

九州縦貫自動車道関係 埋蔵文化財調査報告

I

鹿児島県始良郡溝辺町所在遺跡の調査

西 免 遺 跡
栢 場 遺 跡
山 神 遺 跡
曲 迫 遺 跡
桑ノ丸遺跡

1977. 2

鹿児島県教育委員会

序 文

九州縦貫自動車道・鹿児島線（鹿児島～吉松間）建設に伴う埋蔵文化財の調査は、昭和46年度、始良町小瀬戸遺跡から開始しましたが、調査体制の遅れから、一時中断せざるを得ませんでした。

このため、県教育委員会では、昭和48年度から文化課を独立させて体制の整備をはかると共に、文化財保護関係者及び地元の御協力を得て、加治木～溝辺間の各遺跡について調査を再開しました。その後は各年度継続して自動車道建設に伴う遺跡の調査を実施しており、現在は溝辺町北部の石峯、木佐貫原遺跡を調査中であります。

この間、調査終了の遺跡も多く、すでにその一部は自動車道として使用開始されています。

本来、調査が終了すると同時に公開すべき報告書の作成が、諸般の事情から遅れがちになっておりましたが、この度、ようやく鹿児島線（加治木～溝辺間）建設に係る遺跡のうち溝辺町桑ノ丸、山神等の5遺跡について発掘調査報告書を作成することができました。

本報告書は、昭和46年に県教育委員会が九州縦貫自動車道建設に伴う遺跡の発掘調査にとりかかって以来、初めての発刊であり、意義深いものと考えております。この報告書が多くの方々に文化財愛護の糧として活用されることを心から念じています。

なお、調査に当たっては、地元及び関係諸方面の方々に多大の御協力と文化財に対する深い御理解をいただきました。ここに深甚の謝意を表するものであります。

昭和52年2月28日

鹿児島県教育委員会

教育長 国 分 正 明

例 言

- 1 この報告書は、九州縦貫自動車道（鹿児島線）建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち、昭和49年度に発掘した西免遺跡・柵場遺跡・山神遺跡・曲迫遺跡・桑ノ丸遺跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公道の受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆は、つぎのとおりである。

はじめに	I	本蔵久三
	II・III	平田信芳
	IV	鹿児島大学教授石川秀雄
西免遺跡		平田信芳
柵場遺跡	I・II・III・IV-(2)・V	平田信芳
	IV-(1)・(3)	吉永正史
山神遺跡	I・II・III・IV・V-(1)・(2)・		
	VI-(5)・(6)・VII	平田信芳
	V-(3)・VI-(3)・(4)	牛ノ浜修
	VI-(1)・(2)・(8)	吉永正史
	VI-(7)	立神次郎
曲迫遺跡		弥栄久志
桑ノ丸遺跡	I・II・III・IV-(1)・(2)-1・2-①・②・⑥・(3)-		
	①・③・(4)-①・V-(1)-1~9・13~15	新東晃一
	IV-(2)-2-③・④・⑤・V-(1)・(12)	中村耕二
	IV-(3)-②・V-(1)-⑩・⑪	青崎和憲
	V-(2)	牛ノ浜修
	V-(3)	新東晃一・青崎和憲・中村耕二・牛ノ浜修

- 4 掲載地形図の承認番号は、昭52九複第97号である。
- 5 発掘調査に当たり鹿児島県文化財専門員河口貞徳氏の指導助言をえた。層序および石器の石材同定について鹿児島大学教育学部石川秀雄教授の助言をえた。陶磁器の鑑定は竜門寺焼（三彩）技術保持者川原軍二氏の協力をえた。
- 6 墨書土器の写真撮影について鹿児島県警察本部（鑑識課）の協力をえた。
- 7 縦貫道完成後の遺跡周辺の全景写真は道路公団鹿児島工事事務所より提供をうけた。
- 8 本書の編集は、西免・柵場・山神遺跡を平田、曲迫遺跡を弥栄、桑ノ丸遺跡を新東がそれぞれ編集した。なお、本書で用いたレベル数値はすべて海拔高である。

調査の組織

西免遺跡	調査責任者	文化課長	犀川 稔吉	
	調査担当者	主任文化財研究員	平田 信芳	
		文化財研究員	出口 浩	
		主 事	吉永 正史	
		主 事	牛ノ 浜修	
栢場遺跡	調査責任者	文化課長	犀川 稔吉	
	調査担当者	主任文化財研究員	平田 信芳	
		文化財研究員	出口 浩	
		主 事	立神 次郎	
		主 事	牛ノ 浜修	
山神遺跡	調査責任者	文化課長	犀川 稔吉 (昭和49年度)	
		文化課長	宇都 哲 (昭和50年度)	
	調査担当者	主任文化財研究員	平田 信芳	
		文化財研究員	出口 浩	
		主 事	立神 次郎	
主 事		吉永 正史		
曲迫遺跡	調査責任者	文化課長	犀川 稔吉	
		主任文化財研究員	平田 信芳	} 昭和49年 7 月
	文化財研究員	出口 浩	} 昭和50年 1 月以降	
	文化財研究員	諏訪 昭千代		} 昭和50年 1 月以降
	主 事	弥栄 久志		
桑ノ丸遺跡	調査責任者	文化課長	犀川 稔吉 (昭和49年度)	
		文化課長	宇部 哲 (昭和50年度)	
	調査担当者	主 事	新東 晃一	
		主 事	青崎 和憲	
		主 事	中村 耕治	
主 事		牛ノ 浜修		

埋蔵文化財発掘調査委託契約書

1. 委託事務の名称 九州自動車道（溝辺～加治木間）埋蔵文化財発掘調査
2. 調査施行区域 九州自動車（溝辺～加治木間）
3. 委託期間 昭和49年4月1日から昭和50年3月31日まで
4. 委託金額 40,296,000円

日本道路公団福岡建設局長早生隆彦（以下「甲」という。）は、鹿児島県知事金丸三郎（以下「乙」という。）に頭書の発掘調査の実施を次の条項により委託する。

第1条 甲は、別紙発掘調査計画書に基づき、頭書の委託金額の範囲内で頭書の調査の実施を乙に委託する。

第2条 甲又は乙の都合により、委託期間を延長し、若しくは発掘調査計画を変更し、又は調査を中止するときは、事前に協議して書面により定めるものとする。

第3条 乙は、委託契約締結後、遅滞なく作業予定表及び資金使用計画書を作成し、甲に提出しなければならない。

第4条 乙は、第3条の資金使用計画書に基づき、頭書の発掘調査を実施するために必要な経費の概算払を甲に請求することができる。

2. 甲は、前項の請求があったときは、頭書の発掘調査の進捗状況を勘案して、請求書を受理した日から15日以内に乙に所要の額を支払うものとする。

第5条 甲は、必要と認めるときは、頭書の調査の処理状況について調査し、又は報告書及び作業調査日誌の提出を求めることができる。

2. 乙は、甲が期限を指定して中間報告を求めたときは、これに応じなければならない。

3. 乙は、発掘調査の実施にあたり、作業箇所に作業表示旗をかかげ、調査関係者には腕章等を着用させなければならない。

4. 乙は、頭書の発掘調査が完了したときは、すみやかに完了届を提出しなければならない。

5. 乙は、費用精算調書を作成し、委託期間内に甲に提出しなければならない。

第6条 この契約に基づく報告書。費用精算調書その他の関係書類の作成事務の取扱は、甲が特に指定しない限り、乙の本来の事務取扱に準じて処理するものとする。

第7条 乙がこの契約に基づき甲の費用をもつて取得した購入物件等はすべて甲に帰属するものとする。ただし、発見した文化財に関する甲の権利は放棄するものとする。

第8条 調査に関する文化財保護法及び遺失物法等に関する諸手続については、乙が代行するものとする。

第9条 乙の責に帰する事由により頭書の期間内に第5条第4項に規定する完了届を提出しないときは、甲は遅滞損害金として期間満了日の翌日から起算し、提出当日までの遅滞日数につき頭書の委託金額に対して年8.25パーセントの割合で計算した金額を徴収することができる。

2. 甲の責に帰する事由により第4条の規定による委託料の支払いが遅れた場合には、乙は甲に対して年8.25パーセントの割合で遅延利息の支払いを請求することができる。

第10条 乙の責に帰すべき事由により、甲が契約を解除したときは、乙は頭書の委託金額の10分の1を違約金として、甲の定める期限までに甲に納付しなければならない。

第11条 この契約を変更する必要があるときは、甲乙協議して定めるものとする。

上記契約の証として本書2通を作成し、当事者記名押印のうえ各自1通を保有する。

昭和49年7月1日

甲 福岡市中央区天神2丁目13番7号
日本道路公団福岡建設局
局長 早 生 隆 彦

乙 鹿児島市山下町14番50号
鹿児島県
知事 金 丸 三 郎

九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査遺跡一覧表

(昭和46年～昭和52年2月現在)

番号	遺跡名	所在地	調査期間	調査面積	調査員	概要
1	堀之内B	吉松町川添				樋寄川西側の山麓(傾斜面)畑地に縄文式土器、弥生式土器、須恵器の散布が見られる。
2	木場A	栗野町木場				コミュニティーセンター東部山間地の台地に、土師器、弥生式土器の散布が見られる。
3	木場B	〃				コミュニティーセンター南部山間地の台地に土師器、弥生式土器の散布が見られる。
4	木場C	〃				北部に湯ノ谷川、北に傾斜する台地中腹に土師器、弥生式土器の散布が見られる。
5	山崎B	栗野町山崎				栗野市街地の南の山間部畑地に土師器、弥生式土器の散布が見られる。
6	山崎B	〃				〃
7	山崎C	〃				〃
8	中尾田(山城)	横川町中野				横川市街地の北東、天降川を見下す南面する舌状台地に縄文、弥生土器片、石鏃の散布が見られる。中世山城と推定される。
9	木佐貫原	溝辺町木佐貫	50、12、1	(予案) 26,000㎡	吉永 牛ノ濱	縄文時代(前期後期)土器片 (調査中)
10	石峯	溝辺町麓	一次 (50、10、2 50、12、20 二次 51、11、24	(〃) 16,000㎡	河口 出口 西田	①縄文(前期)土器、住居跡1基、集石遺構 ②土師器片 (調査中)

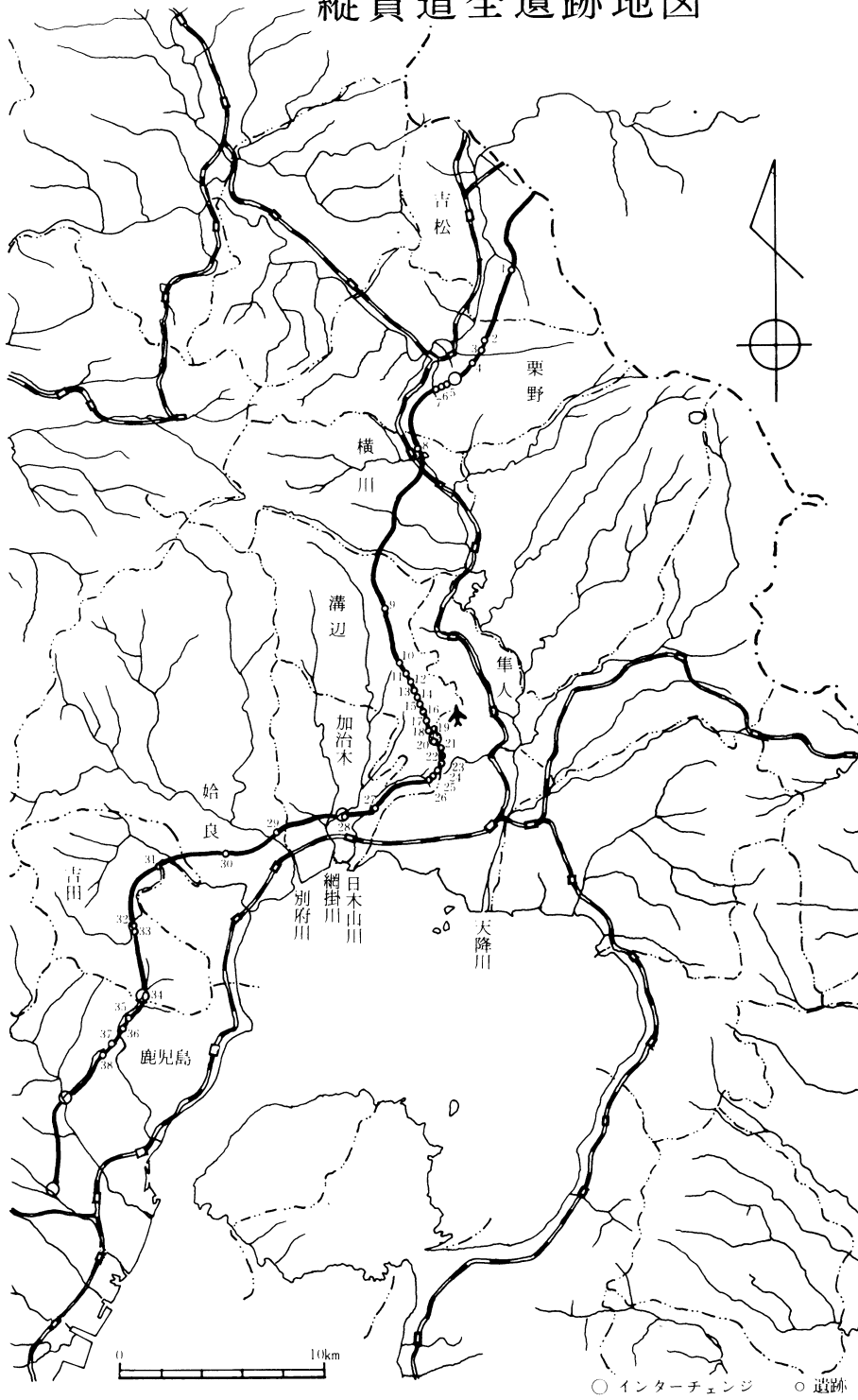
11	柳ヶ迫	溝辺町麓	51. 3. 22 51. 5. 17	m ² 700	長野 西田	①細石器剥片(黒曜石) ②縄文時代(後期)土器片 (整理中)
12	長ヶ原	〃	50. 10. 1 50. 11. 28	1,140	新中 東村	①細石器剥片(黒曜石) ②縄文時代(前期)土器片 ③弥生時代(後期)土器片 (〃)
13	松木原	〃	50. 9. 18 50. 9. 26	420	新池 東畑 中村	①弥生時代(後期)土器片、 黒曜石 (〃)
14	葛根塚	〃	50. 9. 8 50. 9. 26	790	〃	①弥生時代(後期)土器片、 石鏃(黒曜石) (〃)
15	七ツ次	〃	50. 8. 5 50. 9. 18	2,700	弥栄 池畑 中村	①縄文時代(後期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片 (〃)
16	松が迫	〃	50. 7. 14 50. 8. 11	600	弥栄 中村	①弥生時代(後期)土器片 (〃)
17	木屋原	〃	50. 4. 7 51. 3. 31	4,500	弥栄 立神	①縄文時代(前期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片 (〃)
18	山神	〃	49. 6. 13 50. 4. 28	6,900	平田 牛ノ濱 吉永	●①縄文時代(前・後期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片 ③平安時代・建物遺構、溝状 遺構、須恵器、墨書土器(罎、 廣～坏2、破片15)
19	曲迫	〃	50. 1. 27 50. 3. 31	4,300	諏訪 弥栄	●①縄文時代(後期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片 ③土師器片
20	柙場	〃	49. 6. 5 50. 3. 27	2,550	平田、牛 ノ濱、吉永	●①縄文時代(前・後期)土器片
21	西免	隼人町西光寺	49. 5. 25 50. 2. 8	1,500	平田 吉永	●①弥生時代(後期)土器片 ②玉髓、黒曜石 ③弥生時代(後期)土器片 ④土師器片

22	中尾	隼人町西光寺	49. 9. 25 50. 2. 10	2,500㎡	出吉 口永	①縄文時代(後期)土器片 ②弥生時代(終末期)土器片、磨製石鏃 ③土師器片
23	入道	〃	49. 8. 5 50. 3. 31	1,720	〃	①弥生時代(終末期)土器片、石鏃、土師器、溝状遺構
24	南十三塚	溝辺町崎森	49. 7. 16 49. 9. 20	600	出中 口村	①弥生時代(終末期)土器片、
25	東原	〃	49. 9. 17 50. 1. 24	8,700	諏訪 中栄村	①縄文時代(早期)土器片 ②弥生時代(後期)土器片、住居跡1基 ③土師器片
26	桑ノ丸	〃	49. 8. 1 50. 4. 25	8,750	新青 東崎	●①縄文時代(早・前・後期)土器片、石斧、石鏃
27	三代寺	加治木町 日木山	49. 3. 15 49. 7. 31	2,300	河新 弥栄	①縄文時代(早・前期)土器片、石斧、石鏃、集石遺構 ②弥生時代(終末期)土器片 ③土師器、土壇、ピット群
28	建馬場	加治木町反土	46. 12. 8 46. 12. 12	540	盛立 園神	①弥生時代(後期)土器片
29	松木田	始良町鍋倉	46. 12. 12 46. 12. 15	20	〃	①柱穴~22個
30	小瀬戸	始良町 西餅田	46. 8. 20 46. 11. 2	2,780	河立 尾ノ中 有元	①縄文時代(前期)土器片(塞ノ神) ②弥生時代(中期)土器片 ③墨書土師器(伴、大伴、原、仲家)、青磁、白磁、緑釉陶器、須恵器、紡錘車、土錘、井戸杵、木製器、柱穴(多数)
31	小山	吉田村 東佐多浦	46. 11. 6 47. 2. 10	1,420	〃	①縄文時代(早・前期)土器片(吉田、塞ノ神) ②弥生時代土器片 ③墨書土師器、須恵器片、青磁、白磁、緑釉陶器、滑石製石鍋

32	谷ノ口	吉田町本城	46. 11. 10 46. 11. 18	124 ^{m²}	盛 園 立 神	①縄文時代（後期）土器片、 黒曜石剝片 ②弥生時代土器片 ③土師器、白磁、滑石製石鍋
33	上城城址	〃	47. 1. 14 47. 1. 18	20,000 現地踏査	盛 園 田 野 辺	①中世～山城、青磁、白磁、 瓦器
34	宮 後	吉田町宮之浦	46. 11. 10 46. 11. 18	44	〃	①縄文時代（晩期）土器片、 石鏃（黒曜石） ②土師器
35	木の迫	鹿児島市 川上町	50. 12. 9 50. 12. 11	300	立神、牛ノ 濱、吉永	①弥生時代（後期）土器片
36	加治屋園	〃	50. 11. 26 51. 7. 31	1,200	弥 栄 新 東 長 野 中 村	①細石器～細石刃、細石核、 同時期土器片（有文） ②縄文時代前期土器片（案ノ 神式）、集石遺構 ③弥生時代後期土器片
37	加栗山	〃	50. 2. 15 51. 10. 16	30,600	戸 崎 青 崎 立 神 吉 永 牛ノ 濱	①細石器～細石刃、細石核、 石鏃14、局部磨製石斧1、 大型台形石器1 ②縄文時代（前期）土器片（吉 田式、前平式）、住居跡17、 土坑72、集石遺構14、石鏃、 陰陽石（軽石製） ③中世～山城、棚列跡、空掘、 柱穴、青磁、瓦器
38	神の木山	〃	50. 5. 12 50. 5. 15	20	戸 崎 青 崎	①耕作土の下部はシラス層で 遺物なし

（●は、調査報告書発行終了）

縦貫道全遺跡地図



- 遺跡名
1. 堀之内 B
 2. 木場場 A
 3. 木場場 B
 4. 木場場 C
 5. 山崎 A
 6. 山崎 B
 7. 山崎 C
 8. 中尾田
 9. 木佐貫原
 10. 石峰
 11. 柳ヶ追
 12. 長ヶ原
 13. 松木原塚
 14. 葛根次
 15. セツヶ追
 16. 松ヶ原
 17. 木屋原
 18. 山神
 19. 曲追
 20. 杉場
 21. 西免
 22. 中尾
 23. 入道
 24. 南十三塚
 25. 東原
 26. 桑ノ丸
 27. 三代寺
 28. 建馬場
 29. 松木田
 30. 小瀬戸
 31. 小山
 32. 谷ノ口
 33. 上城址
 34. 宮後
 35. 木の追
 36. 加治塚園
 37. 加栗山
 38. 神の木山

九州縦貫自動車道鹿兒島線（えびの～鹿兒島間）路線内遺跡位置図

本文目次

はじめに

I	調査に至るまで	20
II	遺跡の立地	21
III	縦貫道加治木・溝辺間路線内分布地の再確認	25
IV	層序	27

西免遺跡

I	遺跡の位置	33
II	調査の経過	33
III	調査の概要	40
IV	遺物——弥生・石鏃	40
V	まとめ	42

柞場遺跡

I	遺跡の位置	43
II	調査の経過	43
III	調査の概要	43
IV	遺物——縄文・弥生・土師・石鏃・石斧・土錘	47
V	まとめにかえて	51

山神遺跡

I	遺跡の位置	52
II	調査の経過	54
III	層位	59
IV	調査の概要	61
V	遺構——(1)溝状遺構	72
	(2)建物遺構	73
	(3)石組遺構	80
VI	遺物——縄文・弥生・土師・墨書土器・須恵器・土錘・石鏃・ 石匙・敲石・鉄鏃・ふいごの羽目・青銅製仏像	81
VII	まとめ	115

曲迫遺跡

I	遺跡の位置および調査期間	117
II	日誌抄	117
III	地形	118
IV	土層および拡張区の出土状況	118
V	遺物———縄文・土師・石鏃・石匙	122
VI	まとめ	124

桑ノ丸遺跡

I	遺跡の位置	159
II	調査の経過	161
III	調査・出土遺物の概要	165
IV	各地点の調査	167
(1)	層位	167
(2)	第1地点の調査	168
	①調査の概要	
	②遺構	
	③出土遺物と土器出土状況	
(3)	第2地点の調査	181
	①調査の概要	
	②遺構	
	③出土土器	
(4)	第3地点の調査	184
	①調査の概要	
(5)	第4地点の調査	185
	①調査の概要	
	②遺構	
V	出土遺物	188
(1)	土器	188
(2)	石器	226
(3)	まとめ	232

図版目次

図版 1	山神遺跡遠景	125
図版 2	西免遺跡第 1 地点 II 層上部のピット群、西免遺跡出土の成川式土器	126
図版 3	柘場遺跡第 II 層上面と断面	127
図版 4	柘場遺跡出土の縄文式土器	128
図版 5	柘場遺跡出土の縄文式土器、山神遺跡出土の縄文式土器	129
図版 6	柘場遺跡出土の甕形土器・成川式土器	130
図版 7	山神遺跡第 8 地点の溝状遺構	131
図版 8	山神遺跡第 10 地点の溝状遺構と出土遺物	132
図版 9	山神遺跡第 8 地点の焼土とピット群 (第 1 号建物遺構) 第 9 地点の焼土とピット群 (第 3 号建物遺構)	133
図版 10	山神遺跡第 9 地点の土層横転の状況・第 8 地点の焼土の断ち割り面	134
図版 11	山神遺跡第 10 地点の石組遺構	135
図版 12	山神遺跡第 8 地点の石匙の出土状況・炭化物出土のピットの断ち割り	136
図版 13	山神遺跡第 8 地点の墨書土器の出土状況 第 10 地点の墨書土器の出土状況	137
図版 14	山神遺跡出土の条痕文土器	138
図版 15	山神遺跡出土の燃糸文土器	139
図版 16	山神遺跡出土の甕形・鉢形土器	140
図版 17	山神遺跡出土の土師器坏	141
図版 18	山神遺跡第 8 地点出土の墨書土器 (SS 撮影と赤外線フィルム撮影)	142
図版 19	山神遺跡第 8 地点出土の墨書土器片	143
図版 20	山神遺跡出土の須恵器・石匙	144
図版 21	西免・柘場遺跡出土の石鏃	145
図版 22	山神遺跡出土の石鏃	146
図版 23	山神・柘場遺跡出土の石鏃・土錘	147
図版 24	山神遺跡出土の仏像・鉄鏃	148
図版 25	曲迫遺跡近景及びトレンチ・出土状況	149
図版 26	曲迫遺跡出土の手づくね土器・成川式土器・縄文式土器・石匙・石鏃	150
図版 27	縦貫道完成後の遺跡周辺の全景写真	151

挿 図 目 次

第1図	九州縦貫自動車道溝辺工区周辺遺跡分布図（1／50000）……………	24
第2図	山神遺跡の層序……………	28
第3図	桑之丸遺跡の層序……………	29
第4図	西免・柘場・山神・曲迫遺跡発掘区域全体図……………	31
第5図	西免遺跡第1地点の第II層遺物出土状況……………	34
第6図	西免遺跡第1地点の土層図……………	35
第7図	西免遺跡第2地点の土層図……………	37
第8図	西免遺跡第3地点の土層図……………	39
第9図	西免遺跡出土の成川式土器……………	41
第10図	柘場遺跡第5地点の第II層の遺物散布状況……………	44
第11図	柘場遺跡第4地点の土層図……………	45
第12図	柘場遺跡第5地点の土層図……………	46
第13図	柘場遺跡第5地点出土の縄文式土器……………	47
第14図	柘場遺跡第4地点出土の縄文式土器……………	48
第15図	柘場遺跡第5地点出土の縄文式土器……………	49
第16図	柘場遺跡第5地点出土の成川式土器……………	50
第17図	柘場遺跡出土の磨製石斧……………	51
第18図	山神遺跡の土層横転箇所……………	60
第19図	山神遺跡第6地点の旧道跡……………	61
第20図	山神遺跡第8地点の溝状遺構と遺物散布状況……………	62
第21図	山神遺跡第8地点の焼土とピット群……………	63
第22図	山神遺跡第8地点の土層図(1)……………	65
第23図	山神遺跡第8地点の土層図(2)……………	66
第24図	山神遺跡第8地点の第III層上部での遺物散布状況……………	66
第25図	山神遺跡第9地点の土層図……………	67
第26図	山神遺跡第10地点の土層図……………	68
第27図	山神遺跡第9地点の焼土とピット列（3号建物遺構）……………	69
第28図	山神遺跡第9地点E-145b・c・d-IIIのピット群……………	69
第29図	山神遺跡第10地点の溝状遺構下の焼土とピット群……………	70
第30図	山神遺跡第10地点の礎板をもったピット群……………	70
第31図	山神遺跡第10地点の溝状遺構平面図……………	71
第32図	山神遺跡1号建物遺構……………	74

第33図	山神遺跡2号建物	78
第34図	山神遺跡第10地点の第Ⅲ層上部の石組遺構	80
第35図	山神遺跡出土の縄文式土器	82
第36図	山神遺跡出土の燃糸文土器	83
第37図	山神遺跡出土の縄文式土器	84
第38図	山神遺跡出土の縄文式土器	85
第39図	山神遺跡出土の石器	87
第40図	山神遺跡出土の石器	88
第41図	西免・朽場遺跡出土の石鏃	91
第42図	山神遺跡出土の石鏃	92
第43図	山神遺跡出土の石鏃および朽場遺跡出土の土錘	93
第44図	山神遺跡第8地点出土の甕形土器・鉢形土器	94
第45図	土師器坏の計測	96
第46図	山神遺跡出土の土師器	108
第47図	山神遺跡出土の墨書土器	109
第48図	山神遺跡出土の須恵器	112
第49図	山神遺跡出土のふいごの羽子	114
第50図	山神遺跡第8地点出土の青磁片	115
第51図	山神遺跡第10地点溝内出土の遺物	114
第52図	曲迫遺跡位置図	118
第53図	曲迫遺跡附近の地形図および調査区	119
第54図	曲迫遺跡Q～T-152区の北側断面図	120
第55図	曲迫遺跡O・P・Q-129～133区の出土状況	121
第56図	曲迫遺跡出土の土器表測図	122
第57図	曲迫遺跡出土の石器表測図	123

表 目 次

第1表	山神・朽場・西免遺跡の調査面積一覧	53
第2表	1号建物計測表	73
第3表	2号建物計測表	77
第4表	3号建物計測表	79
第5表	石鏃分類表	90
第6表	土師器坏の計測	98

図版目次 (そのII)

図版 1	桑ノ丸遺跡遠景(南から)	237
図版 2	第1地点遠景(東から)	237
図版 3	第1地点確認調査(東から)	238
図版 4	第1地点確認調査(南から)	238
図版 5	12類(成川式土器)出土状態	239
図版 6	12類(成川式土器)出土状態	239
図版 7	窯状遺構断面写真	240
図版 8	窯状遺構	240
図版 9	窯状遺構全景	241
図版10	窯状遺構と断層断面	241
図版11	円筒土器(2類)出土状態	242
図版12	円筒土器(2類)出土状態	242
図版13	第1地点遺物出土状態(III b層)	243
図版14	角筒土器(2類)出土状態	243
図版15	第1地点発掘風景	244
図版16	遺物出土状態(III b層)	244
図版17	地層横転No.1検出状態	245
図版18	地層横転No.1掘り上げ状態	245
図版19	地層横転No.3断面	246
図版20	地層横転No.3掘り上げ状態	246
図版21	第2地点遠景(東から)	247
図版22	III a層の集石	247
図版23	第3地点落ち込み	248
図版24	第3地点全景(南から)	248
図版25	落ち込み	249
図版26	円筒土器(1類)出土状態	249
図版27	近世墓検出状態	250
図版28	近世墓群	250
図版29	近世墓の供養祭	251
図版30	近世墓出土の人骨	251
図版31	1類(吉田式土器)・2類(前平式土器)	252
図版32	2類(前平式土器)	253

図版33	2類 (前平式土器)	254
図版34	2類 (前平式土器)	255
図版35	2類 (前平式土器)	256
図版36	2類 (前平式土器) 口縁施文	257
図版37	2類 (前平式土器) 口縁施文	258
図版38	1類 (吉田式土器) ・ 2類 (前平式土器)	259
図版39	3類	260
図版40	3類	261
図版41	3類	262
図版42	3類	263
図版43	4類 (押型文土器)	264
図版44	4類 (押型文土器) ・ 5類 (平椀II式土器)	265
図版45	6類 (塞ノ神A式土器)	266
図版46	8類 (阿高式土器) ・ 9類 (轟式土器)	267
図版47	10類 (指宿式系土器)	268
図版48	11類 (西平式・三万田式土器)	269
図版49	12類 (成川式土器)	270
図版50	14類 (須恵器) ・ 15類 (近世磁器)	271
図版51	15類 (近世陶器)	272
図版52	石鏃	273
図版53	石器	274

挿 図 目 次 (そのII)

第1図	桑ノ丸遺跡地形図	159
第2図	桑ノ丸遺跡周辺地図	160
第3図	桑ノ丸グリット配置図	165
第4図	遺物類別出土状況図	166
第5図	桑ノ丸遺跡層序	167
第6図	第1地点断面実測図	169
第7図	第1地点平面図(Ⅰ)	171
第8図	窯状遺構実測図	173
第9図	12類完形土器出土状態実測図	175
第10図	土器実測図及拓影	176
第11図	第1地点平面図(Ⅱ)	177
第12図	地層横転実測図	179
第13図	縄文式土器出土状況図	180
第14図	第2地点平面図	181
第15図	集石実測図	182
第16図	第2地点・第3地点断面図	183
第17図	第3地点平面図	184
第18図	第4地点平面図	185
第19図	第4地点断面図	186
第20図	柱穴遺構配置図	187
第21図	1類土器(吉田式土器)	188
第22図	2類(前平式土器—Ⅰ)	193
第23図	2類(前平式土器—Ⅱ)	194
第24図	2類(前平式土器—Ⅲ)	195
第25図	2類(前平式土器—Ⅳ)	196
第26図	2類(前平式土器—Ⅴ)	197
第27図	2類(前平式土器—Ⅵ)	198
第28図	2類(前平式土器—Ⅶ)	201
第29図	2類(前平式土器—Ⅷ)	202
第30図	2類(前平式土器—Ⅸ)	203
第31図	第3類土器(Ⅰ)	207
第32図	第3類土器(Ⅱ)	208

第33図	第Ⅲ類土器(Ⅲ)	209
第34図	4類(押型文土器)	210
第35図	5類(平椀Ⅱ式)、6類(塞ノ神A式)、7類(塞ノ神B式)	212
第36図	8類(轟式土器)、9類(阿高式土器)	214
第37図	第10類(指宿式系土器)	216
第38図	11類(西平式、三万田式土器)	217
第39図	12類(成川式土器—Ⅰ)	218
第40図	12類(成川式土器—Ⅱ)	219
第41図	12類(成川式土器—Ⅲ)	221
第42図	13類(土師器)	223
第43図	14類(須恵器)	224
第44図	15類(近世陶器)	224
第45図	石鏃実測図	227
第46図	石匙・スクレーパー実測図	228
第47図	石器実測図	229
第48図	石器実測図	230

表 目 次 (そのⅡ)

第1表	桑ノ丸遺跡出土土器類別表	166
第2表	1類土器(吉田式土器)一覽表	189
第3表	2類土器(前平式土器・円筒形)一覽表	191
第4表	2類土器(前平式土器・角筒形)一覽表	200
第5表	3類土器一覽表	206
第6表	4類(押型文土器)一覽表	210
第7表	5類(平椀式)、6類(塞ノ神A式)、7類(塞ノ神B式)一覽表	211
第8表	8類(轟式土器)、9類(阿高式土器)	213
第9表	10類(指宿系土器)、11類(西平・三万田式系土器)	220
第10表	12類(成川式土器)	220
第11表	13類(土師器)、14類(須恵器)	225
第12表	15類(近世陶器)	225
第13表	石器一覽表	231

I 調査に至るまで

九州縦貫自動車道の建設事業が始まったのは、昭和43年で、本県の鹿児島線については、加治木～鹿児島間の工事施工命令が昭和43年4月1日に出されている。当教育委員会としてはこれに対処するために、社会教育課文化係（当時）を中心に、関係者の協力を得て、昭和43年12月から昭和44年1月まで、九州縦貫自動車道建設に伴う埋蔵文化財分布調査を実施し、この調査結果に基づいて鹿児島～加治木間の路線が決定された。

その後、鹿児島線（加治木～吉田間）の工事計画が具体化するに及んで、県教育委員会は、昭和46年1月に再度、県文化財専門委員（当時）河口貞徳氏の指導を得て、日本道路公団福岡支社・鹿児島工事事務所と路線内の分布調査を実施した。この結果に基づき、「日本道路公団の建設事業等工事施行に伴う埋蔵文化財包蔵地の取扱いに関する覚書」第4項により、日本道路公団と協議した結果、昭和46年度において、始良町小瀬戸遺跡ほか6か所の発掘調査と中世の山城1か所について調査を行うことになった。この調査のうち小瀬戸遺跡、小山遺跡については、県文化財専門委員・河口貞徳氏を主任調査員とした調査団が当たり、残りの遺跡は県社会教育課が実施した。

その後、道路公団は、昭和47年2月23日に覚書に基づき、鹿児島線（吉松～加治木間）の埋蔵文化財について協議を求めた。これに対し、県文化室は、昭和47年8月2日～10日、同月18日から26日までの間に、延長38キロメートル、巾2キロメートル（溝辺～加治木間は予定路線内）にわたって分布調査を実施した。

この結果に基づいて、文化室は路線の決定について埋蔵文化財の保護のうえから十分配慮されることを要望した。これについて、道路公団は、溝辺～加治木間についてはすでに昭和47年5月17日に路線を発表した後だった関係上、路線内の各遺跡についてはすべて記録保存をすることで合意した。さらにその後これらの遺跡について再度確認するために、県文化財専門委員・河口貞徳氏、同池水寛治氏の協力を得て分布調査を実施し、発掘調査前の取扱いに慎重を期した。又、吉松～溝辺間の埋蔵文化財については、昭和47年度に実施した分布調査の結果によって協議を進めてきたが、さらに、昭和49年1月～2月、河口貞徳氏の協力を得て再確認のための分布調査を実施し、これらの結果に基づいて遺跡の保存区分を決め、道路公団と協議の結果保存する遺跡1か所（吉松町堂迫地下式横穴）、記録保存する遺跡10か所（横川町中尾田遺跡他）が決定した。

その後、県教育委員会は記録保存する遺跡について、昭和49年3月19日より加治木町三代寺遺跡の発掘調査をはじめとして実施することにした。なお、発掘調査については、各年度毎に契約することになった。

以後、発掘調査は関係者各方面の協力を得て続行されているが、昭和52年2月現在、調査終了した遺跡は加治木～吉田間の6遺跡、溝辺～加治木間の17遺跡、吉田～鹿児島間の4遺跡等で、調査面積も約100,000平方メートルに及んでいる。

II 遺跡の立地

標高 200～280m の溝辺の台地は、本来始良カルデラの北壁に連なるシラス台地と云われている。東側は天降川水系によって霧島山塊と隔てられ、西側は網掛川水系によって蒲生地塊と切りはなされている。この台地上の20km²をこえる平坦面は古来十三塚原と称せられ、その一部は昭和18年頃、海軍航空隊の基地として切りひらかれ、滑走路のほかに随所に誘導路・えんたい濠・機関銃座などが作られていたところであり、そのため昭和20年終戦まぎわにはたびたびB-29・グラマン機の攻撃をうけ、現在でも当時の不発弾が時々発見されることがある。海軍航空隊設営以前は、台地とは云っても山あり谷ありと云ったような地形で、よく狐の出るところだったらしいが、現在は地ならしされてほとんど起伏が失なわれつゝある。第2次大戦後、飛行場跡は2反5畝単位で分配されその大半が茶畑と化していたが、昭和46年以降この地は再び飛行機と縁の深い鹿児島空港に変身してしまっている。十三塚原のほとんどが茶畑で、茶畑づくりには40cm～1mも掘りおこすとのことであり、こゝ数年来集団茶園化をはかるためブルドーザーがだいぶ投入されたいらしい。昭和39年から昭和40年にかけて大規模な構造改善事業が実施されたところが多いことも発掘調査に入ってから聞かされた。また「溝辺ごぼう」の名で県内に親しまれたごぼうの産地で、たゞでさえ深く掘りおこさなければならぬのに、昭和45年頃からトレンチャーとよぶ機械が導入されて、たいそう深く掘りかえされたいらしい。

このように掘りかえしと地ならしを繰り返しているうちに、広範囲にわたって土器片を散らしてしまったものと考えられ、分布調査ではほとんどないところはないほどに地表にその散布がみとめられる。かつては遺跡が存在していたとしても、知らず知らずの間にかなり荒されてしまったと考えられ、遺物が散らばることになる根元を探り出すのは大規模な調査でなければほとんど不可能な地域でもある。

また、溝辺町の古代・中世に関する史料は皆無の状態がよく判らないが、地名などに古い時代からのものと考えられるものが散見される。十三塚原台地の北端に神話上山幸になる彦火々出見尊（ヒコホホデミノミコト）の陵とされる「高屋山陵」があり、宮内庁管轄の陵墓となっているが考古学的には実態不明である。溝辺台地の南端で、桑之丸川を隔てて桑之丸遺跡に相對する山に「弓削」という集落があり、その地から石鏃の原材料のひとつとされる玉髓が出ることである。大隅一之宮鹿児島神宮の裏山ともいえるところであり、由緒ありげなところであるが学問的検討は加えられていない。「丹附生」（ニツケ）・「地久里」（チクリ）・「瀬間利」（セマリ）など古代的地名も今後検討を要しよう。「十三塚」には13の塚それぞれに石碑が立てられており、土地の人々からこれにまつわる伝説を聞かされたがその実態はよく判らない。先学柳田国男が全国的にリストアップした十三塚と云う地名以上に検討は進んでいない。「論地」と云う地名も中世になんらかの土地争いのあったところであろうが、史料は皆無である。近世に至り加治木郷にふくまれていたものが慶安年間に溝辺郷として独立しているが、そ

の理由もよく理解できない。

今日の集落は台地の縁辺部および台地の直下に点在しているが、遺跡もまた今日の集落近くに存在している。周辺の遺跡と対比してそれらとの関連を考察すべきであるが、資料準備不足のため簡単に地図（第1図）と一覧表をかゝげるだけにとどめることにする。その他耕作中にたまたま出土した完形品（須恵器の提瓶・子持高坏など）が溝辺町内の中学校・小学校などに保管されているとのことであり、それらに関連遺跡の遺物として資料化をはかる計画であったが、残念ながらそこまでは手がまわりかねた。来年度の報告書で当地区を再びとりあつかうことになるので、その際それらについてまとめた。

第1表 九州縦貫道溝辺工区内遺跡および周辺の遺跡一覧表

地図番号	遺跡名	所在地	地形	遺物	備考
1	三代寺	加治木町三代寺	山腹	縄文(早・前)・土師器	S49調査、現在整理中
2	桑ノ丸	溝辺町崎森桑ノ丸	台地	縄文(前・中・後)・弥生(後)～古墳・土師器・近世陶器	本報告書所収
3	東原	〃 〃 東原	台地	縄文(早・後)・弥生(後)～古墳・土師器	S49調査、現在整理中
4	南十三塚	〃 〃 南十三塚	台地	弥生(後)～古墳	〃
5	入道	隼人町西光寺入道	台地	弥生(後)～古墳	〃
6	中尾	〃 〃 中尾	台地	弥生(後)～古墳	〃
7	西免	〃 〃 西免	台地	弥生(後)～古墳	本報告書所収
8	柵場	溝辺町麓柵場	台地	縄文(前・後)・弥生(後)～古墳・土師器・須恵器	〃
9	山神	〃 〃 山神	台地	縄文(前・後)・弥生(後)～古墳・土師器・須恵器・青磁	〃
10	曲迫	〃 〃 曲迫	台地	縄文(後)・弥生(後)～古墳・土師器	〃
11	木屋原	〃 〃 木屋原	台地	縄文(早・前)・弥生(後)～古墳	S50調査、現在整理中
12	松ヶ迫	〃 〃 松ヶ迫	台地	弥生(後)～古墳	〃
13	七ツ次	〃 〃 七ツ次	台地	縄文(後)・弥生(後)～古墳	〃
14	葛根塚	〃 〃 葛根塚	台地	弥生(後)～古墳	〃
15	松木原	〃 〃 松木原	台地	弥生(後)～古墳	〃
16	長ヶ原	〃 〃 長ヶ原	台地	細石器・縄文(前)・弥生(後)～古墳	〃
17	柳ヶ迫	〃 〃 柳ヶ迫	台地	細石器・縄文(後)	〃
18	石峰	〃 〃 石峰	台地	縄文(早期一押型文土器)	現在発掘調査継続中(註.1)
19	十三塚原第1地点	〃 〃 鹿児島空港内	台地	縄文(前・中)一手向山・塞之神・阿高糸	S45.7調査(註.2)
20	十三塚原第2地点	〃 〃 〃	台地	弥生(後)	〃
21	久保山	〃 〃 久保山	台地	縄文・弥生	
22	据石ヶ岡	〃 竹子据石ヶ岡	山地	縄文(早一押型文土器)	? (註.3)
23	横頭	〃 麓横頭	台地	縄文・弥生・土師	? (註.4)

地図番号	遺跡名	所在地	地形	遺物	備考
24	中野	溝辺町麓中野	台地	縄文(後)・弥生・土師・須恵・黒耀石	
25	麦牟田	有川麦牟田	山地	縄文(前・中・後)・塞之神・並木・岩崎下層式	
26	菅ノ口A	菅ノ口	山林	弥生	
27	菅ノ口B	菅ノ口	山林	弥生	
28	石原	石原	台地	縄文・弥生	
29	倉ノ山	倉ノ山	台地	弥生	
30	竹山	竹山	山麓	縄文(前)・古田式・石鍬・石鎧・石斧	
31	仏石	加治木町小山田仏石	山地	縄文(後)・晩一岩崎上層・夜白式	
32	反土	反土	水田	弥生(後)	
33	日木山洞窟	日木山	山麓	縄文(前)・日木山式・獣骨・洞窟・住居址	
34	黒川山	黒川山	山地	弥生(後)・重弧文土器	
35	楠原	日木山中野 弓削楠原	台地	縄文(前・中)・弥生(重弧文土器)	
36	弓削丘	隼人町小田弓削丘	台地	須恵器(蔵骨器)	
37	沢家墓所	宮内	畑地	古墓	
38	隼人塚	内山田	平野	供養塔	
39	塚ノ原	小田塚ノ原	畑地	縄文(前)・弥生	
40	伽藍	真孝1108	微高地	弥生・鉄剣	
41	鹿兒島神宮	宮内	山麓	貝塚(縄文・弥生)	S 52 工事中発見

(地図番号は第1図のものである。)

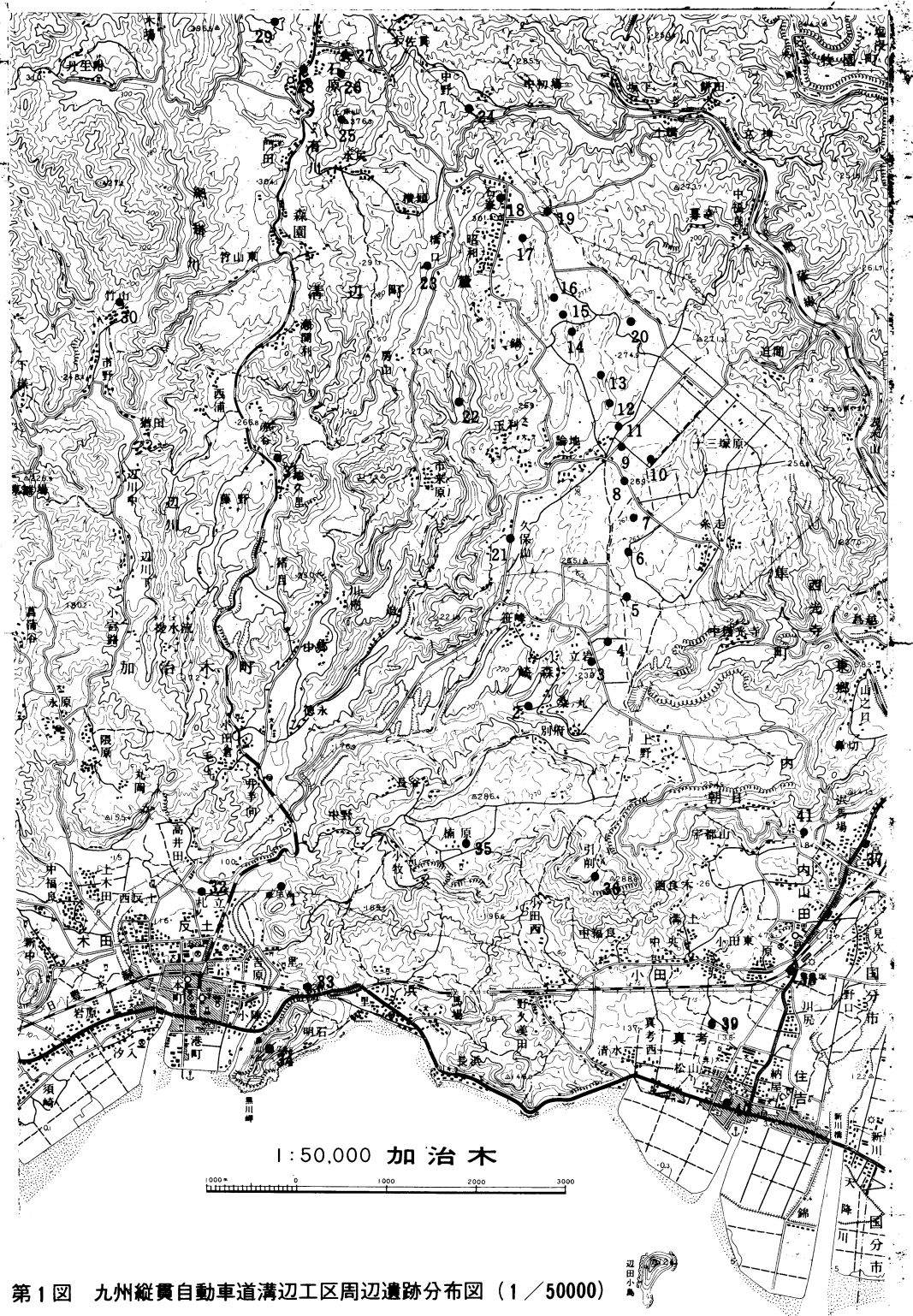
註1 昭和41年8月5日～8月9日、河口貞徳・玉竜高校考古学クラブが調査。「日本考古学年報19」。

2 「始良郡溝辺町大型空港建設地内における埋蔵文化財発掘調査報告書」鹿兒島県史跡調査会、1971. 3。

3 「全国遺跡地図：鹿兒島県、文化庁、昭和50年3月」および「鹿兒島県遺跡地図：鹿兒島県教育委員会、昭和48年」はこの地点にドットをおとしているが、「溝辺町郷土誌：溝辺町、昭和48年11月」では異なった地点になっている。竹子にあるならばこの地図には入らない。この地点と竹子の方を現地確認していないので、地元の方に分があるとは思われるがそのまま地点をおとしておく。

4 「全国遺跡地図：鹿兒島県」および「鹿兒島県遺跡地図」はこの地点にドットをおとしているが、「溝辺町郷土誌」では異なっている。現地確認をしていないのでそのまま地点をおとしておき、後日検討したい。

上記の遺跡一覧表を作るにあたり、註1～4にかゝげた文献の他に使用したものはつぎのものである。「鹿兒島県遺跡地名表」鹿兒島県教育委員会、昭和39年3月。「埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書、九州高速道路鹿兒島線(加治木～古松間)」鹿兒島県教育委員会、1973。



Ⅲ 縦貫道加治木～溝辺間路線内分布地の再確認

文化課に着任したばかりの平田・出口がまずとりかゝったのが、九州縦貫道溝辺工区路線内の発掘調査準備であり、昭和49年4月16日～18日の三日間とりあえず現地をみて調査計画をたてることにした。

4月16日 溝辺インターチェンジ予定地(柵場遺跡)～入道遺跡の分布調査。西免地区で黒耀石の石鏃を採集(図版21-1, 図41-1)。出口は生まれてはじめて表面採集で石鏃を発見することができたと喜ぶ。帰途溝辺町教育委員会に立寄り、作業員募集について打合わせ。

4月17日 インターチェンジ～木屋原間およびサービスエリア(曲迫遺跡)の分布調査。バイパス南側の畑地に多量散布していることを確認し、こゝを掘れば出るなど話しあう。(発掘調査時の山神第8地点)。ひばりがさえずる一面黄色な菜の花畑で昼食をとったが、なにげなく腰をおろしたところに、土器の破片が数片ころがっていたのが印象的。(発掘調査時の柵場第5地点)。

4月18日 桑之丸・東原・南十三塚・入道地区の遺物散布状況を確認。桑之丸・東原はその南半部に多量に散布がみられることを確認。入道は三角点付近の畑地に多量の土器散布がみられることを確認した。また持参した資料に記されていない区域すなわち中尾地区に土器片の散布がみられたのでこゝも調査対象地として追加することにした。午後、論地・糸走など地権者・耕作者の自宅を尋ね歩いて耕作時の状況について聞きとり調査。西免のごぼう作りおよび茶園の集団化、山神の養蚕工場の地下倉庫、昭和18年頃海軍航空隊基地造営のための地ならし作業など、東原は昭和40年から42年にかけて農地基盤整備事業が行なわれたなど、遺跡が荒らされているかも知れない要素を聞きこむ。それでも遺構の最下部はとらえられるのではないかと希望的観測をもつ。午後3時、森田専門員・河野主任とともに溝辺町教育委員会を訪問し、調査開始に伴う諸打ち合わせを行なう。

現地調査の結果「九州高速道加治木～吉松間埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書」(1973年、鹿児島県教育委員会)にあげられた遺跡地名および地図に若干のミスがあることに気付いたので、こゝで修正しておく。

小屋原遺跡 (分布調査報告書遺跡番号105, 全国遺跡地図: 鹿児島10-42)

「木屋原」が一筆図にある表記である。小字木屋原は県道加治木～溝辺間バイパスの北側に当たり、県道より南側は「山神」となる。地続きでしかも同性格の遺跡であり、県道の両側をひとまとめにして一遺跡名で統轄してもよいであろうが、昭和49年度の調査対象地が県道の線までであり、山神地区が遺跡の主体となってもいたので「木屋原遺跡」と「山神遺跡」とに区分した。全国遺跡地図における小屋原遺跡の地点は本報告書であつかう曲迫遺跡にあたっている。本報告書ではこの遺跡を「山神」「曲迫」「木屋原」とに分け、今回は山神・曲迫につい

て報告する。

中免・西免地区遺跡（分布調査報告書遺跡番号106，全国遺跡地図：鹿児島10-43）

分布調査報告書では所在地溝辺町中免となっているが、一筆図に中免という地名はなく、該当地の小字名は「^{ハシバ}栢場」である。聞きとりの結果、栢場一帯のことを俗に中免とも云うことを知ったが、俗称を避けて栢場を遺跡名にした。したがって「栢場遺跡」と「西免遺跡」とに区分することにした。栢場が溝辺インターチェンジがつくられたところになる。西免は栢場の隣接地であるが、溝辺町ではなく隼人町の行政区画内に入る。

東原遺跡（分布調査報告書遺跡番号107，全国遺跡地図：鹿児島10-44）

分布調査報告書に示された地図と一筆図と現地とを比較して、示された地図は現実には「南十三塚」の地形であり、しかも別に本物の「東原」にも遺物の散布がみられたので、混同を避けるために「東原遺跡」と「南十三塚遺跡」とにはっきり分けることにした。両者の距離は約500mはなれている。全国遺跡地図のドットは東原の地点におとされている。

この他、「南十三塚」と「西免」との間に、「入道」に二ヶ所「中尾」に一ヶ所散布地があることを現地踏査で確認した。

このようにして昭和49年度の発掘調査は、北から「山神」・「^{カクマコ}曲迫」・「^{ハシバ}栢場」・「^{ニシタマ}西免」・「中尾」・「^{ハシド}入道」・「南十三塚」・「東原」・「桑ノ丸」の各遺跡が対象地となった。本報告書では山神・曲迫・栢場・西免・桑之丸をとりあつかう。中尾・入道・南十三塚・東原は担当者が長期の調査にはりついているため次回の報告書にまわすことにした。

IV 層 序

鹿児島大学教育学部教授 石川 秀 雄

山神遺跡

(1) 層序

本地域の層序は上位より下位にかけて、I層からV層の5層に分けられる（第①図参照）。各層の概要は下記の通りである。

I層（黒色火山灰層）…最上位にあり耕作土となっており、ところによって、黒ボク（上位）と黒ニガ（下位）の2層に分れているところもある。

II層（上部ローム層）…“赤ホヤ”層とも呼ばれ、下部に特徴的な7～8mm大のオレンジ色の軽石からなる軽石層がみられる。

III層（中部ローム層）…下部に砂質部の混った5mm～6mm大のオレンジ色の軽石からなる軽石層がある。

IV層（下部ローム層）…中位に黒色粘質帯をはさむ。

V層（シラス層）…最下位のV-cは風化した赤シラス、中位に黄褐色シラス層（V-b）があり、ときに砂質部を含む。最上位は粘土層からなる。

第7地点（曲迫 Site）W-160-dにおいて、II・III層が70°の傾斜をもって撓曲しているところがみられるが、これは、局所的な小断層を伴う微褶曲をうけたところであり、その変動の時期はII層堆積後I層堆積前である。

(2) 遺物

I層の最下部に弥生、縄文後晩期の遺物を出土するが、従来、この層位から、志布志湾岸において縄文後期初頭（3,000年前）の遺物などが出土しており、これに対比されよう。従来¹⁴CからII層（上部ローム層）上部の黒褐色ローム層からは（4,640±80 Y. B. P. ; 松井, 1966）が、同層下部の腐食層から（6,390±90 Y. B. P. 松井, 1966）が得られている。よって、III層（中部ローム層）上位のIII a層上部から出土した縄文前期の遺物は、ほぼ6,390年前頃のものと思われる。なお、V-a層はこれに対比される地層から（10,630～11,220 Y. B. P. ; 石川ら, 1972）が得られており、これに対比されよう。

(3) ローム層の構成鉱物

本地域のローム層を構成する重鉱物としては、磁鉄鉱（M）、普通輝石（Au）、シソ輝石（Hy）がある。それらの量比は下記の通りである。

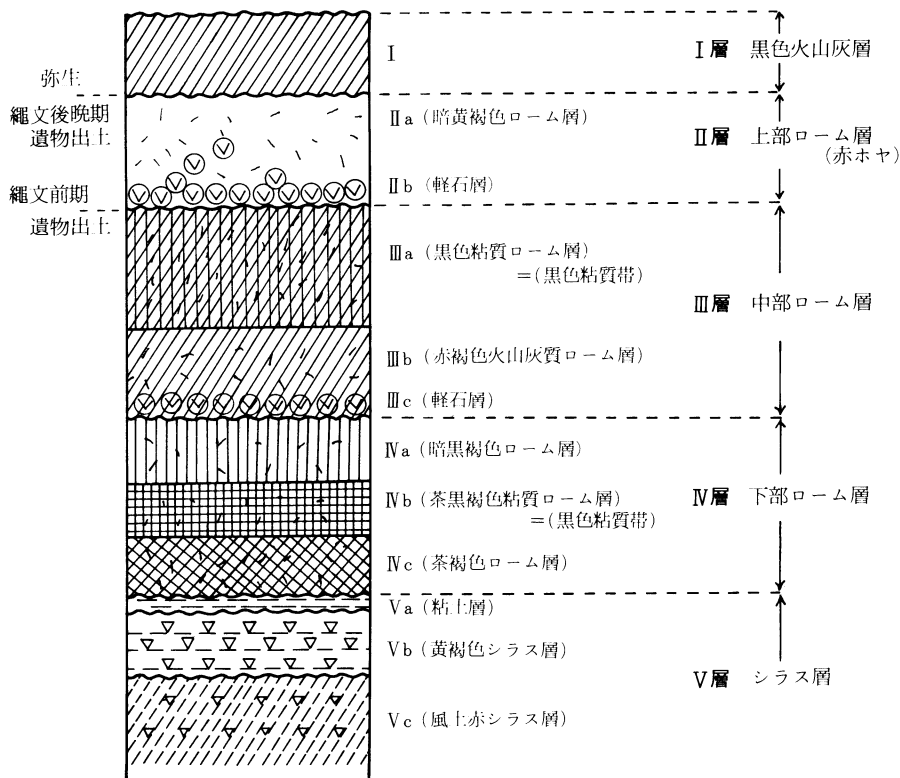
上部ローム層 M > Hy > Au

中部・下部ローム層 Hy > M > Au

本地域のローム層を構成する粘土鉱物は下記の通りである。

上部・中部ローム層…アロフエン

下部ローム層…加水ハロイサイト、モンモリロナイト



第1図 溝辺町山神遺跡の層序

桑ノ丸遺跡

本地域の層序は溝辺町山神遺跡の場合と類似しており、上位より黒色火山灰層（I層）上部ローム層（II, III a, III b）および中部ローム層（IV, V, VI）からなる。

(1) 黒色火山灰層

耕作土となっており、その下部より弥生式遺物を出土する。

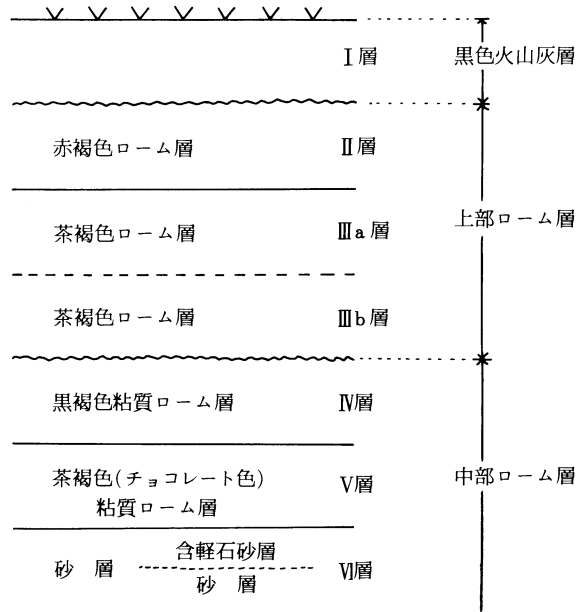
(2) 上部ローム層

全体的に厚さは80cm程であり、上位から赤褐色ローム層（II）、茶褐色ローム層（III a）、茶色ローム層（III b）があり（III b）層には1～3mm大の軽石が含まれる。（II）層から縄文後期、（III-a）層から縄文前期（新）、（III-b）層から縄文前期（古）のそれぞれ遺物を出土する。なお本層と対比される地層の年代は上限4,640年～下限6,390年として与えられているが、よく、これに対応している。

(3) 中部ローム層

全体的に測定できる厚さは80cm程度であり、上位より、黒褐色粘質ローム層（Ⅳ）、茶褐色粘質ローム層（Ⅴ）および砂層（Ⅵ）からなり、砂層（Ⅵ）はさらに上部の含軽石砂層と下部の砂質層に分けられる。

(4) 本地域には局所的に小断層、地層の撓曲部がみとめられ、その形成時期は上部ローム層堆積後、黒色火山灰層堆積前と考えられる。

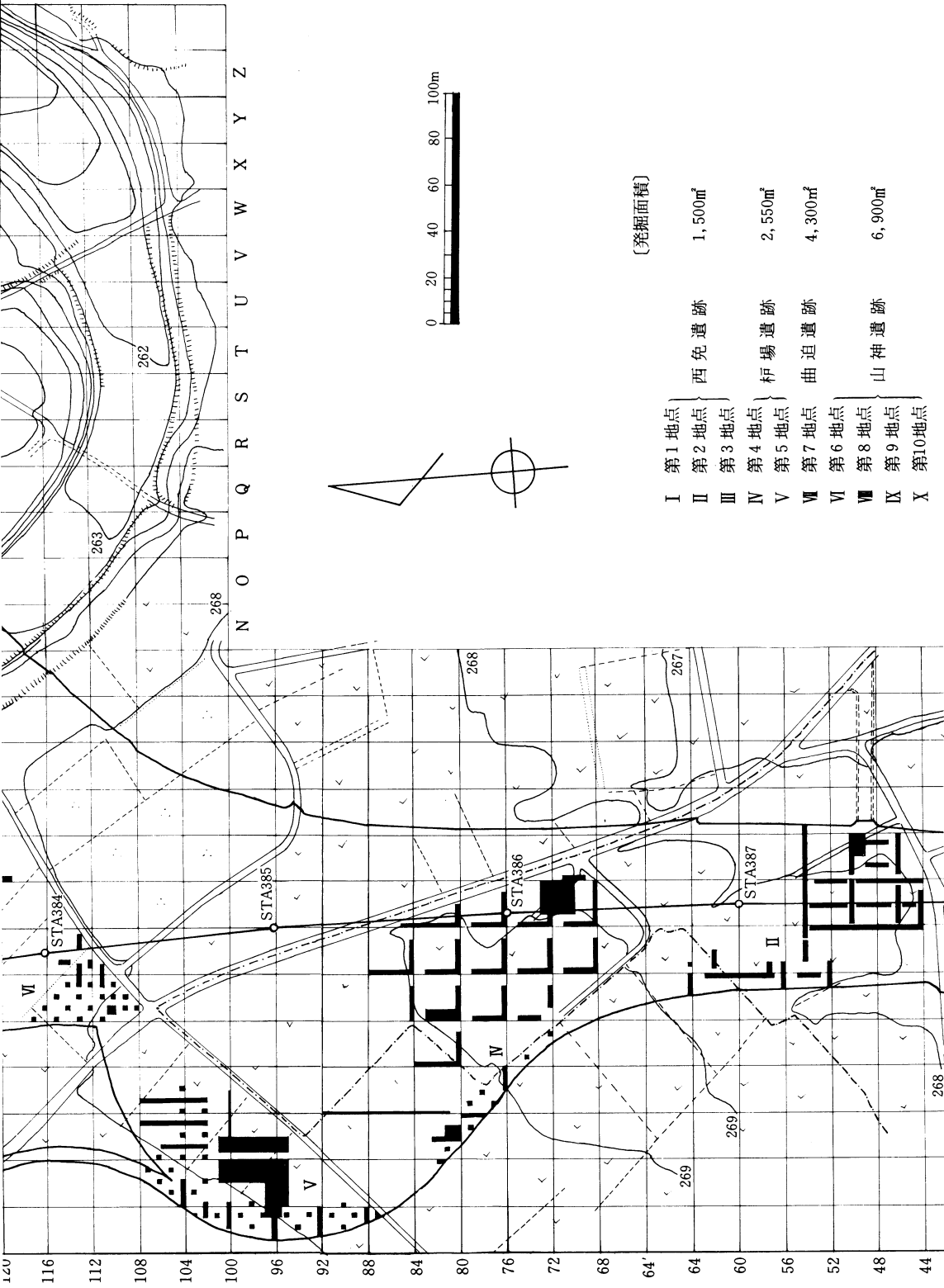


第2図 桑ノ丸遺跡の層序

本文は昭和49年6月および昭和50年3月に、鹿児島県文化財専門員の石川秀雄鹿児島大学教授のご指導をうけた。その際の文化財調査報告書を掲載させていただいた。

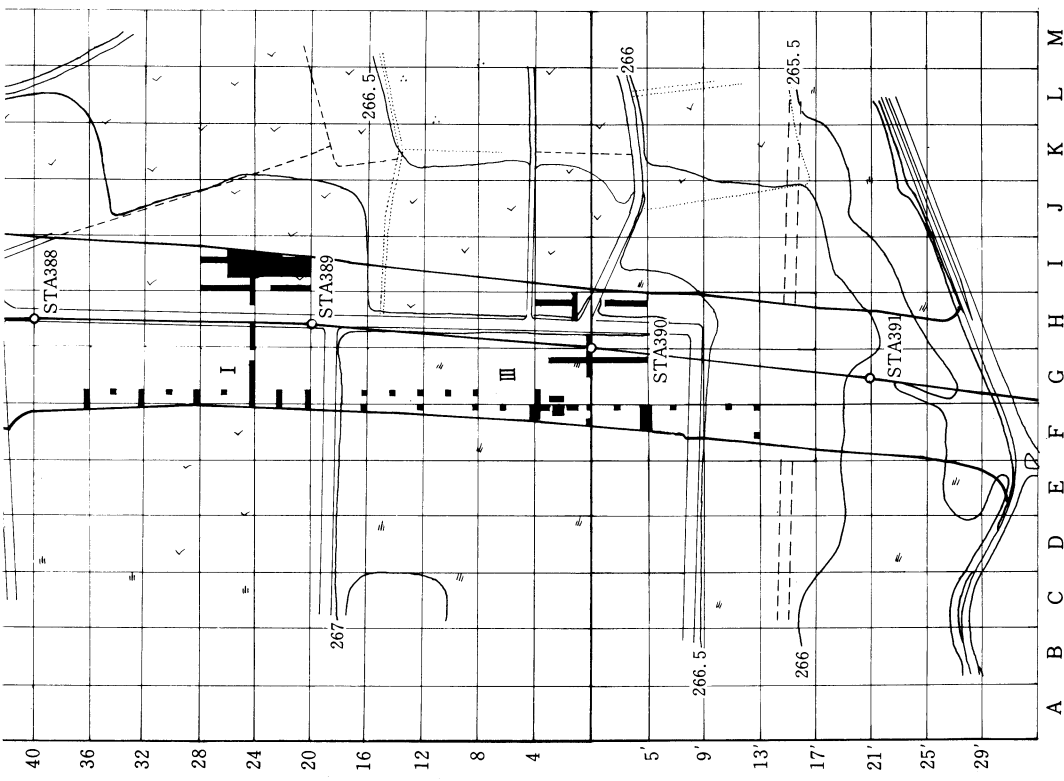
西 免 遺 跡
栢 場 遺 跡
山 神 遺 跡
曲 迫 遺 跡



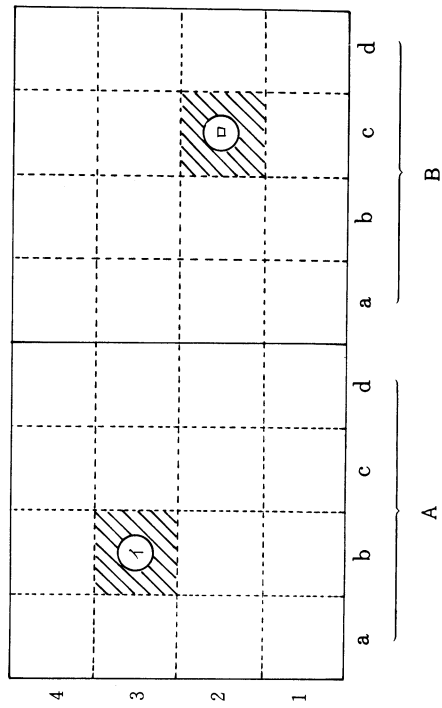


[発掘面積]

I	第1地点	西免遺跡	1,500㎡
II	第2地点	榎場遺跡	2,550㎡
III	第3地点		
IV	第4地点		
V	第5地点	曲迫遺跡	4,300㎡
VI	第6地点	山神遺跡	6,900㎡
VII	第7地点		
VIII	第8地点		
IX	第9地点		
X	第10地点		



グリッドの呼称



例：① A-3-b-III (A-3-b-区の第III層)
 ② B-2-c-II (B-2-c-区の第II層)

第4図 西免・杵場・山神・曲迫遺跡発掘区域全体図

西 免 遺 跡

I 遺跡の位置	IV 遺物
II 調査の経過	V まとめ
III 調査の概要	

I 遺跡の位置

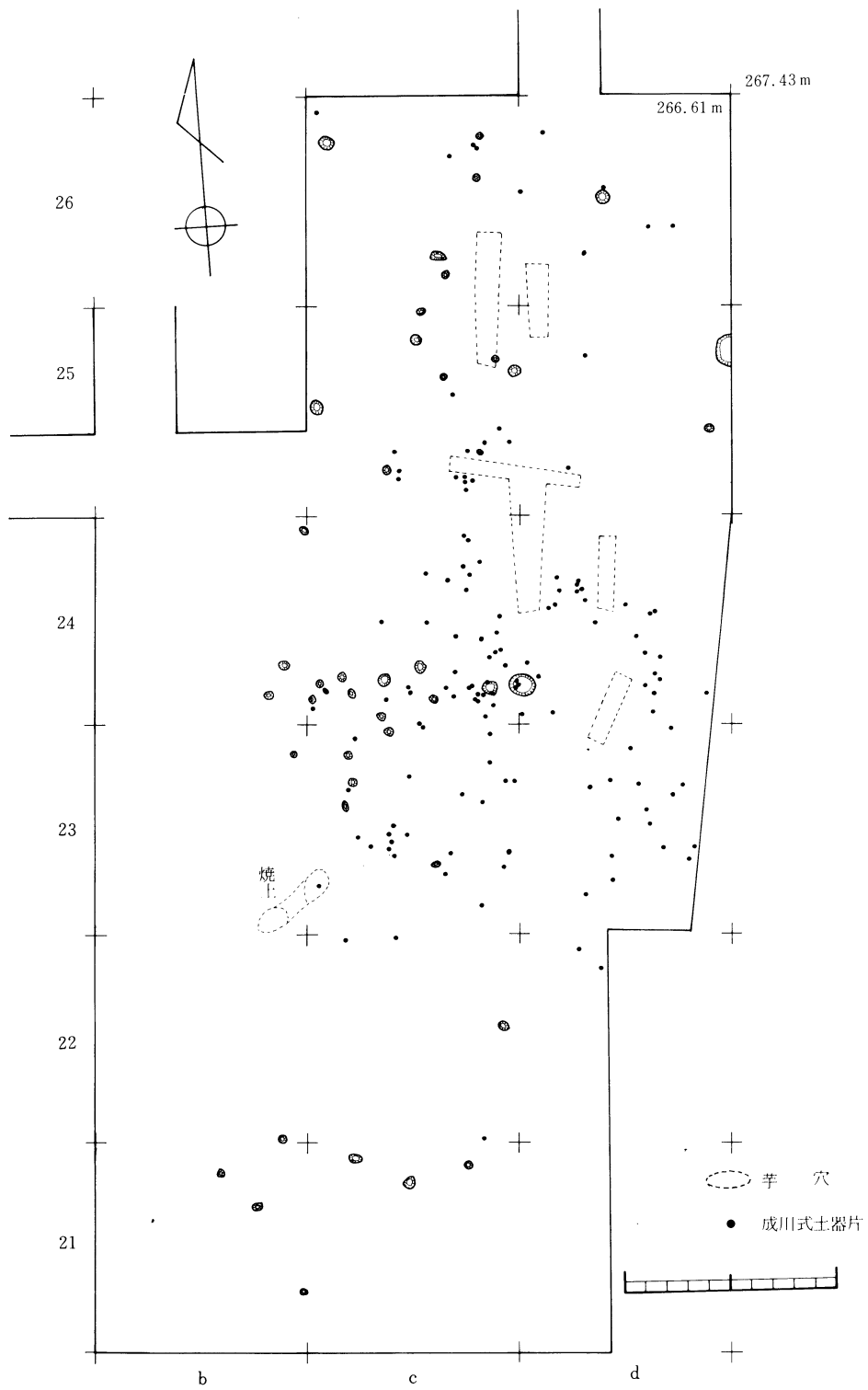
溝辺町と境を接する隼人町西光寺字西免にあり、東方および東南方向に傾斜しはじめる台地の縁辺部にあたる。最も近い集落は糸走で、西免は糸走部落からみればうしろの山の上の平坦部と云うことになり、そこに茶畑しかも集団茶園化されたものがひろびろと展開する。北は溝辺インターチェンジがつくられた柵場遺跡に隣接し、西免の南端から中尾遺跡を見おろし、以下入道・南十三塚・東原・桑之丸遺跡の方向に向って傾斜が続いている。

高速道のステーション番号で云うとSTA 385⁺⁸⁰ からSTA 390までの部分に当たり、加治木インターチェンジから長い坂道をのぼりつめてようやく空港がみえる台地上の平坦面にたどりつき、溝辺インターチェンジにさしかゝる一帯が西免遺跡である。

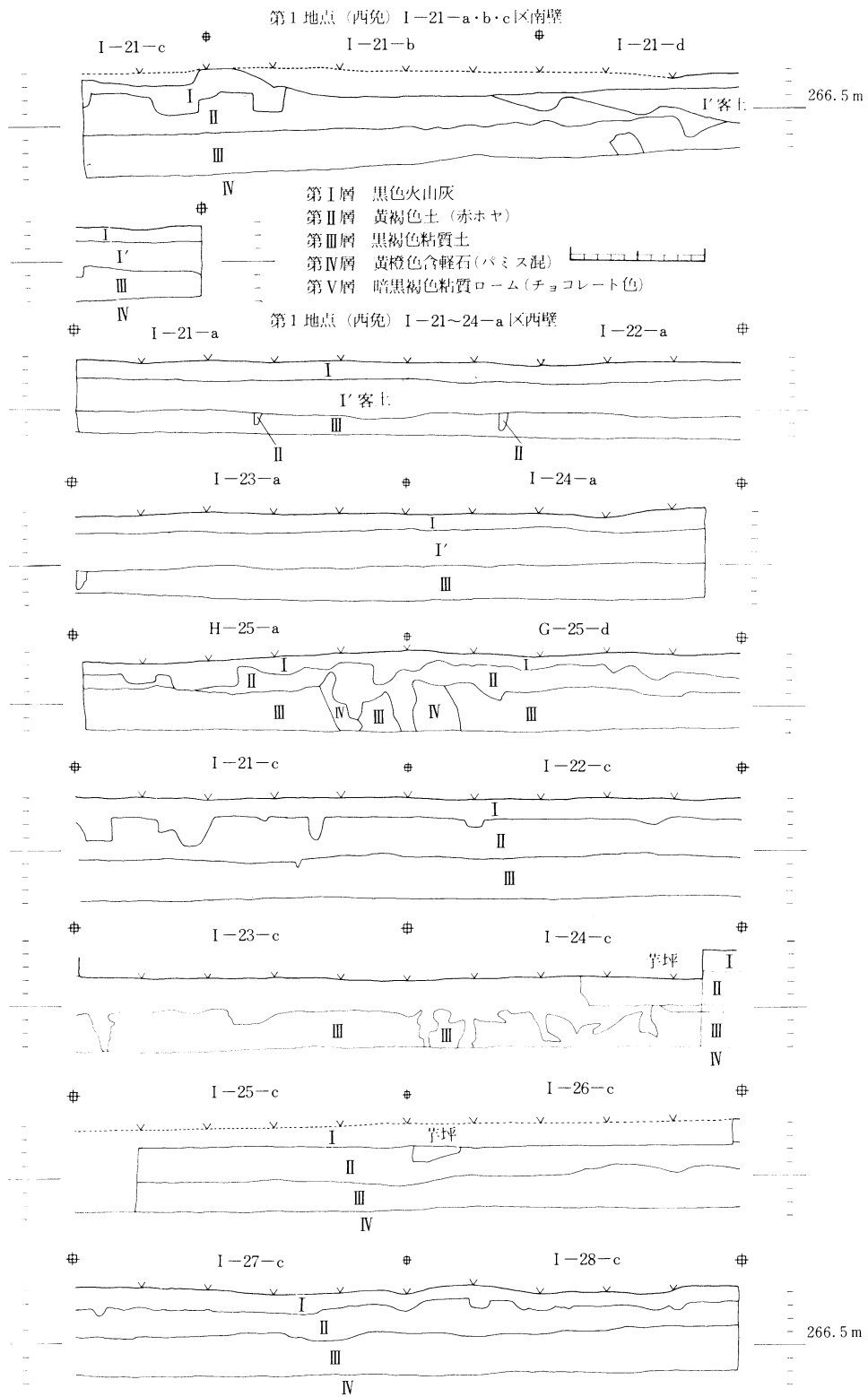
II 調査の経過

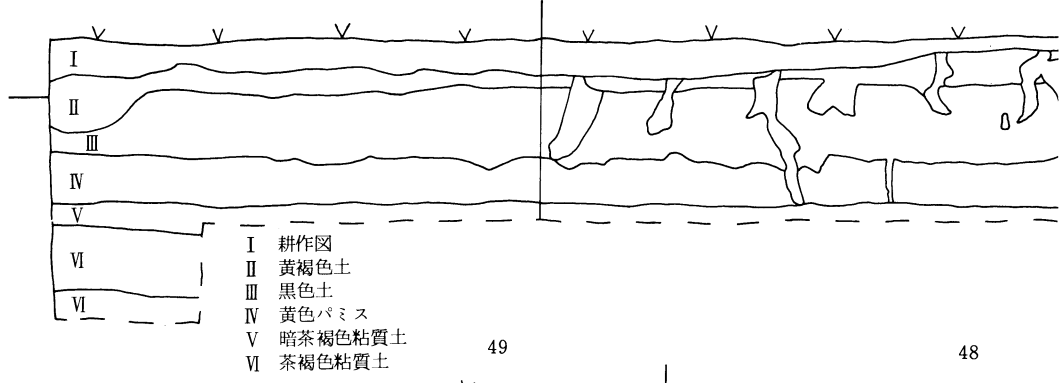
幅50～60m・長さ約400mの南北方向に一直線の高速道敷地を三区分する農道二本により便宜上三地点に分けて調査を進めることにした。STA 390とSTA 385のセンター杭を結ぶ直線を基準線とし、STA 390を基点として5m単位のグリッドを組んだ(図4)。測量会社に打たせたピッチ杭が間に合わぬことと、工事用道路からまず調査するとの方針に従い、この地区で最も表面散布の多い畑の西側で路線内遺跡の再確認の時に石鏝(図版21-1、図41-1)を表面採集した畑を第1地点として昭和49年5月25日発掘調査を開始した。これが縦貫道溝辺工区発掘調査の鍬入れになった。最初のトレンチはF-21-d～G-21-a区の2m×10mの東西トレンチで、STA 389の地点である。調査着手の順にしたがい北側を第2地点、南側を第3地点とよんだ。第1地点は地表散布が多くみられたところ、第2地点は若干の散布がみられたところ、第3地点は南向きの緩傾斜面の肩部分にあたるため地表散布は確認できなかったが地形的にみて確認を必要とすると判断した。なお調査経過の時間的流れについては37ページに記載しておいたのでここでは各地点における調査期間と担当者をあげるにとどめる。

第1地点	工事用道路	昭和49年5月25日～6月13日	(平田・出口)
	本道部分	昭和50年1月22日～2月8日	(平田・牛ノ浜)
第2地点	工事用道路	昭和49年5月28日～6月5日	(平田・出口)
	ボックス部分	昭和49年11月8日～12月14日	(出口・吉永)



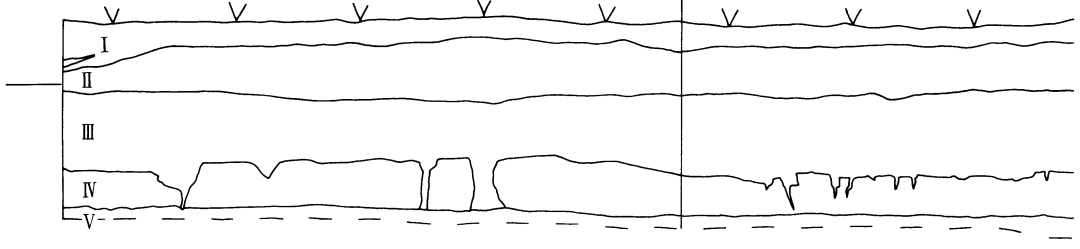
第5図 西免遺跡第1地点の第Ⅱ層遺物出土状況



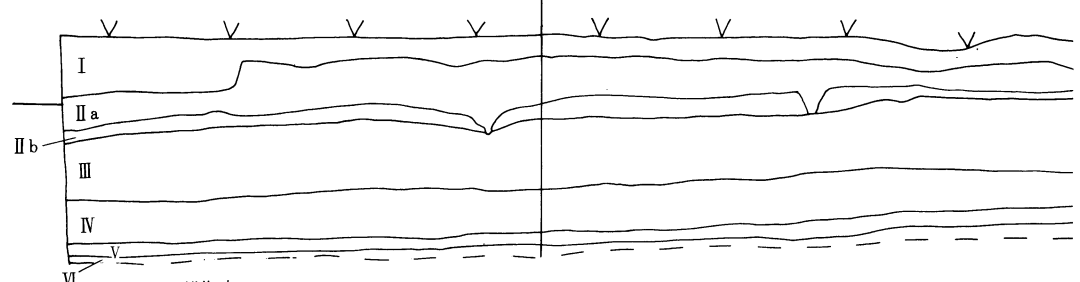


49

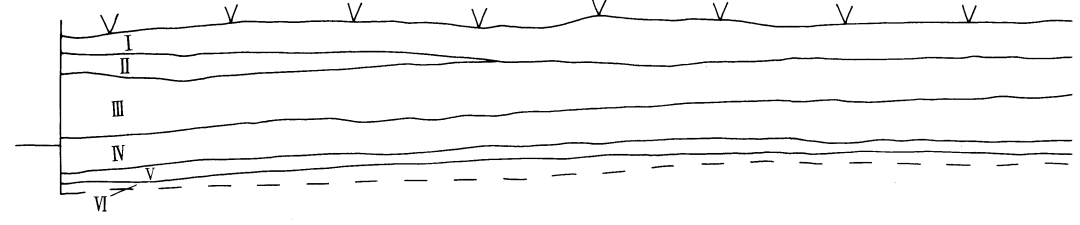
48



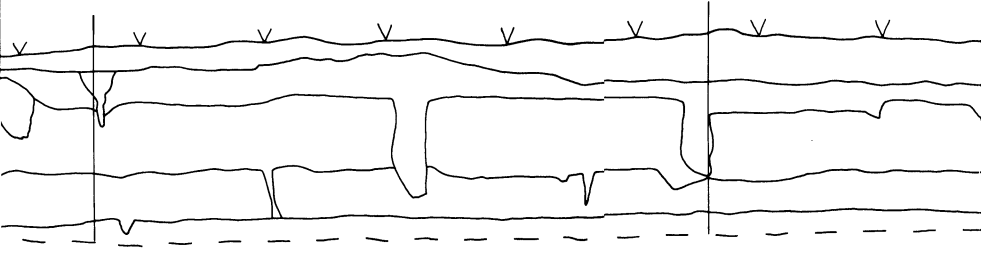
I



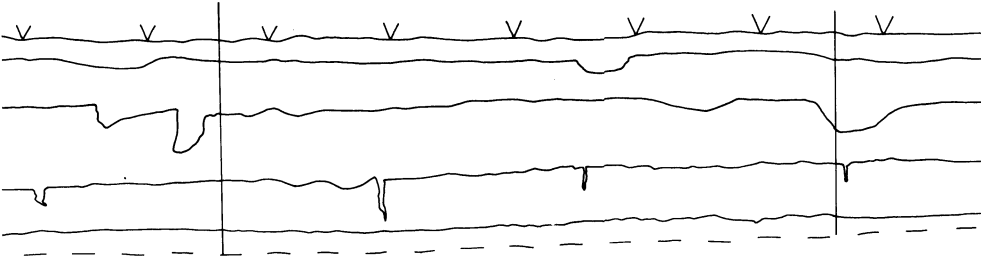
- I 耕作土
- IIa 黄褐色土
- IIb 黄褐色パミス
- III 黒色土
- IV 黄色パミス
- V 暗茶褐色粘質土
- VI 茶褐色粘質土



52

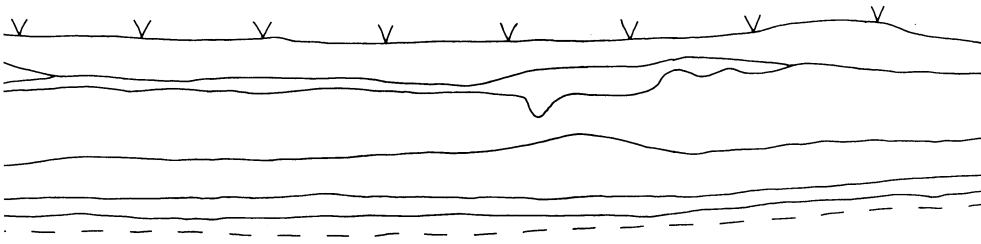


47

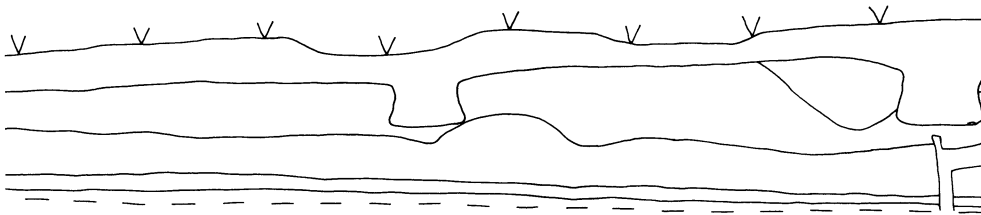


1 G-45~54区 東壁土層図

H



G

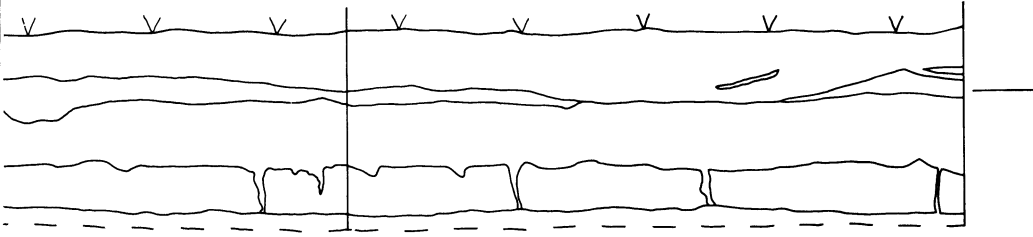


2 F~I-55区 南壁土層図

第7図 西免遺跡第2地点の土層図

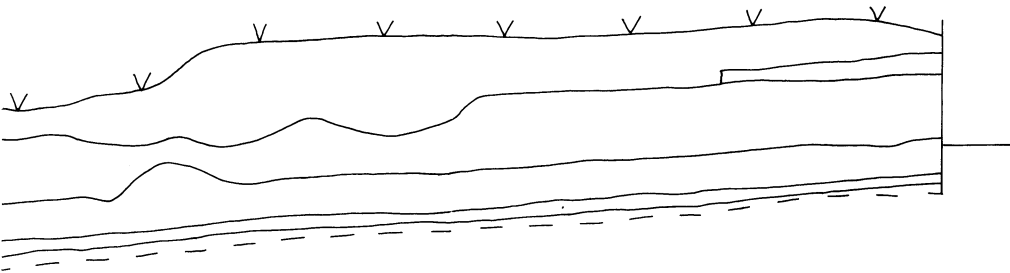
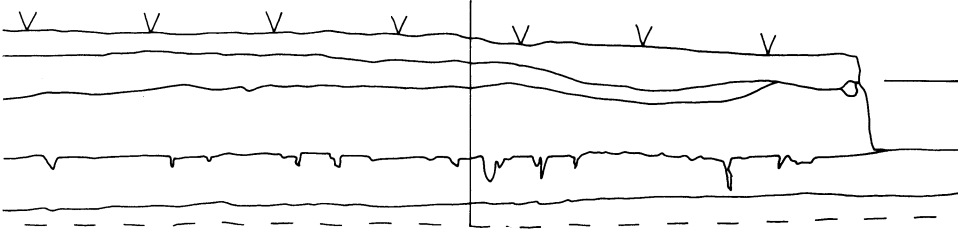
51

50

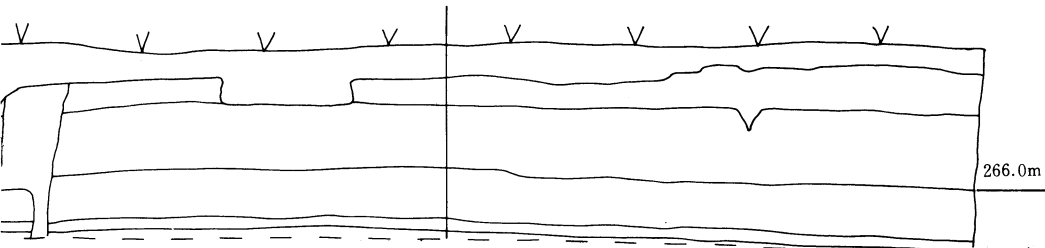


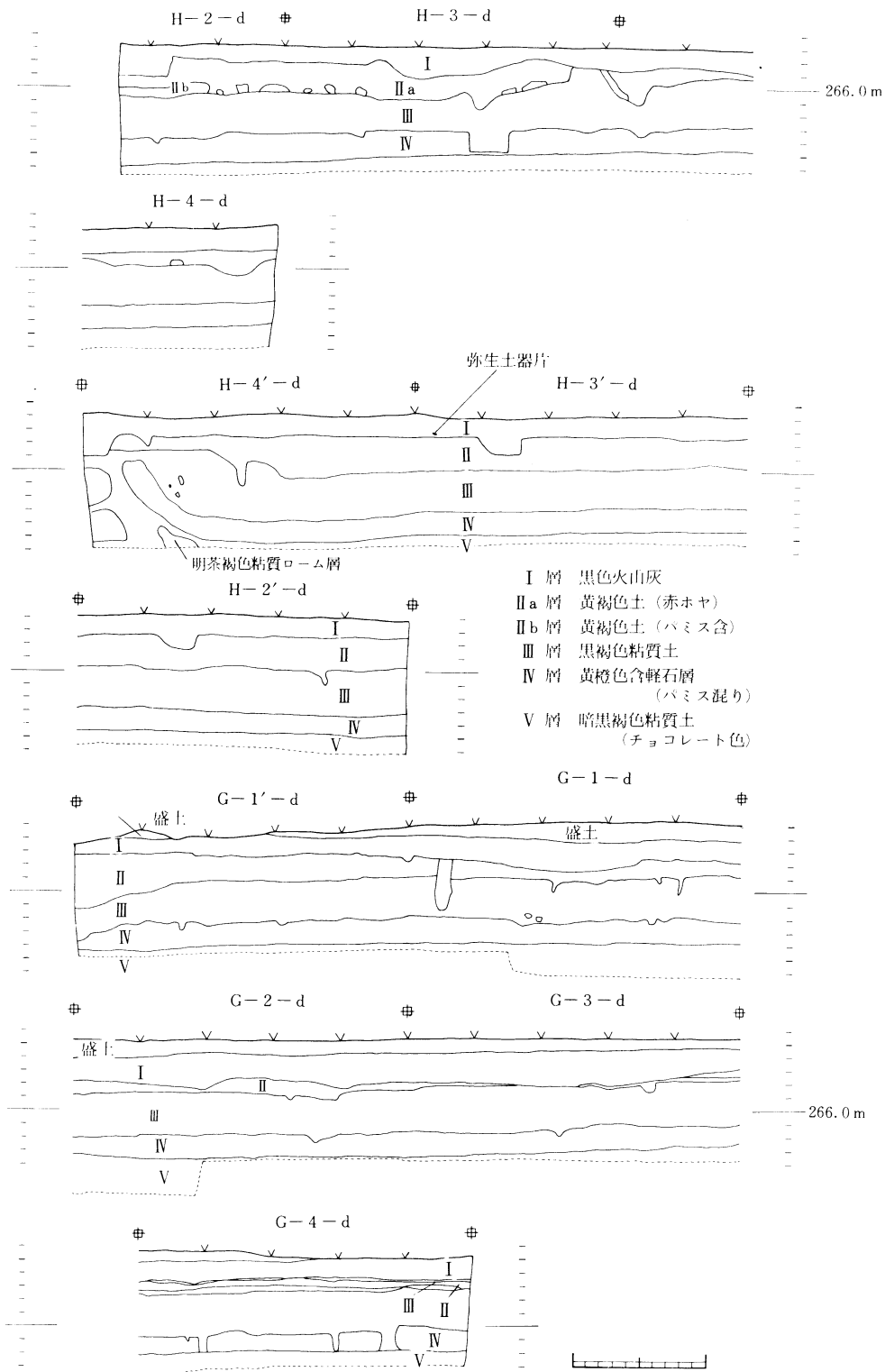
46

45



F





第8図 西免遺跡第3地点の土層図

第3地点	工事用道路	昭和49年6月3日～6月13日	(平田・出口)
	本道部分	昭和50年1月13日～2月8日	(平田・牛ノ浜)

III 調査の概要

掘ってみなければ判らないと云う不確定要素が伴うものの、現実にはトレンチを入れた結果、地表散布とは裏腹に遺構はおろか遺物さえほとんど出土せず、遺物も表面採集の方が多いのではないかと云うような状態であった。それまでの通念として、地表散布がみられるところを発掘すれば必ず遺物なりなんらかの遺構を見出すことができるとばかり考えていたが、その常識が完全にくつがえされた。一ヶ月・二ヶ月と何も見出せず、こんなところが遺跡ですかと問われたり、この土器のかけらひとつが何十万円もしますなど云われたりする苦しい調査を続けるうちに、機械力による農地整備事業などの面的な開発工事が与える破壊は埋蔵文化財にとっては致命的な打撃であることを切実に感じるようになった。ブルドーザーその他の機械力でかきまわされ、弥生以降のものはとばされていても、その下に縄文・旧石器の層が生きているとの信念・意地が心の支えになって調査を続けた結果、地表散布はなかったが地形的にみてあやしいなど考えた第3地点において、F-3・4-d区のV層で加工および使用痕のみられない玉髓片を見出し、その周辺をひろげて黒耀石片を5点探した。出土数および出土状況からみて、旧石器の包蔵地が高速道西側のそんなに遠くないところにある可能性を知りえた。このことと、この層を探せば旧石器を探しうる可能性を知ったことが特筆すべき収穫であった。

最も地表散布の多かった第1地点本道部分の調査で成川式土器片が若干包蔵されている地点を探しだし若干のピット群を発見した(図版2・図5)。しかし、説明しうる遺構的なものを発見することができなかった。なお層位は山神・柘場と同じであるので重複をさけるため、山神遺跡の項において一括してのべることにして、こゝでは各地点の土層図を掲載するにとどめる。

IV 遺物

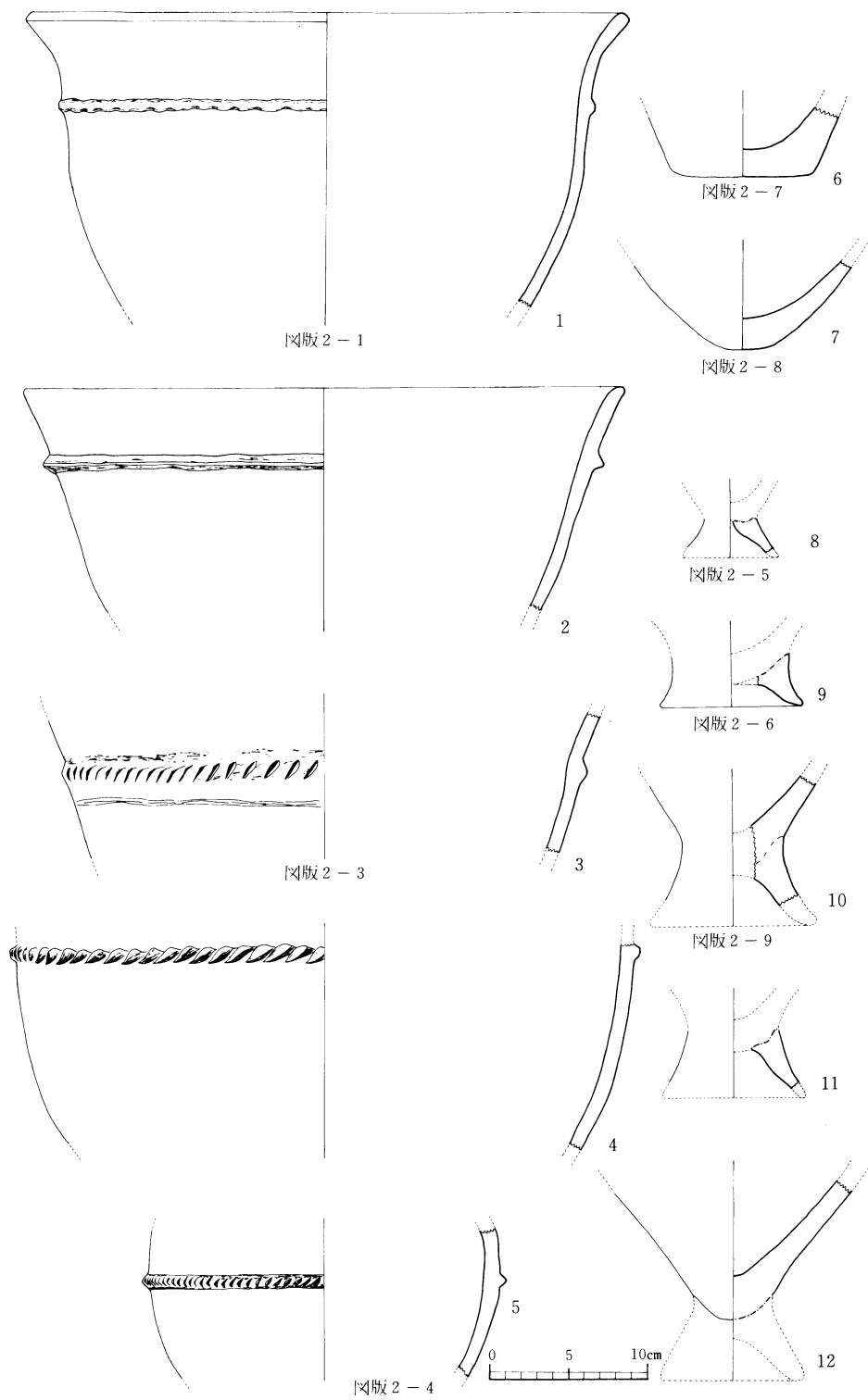
(1) 土器

1. 成川式土器(図版2・図9)

出土した土器はすべて南九州の弥生後期に編年されている成川式土器である。微小破片ばかりで完形品は皆無であるが資料化するものはすべて図示をこころみた。第9図では1・3が第2地点出土のものであり、他はすべて第1地点出土である。いずれも、第II層の黄褐色土(赤ホヤ)の上部に出土し、この層がわずかに残存している地域でのみ出土した。

○甕形土器(図9-1・3)

第2地点出土のもので、頸部で若干しまり口縁部がゆるやかに外反する型のもので、「くの字」形のくびれ部分に絡縄凸帯と刻み目凸帯をもつものがある。前者は内外とも茶褐色、後者は内面茶褐色・外面黒褐色を呈し、どちらも口縁部には横なで調整がみられる。底部は中空のあげ底で第9図8～11のような貼り付け脚とみなされる。



第9図 西免遺跡出土の成川式土器

◦ 甕形土器 (図9-2・4)

前者のように口縁部が外反しない直口型のものである。刻み目のない三角凸帯と刻み目凸帯とがあるが、いずれも貼り付けで頸部のつなぎめにほどこしてある。これは製作時もしろいところをカバーするにあたり、美観と実用をかねたものであろう。

◦ 壺形土器 (図9-5)

胴部の中央、最大径をもつところに刻目凸帯をほどこしたものである。内面は茶褐色、外面は黒褐色で斜方向の刷毛目調整がほどこされている。底部は第9 図-7のような卵の先端のような形になるのであろう。

(2) 石器

第3 地点F-3-d 区のチョコレート色をした第V層(暗黒褐色粘質土)に3cm大の玉髓(珪岩)片1点、その周辺を拡張して黒耀石5片を見出したが、いずれも原石片とみなされた。また、表面採集および耕作土中より石鏃が3点出土している。山神遺跡の遺物の項で一括して記述する。

V まとめ

遺構はおろか遺物もほとんどないと云ってよい程の遺跡であったが、機械力による大規模な農地整理は遺跡・埋蔵文化財にとっていかに残酷なものであるかを思い知らされたことは、文化財担当者にとってこれほどの良薬はなかったと云える。また、従来地山ではないかと考えられていた層をつき破ったところ、その下に旧石器のローム層があることを確認し、この層まで掘り下げる必要があることを調査員一同が認識したことが、後日報告されることになる旧石器の大遺跡を昭和50年・51年度にそれぞれ発見するいとぐちとなった。これらの意味において、西免遺跡が与えた教訓は大であったと云える。

栢 場 遺 跡

I 遺跡の位置	IV 遺 物
II 調査の経過	V ま と め
III 調査の概要	

I 遺跡の位置

西免遺跡の北側・山神遺跡の南側で、ともに同一台地上の遺跡であり、栢場が台地中央部のやゝ小高いところを占める。県道論地・糸走線の南側に位置し、高速道溝辺インターチェンジが建設される部分にあたる。発掘調査前は「中免遺跡」の名称が与えられていたが、これは俗称であったので正式の小字名を採用し、遺跡名を改めることにした。

II 調査の経過

山神遺跡の項で一括してまとめるので、こゝでは各地点の調査期間と調査担当を記載するにとどめる。

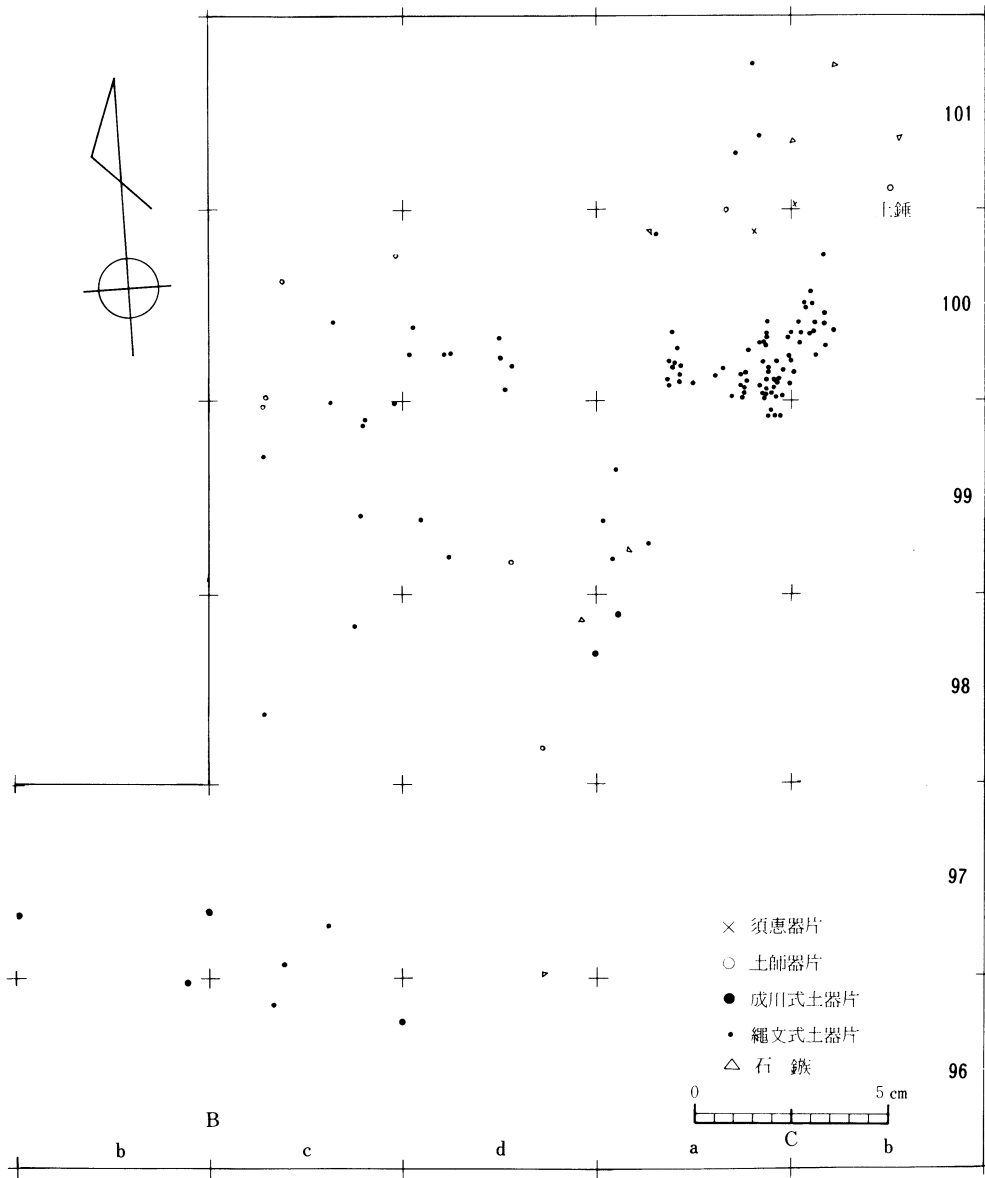
第4地点	工事用道路部分	昭和49年6月6日～6月19日	(平田・出口)
		昭和49年7月17日～8月27日	(平田・立神)
	本道部分	昭和50年1月9日～3月14日	(平田・牛ノ浜)
第5地点	工事用道路部分	昭和49年6月10日～6月12日	(平田・出口)
		昭和49年7月5日～8月27日	(平田・立神)
	本道部分	昭和50年3月1日～3月27日	(平田・牛ノ浜)

III 調査の概要

昭和47年度に実施された分布調査で、縄文晩期と弥生前期の散布となっている。インターチェンジ用の敷地を南北に分ける農道があり、調査の便宜上農道より南側を第4地点、北側を第5地点とした。層位も西免・山神と同一なので、重複を避けるためこゝでは土層図のみを掲載し、層位については山神遺跡の項で記述する。

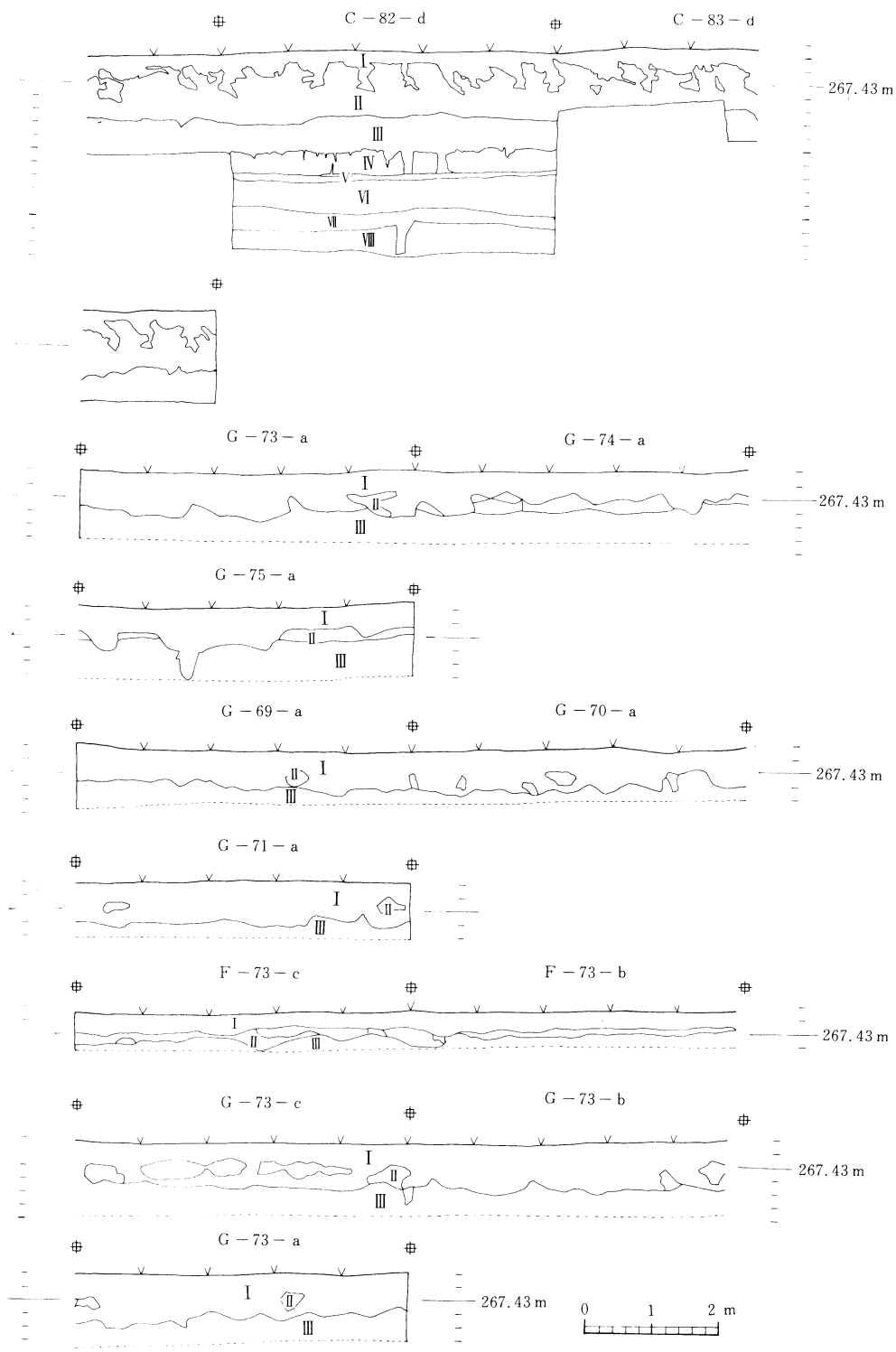
第4地点は西免と同様トレンチャーおよびブルドーザーによる破壊がはげしく、主たる遺物包含層は平面・断面とも竊模様となっており(図版3, 図11・12)、遺構についてはほとんど期待できなかった。H-73-c区のII層下部より岩崎下層式が3片出土したので拡張してみたが、他になにもでなかった。また第4地点北半の各トレンチは攪乱されていたが石器類の出土が若干みられた。

第5地点においては地表散布の多いB-96~101区を400㎡の広さで全面発掘を行なった。

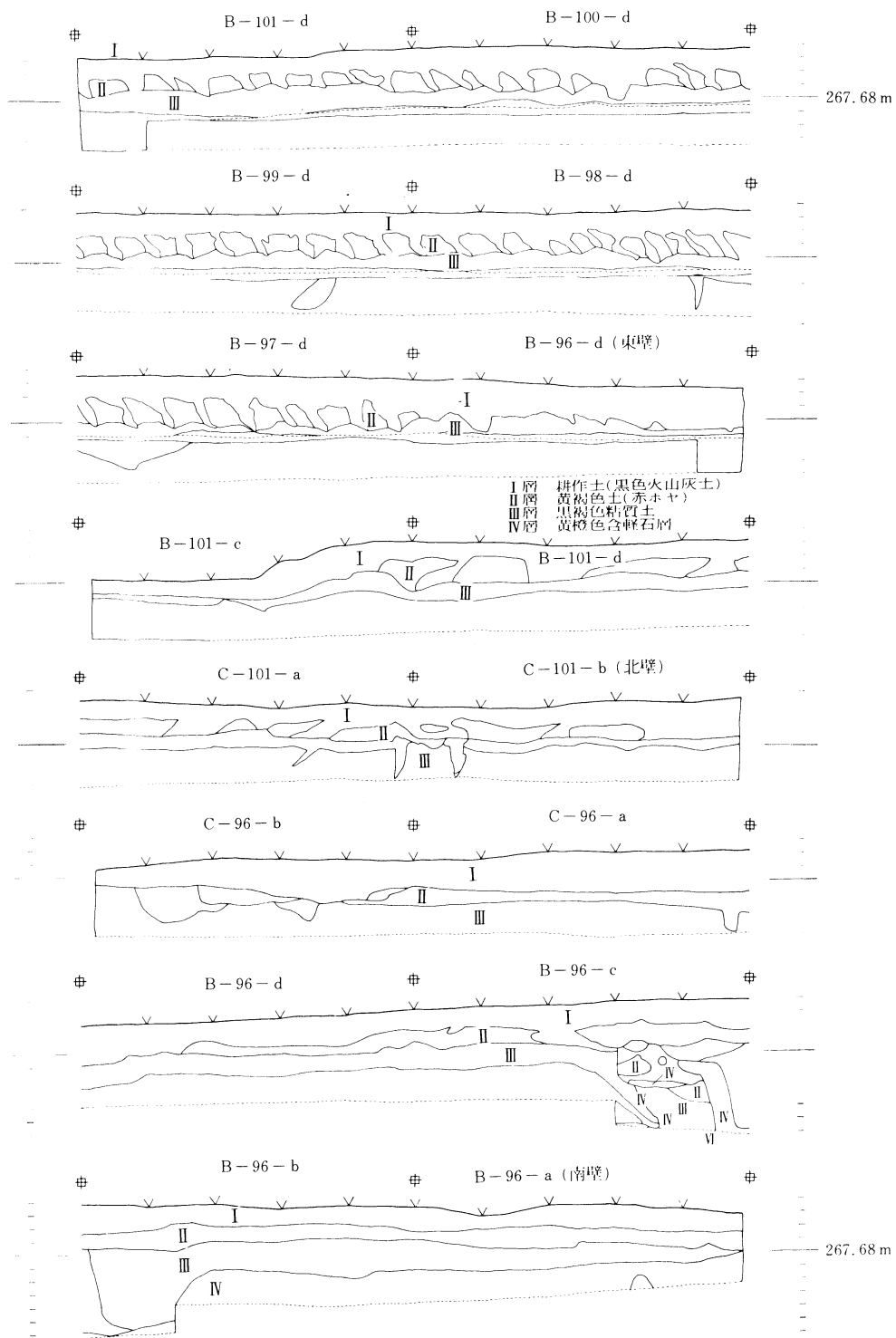


第10図 柵場遺跡第5地点の第II層の遺物散布状況

荒されてはいたが（図版3）、第II層上部で成川式土器の甕形土器の完形品と壺の略完形品が各1ヶ、土錘が5ヶ出土した。完形品といっても一ヶ所にまとまって出土したものではなく、土器の個数体が少なかったことが幸いして20m四方にばらばらに散らばっていたものでも容易に接合を探しだすことができた。長年の耕作の間にこのように散乱したのであろう。また、第III層上部に縄文前期の塞之神式土器片が出土した。



第11図 栢場遺跡第4地点の土層図



第12図 柵場遺跡第5地点の土層図

IV 遺物

(1) 土器

1 縄文式土器 (図版4・5, 図13~15)

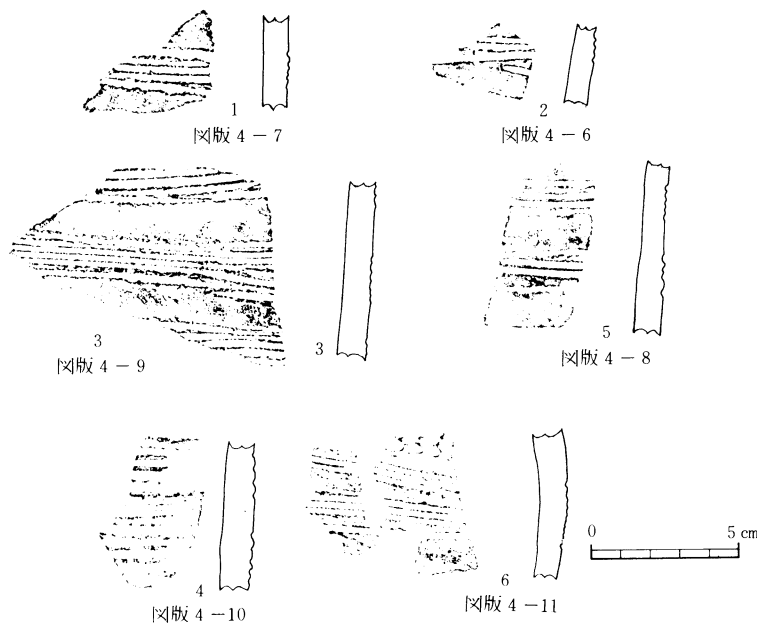
出土遺物は第II層上部の岩崎下層式・凹線文土器・指宿式と第II層下部の塞ノ神B式とに分けられる。

I類 (塞ノ神B式土器) (第13図1~6, 図版4-b~11)

第5地点から出土したものである。第13図1~5は胴部片で、貝殻腹縁による条痕文を、ヘラ描きによる平行枠内に施したものである。枠外はヘラで調整されている。6は頸部から胴部にかけての土器片である。頸部には、貝殻腹縁による刺突文を連続して施した後、ヘラで枠を設けている。条痕文は1~5と同様である。1~6共に無文の所はヘラでよく調整されている。又内面もヘラで調整されている。胎土には細砂粒を含み、焼成は良い。色調は内外共に淡褐色を呈するが、6の外のみ黒褐色を呈している。

II類 (岩崎下層式土器) (第14図1・2, 図版5-1・2)

第4地点から出土したものである。1・2共に口縁から胴部にかけての土器片である。口縁部に凹線を斜位に連続して施し、その下部に2~4条の凹線文をヘラ様のもの施している。口縁部は1はやや直行しており、2はやや外反している。頸部から口縁部にかけての内面には、指の圧痕が残る。胎土はあまり砂粒を含まないが、焼成は良い。色調は内外共に赤褐色を呈する。



第13図 柵場遺跡第5地点出土の縄文式土器

Ⅲ類（凹線文土器）（第14図3，図版5-3）

第4地点から出土したもので、胴部から底部近くへかけての破片である。外面には波状の浅い凹線文を斜位に施している。調整は雑で擦痕が明瞭である。内面は指の圧痕が見られる。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。色調は外面で赤褐色、内面で茶褐色を呈する。



第14図 柵場遺跡第4地点出土の縄文式土器

IV類（指宿式土器）（第15図1～5，図版4-1～5）

第5地点より出土したものである。1は外反する口縁部片である。口唇部は波状を呈する。外面はへらでよく調整されているが、指の圧痕文を所々残している。施文はへら状のもので、短い沈線と縦位の波状文を、組み合わせたものである。内面は貝殻腹縁により調整されている。胎土に細砂粒を含み、焼成は良い。色調は内外共に茶褐色を呈する。2は胴部片である。内外共にへらでよく調整されており、先の丸いへら状の施文具による沈線を横位に旋している。胎土に砂粒を多く含み、焼成はあまり良くない。色調は内外共に黒褐色を呈する。3・4は共に口縁部片である。内外面共に貝殻腹縁による条痕を地文としているが、沈線の施されたあとのもので、胎土が沈線の上にかぶさってきているのがわかる。沈線間には貝殻腹縁による刺突文を施していて、擬縄文的手法を取り入れている。3・4は同一個体の破片と思われる。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。色調は内外共に黒褐色を呈する。



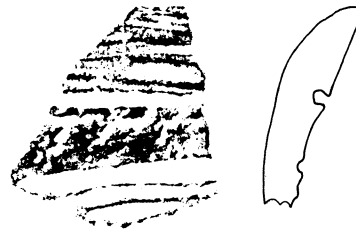
1 図版4-1



2 図版4-2



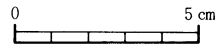
3 図版4-3



4 図版4-4



5 図版4-5



第15図 柵場遺跡第5地点出土の縄文式土器

2 成川式土器

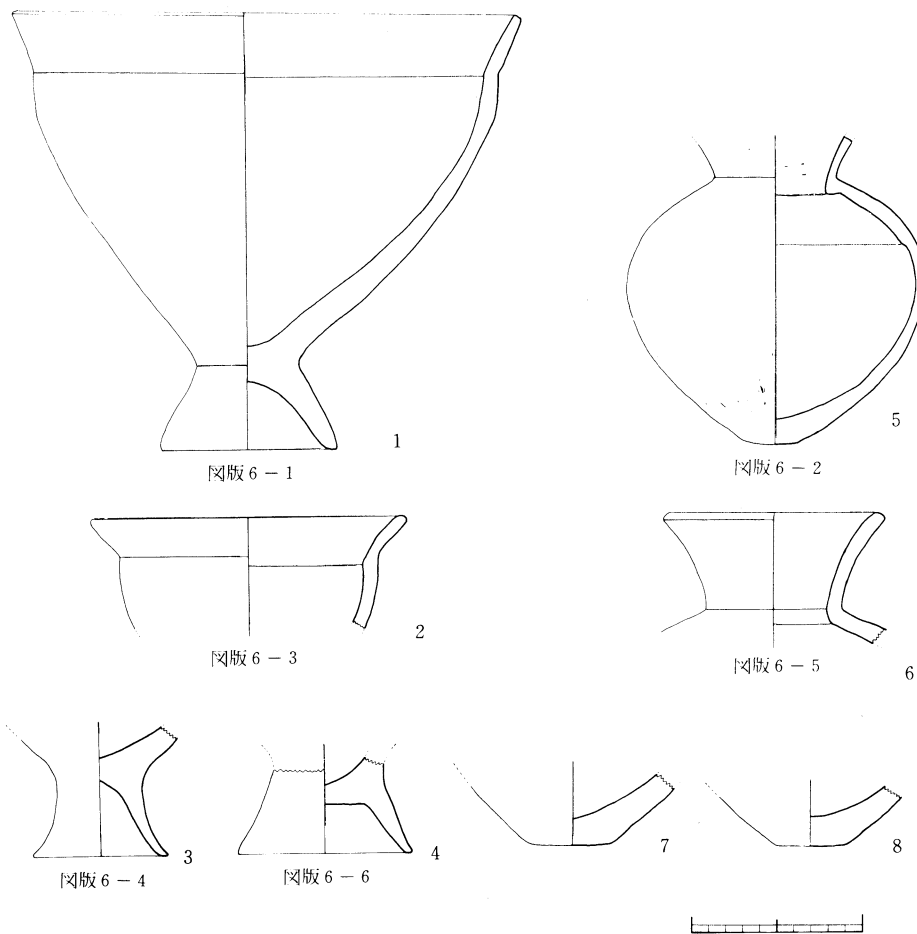
①甕形土器 (図版6-1, 図16-1)

口径29.8cm、高さ26cm。内外とも明褐色で、器壁は薄手につくられ、胎土は微細なものを用いている。焼きはあまりよくない。口縁部が外反して内側に稜線をつくり肩のところわずかにくびれるが、胴ははることなく、直線的に底部に向かう。中空のあげ底貼付け脚をもつ。口縁部は横なで、胴の上部は縦なで調整。胴の下部および脚は縦にへら調整が行われている。

土師器のようだと云う意見もあったが、古式土師の編年は南九州ではおこなわれているので今後の研究課題としておく。

②甕形土器 (図版6-3, 図16-2)

復元口径18.5cm。胎土は細かいものを用いており、器壁はうすい。内外とも明褐色を呈する



第16図 栢場遺跡第5地点出土の成川式土器

が、胴部外面にはすすが付着している。

③壺形土器（図版6-2，図16-5）

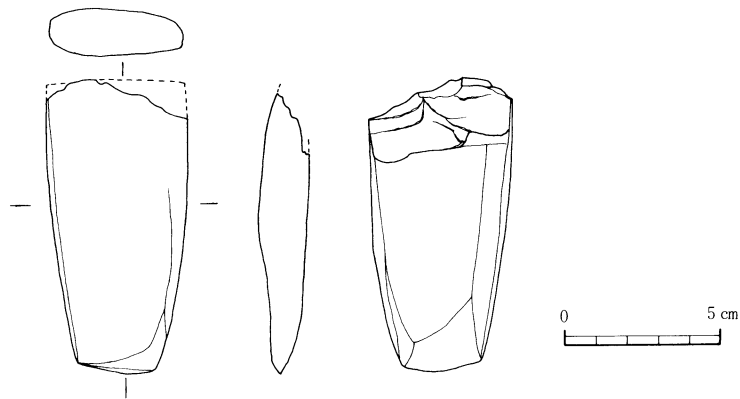
胴部外径17.5cm・胴部高15.7cm・頸部外径7.2cm。胴部最大径が中央部より高い位置にある。底は丸底に近く、さゝえになるものがなければ直立不能である。内外とも赤褐色を呈し、若干砂粒混りで焼成は良好。口唇部を欠き、あとわずかの1片で完形品とならなかったものである。外面は刷毛目調整が口縁部については横に、胴部は縦方向に行われている。内面は輪積み痕が顕著である。

(3) 石器

①磨製石斧（図版23-5，図17）

第4地点の第I層より出土したものである。緑泥変岩を使った全面磨製の石斧である。長さ9.5cm、最大巾4.6cm、最大厚み1.6cmある。刃部の片面は使用のためか、剝落している。刃は蛤刃状を呈していたと思われる。

この他に土錘・石鏃が出土しているが、山神遺跡の項で述べる。



第17図 柕場遺跡出土の磨製石斧

V まとめにかえて

こゝは出土する遺物からみて、たしかに以前は古代の人々が生活した場のひとつであったと云える。しかし機械の爪跡はその場を大きくかきむしっており、遺跡は遺言も云えないような頻死の状態であったと云ってよい。その死水をとったような気持である。この遺跡がわれわれに云い残したかったことは遺物を通して考えるしか途はない。しかし、いろいろな時代の遺物が出ており、あまりにも断片的であるので、どんな遺跡であったのか遺言を聞けなかっただけに、いまだに判りかねている。

山 神 遺 跡

I 遺跡の位置	V 遺構
II 調査の経過	VI 遺物
III 層位	VII まとめ
IV 調査の概要	

I 遺跡の位置

鹿児島空港が所在する十三塚原台地の西端部に近く、海拔 256 m～ 258 mの平坦な台地上の茶畑地帯である。西南から東北方向に走る県道加治木～溝辺間バイパスとそれとほぼ直交する西北から東南に向かう県道論地～糸走線とに区画された東側の畑地が山神遺跡になる。全国遺跡地図、鹿児島10-42（註1）の西側 200 m～ 300 mにあるこの畑地を、幅約50 mの九州高速道の敷地がほぼ南北に貫通している。九州高速道のステーション番号で云えば、STA 380+20からSTA 384+20の 400 mの区間、完成後の高速道で云うと、県道加治木～溝辺間バイパスの空港ホテルそばのボックスと溝辺インターチェンジ北端との間が調査対象となった地域である。

北側は県道加治木～溝辺間バイパスによって木屋原と接する。発掘調査の結果判明したことであったが、このバイパス部分は本来心もち小高い地形であったと考えられる。いつの時代か判断しかねるが、削平して平坦にしたところで、本来南側の緩傾斜面が山神、北側の緩傾斜面が木屋原と区分されていたと推定された。東は迫を隔てて曲迫遺跡に相對し、南はこの一帯では最も小高い柵場・西免遺跡に連なる。

山神第8地点の路線外、西側約50 mの畑地に、古老の話ではその昔「山神」を祀った祠があったとのことである。現在は使用されていない古井戸のみが残存するだけであり、また「山神講」などの伝統行事についてもこの地区の人々は全然記憶にないとのことである。

なお、古井戸のことが話題になった時、どれ程の深さだったかを尋ねると、論地岡（山神一帯の通称）では23尋、桑ノ丸では8尋、また論地岡には泉が二、三箇所あったが、現在は涸渇してしまったとのことであった。

（註1）九州高速道加治木～吉松間埋蔵文化財包蔵地分布調査報告書（1973年、鹿児島県教育委員会）およびそれにもとづく全国遺跡地図には「小屋原遺跡」と記されているが、この地点は本報告書でとりあつかう「曲迫遺跡」の地点であり、字絵図表記の「木屋原」は山神遺跡の北側に連なる地域である。山神・木屋原・曲迫はそれぞれ道路、農道によって相互に隣接しており、恐らく小字境の路

上において土地の人に尋ねた地名によったために、このような混同を生じたものと推定される。

第1表 山神・栢場・西免遺跡の調査面積一覧

月	調査者	調査日数	山 神	栢 場	西 免	特 記 事 項
			調査面積	調査面積	調査面積	
5	平 田 出 口	5	m ² m ³	m ² m ³	m ² m ³	5.21 ベースキャンプ設営 25 西免の工事用道路より調査開始
6	〃	22	165 176.6		638 595.5	6.13 西免・栢場の工事用道路調査完了
7	〃	26	曲迫 (386) (357.85)	200 197.5		7.4 第1インター橋部分の調査完了
8	平 田 立 吉 神 永	22.5		364.5 318		8.22 山神地区調査開始
9	〃	21	1580.25 815.65			
10	〃	23	2633.5 1111.1			
11	平 田 立 吉 牛ノ浜	21.5	896.75 1112.3		448 576.74	11.12 西免ボックス部分調査開始(担当、出口、吉永)
12	平 田 牛ノ浜	17	1174.5 882.9			12.14 西免ボックス部分あけ渡し
1	〃	17.5	273.5		171 307.8	
2	〃	16	299.7	1046 717.5	243 202.75	2.8 西免地区調査完了 19 山神地区工事用道路あけ渡し
3	〃	22	260.5	939.5 1199		3.27 栢場地区調査完了
4	平 田 弥 栄	17	450 810			4.28 山神地区調査完了
総 計		230.5	6900 5743.25	2550 2431.55	1500 1682.79	

II 調査の経過

溝辺インターチェンジのどまんなかにベースキャンプを設営し、半径 500mの三方向約7ヘクタールの縦貫道敷地の範囲を担当したが、工事用道路とかインター橋やボックス部分など工事を急ぐ部分の調査を早く済ますように要請されたため、この月は西免、つぎは山神、また西免と、あちらに行きこちらに行きの調査であったため一遺跡にどっしり腰を据えた調査ではなかった。したがって山神・柝場・西免はこゝに一括して記載する。なお曲迫は第2インター橋の確認調査を行なったが、サービスエリア部分には手がまわりかねて諏訪・弥栄パーティーにたのまざるをえなかった。

以下、11ヶ月におよぶ調査の日誌抄を掲載して調査経過の説明にかえる。

調査日誌抄

西免遺跡 調査期間 昭和49年5月25日～昭和50年2月8日

- 5月21日 朝、課に立寄り用具を積み、溝辺へ向かって出発。たまたま朝刊の三面トップに、縦貫道溝辺工事おくれる——長くかかる発掘調査——と掲載されていた。変なタイミング。長期間帰れぬことを覚悟して鹿児島をはなれる。
- 22～24日 ベースキャンプの設営ならびに器材・用具の点検。対象遺跡の地権者・耕作者宅を軒並みに訪問し、耕作時の状況について聞きこむ。
- 25日 作業員へのオリエンテーション。STA389より発掘開始（担当、平田・出口）。地表下30cmで赤ホヤ層出現。地表散布の状態とは異なり、遺物・遺構をみとめることができず。
- 27日 道路公団浅野所長来訪。
- 28日 G-21-a区をシラス層まで振り下げ、層位を確認。
- 29日 第2地点工事用道路部分の確認調査開始。ごぼう作りにより赤ホヤ以上はかく乱されていた。
- 6月3日 第3地点工事用道路部分の確認調査開始。岸川文化課長の現場視察。
- 6日 第3地点F-3-d区のチョコレート色をした第V層（暗黒褐色粘質土）に3cm大の玉髓（珪岩）片が出土。旧石器の包含層になるのではないかと以後この層を注意する。徳重教育次長・塚田総務課長の現場視察。有村文化課長補佐同行。
- 13日 西免地区工事用道路部分の調査完了。
- 11月8日 第2地点ボックス部分の杭打ちおよびトレンチ設定。
- 12日 ボックス部分の掘り下げ開始（担当、出口・吉永）。耕作によるかく乱甚だし。
- 15日 II層掘り下げに入る。——遺物の出土なし。
- 19日 III層掘り下げに入る。
- 26日 河野専門員の現場視察。
- 29日 岸川文化課長の現場視察。

- 12月3日 土層実測用水系設定。G-54-d区Ⅲ層より戦争中のアメリカ軍の機関砲弾とみなされる不発弾出土。山鉾でぶちあてたお婆さんたちはびっくり顔。吉永、気軽にぶらさげて警察へ届ける。戦争を知らない若者たちは、不発弾とはいえそのこわさを知らない。
- 11日 土層実測を終了し、ボックス部分の調査完了。
- 14日 西免ボックス部分のあけ渡し。
- 1月9日 第1地点・第3地点本道部分の杭打ちおよびトレンチ設定。
- 13日 第3地点本道部分の調査開始（担当、平田・牛ノ浜）
- 18日 大雪のため作業不能。クレーン車で作業小屋を山神から栢場に移す。
- 22日 第1地点本道部分の調査開始。有村文化課長補佐の現場視察。溝辺町教育長および文化財審議委員、見学に来訪。
- 1月25日 成川式土器の出土が若干みられるので、I-23-26-b・c・d区を10m×20mに拡張。そのために山神第8地点より第1地点にベルトコンベアを移す。
- 31日 I-21-23-a・b区を拡張して全面発掘。
- 2月7日 ピット群の実測、遺物のとりあげ、土層実測完了。
- 8日 西免地区の調査を終了して道路公団へあけ渡す。

栢場遺跡 調査期間 昭和49年6月5日～昭和50年3月27日

- 6月5日 発掘地点の杭打ちおよびトレンチ設定。
- 6日 第4地点工事用道路部分より発掘開始（担当、平田・出口）。遺物皆無。
- 10日 第5地点工事用道路部分の発掘開始。B-101-d区Ⅱ層においてはじめて土錘が1ヶ出土。これが溝辺で接したはじめての遺物らしい遺物。しかし、残念ながら攪乱層中より出土。こんな山の中からと首をひねったり驚いたり。
- 12日 第1・第2インター橋部分の調査を早くと要請されて、栢場地区の確認調査を一時中断。
- 7月5日 第5地点工事用道路の調査再開。（担当、平田・立神）
- 8日 第二次募集を行ない作業員増加。
- 10日 A-97-d区Ⅲ層直上に塞之神式土器片出土。これによって、当地区においては第Ⅰ層下部が土師・須恵、第Ⅱ層上部に弥生、中部に縄文後・中期、第Ⅲ層上部に縄文前期、第Ⅴ層が旧石器の包含層であることがはっきりしてきた。
- 12日 鹿島建設の大型ブルドーザーがベースキャンプ前に居坐る。いよいよまわりに工事の騒音を聞きながらの調査となる。
- 17日 第4地点工事用道路の調査再開。トレンチャーもしくはブルドーザーによる第Ⅱ層以上の破壊が顕著。しかし遺物の出土はわりと多い。農業基盤整備事業で遺跡は全く破壊されてしまっていることが判る。

7月18日 鹿児島大学石川秀雄教授の土層調査。

第Ⅰ層 黒色火山灰層

第Ⅱ層 上部ローム 2,000年～ 5,000年

第Ⅲ・Ⅳ層 中部ローム 5,000年～ 8・ 9,000年

第Ⅴ層以下 下部ローム

とのご教示をうく。

8月1日 センターラインのグリッド杭に番号をつけおとしたものが1本あることに気付く。
すでに南北両端から調査が進められているため、全体を変更するよりもダッシュ区として修正する。

7月27日 工事用道路部分の各トレンチの実測完了。

1月9日 第4地点本道部分の杭打ちおよびトレンチ設定。

27日 第4地点本道部分の調査開始（担当、平田・牛ノ浜）

30日 H-73-C区Ⅱ層下部より縄文片（岩崎下層）3片出土。拡張してみたが他に遺物なし。

2月8日 各トレンチⅢ層以下の掘り下げ開始。

3月1日 第5地点本道部分の調査開始。第5地点は機械耕作が第Ⅱ層中程にまでおよびⅠ・Ⅱ層が縞模様となってあらわれるが、出土遺物はわりと多い（とくにB-100-d区）。しかし、かく乱層のため断片的なものばかり。

6日 第5地点北半のC・D-103～108区に10mピッチでトレンチを設定。第Ⅱ層にも機械耕作がおよんでおり、また東部は第Ⅱ層も残存しておらず遺構および遺物検出の可能性なし。

14日 第4地点、土層実測が終り調査完了。

17日 河口貞徳・石川秀雄両文化財専門員の調査指導。縄文式土器について形式の、石器類について岩石のご教示をうく。

20日 第5地点、第Ⅲ層以下の掘り下げに入る。

27日 土層実測を終えて柵場地区の調査を完了。

山神遺跡 調査期間 昭和49年6月13日～昭和50年4月28日

6月13日 第6地点、第1インター橋部分の確認調査開始（担当、平田・出口）

17日 F-111-b区Ⅲ層に大形長脚石鏃が1点出土。

24日 F-109-b、F-110-bにおいて旧道跡を確認。これば小字「山神」と小字「柵場」との字境であったものとみなされる。他に遺物・遺構なし。

26日 曲迫の第2インター橋部分の確認調査開始（担当、平田・出口・立神・中村）。

7月1日 中村着任。上村俊雄氏来訪。ウイスキーの差入れをうける。

2日 第1インター橋部分の調査終了。

- 7月3日 STA 405より縦貫道溝辺工区の道路建設工事はじまる。
- 4日 立神着任。
- 16日 出口・中村パーティー、南十三塚の調査に入る。
- 17日 第2インター橋部分の調査完了。
- 8月3日 第8地点工事用道路部分の杭打ちおよびトレンチ設定(20%方式)。
- 10日 吉永着任。第8地点において文化財研修講座現地研修会を実施。
- 22日 第8地点工事用道路の発掘開始(担当、平田・立神・吉永)。今までの各地点とも異なり、第I層から土師・須恵の小片が数多く出土しはじめ、作業員も活気が出て来た。第II層上部に溝状遺構が出現し、これの追跡にとりかゝる。
- 8月24日 3ヶ月を記念して、午後、レクリエーション大会。博物館友の会員、遺跡見学に来訪(盛園尚孝博物館次長引率)。
- 26日 第9地点工事用道路部分の杭打ちトレンチ設定(28%方式)。午後掘り下げを開始。あまりにも出ないところばかりを掘っていたためトレンチ設定を実験的にいろんなやり方で試み、28%方式ならまず遺構を洩らすことはないと思上では考えたが、現実には排土の処理に難点があった。台風14号通過後、溝辺台地では足早な秋の訪れを肌感ずる。こおろぎが一斉に鳴きはじめた。
- 28日 第8地点、D-181-c区II層上部より墨書土器片出土。第8地点にベルトコンベアを導入。
- 9月2日 D-180-b区II層上部より土師坏の完形品3ヶ出土。180~184区は全面発掘と方針を決める。
- 3日 第10地点の杭打ち、せまい工事用道路ばかりをやっていてはロスが大きいことがよく判ったので、全域にトレンチを設定。第8地点は溝状遺構の掘り下げに入る。流線形状の溝でわりと浅く、深さ15~20cm。C・D-180~184区に $\frac{1}{10}$ 平面図用の水系を設定。
- 7日 排土捨場の事前調査のためE-189~194区の杭打ち。台風18号に備えてテントをはずす。
- 9日 C-181~184区II層上面の遺物とりあげ。道路公団浅野所長来訪。
- 10日 溝状遺構の自然乾燥・ひび割れを防ぐため、草を刈って全面拡張区全域に敷く。想像以上に効果あり。
- 11日 排土捨場予定地の掘り下げ。第III層の残りも少なく、遺物包蔵の可能性なし。鹿島建設の事務所を訪れ、機械力による排土除去を依頼。
- 17日 犀川文化課長の現場視察。遺跡調査らしくなってきたのを喜ばれる。
- 20日 第9地点より第10地点にテントを移動。第10地点の発掘調査開始。
- 24日 ベースキャンプに電話設置さる(09955-8-2555)。
- 25日 第10地点E-130・131-C区を拡張発掘。縄文後期(指宿系)の破片出土地周辺

の確認にとりかかる。

- 30日 第10地点のコンター計測。
- 10月1日 第9地点本道部分の確認調査開始。
- 3日 第8地点本道部分の確認調査に入る。5m×5mグリッド単位の発掘(25%方式)に切換える。C-186-b区で、幅1.5mの東西方向の旧道跡を検出。しかし、C-186-b、C-188-d区は地表下30~35cmで第IV層があらわれ、遺物包蔵の可能性はうすくなった。第10地点E-125~132区の溝状遺構の掘り下げ。
- 9日 第10地点F-136-b・c区のピット(杉板と思われる礎板が残っており柱穴とみなされた)の対を探したが見つからず、建物遺構にはなりえなかった。
- 10月11日 松山教育次長・森田専門員・有村課長補佐の現場視察。
- 14日 F-140-d、F-141-c・d区を拡張。成川式土器出土の周辺を確認。なにも出土せず。
- 15日 第8地点の全面発掘区第II層掘り下げ開始。
- 19日 第8地点C・D-182-d~C・D-184-b区は、径15mほどの円形の凹地の各所に炉址的な焼土が散在し、それをとりかこんでピット群が存在することが判る。
- 22日 雨の中を強行して作業を続ける。第8地点本道部分の未発掘地域に20mピッチでトレンチを設けて掘り下げる(D・E・F-173~177区)。東半分はトレンチャーにより第II層までかく乱。かりに遺跡が存在していたとしても完全に破壊されている。かく乱部分については、一気にIV層まで掘り下げることにする。E-177-b区IIで完全な土師器の坏2ヶ出土。土手茶(畑境の茶園列を土地では土手茶とよぶ)の直下だったために破壊をまぬがれて残っていたのであろう。
- 23日 青銅製仏像(D-180-b-II)、穴あき坏の底部(C-182-c-II)、墨書土器片「廣」(C-182-c-II)など出土。
- 25日 河口貞徳先生来訪。
- 28日 第8地点の全面拡張区の $\frac{1}{10}$ 実測開始。吉永に代わり牛ノ浜が山神遺跡の担当となる。(担当、平田・立神・牛ノ浜)
- 31日 E-177-b-IIの完全土器出土状態の実測。うち一個は墨書土器「奠」とわかる。D-182-d-IIより鉄鏃出土。全面発掘区第II層上部のコンター計測。犀川文化課長の現場視察。
- 11月1日 第10地点、第II層の掘り下げ開始。E-131-c-IIIで石匙出土。
- 6日 第9地点ボックス部分(E・F-141~149区)の調査開始。
- 8日 E-143-C-II(第9地点)より底部に「井」の刻字がある土師器の坏が出土。
- 21日 I-129-b-II(第10地点)より「吉」の墨書がある土師器の坏(完形)が出土する。
- 25日 墨書土器出土のI-129-b区周辺を拡張。他に遺物なく、全くの単独出土。

- 11月28日 G-133-c-IIIよりえたいの知れぬ集石遺構が出現。
- 12月3日 第9・第10地点のG-a区の南北トレンチすべてについてIII層以下の掘り下げ。
- 6日 E-129・130-c-II（第10地点）に検出された焼土周辺のピットを追求。遺跡の主体は道路敷地外にあるとみなされた。
- 13日 集石遺構の周辺を拡張してみたが、なにもなし。
- 14日 第9地点ボックス部分と第10地点の工事用道路を公団に明け渡す。
- 25日 第8地点の全面発掘区第II層の遺物とりあげ。第10地点集石遺構の実測。作業員は冬休みとする。
- 26・27日 出土遺物の整理。以後は正月休み。
- 1月8日 調査再開。第9地点本道部分トレンチの第III層以下の掘り下げ開始。河野専門員の現場視察。
- 13日 第8地点全面発掘区についてIII層掘り下げ開始。
- 27日 全面発掘区第IV層上部のコンター計測。
- 2月10日 C-184-a-IIの2号建物遺構の実測。
- 12日 D-181-182-a-IIの1号建物遺構の実測。
- 13日 1号建物遺構の断ち割り。断ち割りトレンチより磨製石鏃出土。
- 22日 大雪。2月は18日間稼働可能のうち7日間は雨・雪にたづられて作業不能。
- 24日 E-178・179・180-IIIに縄文片（条痕文土器）十数片出土。
- 3月4日 E-178～180-IIIの縄文片出土状況の実測。
- 8日 E-178-180-IIIの遺物とりあげ。以後しばらく柵場の調査に集中。
- 24日 E-181～184区の第II層の掘り下げ開始。
- 29日 ベースキャンプを木屋原に移す。その間作業休止。
- 4月7日 昭和50年度調査開始（木屋原遺跡）。山神遺跡は残務整理要員のみを残す。
- 8日 山神第8地点全面拡張区の第III層・第IV層の掘り下げと土層実測開始。
- 28日 E-179-b区の土層実測を最後に、山神遺跡の調査終了。

III 層位

第I層（耕作土）は黒色火山灰土で、その下部に通称黒ニガと呼ばれる真黒な土があり、この黒ニガが土師器・須恵器の包含層とみなされるがそのほとんどが耕作その他によってかく乱されており、山神第8地点・第10地点で若干の地域に残存していたにすぎない。残っていると、この地区では厚さ5～10cm程度のものである。考古学上の層位表現では、この黒ニガを第II層としてとりあつかうところであるが、地学的見地との対比において層位の呼称に差異があっては混乱をまねきやすいので、層位呼称はあえて一致させることにした。

この黒ニガは次の記録と対比することができる。

「延暦七年……秋七月己酉、太宰府言。去三月四日戌時、当大隅国贈於郡首之峯上、火炎大

熾。響如雷動。及亥時、火光稍止、唯見黒烟。然後雨沙。峯下五六里、沙石委積可二尺。其色黒焉。」(続日本紀卷三十九)

要約すると「延暦7年(A.D. 788)、曾之峯(霧島山)が爆発して沙(火山灰)をふらせた。山麓の5~6里(3~4km)は、火山灰が2尺(約60cm)ばかりつもった。その火山灰の色は黒い」となる。溝辺台地でこの黒ニガに伴う遺物は奈良時代および平安時代初期のものであり、史料と遺物が年代的に一致する例と云えよう。なおまた後述するが、山神第8地点・第10地点にみられた溝状遺構の覆土はこの黒ニガである。

第II層の黄褐色土(俗称赤ホヤまたは赤ポッコ)は、よく残っているところで厚さ40~50cm、その最上部に弥生後期とされる成川式土器、中程に縄文後期の市来式・指宿式・岩崎上層式が出土する。しかしながら、当地区において耕作その他によるかく乱が、第II層下部まで及んでいるところが大半であり、よく残存しているところは、遺物の出土が多くみられ、この層が残存しているか否かが遺跡範囲確認の主目標となった。

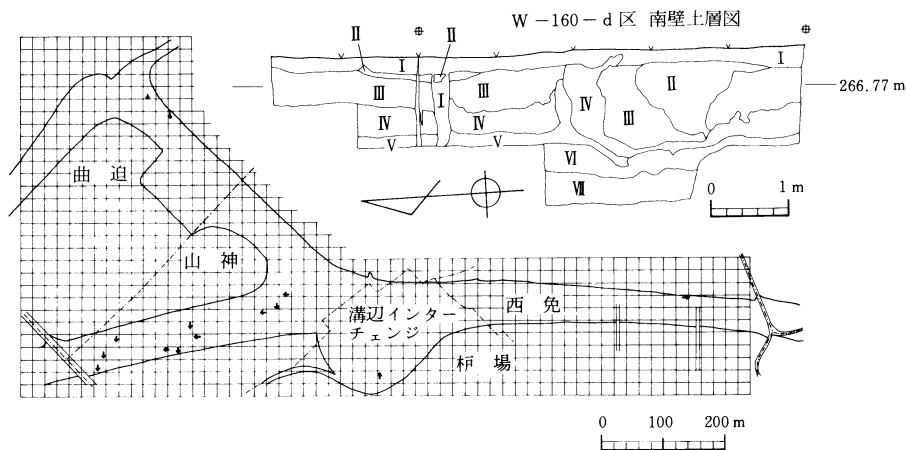
第III層の黒褐色粘質土は、その上部に縄文前期の貝殻条痕文土器が出土した。

第IV層の黄橙色含軽石層(パミス混り)は無遺物層で、調査担当者間の判りやすい呼称として、現場では「第2オレンジ」とか「第2パミス」と呼んでいた。上部は非常に固い粘質土、下部は水分を多量に含んだ軽石である。

第V層の暗黒色粘質土は、現場での呼称を「チョコレート」または「チョコ」と云った。細石器・旧石器の包含層とみなされるが、山神遺跡ではその包蔵を確認しえなかった。またこの層以下も掘り下げたが、無遺物層であった。

土層の横転(図版9)

最初、第7地点曲迫の第2インター橋部分の調査で、Y-167-a区の第II層赤ホヤを掘りこんだような円形の黒い落込みがみられ、遺構かと調査員1人がはりついて慎重に対処したが



第18図 山神遺跡の土層横転箇所

その落込みは掘り下げて掘り下げて容易に底は出なかった。そのうち W-160-d 区の壁面で層位が90度横転していることに気付き、その後は平面的にも理解することが可能となった。

十三塚原の台地は始良カルデラの北壁に連なる部分でもあり、霧島火山とは指呼の地域にあるところから、火山地帯の自然現象として極小局地的な断層が随所に発生したのであろう。赤ホヤ形成後の時期、すなわち弥生後期から奈良時代までの間に、いわゆる地が裂けるような現象がこの台地上のあちこちに生じたのであろう。東に霧島山を仰ぎみる土地で、いにしえの人々が大地の裂ける恐怖を山に向って拝み、「山神」の気持をなだめようとしたのであろうか——これは単なる憶測にすぎぬものであるが。

IV 調査の概要

道路工事推進の緩急によって最も調査を急ぐように要請された第1インター橋部分を第6地点として、柵場の工事用道路の確認調査を中断し、まずこれに着手した。その後、山神地区を三分する農道二本を便宜的な区分線として、北から第8・第9・第10点と呼称を与えて地点単位に調査を実施した。

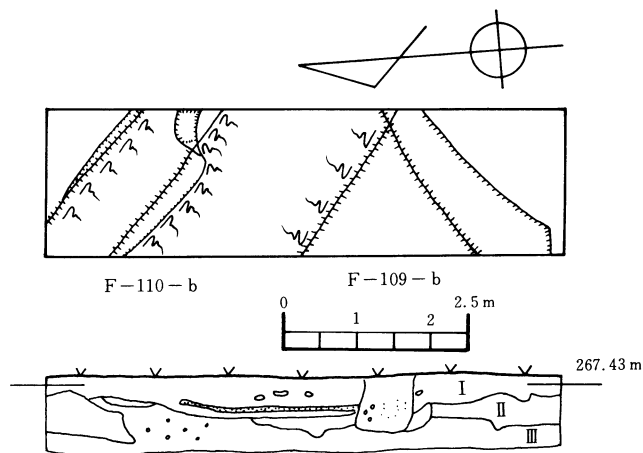
第6地点

調査期間 昭和49年6月13日～7月2日（担当、平田・出口）

主たる遺物包含層である第II層が芋穴などのためかなり掘られ乱れていた。G-112-d-IIでは固いブロックがつみかさなった状態のところが見られ、その間にやわらかいところがあり柱穴かと勇んで調査したが、樹根によるものであった。F-116-c区には養蚕の地下倉庫の一部が見られ、聞きとり調査を裏付けることができた。昭和9年、養蚕のための家屋が8軒ほど建てられたということで、そのためと思われる瓦・釘・ガラス瓶・茶碗など現代のものがI層とII層の上部から多く出て来た。

F-109・110-b-IIには大正3年の桜島の噴出物と考えられる火山灰層がうすく推積しており、終戦前まで論地・糸走間の旧道跡であったことと、この旧道が山神・柵場の小字境であったことを確認した。

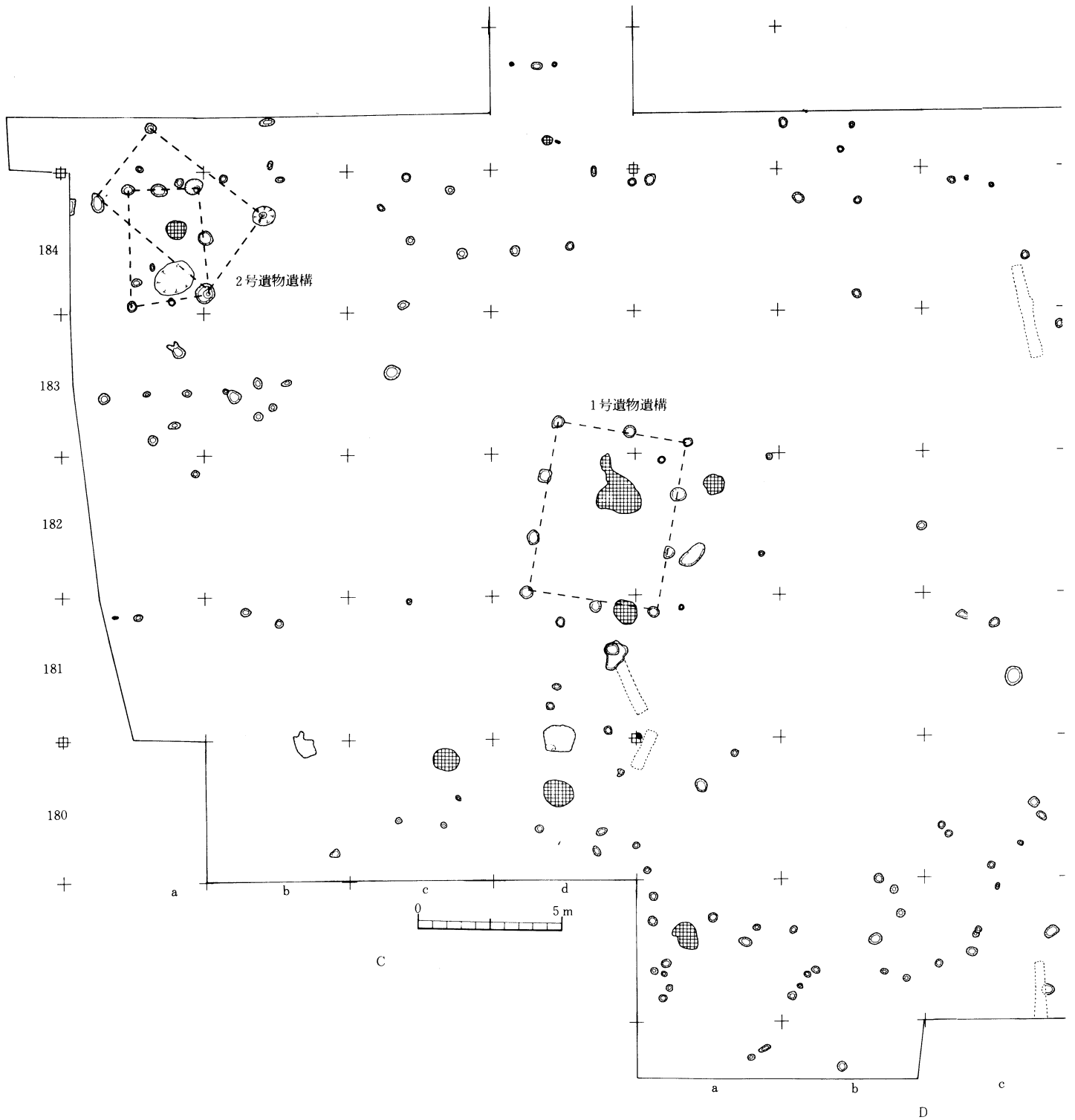
遺物は第I層から成川式土器・土師器の小破片が少量出土した。F-116-b-IIIの上部、地表下60cmで縄文後期タイプとみられるチャート製の双脚石鏃が出土した（図版22-14、図-14）。若干拡張して周辺を確認したが、他に遺物をみとめるこ



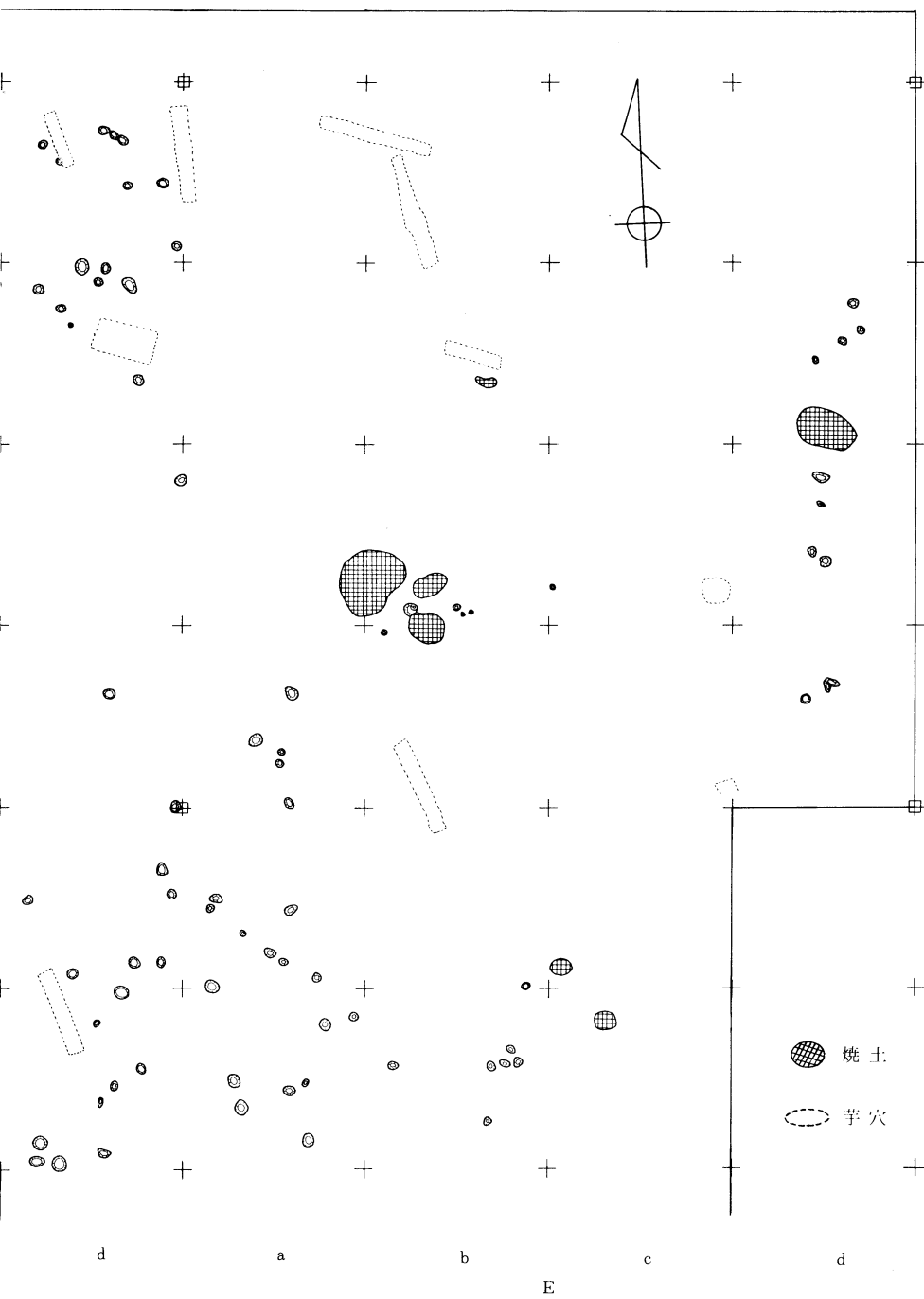
第19図 山神遺跡第6地点の旧道跡

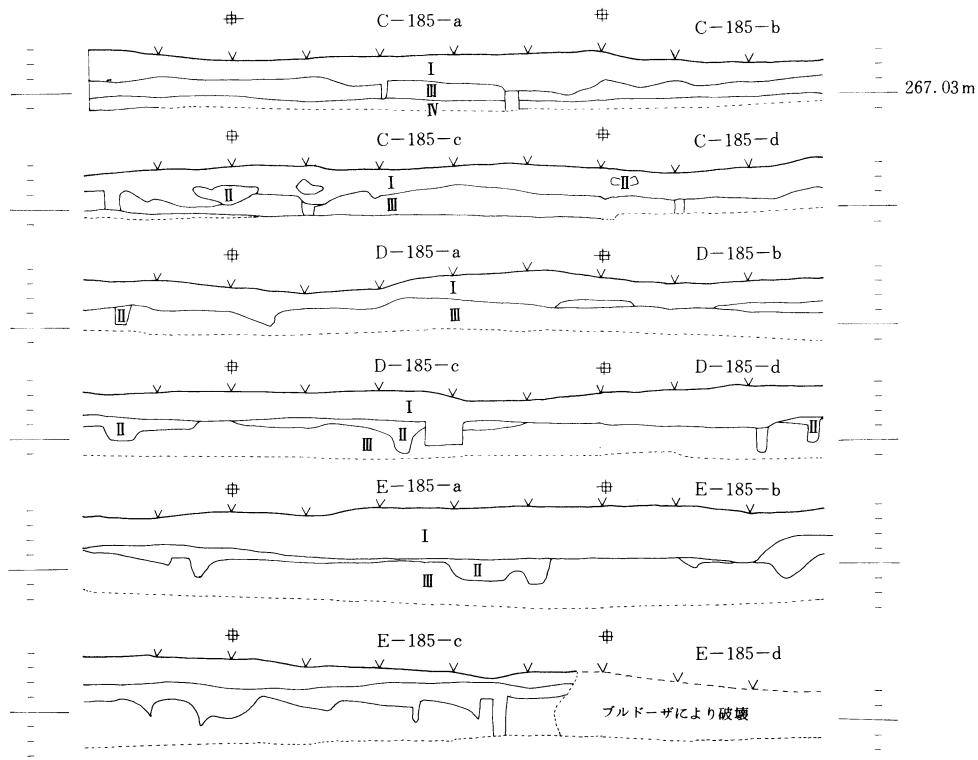


第20図 山神遺跡第8地点の溝状遺構と遺物散布状況

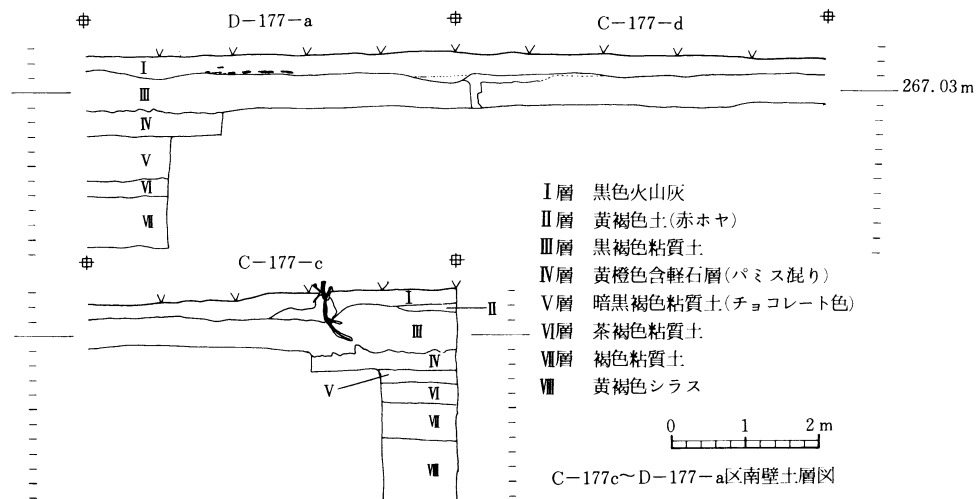


第21図 山神遺跡第8地点の焼土とピット群



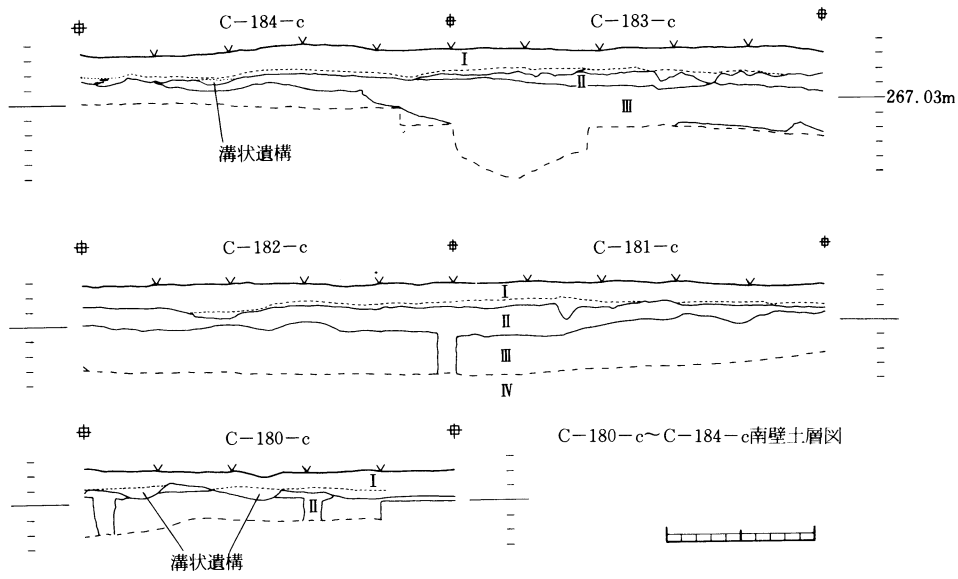


山神遺跡第8地点
B-185d区~E-185-d区北壁土層図

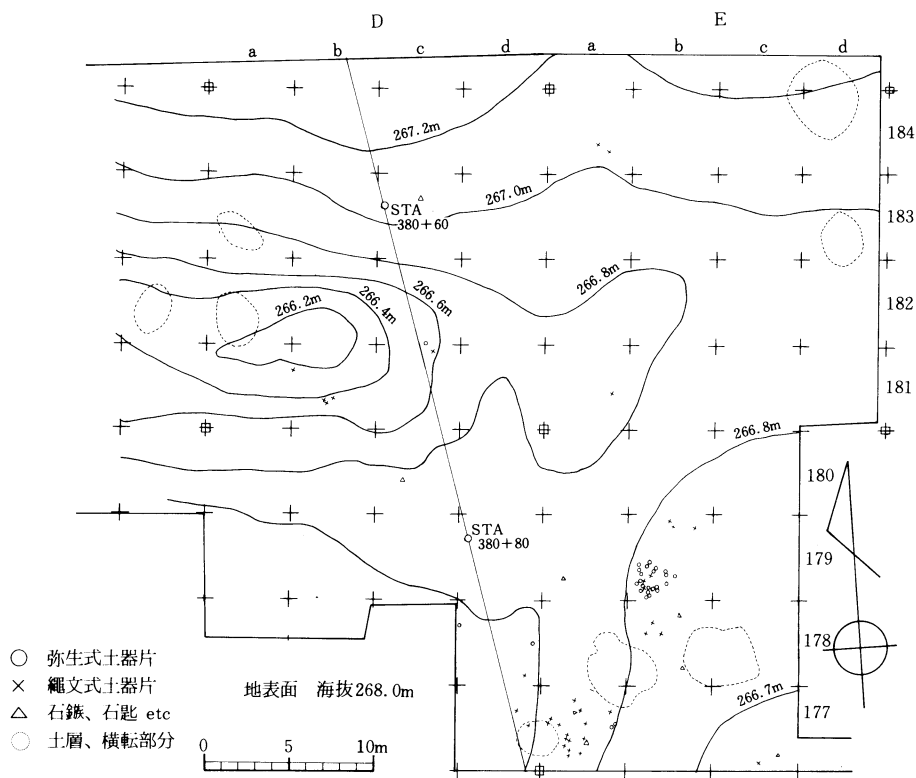


C-177c~D-177-a区南壁土層図

第22図 山神遺跡第8地点の土層図(1)



第23図 山神遺跡第8地点の土層図(2)



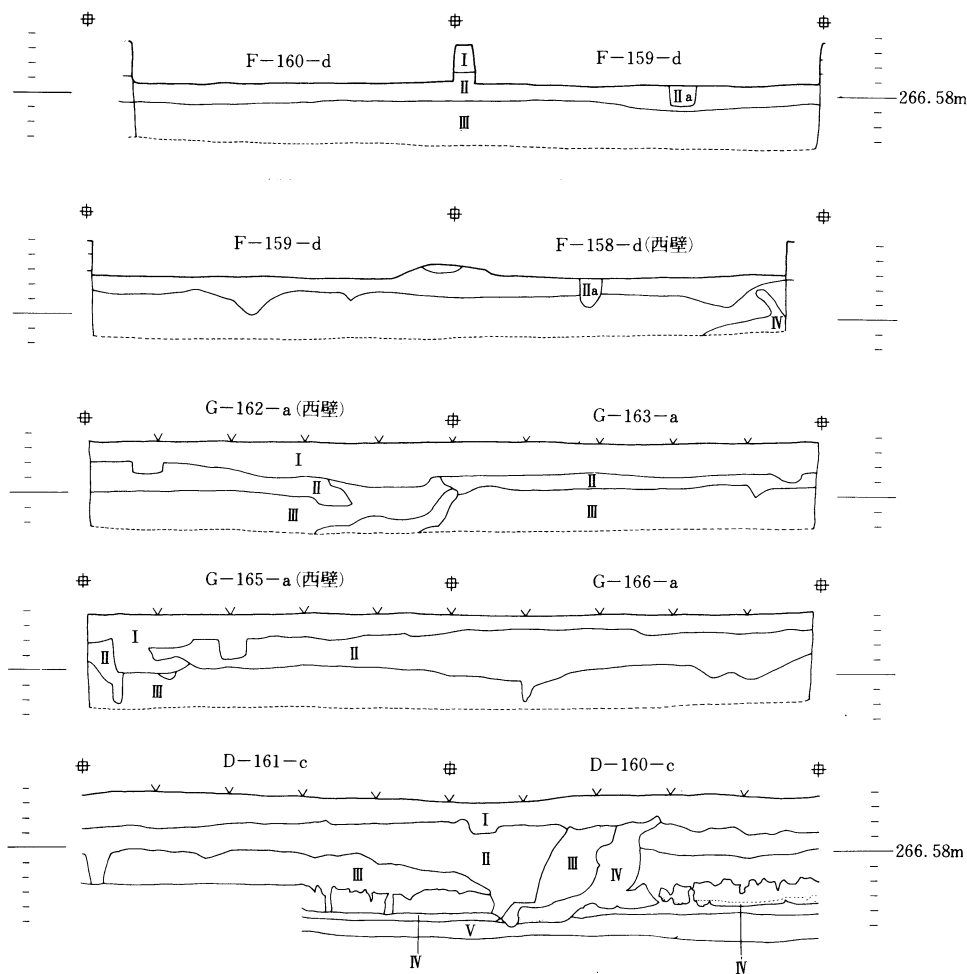
第24図 山神遺跡第8地点の第III層上部での遺物散布状況

とができなかった。

第8地点 (図版7, 9, 10, 12, 13, 18, 19)

調査期間 昭和49年8月22日～昭和50年4月28日。(担当、平田・立神・吉永・牛ノ浜)。

地表に土器片の散布が多くみられた地域約1200㎡を全面発掘した。したがってこの地域では最も長期間にわたり調査がおこなわれた地点である。主たる包含層のI層下部とII層上部が約600㎡残っており、多量の土師器坏、須恵器片が出土した。墨書土器の完形品1点をはじめ墨書土器の小片15、像高2.4cmの青銅製小仏像や鞆などの出土は特筆に値しよう。第II層中程より磨製石鏃、第II層下部に入ったところから縄文後期の、第III層上部から縄文前期の土器片が出土した。遺構的なものとして13にのぼる焼土とそれをとりまく数多くのピット群、そのうち建物遺構として確認できたものが2、時代不明の浅い溝状遺構が検出された。

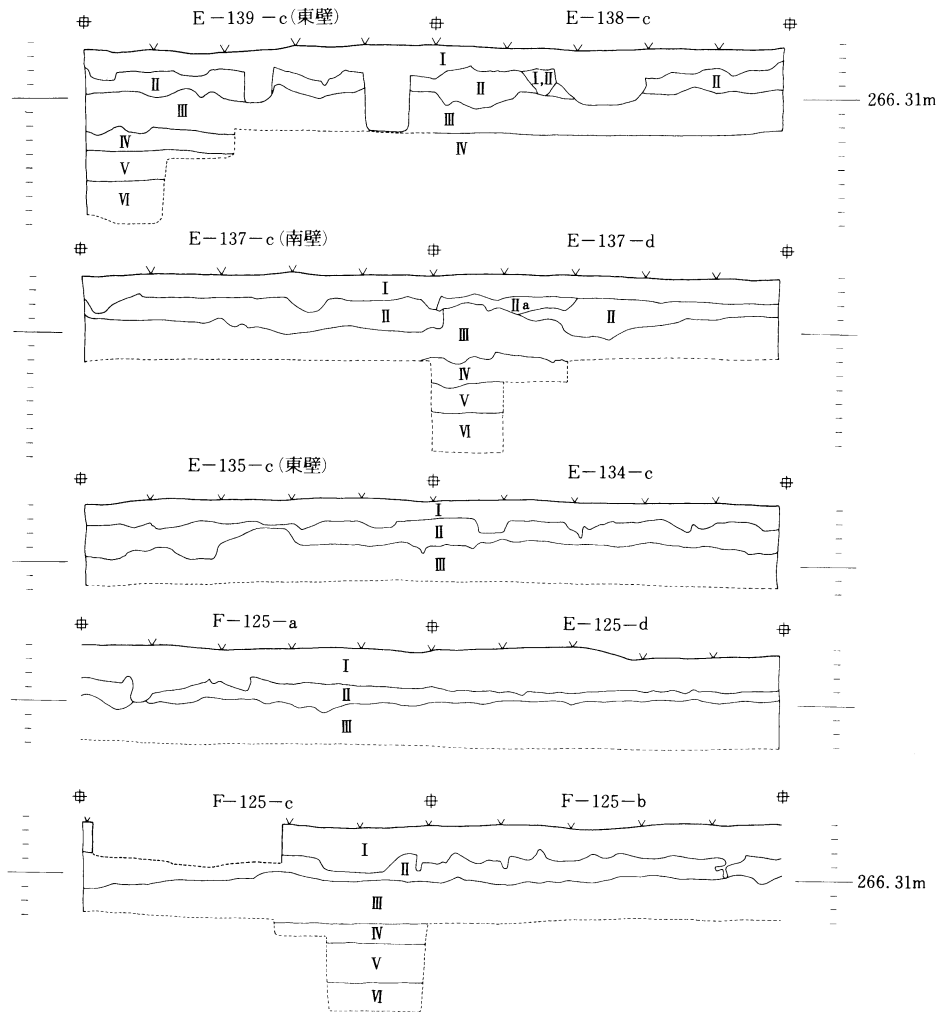


第25図 山神遺跡第9地点の土層図

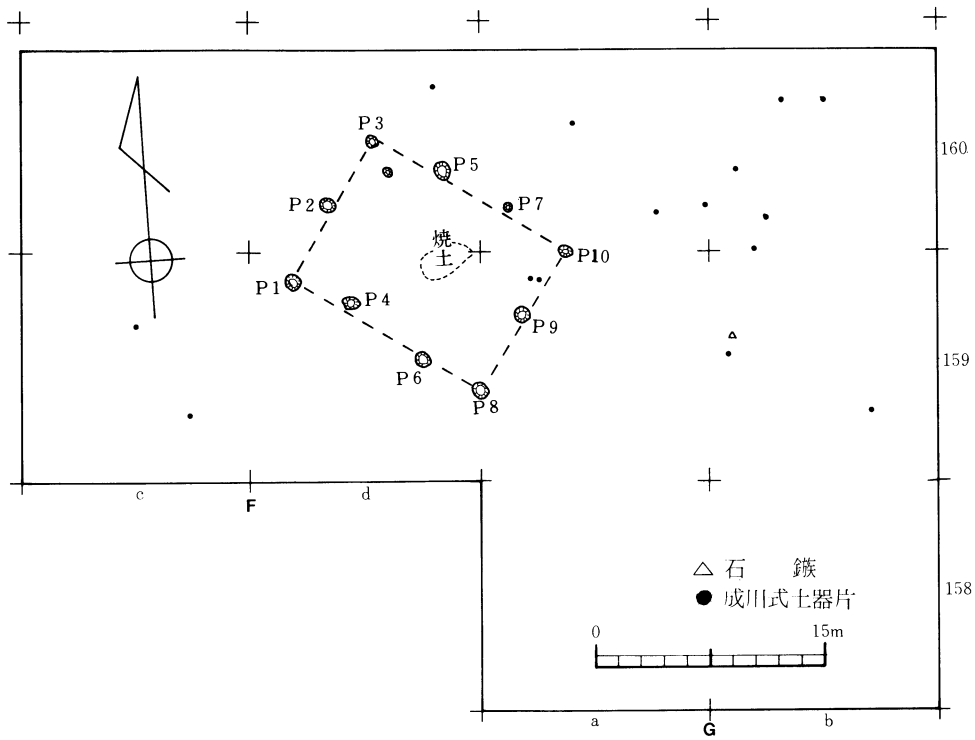
第9地点 (図版9, 10)

調査期間	工事用道路	昭和49年8月26日～昭和50年4月28日	} 担当、平田・吉永・牛ノ浜
	本道部分	昭和49年10月1日～昭和50年4月28日	
	ボックス部分	昭和49年11月6日～昭和49年12月14日	

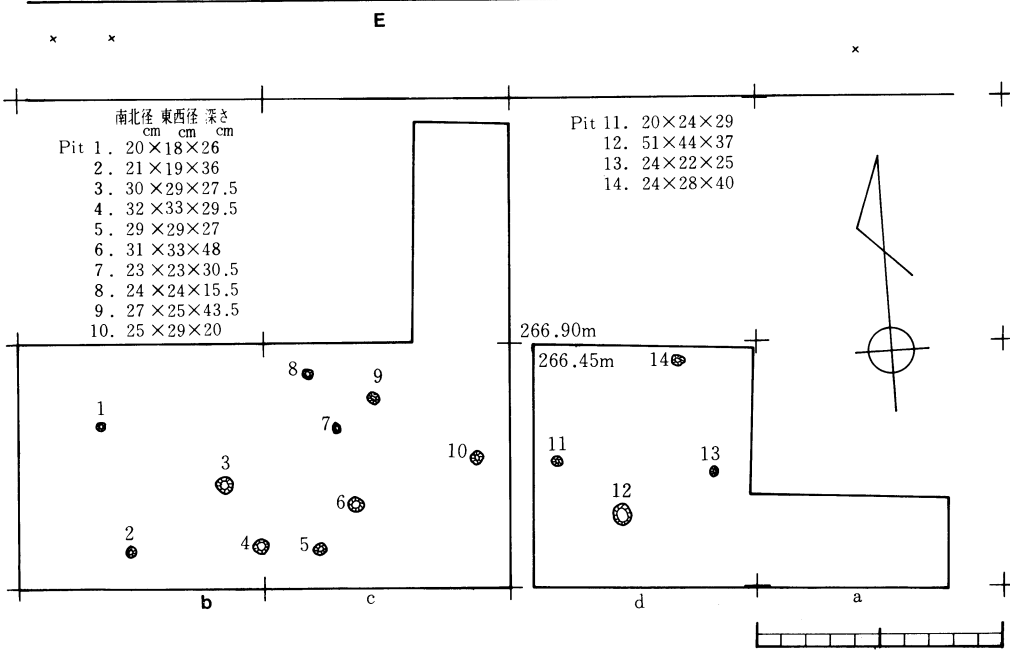
この地域も荒されていた部分がかかなりみられ、ようやく中央部のF-159・160-d区の第II層上部で建物遺構1を検出した。また西南部で第III層に掘りこんだピット列がみられたがまとまりのあるものではなかった。遺物には縄文前期・後期の土器片、「井」の刻字のある土師坏などがある。



第26図 山神遺跡第10地点の土層図



第27図 山神遺跡第9地点の焼土とピット列（3号建物遺構）

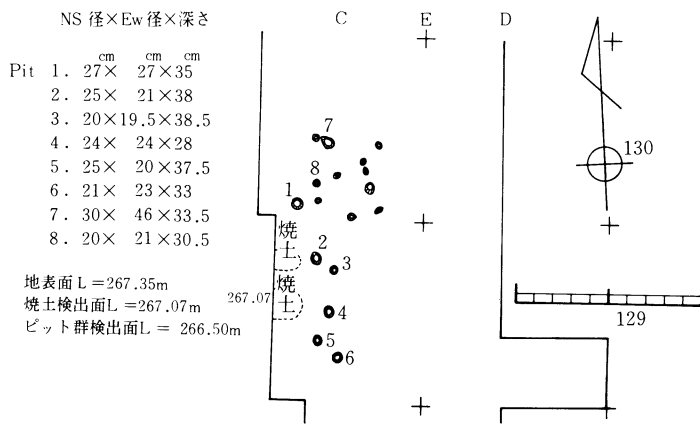


第28図 山神遺跡第9地点E-145b・c・d-Ⅲのピット群

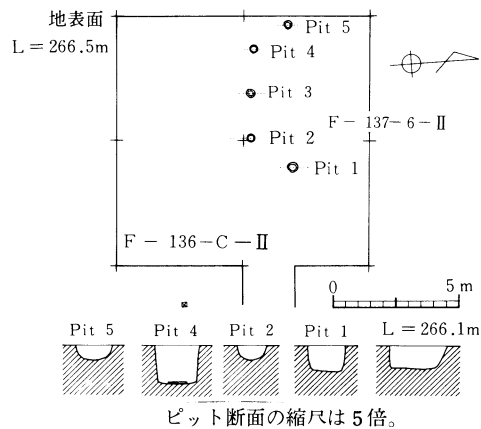
第10地点 (図版 8, 11, 13)

この地域も広範囲に削平、地ならしをうけたり、機械耕作で荒されていた。中央部の西側に時代および正体不明の溝状遺構を検出した。その下部に焼土とピット列が検出されたが、遺跡の主体は道路敷地外になるものとみなされた。しかしそこも街路樹など大木の苗圃となっており、遺構残存の可能性はうすい。中央部のG-133-c区の第III層上部で集石遺構がみられ、その周辺を調べたがなにもなく、その性格は判らなかった。また杉材と思われる礎材をもったピットが検出され追求したが、対を発見することができなかった。終戦当時、第9地点から第10地点にかけては兵舎となっており、北海道出身の兵隊が馬小屋を作る時、北海道のならわしとして掘立柱の基礎に板を敷いたらしいとの話を聞かされたが、真偽のほどは判りかねる。

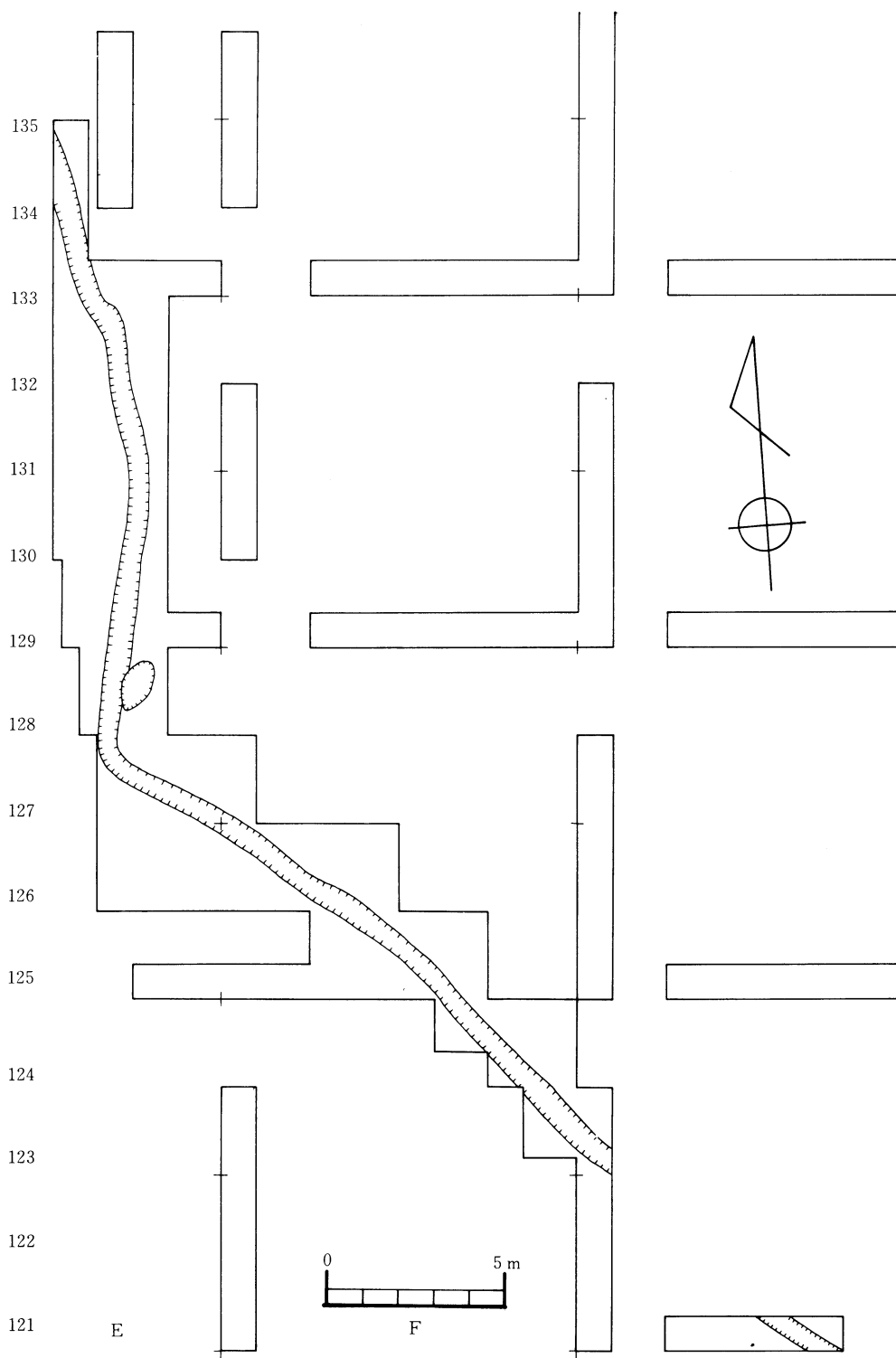
主な遺物としては「吉」の墨書がある土師器坏がある。この他に縄文後期の指宿式土器片・成川式土器片・青磁片などが若干出土した。



第29図 山神遺跡第10地点の溝状遺構下の焼土とピット群



第30図 山神遺跡第10地点の礎材をもったピット群



第31図 山神遺跡第10地点の溝状遺構平面図

V 遺構

(1) 溝状遺構

1. 第8地点の溝状遺構（図版7，図20）

第I層を掘りさげてやがて赤ホヤがあらわれる地表よりの深さ約40cmのところに帯状になってあらわれる。幅60～100cm・深さ15～20cmの深皿状の断面をもつもので、覆土は前述した8世紀末の霧島の噴出物黒ニガである。多いところで5条も密集して並行しているが、発掘区全体をみると、その方位はおよそN22～25°Eで、互に直交して方形もしくは長方形の区画を構成する。溝の中およびその周辺から、土師器・須恵器の小片が数多く出土する。とくにC-181～184-c区からD-181～184-dにかけての20m×30mの方形の中に密集している。この区域内に後述する1号建物遺構も存在する。覆土および遺物から考えて奈良時代から平安時代初期にかけての土地区画を意味したものではなかろうか。数条に密集した地域は土地の境界のもめごとでもあって、たびたび変動したのであろうか。山神一帯の総括的地名は論地でもある。——なんらの史料的裏付けをもたぬので深入りはしない。

2. 第10地点溝状遺構およびそれより出土した遺物（図版8，図51）

第10地点の西側において、巾80～120cmで、深さ30～40cmの断面が流線形状になっている溝が、「く」の字状に走っているのが検出された。溝の性格は、出土遺物が縄文式・弥生式・須恵・青磁・鉄銭・近世陶器の多時期にわたって混在していたため把握することができなかった。

① 縄文式土器（指宿式）（図版8-1，図51-1）

1は口縁部片で、口唇部は平らである。口縁上部に横位の沈線を施し、その下にはジグザグ状に沈線を施している。内外面共にヘラでよく調整され、なめらかである。胎土に砂粒を含み焼成は良い。色調は内外共に赤褐色を呈する。口縁部近くにはススが付着している。

2・3は共に胴部片である。施文はヘラによる沈線を施している。内外面共にヘラで調整されているが、雑である。共に同一個体と思われる。胎土に石英砂粒を含み、焼成は良い。色調は内外共に赤褐色を呈する。

② 須恵器（図版8-2，図51-2）

頸部から肩にかけての壺の破片である。頸の径は10.8cmで、一部に自然釉がかかっている。肩の部分に貼り付けの三角突帯をもっている。胎土は良好で、灰色の焼成である。

③ 青磁（図版8-3，図51-5）

直線的に開く口縁部片で、復元径は15.2cmである。施文はみられない。色調は灰緑色を呈しており、越州窯産のものと思われる。

④ 敲石（図51-6）

安山岩製のもので、両端に使用痕がみられる、長さ9.0cm、幅8.1cm、最大厚み3.6cm。

⑤ 鉄銭（図51-8）

径2.5cm、厚さ3.0mmのもので、中に四角の穴をもつ鉄製のものである。腐蝕が進んでいるため両面とも文字は判読できない。

(2) 焼土とピット群 (建物遺構)

土師器・須恵器の散布をともなう溝状遺構以上の面をとりはらうと、径80～100cm程度の灰を主体とし、炭の小片も入っている焼土が出現し、その焼土をとりまくようにピット群が検出された。

第8地点が最も多く、焼土14を検出した(第18図)。第9地点で焼土1(第24図)、第10地点では、焼土3を検出した(第29図)。

焼土とピット群の組み合わせの中で、なんらかの遺構として形になるものが3組発見されたので、1号、2号、3号建物とした。

1号建物 (図版9, 第32図)

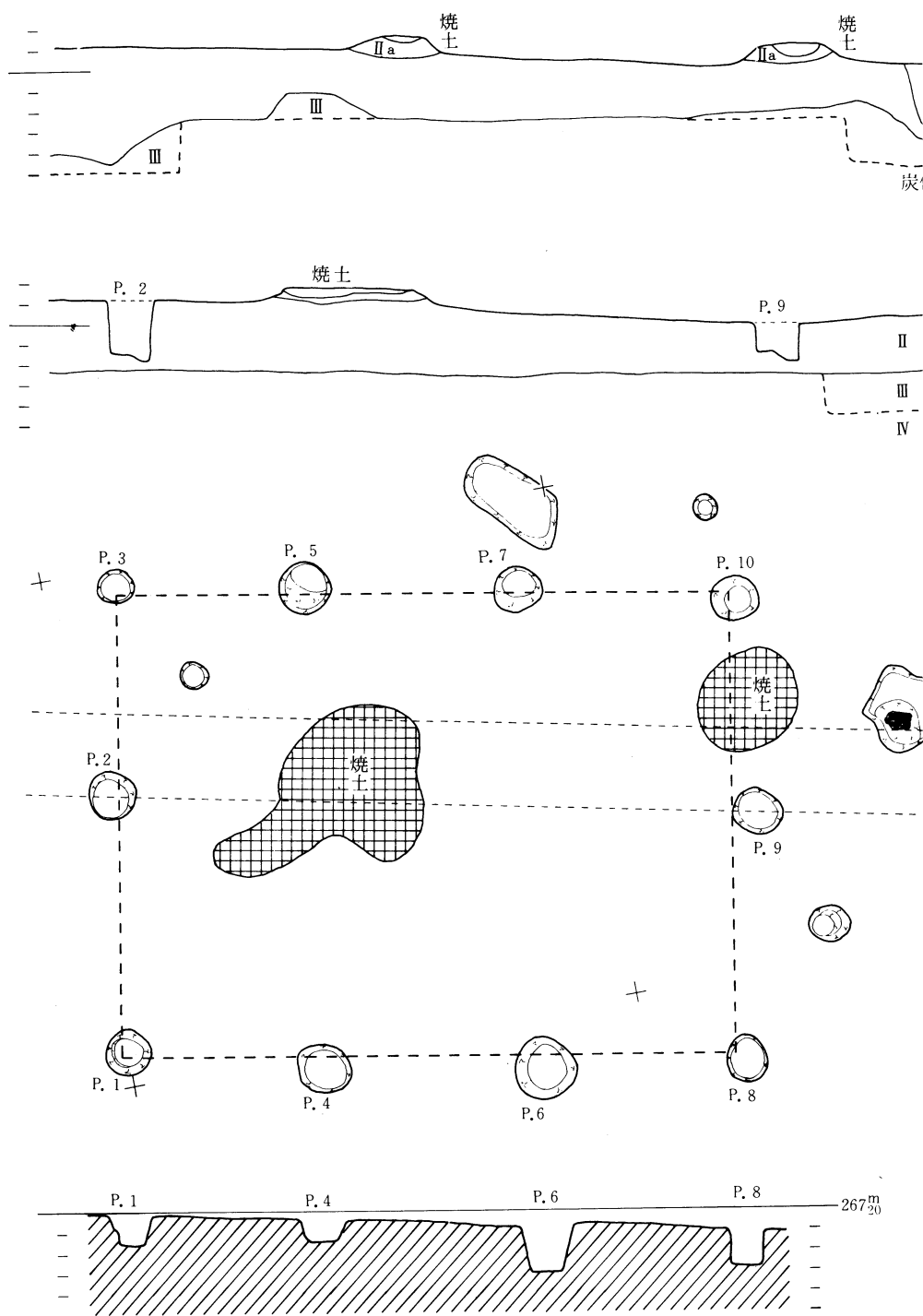
山神第8地点、全面拡張区のほか中央に位置する3間×2間の掘立柱の建物跡で、梁間間227.5cm、桁行間461.25cmである。桁行方位は、N14°Eを指し、梁間、桁行間の占有面積は28.4㎡である。中央部からやや北寄りに、灰を主体とし、炭の小片も検出される焼土がみられたが、これは3ヶ所で火をたいたものが重なりあった形となっている。

3号建物と3間×2間、中央に焼土という点で類似し、平面プランも梁間間：桁行間＝3：4と相似形になっている。

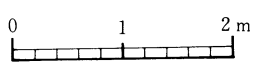
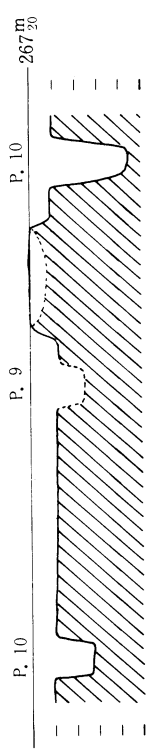
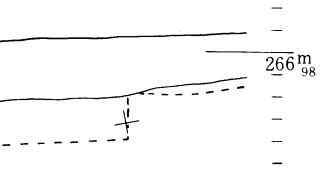
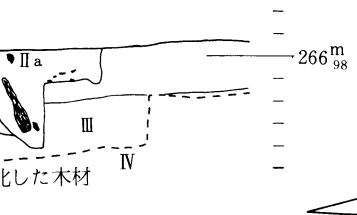
なお、1号建物の南側1.5mのところ、径40cm深さ90cmのピットがあり、焼けて炭化した柱の残部と思われるものが、検出された(図版12)。すべて炭化してよろしく、ただの一例だけであるため、焼け残りの柱と断定することはできなかった。

第2表 1号建物計測表

3間×2間	梁間柱間	梁間間		桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P1 P2	250	455	P1 P4	195	610	1	44.5	48	43
P2 P3			P4 P6			2	54	49	47
P8 P9	240	450	P6 P8	200	610	3	17	35	32
P9 P10			P3 P5			4	23	52	51
P4 P5	210	470	P5 P7	210	610	5	41	56	51
P6 P7			P7 P10			6	51	54	49
		470	P2 P9		625	7	22.5	48	39
平均	227.5	461.25	平均	210.33	615	8	35.5	44	42
(単位cm)									
焼土 長径 240cm 短径 150cm									
						9	28.5	43	42
						10	62.5	43	42
						平均	37.95	47.2	43.8



第32図 山神遺跡の1号建物



2号建物 (第33図)

山神第8地点発掘区域の西北隅にある、2間×2間の掘立柱の建物跡で、梁間間263.33cm、桁行間398.33cmとみなされる。P1～P3の南側梁間は東に振れ、両桁行も平行ではない。(ただし、桁を柱の内・外に違わせて通したとしたら平行プランになる)。また、P5にあたる位置に柱穴を確認できなかった。

桁行方位は、N2°Eで、梁間、桁行間の占有面積は10.5㎡である。

中央部に径80cmの灰を主体とした焼土、南にかたよったところに長径140cm、短径110cm、深さ15～17cmの楕円形の掘りこみがみられ、その覆土は、灰が主で炭の小片もみられた。こちらが2号建物(1)に伴うと考えられる。同じ位置に重複して検出された桁行方位、N42°Wの2間×1間の建物遺構は、P12にあたる位置に柱穴を確認することはできなかった。

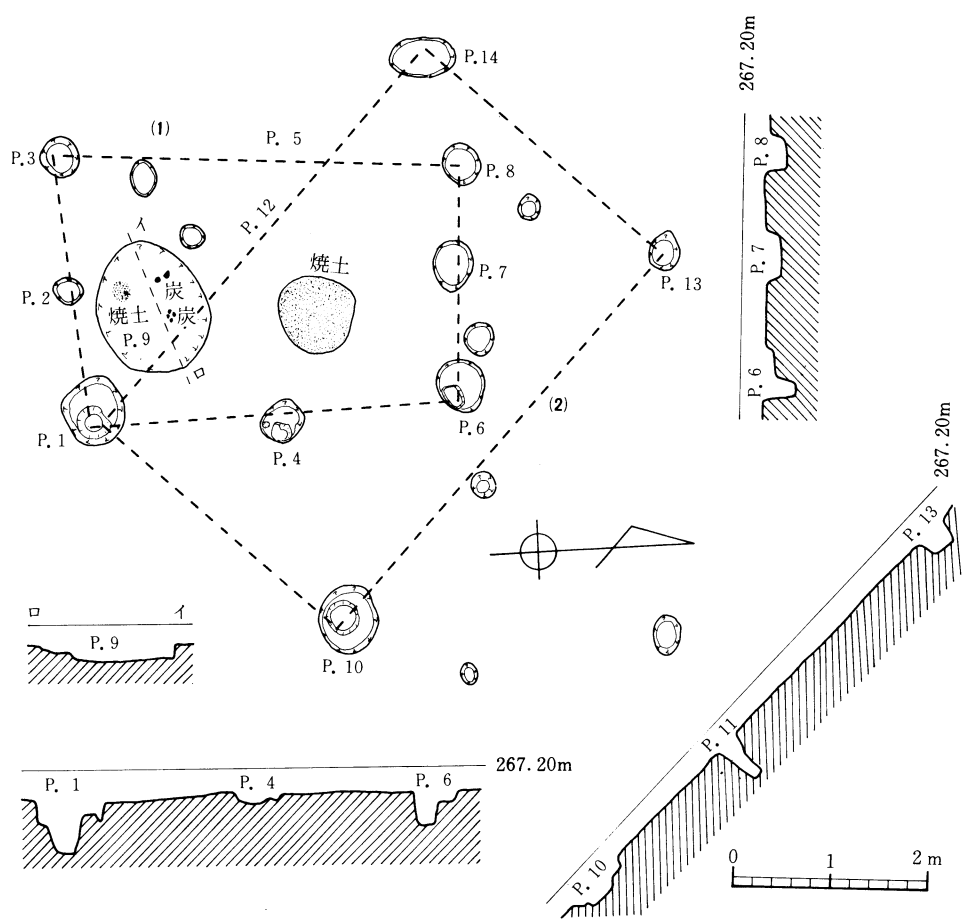
これはP4・P7を棟持柱とする寄棟型の掘立柱建物と推定されるが、この方面の専門家に諮問していないので断定はしない。梁間、桁行間の占有面積は16.5㎡である。平面プランも梁間間：桁行間＝2：3(あるいは5：8)と考えられる。こちらを2号建物(2)とした。

第3表 2号建物 (1) 計測表

2間×2間	梁間柱間	梁間間		桁立柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径
P1 \ P2	140	280	P1 \ P4	195	500	1	55	72	68
P2 \ P3	140		P4 \ P6	180		2	14	34	26
P6 \ P7	135	240	P3 (P5)	225	500	3	50	43	40
P7 \ P8	110		(P5) \ P8	190		4	12	45	44
P4 (P5)		270	P2 \ P7			5	—	—	—
平均	131.25	263.33	平均	197.5	500	6	35	56	48
(単位cm)						7	15	55	40
P9 長径140cm、短径110cm、深さ17cm						8	25	42	37
						平均	29.4	49.6	43.3

2号建物 (2) 計測表

2間 × 1間	梁間間		桁立柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	
P1 \ P10	330	P10 \ P11	198	500	1	55	72	68	
P11 \ P12	340	P11 \ P13	305		10	20	72	62	
P13 \ P14	320	P1 \ P12	200	500	11	47	27	25	
		P12 \ P14	300		12	—	—	—	
平均	330	平均	250.75	500	13	26	26	32	
(単位cm)						14	32	32	40
焼土 径80cm						平均	36.0	53.0	45.4



第33図 山神遺跡の2号建物遺構

3号建物 (図版9, 図-27・25)

山神第9地点中央部東側で検出された3間×2間の掘立柱の建物遺構で、梁間間：桁行間の比率は3：4で、平面プランは1号建物と相似形をなす。

梁間間361.25cm、桁行間481.66cmであり、桁行方位は、N52°Wを指し、梁間・桁行間の占有面積は、17.4㎡である。

第4表 3号建物計測表

3間×2間	梁間柱間	梁間間	桁行柱間	桁行間	P	深さ	長径	短径	
P1 P2	185	355	P1 P4	135	475	1	14.5	28	25
P2 P3	170		P4 P6	200		2	17.5	32	31
P8 P9	190		P6 P8	140		3	17.5	27	26
P9 P10	170	360	P3 P5	165	485	4	27.5	27	25
P4 P5	350	P5 P7	165	5		29.5	34	30	
P6 P7	380	P7 P10	160	6		25.0	28	28	
			P2 P9	485	7	10.0	16	13	
平均	178.75	361.25		160.83	481.66	8	23.0	39	35
(単位 cm)									
焼土 長径 118cm、短径65cm									
						9	24.0	34	33
						10	22.5	29	25
						平均	21.1	27.4	27.1

建物遺構は、1号・2号・3号とも、次の点で共通している。

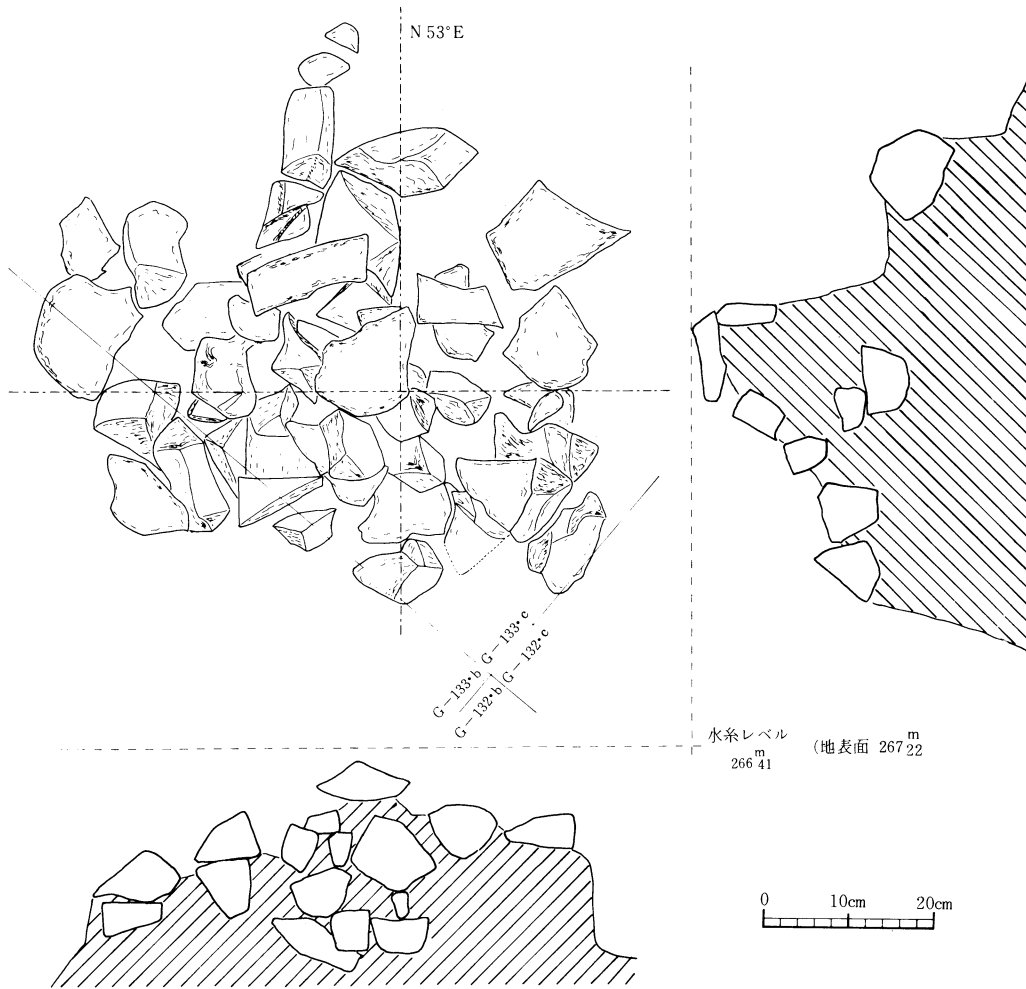
- ① 掘立柱である。
- ② 炬とみなされる焼土を中央部にともなう。
- ③ 梁または桁を柱にしぼりつける位置が、内側・外側になるかによって柱穴の位置が内寄りまたは外寄りになったと考えられる。そのため柱穴列は一直線に並ばないものがある。
- ④ 奈良末・平安初期の土器片をとりあげたあと、掘り下げを進めた時はじめて柱穴が検出される。
- ⑤ 使用尺は、曲尺と同じ長さの1尺=30.3cmのものとみなされる。出土遺物から考え、奈良時代の使用尺としては天平尺を想定するのが常識的であるが、山神遺跡の場合は天平尺よりやや長大なものと考えられる。梶国男氏は関東の鬼高期住居址の使用尺として約24cmの晋尺をあげておられるが(註1)、この30.3cmの尺は晋尺の $\frac{5}{4}$ の尺であり、大尺・小尺の間係にあったものであろうか。この使用尺がなにものであるかは、今後の研究課題である。

なお、1号建物と3号建物は全く相似の形で、その大きさを比較すると梁間・桁行ともに5：4の違いになっている。(1号建物 $\times \frac{4}{5}$ = 3号建物)

註1 梶国男「古墳の設計」築地書館, 1975.

(3) 石組遺構 (図版11)

山神遺跡第10地点、G-133-c 区の3層上部で55cm×60cmのほぼ円形を成した集石が確認された。10cm内外の礫を含めて約50個の安山岩質の角礫が用いられている。断面からみると、少々盛り上ったような場所に配したようにみられるが掘り方は認められない。礫自体に焼けた痕跡はなくまた、周辺においても遺物の出土をみず集石の性格はつかめなかったが、今後の検討の意味でここに記載する。



第34図 山神遺跡第10地点の第Ⅲ層上部の石組遺構

VI 遺物

(1) 縄文式土器

出土遺物は、第Ⅱ層中の凹線文・岩崎下層式・市来式・貝殻条痕文・撚糸文と、第Ⅲ層中のヘラ沈線文・底部に分けられる。

I 第Ⅱ層中の土器

1類（凹線文土器）（第35図-1、図版5-1）

第8地点より出土したもので、頸部片である。外面はヘラでよく調整され、浅い凹線文を横位に施して、ススの付着がみられる。内面もヘラでよく調整されている。胎土に雲母を含み、焼成は良い。色調は外面が黒褐色、内面が茶褐色を呈する。

2類（岩崎下層式土器）（第35図2・3、図版-2・3）

第8地点より出土したものである。2は胴部、3は胴部から頸部にかけての土器片で、同一個体のものである。外面はヘラでよく調整されており、数条の浅い凹線文を横位に施している。内面もヘラでよく調整されているが、貝殻腹縁による調整ないしは整形のあとと思われる条痕が認められる部分がある。胎土に雲母を含み、焼成は良い、色調は内外面共に淡茶褐色を呈する。

3類（市来式土器）（第35図4、図版4-4）

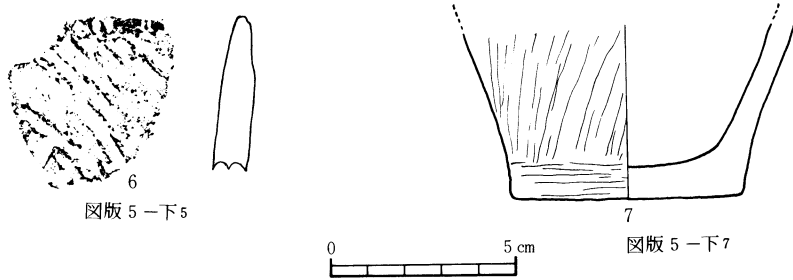
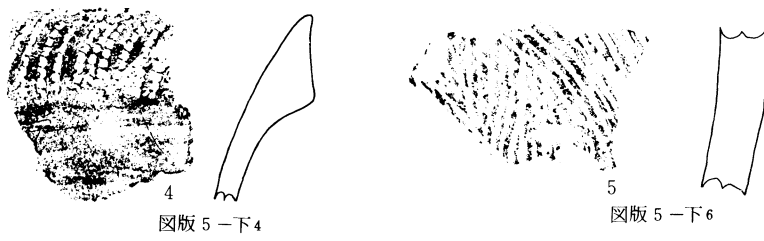
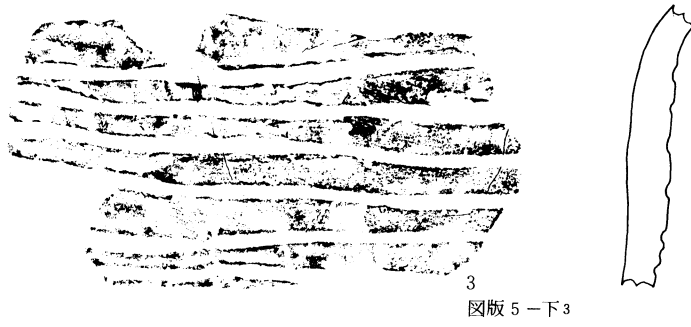
第9地点より出土したもので、口縁部片である。口縁部は断面が三角形を呈する。その上部に貝殻腹縁による刺突文を斜位に施している。内外面はヘラで調整されているが、貝殻腹縁により形整されたと思われる条痕が認められる。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。色調は内外共に赤褐色を呈する。

4類（貝殻条痕文土器）（第35図5・6、図版4-5、6）

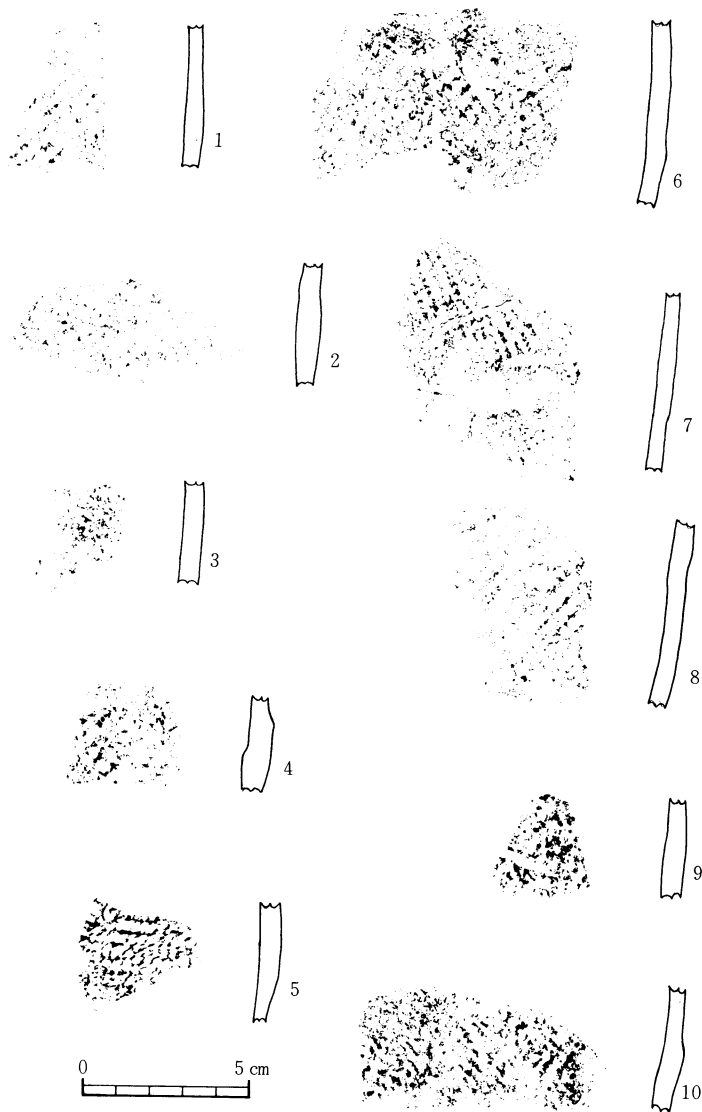
第8地点より出土したものである。5は胴部片、6は口縁部片である。5は厚手のもので、外面には貝殻腹縁による条痕を綾杉状に施しているが、雑である。内面はヘラにより調整されている。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。内外淡茶褐色を呈する。6は口唇部外側に刻みを施し、口縁部より下は貝殻腹縁により条痕を斜位に施しているが、浅く雑である。内面はヘラによりよく調整されている。又外面にはススの付着がみられる。胎土に砂粒を含み、焼成は良い。色調は褐色を呈する。

5類（撚糸文土器）（第36図1~10、図版15~1~10）

第9地点より出土したものであり、1~10全て胴部片で小片である。1・2と6~9は右上がりの斜行撚糸文を施すが、3~5は左上がりの斜行撚糸文を施している。10は左右の斜行撚糸文の接する部分である。又文様構成に施文帯と無文帯とを交互にもっている。施文は雑に施されているが、内面はヘラでよく調整されている。1は外面にススの付着がみられる。器壁はうすいが、胎土に黒雲母を含み、焼成は良い。色調に外面が黒褐色ないしは褐色を呈するが、内面は1・6~10が茶褐色を、2~5が灰褐色を呈している。一は内面に於いて、輪積の手法を残している。



第35図 山神遺跡出土の縄文式土器

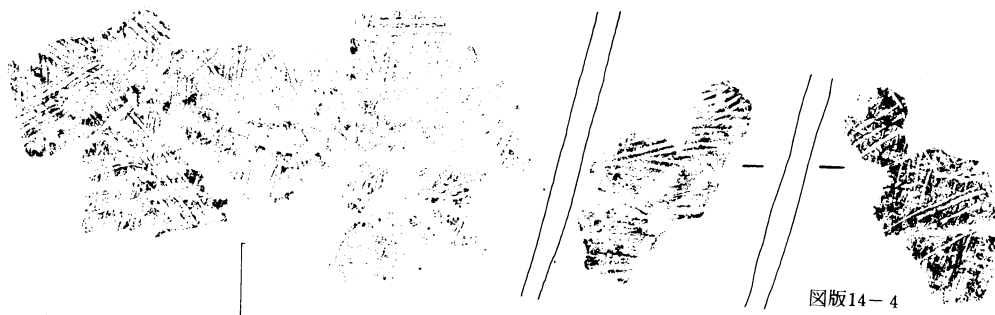


第36図 山神遺跡出土の燃糸文土器

II 第3層中の土器

6類 底部 (第35図7, 図版5~7)

第8地点より出土したものである。外面はやや斜めに雑なへら調整を、底近くでは横位のへら調整を施していて、擦痕が明瞭である。底面もへら調整されている。内面では壁部分は縦位にへらでよく調整されている。底部内面は指によると思われる圧痕がみられるが、なめらかで



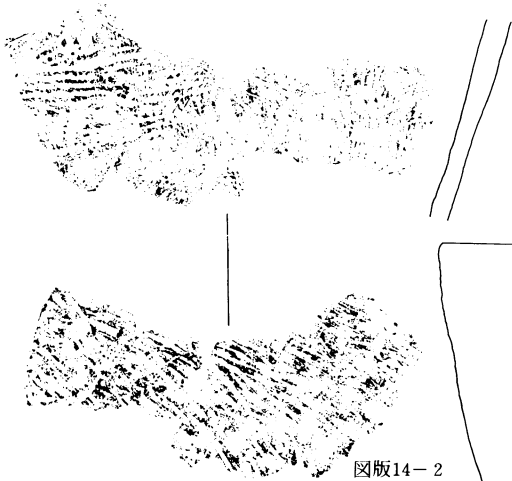
図版14-4



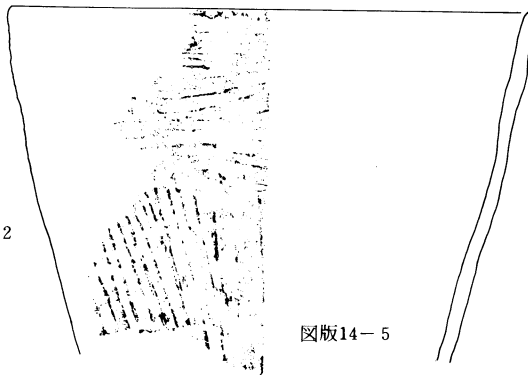
図版14-1



図版14-3

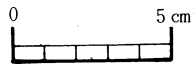
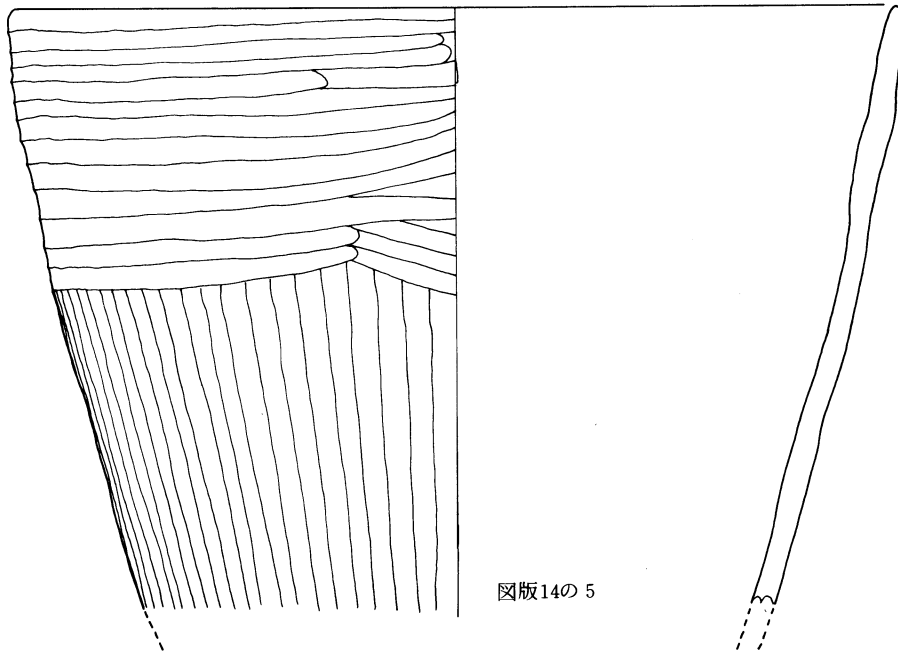
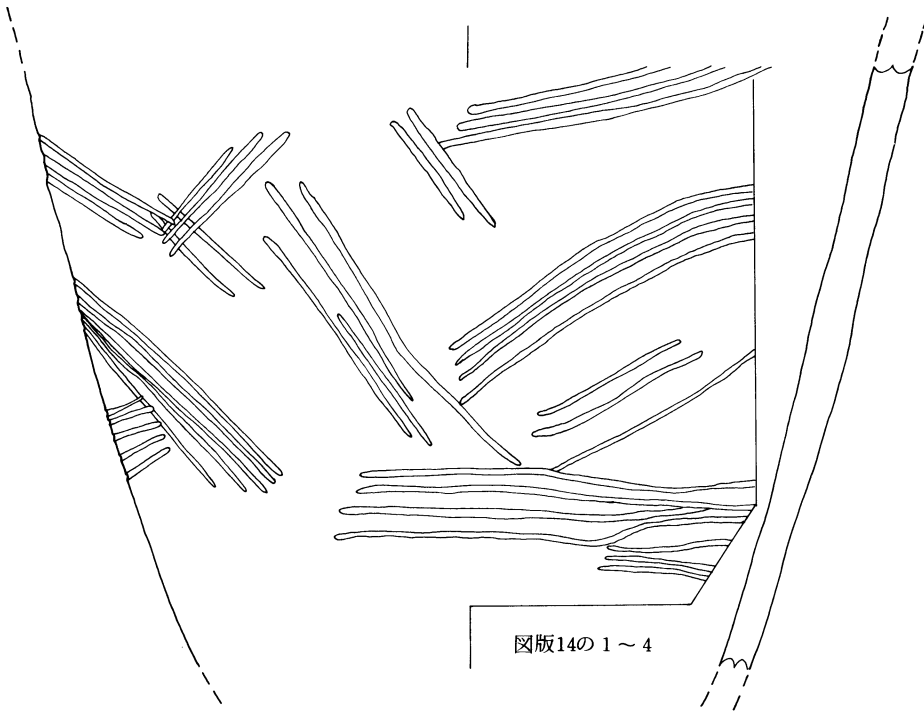


図版14-2



図版14-5

第37図 山神遺跡出土の縄文式土器



第38図 山神遺跡出土の縄文式土器

ある。胎土に細砂粉を含み、焼成は良い。色調は内外共に茶褐色を呈する。

7類 (図37-1~4, 図38-1, 図版14-1~4)

第8地点より出土したもので、胴部片である。器壁は厚く、直線的である。調整は貝殻腹縁によるもので、外面では縦位に上部では、はっきり条痕を残している。下部では浅く、条痕を残さなくなる。内面では深い条痕を横位に施している。文様は先の細い施文具で、2ないし数条の沈線を斜格子状に乱れて施している。下部では横位の沈線を施しており、文様帯の区切りを示すと思われる。胎土に石英砂粒を含み、焼成はあまり良くない、部分的に剝離がみられる。色調は外面の上部で黒褐色、下部で茶褐色を呈し、内面は灰褐色を呈している。

8類 (図37-5, 図38-2, 図版14-5)

第8地点より出土したもので、口縁部から胴部のものである。口縁径は27.8cmを測り、口縁部が直行する円筒形をなす。文様は先の丸いヘラ状の施文具を使い、口縁部では横位の、胴部では縦位の条痕となっている。調整痕がそのまま文様効果を出している。内面は横位のヘラ調整が施されている。胎土に石英砂粒を含み、焼成はやや良い。色調は内外面共に灰褐色を呈する。

(2) 石器

山神地区より出土した石器には、フレーク1、石匙3、すり石1、凹み石2の4種がある。出土した層位は石匙(図版12)が第Ⅲ層より出土したもので、他は第Ⅱ層より出土したものである。それぞれの属する時代ははっきりつかめられなかったが、第Ⅱ層は中期から後期の土器が出ているので、その時代と比較できよう。

フレーク (図39-3)

玄武岩製の剝片を使用したものである。刃部を周辺につくり出してはいるが、風化により、鋭さを失っている。第8地点より出土したものである。

石匙 (図版12・20, 図39-1・2・4)

1は玄武岩製で横長の完全なものである。巾は6.7cm、長さ2.6cm、厚さ6.5cmである。つまみの部分には自然面を残す。刃部はよく仕上げられている。第8地点より出土したものである。2も玄武岩製で、破片である。両面に自然面を残す。刃部はよく仕上げられている。1同様第8地点で出土。4は玄武岩製の剝片を使用したもので、一部が欠けている。厚さが2.3cmとやや厚い。第10地点出土のものである。

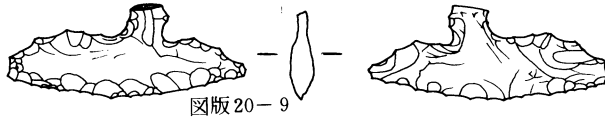
すり石 (図版16-1, 図40-1)

第8地点より出土したものである。輝石安山岩製のもので、約1/2が欠損している。両面は平らで、断面はほぼ平行をなす。巾9.4cm、長さ5.4cmである。

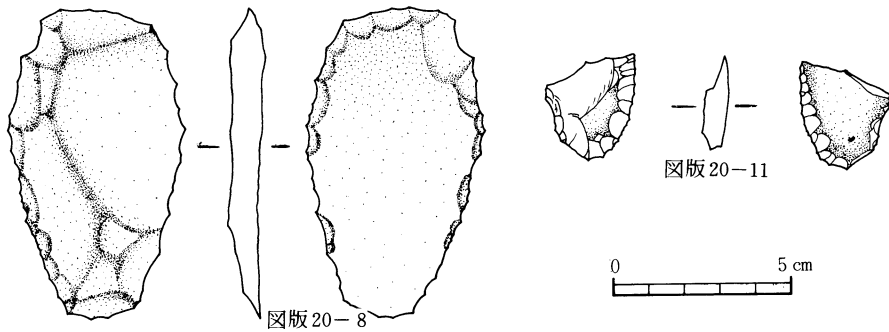
凹み石 (図版16-2・3, 図40-2・3)

2は砂岩製のもので、長さ4.5cm、巾8cmである。周辺には敲石として使われた痕を残しており、欠損後凹み石として再利用したものである。凹みは片面だけであるが、現存のほぼ中央に位置している。器面は全体によくみがかれている。第8地点出土のものである。3は安山岩

製で、長さ10.0cm、巾6cmのもので、第8地点出土のものである。岩質は軟弱で風化がはげしい。凹みは両面にある。両端は敲痕のようにみえるが、風化で判然としない。



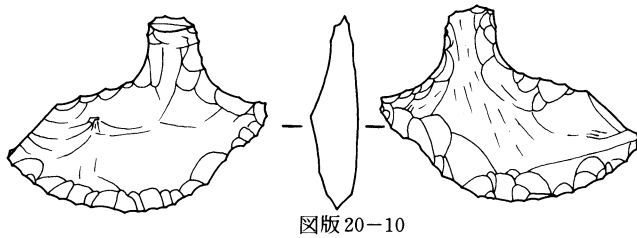
図版20-9



図版20-8

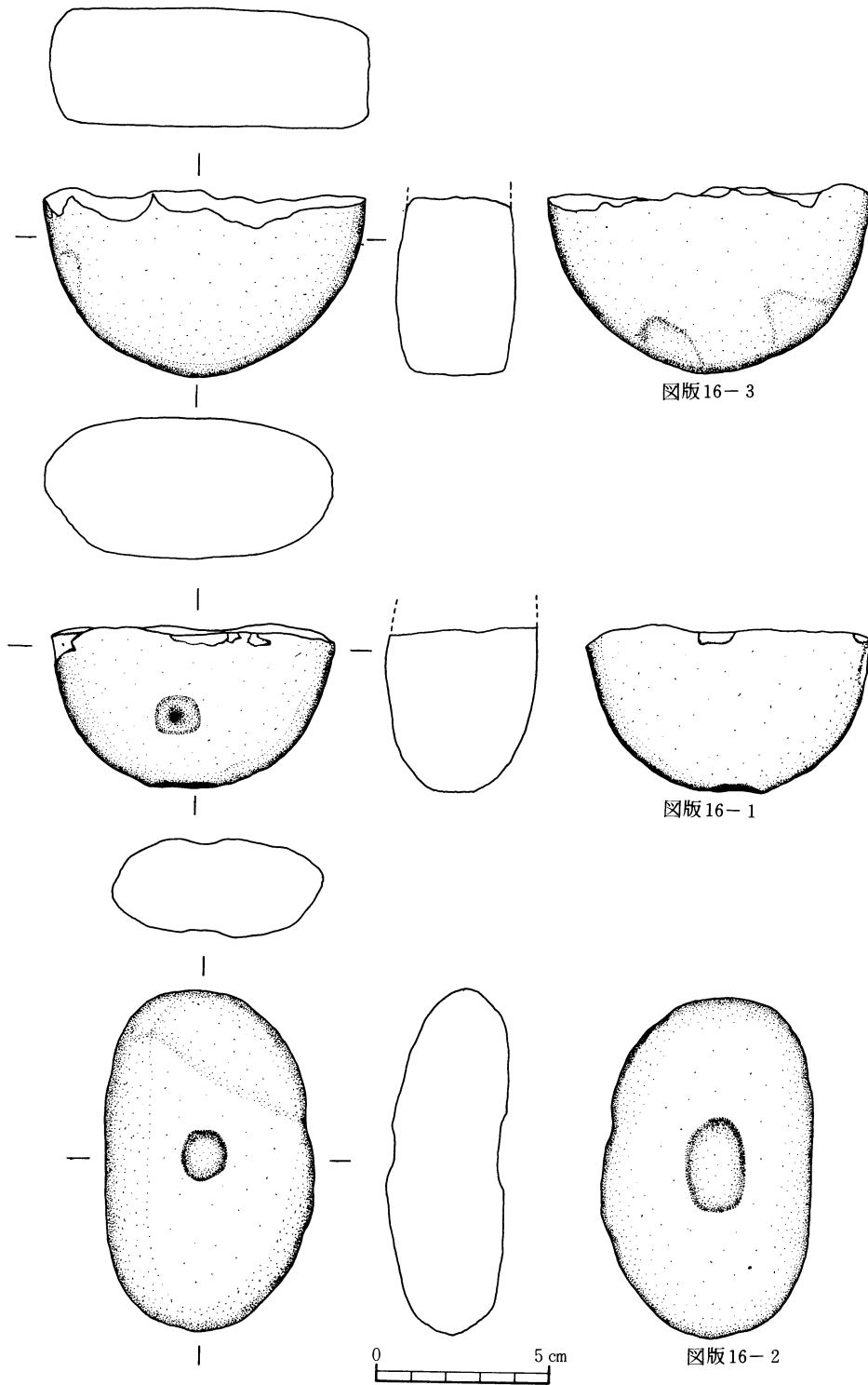
図版20-11

0 5 cm



図版20-10

第39図 山神遺跡出土の石器



第40図 山神遺跡出土の石器

(3) 石鏃 (図版21～図23, 図41～43)

西免・栢場・山神遺跡の総数は37点である

西免遺跡 (1～3)

各地点 (第1・2・3地点) のI層より1点ずつの出土をみている。3本とも凹基式で、石材は黒曜石・チャート・珪岩となっている。

栢場遺跡 (4～12)

第4・5地点あわせて9本の石鏃を検出している。そのうちの1本は磨製石鏃である (12) この磨製石鏃は、扁平無茎のもので基部にえぐりがみられ完形品である。鏃が先端部付近で両方にわかれ基部まで続く。石材は泥灰岩である。他はすべて無茎打製石鏃で石材は珪岩・黒曜石・玄武岩である。形態的には、平基式 (4・10) と凹基式 (5・6・7・8・9・11) とに大きく分けられる。サメ歯鏃あるいは鋸歯鏃とよばれる細かい調整痕のみられるもの (11) も出土した。

山神遺跡 (13～37)

第6・8・9・10地点あわせて25点の石鏃を検出している。そのうち、第8地点のII層より千枚岩製の磨製石鏃が出土している (13)。この磨製石鏃は、栢場遺跡出土のものと同様形態をもっている。その他のものはすべて無茎打製石鏃である。石材は珪岩、黒曜石・玄武岩・チャートである。形態的に、平基式 (27) と凹基式とに分けられ、凹基式には、鋸歯鏃 (16・24・26・29・34) や基部のえぐり部分が円形あるいは梯形をした鏃形鏃 (17・19・33) もみられる。山神遺跡に於いては、第8地点のII層に石鏃が44%集中をみた。I層から出土もいれてみると約半分近くが検出されたことになる。

(4) 土錘 (図版23, 図43)

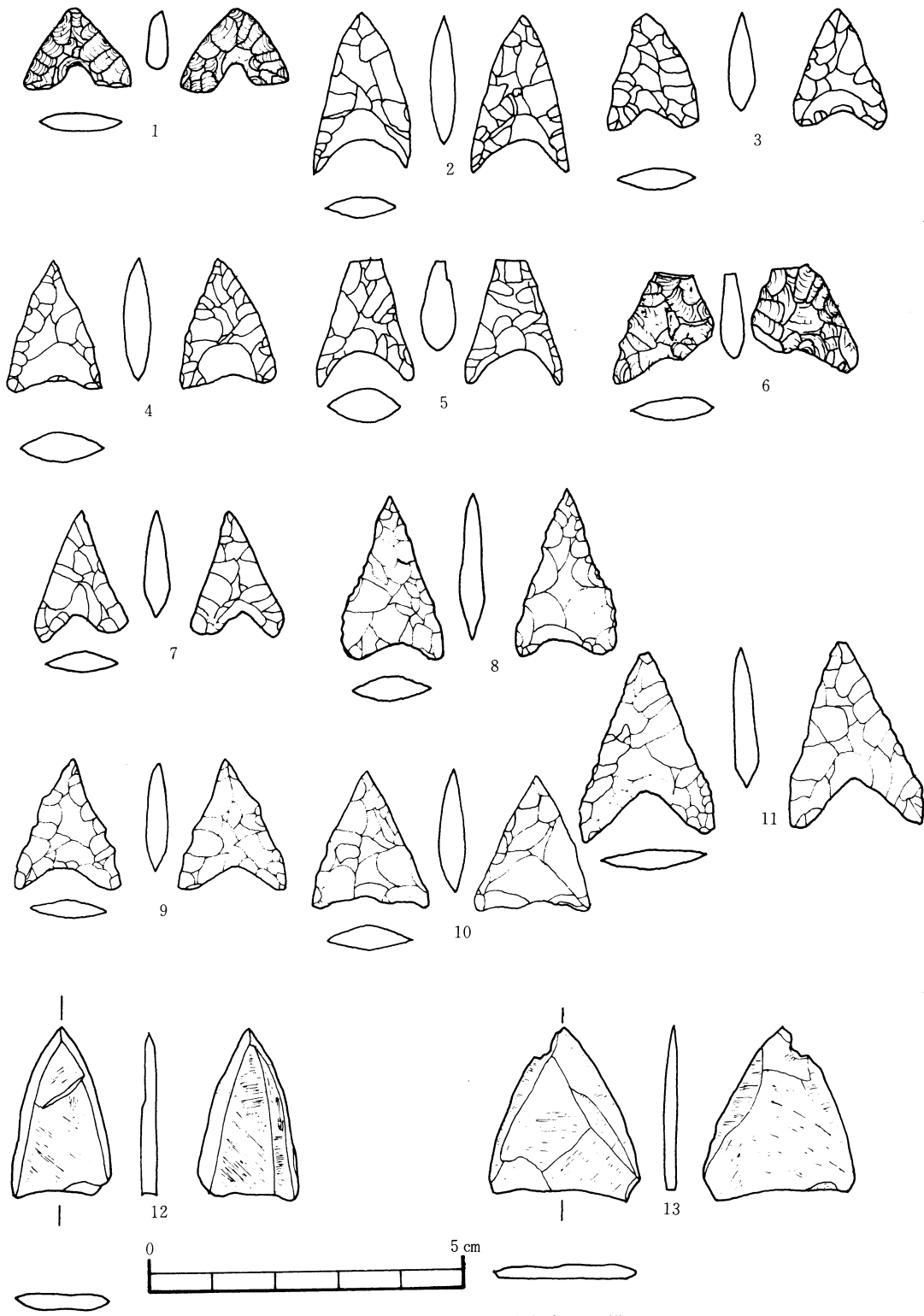
栢場・山神遺跡より5点出土している。

栢場遺跡第5地点から4点の出土をみている。1はB-97-d区II層から出土し長さ4.2cm、直径1.8cm、重さ9.6gの赤褐色の完形品である。2はB-96-c区I層より出土の長さ4.0cm、直径1.9cm、重さ11.2gの黄灰色をしたものである。約3分の1が欠損している。3はB-101-d区I層下部より出土している。長さ4.5cm、直径1.8cm、重さ10gの暗灰色の両面より穿孔したものである。4はC-101-b区I層より出土で長さ4.0cm、直径1.7cm、重さ10.5gの赤褐色をしたよく整正された完形品である。5は先端部が欠けている。黄褐色をした現在長さ4.5cm、直径1.4cm、重さ6.7gのものでC-100-a区I層より出土している。

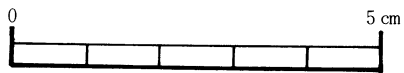
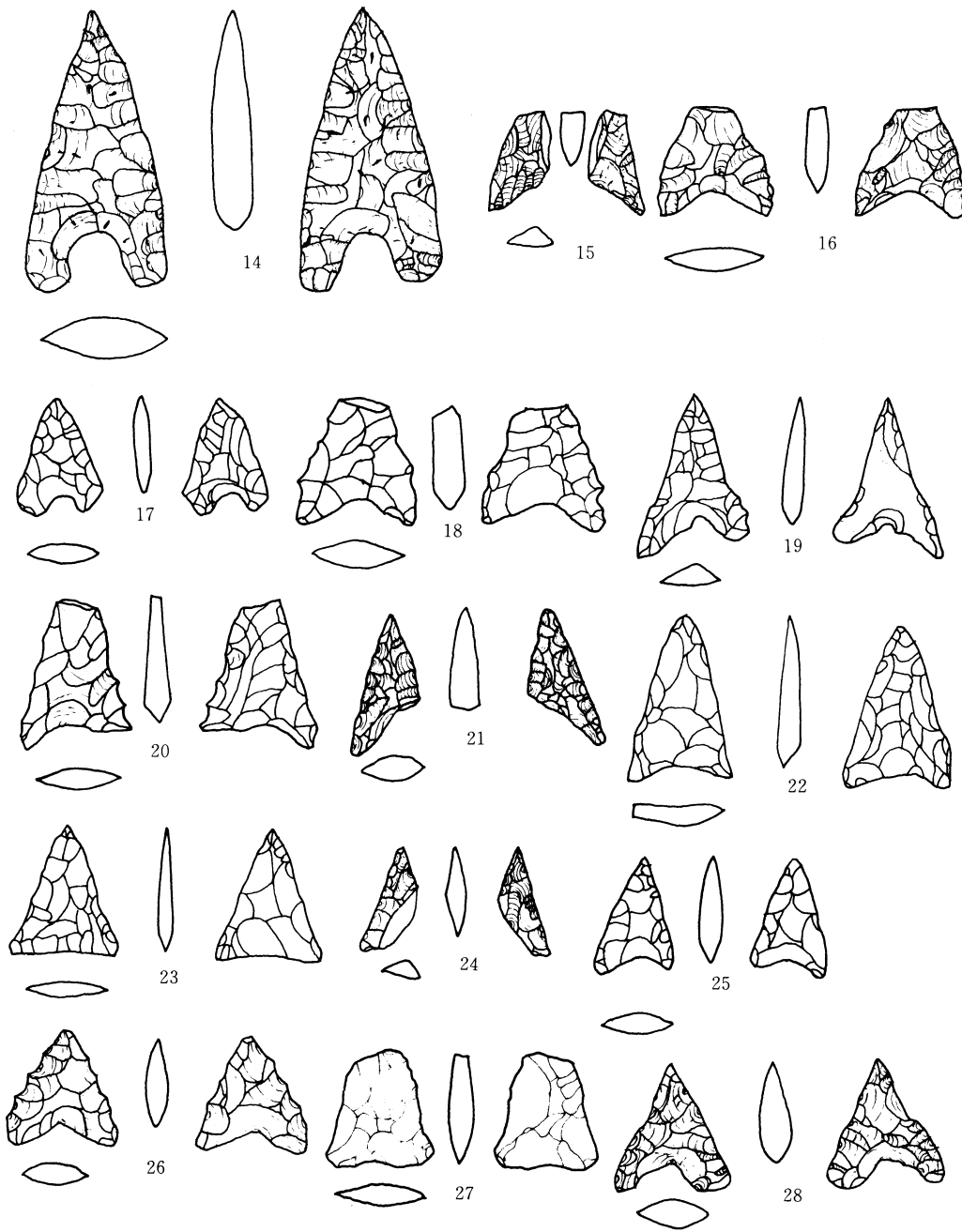
山神遺跡からは第8地点のC-185-d区I層から1点出土している。現在長さ4.2cm、直径1.8cm、重さ9.1gの黄褐色をした土錘である。栢場・山神遺跡より約600m北西のところに以前魚釣迫と呼ばれた場所があり、土錘との関連がでてくるのではなかろうか。また5点とも長さ・直径・重さが一定しており同時期のものと思われる。

第5表 石鏃分類表

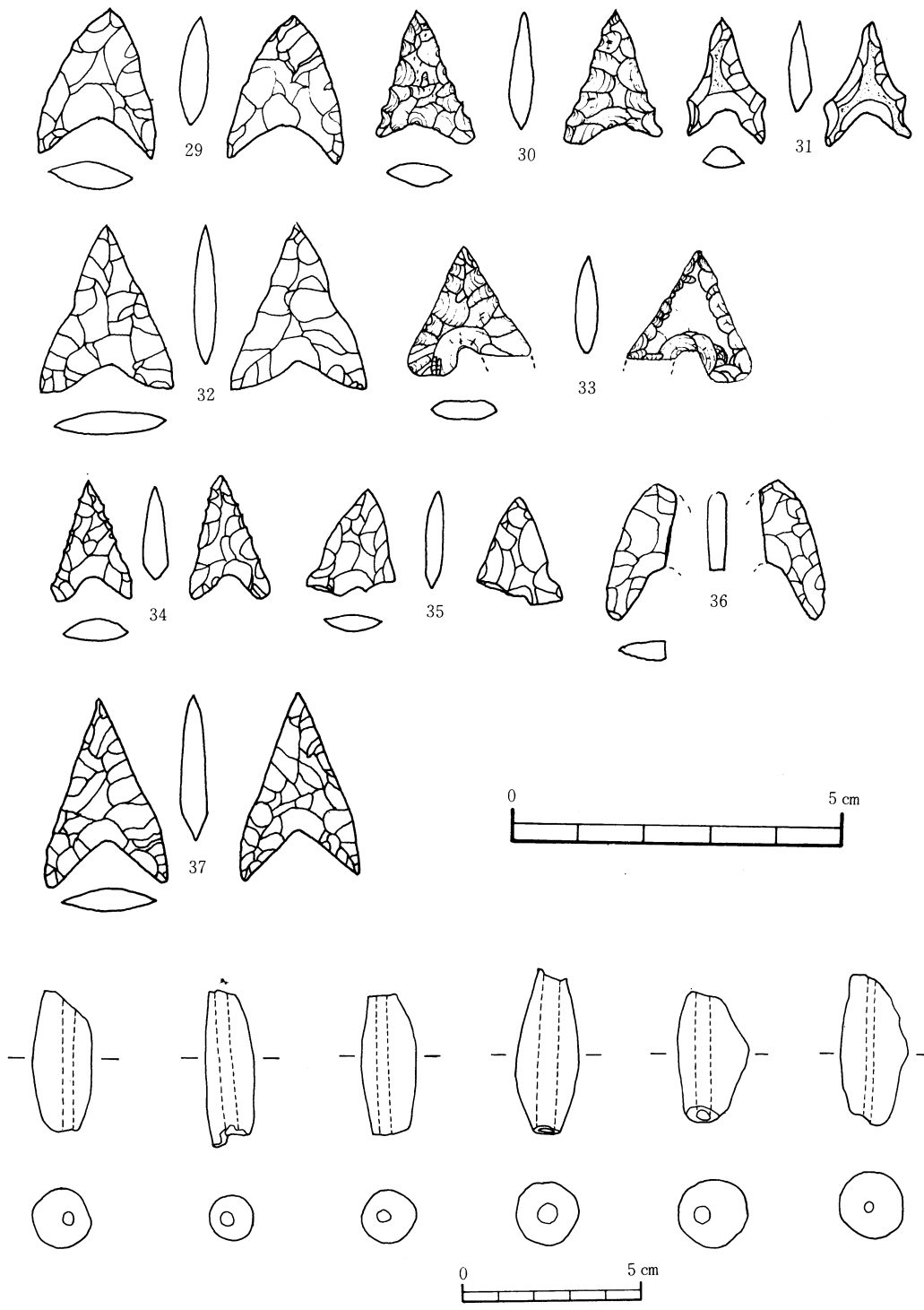
No.	遺跡	地点	区	層	石質	長さ	巾	厚さ	重さ	タイプ及び備考
1	西免	1	表 採		黒曜石	1.3	1.75	0.35	0.45	
2	〃	2	I-50-c	I	チャート	2.5	1.6	0.35	1.0	凹基式
3	〃	3	F-3-d	I	硅岩	2.0	1.5	0.35	0.75	凹基式
4	栢場	4	C-83-b	I	硅岩	2.0	1.5	0.35	1.0	平基式
5	〃	〃	H-72-b	I	硅岩	2.1	1.6	0.5	1.15	凹基式 先端部欠損
6	〃	〃	C-79-d	Ⅲ上	黒曜石	(1.8)	(1.5)	0.3	0.75	凹基式 先端部片脚欠損
7	〃	5	C-101-b	I	玄武岩	2.1	1.5	0.4	0.75	凹基式
8	〃	〃	C-101-b	I	硅岩	2.6	1.5	0.35	1.1	凹基式
9	〃	〃	B-98-d	Ⅱ	玄武岩	2.2	1.7	0.3	0.75	凹基式
10	〃	〃	B-96-d	Ⅱ	硅岩	2.0	1.8	0.4	1.05	平基式
11	〃	〃	C-99-a	Ⅱ	硅岩	3.1	2.1	0.35	1.35	鋸歯鏃
12	〃	〃	C-100-a	I	泥灰岩	2.7	1.6	0.2	1.2	磨製石鏃
13	山神	8	C-181-d	Ⅱ	千枚岩	2.6	2.4	0.2	1.7	磨製石鏃
14	〃	6	F-111-b	Ⅲ上	黒曜石	4.1	2.0	0.55	3.5	二等辺三角形の大型石鏃
15	〃	8	C-174-c	I	黒曜石	(1.4)	(0.8)	0.4	0.45	凹基式 先端部片脚欠損
16	〃	〃	D-175-d	I	黒曜石	(1.6)	1.65	0.3	0.7	鋸歯鏃 先端部欠損
17	〃	〃	D-181-c	Ⅱ	硅岩	1.7	1.3	0.2	0.4	鋸形鏃
18	〃	〃	D-179-b	Ⅱ	硅岩	(1.9)	1.8	0.4	1.3	先端部欠損
19	〃	〃	D-182-a	Ⅱ	玄武岩	2.4	1.7	0.25	0.6	鋸形鏃
20	〃	〃	C-181-c	Ⅱ	硅岩	2.2	1.7	0.3	1.05	先端部欠損
21	〃	〃	D-182-b	Ⅱ	黒曜石	2.1	(1.0)	0.4	0.6	長脚鏃
22	〃	〃	D-181-b	Ⅱ	硅岩	2.4	1.6	0.4	1.1	
23	〃	〃	D-183-a	Ⅱ	チャート	2.0	1.5	0.2	0.45	
24	〃	〃	D-175-d	Ⅱ	黒曜石	(1.6)	(0.6)	0.3	0.2	鋸歯鏃
25	〃	〃	D-174-c	Ⅱ	硅岩	1.7	1.2	0.3	0.5	小型
26	〃	〃	D-181-d	Ⅱ	チャート	1.8	1.5	0.25	0.6	鋸歯鏃
27	〃	〃	D-183-c	Ⅱ	チャート	1.7	1.6	0.3	0.9	平基式
28	〃	〃	E-179-a	Ⅲ	黒曜石	1.9	1.7	0.45	0.75	凹基式
29	〃	9	G-159-a	I下	硅岩	2.3	1.8	0.4	1.1	
30	〃	〃	G-159-b	I	黒曜石	2.1	1.5	0.35	0.65	鋸歯鏃
31	〃	〃	H-133-d	Ⅱ	硅岩	2.0	1.3	0.3	0.5	
32	〃	〃	D-157-c	Ⅱ	黒曜石	2.6	2.1	0.3	1.05	
33	〃	〃	E-143-c	Ⅲ	黒曜石	2.0	1.8	0.3	0.7	鋸形鏃 片脚欠損
34	〃	10	F-136-c	I下	硅岩	1.9	1.3	0.4	0.6	鋸歯鏃
35	〃	〃	G-133-a	I	玄武岩	(1.6)	(1.35)	0.25	0.4	脚欠損
36	〃	〃	J-125-a	I	硅岩	(2.1)	(0.8)	0.3	0.6	凹基式 片脚欠損
37	〃	〃	G-139-a	Ⅱ	硅岩	2.9	1.9	0.35	1.3	



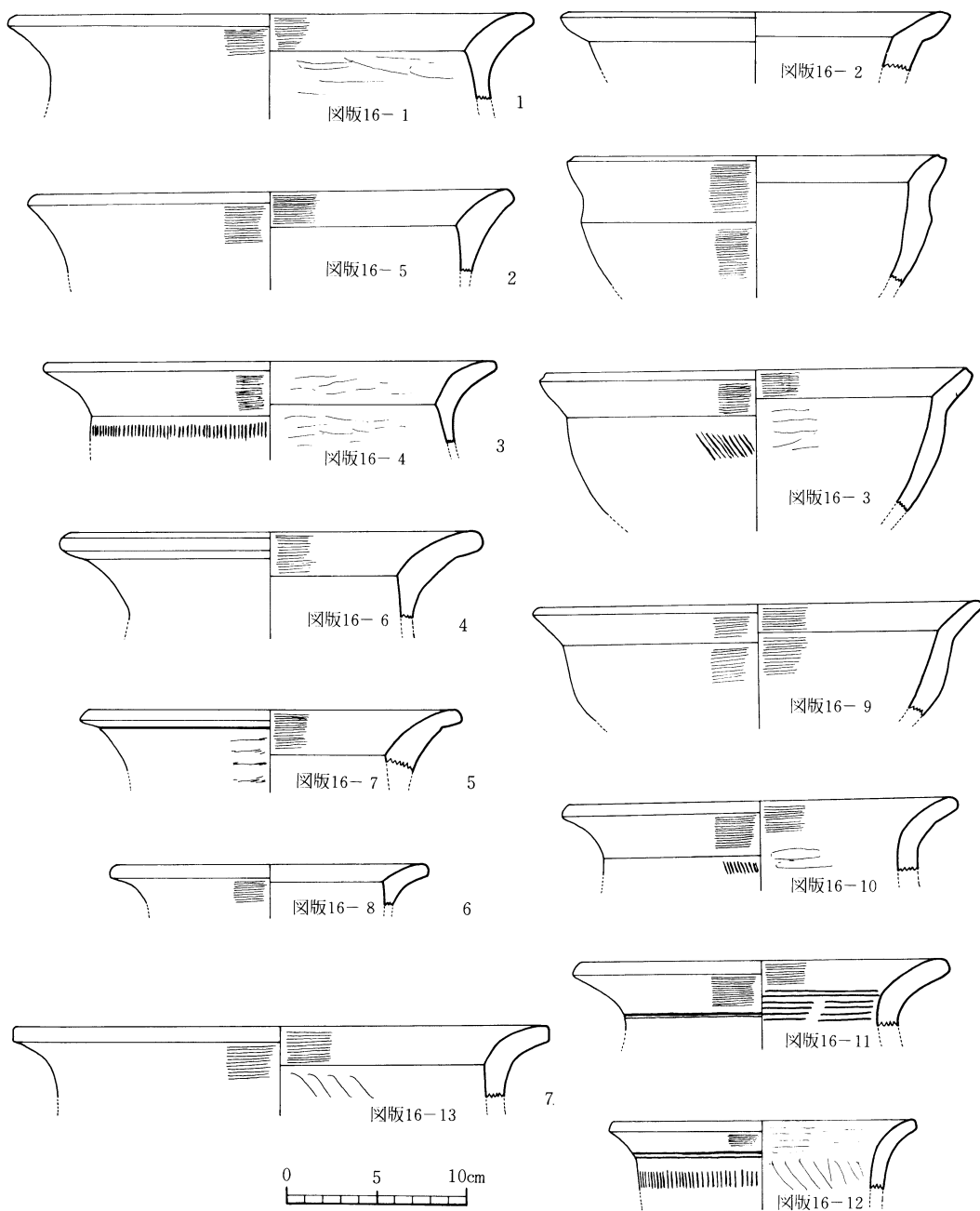
第41図 西免・柵場遺跡出土の石鏃



第42図 山神遺跡出土の石鏃



第43図 山神遺跡出土の石鏃および柙場遺跡出土の土錘



第44図 山神遺跡第8地点出土の甕形土器・鉢形土器

(5) 土師器

山神遺跡調査当時は、胎土焼成からみて、成川式土器で処理していた。また出土が土師器、須恵器に続いて連続的に出土し、はっきりした区分はつけられなかった。土師器は、坏、椀のみでその他の器種がみあたらず、須恵器は甕形土器がその大半というような状態で、第8地点における土器の出土には器種、器形にかたよりがみられた。器種および共伴に近い状態から考えて弥生後期として処理するのではなく、古式土師とした方がよいと考える。また、こゝで述べる甕形土器・鉢形土器は、その底部らしいものがほとんど見あたらなかった。鍋・羽釜状の底で、胴部の破片と区別がつけられない形状のものであるのかも知れない。

①甕形土器 (図版16, 図42-1~6)

胴部の器壁は内外とも赤褐色で胎土に細かい砂が混り、焼成良好な土器である。薄い器壁に対して、部厚く「く」の字形に外反する口縁をもち、内側はヘラで調整しているため、稜線を形成する。口縁部には、内外ともよこなで調整がみられる。胴部は垂直に下るものと、いくぶん、外ふくらみ気味になるものとみなされる。底部は鍋底、あるいは丸底状のものになるのだろうか。底部をとらえていないので推定の域を出ない。

②甕形土器 (図版16, 図42-12~14)

小形の甕形土器で、胎土焼成は、1と同様である。部厚い口縁でなく、口縁部から胴部にかけて、同じ厚さで続く。13は内面に横の、14は外面に縦の刷毛目がほどこされている。

③鉢形土器 (図版16, 図42-8~11)

胎土焼成は1、2と同様である「く」の字形の口縁をもち、内面に稜線をもつ。器壁は胴部中程で厚く、以下底に向ってうすくなる傾向がみられる。

④坏および墨書土器

山神第8地点において、土師器の坏が数多く出土している。完形品を実測し、底部を実測しているうちに、底部径が約6cmのものと約7cmのものに大別できることに気付いた。6cmは天平尺の2寸、7cmは高麗尺の2寸になるから、土器の寸法を論じたものはないかと、気をつけたところ、田中琢氏が「瓦器は、寸法をきめて製作されたものらしく、古くは径五寸、鎌倉時代には四寸を意図していたのではないかと述べられておられることに気付いた(註1)。これと櫛国男代が鬼高期の土器を計測して使用尺を論じておられる(註2)ことから考えて、当然、奈良、平安の土師器には意図的な数値があるものと判断した。

延喜式には各種の器があげられている。たとえば

(銀器) 御飯筒……径6寸、深1寸7分

(漆器) 窪坏……径5寸、深1寸5分

(銀器) 酒台……高6寸3分、広6寸

(朱塗器) 蓋……径5寸

蓋……径4寸5分

(瓷器) 蓋……径4寸7分

- 蓋-----径4寸
- 捧壺-----周1尺9寸 高6寸
- (朱塗器) 盤-----8寸、7寸、6寸、5寸
- (瓷器) 花形塩坏-----3寸
- 小椀-----6寸
- (添器) 大椀-----径8寸6分、深3寸
- (瓷器) 茶椀-----径5寸
- 中椀-----径7寸8分、深2寸

など、まだいくらでもあるが、寸法を記入してある。これらを要約すると、口径と深さ、高さを記入している。そこで、坏の計測箇所として、5箇所を選定し、まず完形品から法則性を見出した。つぎに口縁部にかけていても、極端に外反または内湾しないかぎり実測図で、外側・内側の立ちあがりぐあいを眺めると、ほぼ落着く点がきまってくる。

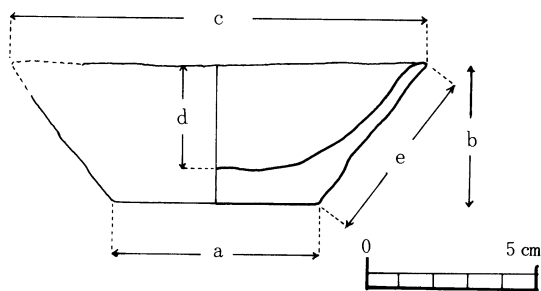
多くの実測図をあたっているうちに、第45図のような計測箇所を設定しえた。やはり古代の人々も人の子、どこかで寸法を合わせようとしたことがうかがえる。

山神遺跡の場合、第6表でみるとおり、椀形が圧倒的に多い。「薩摩国府国分寺発掘調査報告書」掲載の実測図をあたると、 $a = c \times \frac{1}{2}$ 型が数少ない図の中に、5、6ヶすぐ探しだせる。なお、延喜式によると坏には、いろいろな種類がある。器形で分類していけば、ひとつずつでも判ってくるのであるまいか。

山神出土の底部について、実測可能な大きめのものは、ほとんど手をつけたが、小さな破片は実測した数よりはるかに多い。底部はヘラ切りがほとんどで、回転糸切は皆無だったのが、特徴的である。

註1 「日本の考古学」Ⅵ，河出書房，P 210. 田中琢氏執筆。

2 梶国男「古墳の設計」築地書館，1975。



遺物は、鹿児島県始良郡始良町西ノ妻より耕作中に出土した坏。 $a = 6.0 \sim 6.1$ $b = 4.1 \sim 4.2$ $c = 12.2$
 $d = 3.0$ $c = 5.2$ $a = c \times \frac{1}{2} = d \times 2$

第45図 土師器坏の計測

墨書土器 (図版18・19, 図47)

墨書土器片の出土がわりと多いので驚いた。薩摩国府・国分寺の調査でも、こんなには見つからない。「奠」にせよ「廣」にせよ、このような達筆な墨書土器の出土は寡聞のためか知らない。完全な墨書土器にかかれている文字があまりにも達筆なので、なんと読むかについていろいろと論がわかれた。「奠」・「奥」・「西天」の三通りとなった。「奥」には「かまど」の意があり、焼土が附近に多いことから好都合との意見もあつたが、「奠」と読むのがすなおな読み方だと考える。また、達筆すぎる文字であることから、大隅国衙の官人と関連があるのかも知れない。この問題は今後の大きな研究課題である。なおまた、第8地点・第10地点ともに完形品がすぐ近くに他に遺物を見出せない全く単独の形で出土したことも特徴的であり、それが何故であるのか今のところ判らない。

(6) その他

1 ふいごの羽口 (図版17-3, 図49-1)

ふいごの羽口の出土は、焼土の検出が数ヶ所みられたことと関連して、タタラとの関係を調べるのが今後の課題である。

2 鉄鏃 (図版24)

長さ 4.5cm・幅 3cm 重さ 10.1g まったくさびてしまっている。

3 青銅製小仏像 (図版24)

高さ 4cm、重さ 9.2g のものである。その大きさから考えて護持仏的なものであろう。

4 「へら」きずあとの残る土器 (図49-2)

長さ 1.3cm、幅 0.1cm・深さ 0.1cmの「へら」きず。ネジ廻しの先端のようなへら先が器面に対して垂直にあたったような後が残っている。偶然のものであろうが、焼成前にできた傷である。

5 高坏の脚 (図49-3)

底部径 11.2cm、脚高 5.5cm。D-169-b-IIの溝状遺構中より出土。赤褐色を呈し、なで調整。細砂混りで焼成良好。1年間近いこの地区の調査で高坏が出土したのはこれが1点のみで、しかも出土地点のすぐ近くでは他に出土遺物がないのも理解に苦しむ。

第6表 土師器環・碗の計測

① $a = c \times \frac{1}{2}$ 型

	図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考
1	4	D-184-d-II	碗	黄白色	付け高台	8.5	8.3	17.0	6.0	9.3	図46-17
2	30	D-181-b-II	〃	明褐色	〃	8.4	6.5	16.8	5.1	7.8	
3	183	C-182-c-II	〃	褐色		8.4	7.0	16.8	5.4	8.1	内黒
4	181	D-181-b-I	〃	明褐色		8.4	6.0	16.8	5.1	7.4	〃
5	145	C-181-b-II	〃	黄白色	付け高台	8.4	6.0	16.8	4.5	7.3	〃
6	166	C-183-b-I	〃	褐色	〃	8.4	6.0	16.8	4.5	7.3	〃
7	29	C-181-b-II	〃	明褐色	〃	7.8	6.0	15.6	4.7	7.2	
8	126	D-182-d-I	〃	〃	〃	7.8	6.0	15.6	4.5	7.2	内黒
9	108	C-182-c-II	〃	黄白色	〃	7.6	6.0	15.2	4.5	7.1	〃
10	182	D-181-a-I	坏	褐色	へら切り	7.0	6.0	14.0	4.5	6.9	〃
11	43	C-181-d-II	〃	明褐色		7.0	5.1	14.2	4.5	6.2	図46-11
12	238	C-182-c-II	〃	明褐色	〃	7.0	5.1	14.0	4.5	6.1	
13	217	C-181-b-I	〃	褐色	〃	7.0	5.0	14.0	4.5	6.1	
14	220	D-181-b-II	〃	黄白色	〃	7.0	5.0	14.0	4.5	6.1	
15	252	D-182-b-II	〃	明褐色	〃	7.0	5.0	14.0	4.5	6.1	
16	256	D-181-d-II	〃	赤褐色	まきあげ	7.0	5.0	14.0	4.5	6.1	
17	258	D-182-a-II	〃	〃	削り出し	7.0	5.0	14.0	4.5	6.1	
18	64	D-182-c-II	〃	〃	へら切り	7.0	5.0	14.0	4.5	6.1	
19	140	E-129-c-I	〃	褐色	糸 切	7.0	5.0	14.0	4.5	6.1	内黒
20	221	D-182-b-II	〃	黄白色	へら切り	7.0	5.0	14.0	4.4	6.1	
21	63	C-183-d-II	〃	赤褐色	〃	7.0	5.0	14.0	4.4	6.1	
22	171	C-184-a-II	〃	黄白色	削り出し	7.0	5.0	14.0	4.3	6.1	内黒
23	174	C-182-d-II	〃	〃	付け高台	7.0	5.0	14.0	4.3	6.1	〃
24	236	C-181-b-II	〃	赤褐色	へら切り	7.0	5.0	14.0	4.3	6.1	
25	242	C-182-b-II	〃	〃	まきあげ	7.0	5.0	14.0	4.3	6.1	
26	195	B-101-c-I	〃	褐色	削り出し	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	栢場出土
27	91	D-182-c-II	〃	赤褐色	へら切り	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
28	93	D-183-a-II	〃	〃	〃	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
29	94	D-181-a-II	〃	〃	〃	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
30	96	D-180-a-II	〃	〃	〃	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
31	98	D-183-a-II	〃	〃	〃	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	

	図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製作法	a	b	c	d	e	備 考
32	234	D-183-a-II	坏	赤褐色	へら切り	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
33	243	C-182-a-II	"	"	"	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
34	259	D-183-a-II	"	"	削り出し	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
35	260	C-182-c-II	"	明褐色	"	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
36	101	C-181-d-II	"	赤褐色	へら切り	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
37	158	C-182-b-II	"	黄白色	付け高台	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	内黒高台埴色
38	60	D-181-a-II	"	赤褐色	へら切り	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
39	67	D-182-a-II	"	黄白色	"	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
40	68	C-182-d-II	"	"	"	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
41	83	D-182-c-II	"	"	"	7.0	5.0	14.0	4.2	6.1	
42	178	D-182-b-II	"	"		7.0	5.0	13.8	4.2	6.1	内黒
43	5	E-143-c-II	"	赤褐色	へら切り	7.0	5.0	13.7	4.2	5.9	井の刻字図版17 -1 図46-12
44	229	B-181-b-I	"	明褐色	"	7.0	4.8	14.0	4.2	5.9	
45	100	C-182-d-II	"	褐色	"	7.0	5.0	14.0	4.0	6.1	
46	237	C-181-d-II	"	"	"	7.0	5.0	14.0	4.0	6.1	
47	184	C-181-c-II	"	明褐色		7.0	5.0	14.0	3.9	6.1	内黒
48	223	E-176-b-I	"	"	へら切り	7.0	5.0	14.0	3.9	6.1	
49	176	D-183-b-I	"	黄白色	付け高台	7.0	5.0	14.0	3.9	6.1	内黒
50	32	E-182-c-II	椀	"	"	6.8	5.6	13.6	4.2	6.5	焼土内
51	15	D-182-b-II	"	赤褐色	へら切り	6.8	5.1	13.6	4.1	6.2	
52	13	D-183-c-II	"	"	"	6.8	5.0	13.6	4.1	6.0	
53	116	D-181-b-II	"	黄白色	付け高台	6.6	7.1	13.2	4.5	7.8	内黒
54	227	C-182-d-II	"	赤褐色	へら切り	6.6	5.0	13.2	4.4	6.1	
55	89	C-181-b-II	"	"	"	6.6	5.0	13.2	4.4	6.0	
56	87	C-183-d-II	"	"	"	6.6	5.2	13.2	4.2	6.0	
57	11	C-172-c-II	"	"	"	6.6	5.0	13.2	4.2	6.0	穴あき、図版17 -7、図46-6
58	121	D-182-b-II	坏	褐色	付け高台	6.6	5.0	13.2	4.0	6.0	内黒
59	123	C-182-d-II	"	黄白色	"	6.6	5.0	13.2	3.6	6.0	"
60	261	C-180-d-II	"	明褐色	へら切り	6.5	4.5	13.0	3.6	5.6	
61	14	C-181-a-II	"	黄白色	"	6.4	5.0	12.8	4.0	6.0	
62	86	D-180-a-II	"	赤褐色	"	6.0	5.0	12.0	4.2	5.8	
63	74	C-183-d-II	"	明褐色	"	6.0	4.2	12.0	3.6	5.2	
64	76	D-181-b-II	"	黄白色	"	6.0	4.2	12.0	3.5	5.2	

	図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製作法	a	b	c	d	e	備 考
65	187	C-183-c-I	坏	明褐色		6.0	4.0	12.0	3.6	4.9	内黒
66	12	C-181-b-II	椀	黄白色	へら切り	5.8	5.8	11.6	4.8	6.5	
67	143	C-182-d-II	坏	褐色	付け高台	6.6	4.0	13.2	2.1	5.1	
68	136	C-181-b-II	〃	〃	〃	6.0	3.6	12.0	2.1	4.6	内黒

- 削り出しと表現したのは、「削り出し高台」と言い切ることはできぬが、若干底部をえぐったものを指す。
- 「まきあげ」はまきあげ痕の明瞭なもの。
- 「高台埴色」は高台を意図的に埴色に着色したもの。
- ゴチックの数値は実測値および復元値・他は推定数値。

② $a = d \times 2 = c \times \frac{1}{2}$ 型

	図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製作法	a	b	c	d	e	備 考
1	8	I-129-b-II	坏	褐色	付け高台	7.0	5.0	13.8	3.7	6.0	墨書「吉」図版17、図46、47
2	160	D-182-c-II	〃	〃	〃	7.0	5.0	14.0	3.7	6.1	内黒
3	134	C-183-b-II	〃	〃	削り出し	7.0	5.0	14.0	3.6	6.1	〃
4	197	B-99-d-I	〃	黄白色	付け高台	7.0	5.0	14.0	3.5	6.1	〃 栢場出土
5	146	C-182-b-II	〃	〃	〃	7.0	5.0	14.0	3.3	6.1	〃
6	105	C-180-d-II	〃	明褐色	〃	7.0	5.0	14.0	3.0	6.1	
7	48	D-181-c-II	〃	赤褐色	へら切り	6.0	4.2	12.0	3.0	5.2	

③ $a = e = c \times \frac{1}{2}$ 型

	図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製作法	a	b	c	d	e	備 考
1	179	C-185-b-II	椀	褐色		8.4	7.5	16.8	6.6	8.4	内黒
2	31	D-183-c-II	〃	明褐色	付け高台	8.4	7.5	16.8	6.3	8.4	
3	207	C-183-c-II	〃	黄白色	〃	8.4	7.2	16.8	6.2	8.4	
4	212	C-182-b-II	〃	〃	〃	8.4	7.2	16.8	5.9	8.4	
5	104	C-183-c-II	〃	赤褐色	〃	8.4	7.2	16.8	5.9	8.4	
6	162	C-183-d-II	〃	〃	〃	8.4	7.3	16.8	5.4	8.4	内黒
7	107	D-181-a-II	〃	褐色	削り出し	8.4	6.6	16.8	5.3	8.4	
8	115	C-182-c-II	〃	明褐色	付け高台	8.0	7.0	16.0	5.6	8.0	内黒

	図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考
9	114	C-183-b-II	椀	黄白色	付け高台	8.0	7.0	16.0	5.4	8.0	内黒
10	128	E-129-c-II	"	"	"	7.8	6.6	15.6	4.8	7.8	"
11	19	D-180-b-II	"	明褐色	"	7.6	7.0	15.2	5.1	7.6	
12	190	D-180-a-I	"	褐色	付け高台?	7.5	6.6	15.0	5.4	7.5	内黒
13	204	D-183-b-II	"	赤褐色	へら切り	7.5	6.5	15.0	5.9	7.5	
14	189	C-180-d-II	"	褐色	付け高台?	7.5	6.5	15.0	4.8	7.5	内黒
15	111	D-182-d-II	"	黄白色	付け高台	7.2	6.4	14.4	4.9	7.2	"
16	103	C-180-b-II	"	赤褐色	"	7.2	6.2	14.4	4.8	7.2	
17	10	C-181-b-II	"	"	削り出し	7.2	6.1	14.4	4.5	7.1	
18	120	D-181-b-II	"	褐色	付け高台	7.2	6.0	14.4	4.2	7.0	内黒
19	254	D-182-a-II	"	赤褐色	巻きあげ	7.0	6.1	14.0	5.7	7.0	
20	231	D-182-b-II	"	"	へら切り	7.0	6.1	14.0	5.6	7.0	
21	249	C-181-d-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.5	7.0	
22	157	C-182-d-II	"	"	付け高台	7.0	6.1	14.0	5.5	7.0	内黒高台埴色
23	232	C-181-b-I	"	明褐色	へら切り	7.0	6.0	14.0	5.5	7.0	
24	218	D-182-a-II	"	"	"	7.0	6.0	14.0	5.4	7.0	
25	219	C-181-a-II	"	"	"	7.0	6.0	14.0	5.4	7.0	
26	180	C-182-c-II	"	褐色	"	7.0	6.0	14.0	5.4	7.0	内黒
27	210	C-183-b-II	"	黄白色	"	7.0	6.0	14.0	5.4	7.0	
28	203	C-182-c-II	"	赤褐色	"	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
29	216	C-181-c-II	"	明褐色	"	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
30	225	D-182-a-II	"	赤褐色	"	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
31	246	C-183-b-II	"	"	削り出し	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
32	247	D-182-a-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
33	255	D-182-a-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
34	50	D-183-b-II	"	明褐色	へら切り	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
35	53	C-183-d-II	"	赤褐色	"	7.0	6.1	14.0	5.4	7.0	
36	55	C-182-d-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.3	7.0	
37	88	D-182-c-II	"	"	"	7.0	6.2	14.0	5.3	7.0	図46-10
38	226	D-182-a-II	"	"	"	7.0	6.0	14.0	5.3	7.0	
39	196	B-101-c-I	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.3	7.0	柘場出土
40	159	D-180-b-I	"	"	付け高台	7.0	6.1	14.0	5.3	7.0	内黒高台埴色
41	132	C-181-b-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	5.2	7.0	"

	図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考
43	248	D-182-a-II	椀	赤褐色	へら切り	7.0	6.1	14.0	5.2	7.0	
44	250	C-181-d-II	〃	〃	削り出し	7.0	6.1	14.0	5.2	7.0	
45	44	D-181-b-II	〃	〃	へら切り	7.0	6.1	14.0	5.2	7.0	
46	58	D-183-a-II	〃	〃	〃	7.0	6.1	14.0	5.2	7.0	
47	59	D-182-c-II	〃	〃	〃	7.0	6.1	14.0	5.1	7.0	
48	77	C-180-b-II	〃	黄白色	〃	7.0	6.1	14.0	5.1	7.0	
49	78	D-181-b-II	〃	〃	〃	7.0	6.1	14.0	5.1	7.0	
50	79	C-184-c-II	〃	〃	〃	7.0	6.1	14.0	5.1	7.0	
51	92	C-183-a-II	〃	赤褐色	〃	7.0	6.0	14.0	5.1	7.0	
52	224	D-182-b-II	〃	〃	〃	7.0	6.0	14.0	5.1	7.0	
53	240	D-181-d-I	〃	暗褐色	巻きあげ	7.0	6.0	14.0	5.1	7.0	
54	155	E-129-b-I	〃	褐色	削り出し	7.0	6.1	14.0	5.1	7.0	内黒
55	230	D-183-b-II	〃	赤褐色	へら切り	7.0	6.1	14.0	5.1	7.0	
56	213	C-182-c-II	〃	黄白色	付け高台	7.0	6.1	14.0	5.0	7.0	
57	125	D-180-a-I	〃	〃	〃	7.0	6.2	14.0	5.0	7.0	内黒
58	169	D-181-a-II	〃	明褐色	〃	7.0	6.2	14.0	5.0	7.0	内黒高台埴色
59	200	C-182-c-II	〃	赤褐色	へら切り	7.0	6.1	14.0	5.0	7.0	
60	38	D-182-c-II	〃	〃	削り出し	7.0	6.1	14.0	5.0	7.0	図46-23
61	168	C-180-c-I	〃	褐色	付け高台	7.0	6.2	14.0	5.0	7.0	内黒高台埴色
62	130	C-182-d-I	〃	黄白色	〃	7.0	6.2	14.0	4.9	7.0	内黒
63	175	D-181-a-II	〃	褐色	〃	7.0	6.1	14.0	4.9	7.0	〃
64	205	C-182-c-II	〃	赤褐色	〃	7.0	6.1	14.0	4.9	7.0	
65	165	D-181-c-I	〃	黄白色	〃	7.0	6.1	14.0	4.9	7.0	内黒
66	40	C-182-d-II	〃	〃	削り出し	7.0	6.1	14.0	4.9	7.0	図46-22
67	39	C-182-d-II	〃	赤褐色	〃	7.0	6.1	14.0	4.8	7.0	
68	49	D-183-b-II	〃	〃	へら切り	7.0	6.1	14.0	4.8	7.0	
69	235	C-182-d-II	〃	〃	〃	7.0	6.0	14.0	4.8	7.0	
70	208	C-182-b-I	〃	褐色	付け高台	7.0	6.3	14.0	4.8	7.0	
71	129	C-183-d-I	〃	〃	〃	7.0	6.1	14.0	4.8	7.0	内黒
72	164	C-182-d-II	〃	〃	〃	7.0	6.0	14.0	4.8	7.0	〃
73	151	C-183-d-II	〃	〃	〃	7.0	6.1	14.0	4.8	7.0	〃
74	154	C-182-b-II	〃	〃	〃	7.0	6.1	14.0	4.8	7.0	〃
75	137	C-185-a-II	〃	赤褐色	〃	7.0	6.1	14.0	4.7	7.0	〃

	図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考
76	109	C-181-d-II	碗	黄白色	付け高台	7.0	6.2	14.0	4.7	7.0	内黒
77	167	C-180-b-I	"	赤褐色	付け高台	7.0	6.2	14.0	4.7	7.0	"
78	177	C-181-d-II	"	褐色	へら切り	7.0	6.2	14.0	4.7	7.0	"
79	209	E-180-a-I	"	"	"	7.0	6.2	14.0	4.7	7.0	
80	142	D-183-a-II	"	明褐色	付け高台	7.0	6.1	14.0	4.7	7.0	内黒
81	150	C-181-a-II	"	黄白色	"	7.0	6.1	14.0	4.7	7.0	"
82	149	C-181-d-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	4.6	7.0	"
83	163	D-183-b-II	"	褐色	"	7.0	6.1	14.0	4.6	7.0	"
84	112	C-180-d-II	"	明褐色	"	7.0	6.1	14.0	4.6	7.0	"
85	127	C-181-d-II	"	黄白色	"	7.0	6.1	14.0	4.6	7.0	"
86	161	D-182-b-II	"	褐色	"	7.0	6.1	14.0	4.5	7.0	内黒高台埴色
87	206	C-185-b-II	"	明褐色	"	7.0	6.1	14.0	4.5	7.0	
88	131	C-182-a-II	"	褐色	"	7.0	6.1	14.0	4.5	7.0	内黒
89	133	D-182-a-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	4.5	7.0	"
90	156	D-180-a-I	"	"	"	7.0	6.1	14.0	4.5	7.0	"
91	186	D-184-a-II	"	黄白色	へら切り	7.0	6.0	14.0	4.5	7.0	"
92	202	C-181-b-II	"	赤褐色	付け高台	7.0	6.0	14.0	4.4	7.0	
93	18	D-184-a-II	"	明褐色	"	7.0	6.1	14.0	4.4	7.0	
94	144	D-182-d-II	"	褐色	"	7.0	6.1	14.0	4.3	7.0	内黒
95	211	D-180-a-I	"	明褐色	"	7.0	6.1	14.0	4.2	7.0	
96	148	D-181-b-II	"	黄白色	"	7.0	6.1	14.0	4.0	7.0	内黒
97	33	D-181-b-II	"	明褐色	付け高台	7.0	6.1	14.0	4.0	7.0	
98	23	C-181-b-II	"	"	"	7.0	6.1	14.0	3.7	7.0	
99	199	C-182-c-II	"	"	へら切り	6.6	6.0	13.2	5.5	6.6	
100	194	B-100-c-I	"	黄白色	"	6.6	6.0	13.2	5.0	6.6	朽場出土
101	99	D-182-a-II	"	赤褐色	"	6.6	5.7	13.2	4.9	6.6	
102	241	C-181-b-I	"	暗褐色	"	6.6	5.5	3.2	4.9	6.6	
103	110	D-183-d-II	"	黄白色	付け高台	6.6	5.8	13.2	4.7	6.6	内黒
104	222	E-180-a-I	"	赤褐色	へら切り	6.6	5.8	13.2	4.6	6.6	
105	135	D-181-b-I	"	黄白色	付け高台	6.6	5.8	13.2	4.4	6.6	内黒
106	119	D-181-b-I	"	赤褐色	"	6.6	5.6	13.2	4.2	6.6	"
107	57	C-182-b-II	"	"	へら切り	6.6	5.2	13.2	4.2	6.6	
108	90	D-183-a-II	"	"	"	6.1	5.3	3.2	4.5	6.1	

	図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考
109	42	D-182-a-II	椀	赤褐色	へら切り	6.0	5.6	13.2	5.0	6.6	
110	72	C-181-b-II	〃	黄白色	まきあげ	6.0	5.3	12.0	4.8	6.0	
111	56	C-181-a-II	〃	赤褐色	へら切り	6.0	5.3	12.0	4.5	6.0	
112	82	D-182-b-II	〃	黄白色	〃	6.0	5.3	12.0	4.5	6.0	内黒
113	73	D-183-a-II	〃	明褐色	〃	6.0	5.2	12.0	4.5	6.0	
114	54	D-182-d-II	〃	赤褐色	〃	6.0	5.2	12.0	4.4	6.0	
115	61	D-182-a-II	〃	〃	〃	6.0	5.2	12.0	4.4	6.0	
116	41	D-180-b-II	〃	〃	〃	6.0	5.3	12.0	4.2	6.0	
117	2	D-182-d-II	〃	〃	へら切り	6.0	5.0	12.7	4.2	6.0	図版17-4, 図46-13
118	80	D-182-d-II	〃	黄白色	〃	6.0	5.2	12.0	4.2	6.0	
119	124	C-182-b-II	〃	〃	付け高台	6.0	5.2	12.0	4.1	6.0	内黒
120	147	D-183-a-II	〃	〃	付け高台	6.0	5.2	12.0	4.1	6.0	内黒
121	81	E-176-a-I	〃	〃	へら切り	6.0	5.2	12.0	4.0	6.0	
122	113	D-182-a-II	〃	〃	付け高台	6.0	5.0	12.0	3.9	6.0	内黒
123	122	D-182-d-II	〃	〃	〃	6.0	5.0	12.0	3.6	5.9	内黒
124	16	C-182-d-II	〃	〃	へら切り	6.0	5.0	12.0	3.6	6.0	
125	66	C-183-c-II	〃	〃	〃	5.4	4.5	10.8	3.6	5.4	

③ a=b=c × $\frac{1}{2}$ 型

	図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考
1	191	D-182-a-II	椀	褐色	付け高台?	9.1	9.0	18.3	7.2	9.1	内黒
2	228	C-181-d-II	〃	赤褐色	削り出し	7.0	7.0	14.0	6.3	7.8	
3	257	C-181-b-I	〃	〃	へら切り	7.0	7.0	14.0	6.3	7.8	
4	85	C-183-d-II	〃	〃	〃	7.0	7.0	14.0	5.7	7.8	
5	34	C-183-d-II	〃	明褐色	付け高台	7.0	7.0	14.0	5.1	7.8	
6	215	B-96-d-I	〃	褐色	〃	7.0	7.0	14.0	4.9	7.8	榎場出土
7	37	C-180-d-II	〃	黄白色	〃	7.0	7.0	14.0	3.9	7.8	図46-21
8	24	C-182-d-II	〃	明褐色	〃	6.6	6.6	13.2	4.5	7.2	図46-19
9	28	C-181-b-II	〃	黄白色	〃	6.4	6.4	12.8	4.7	7.1	
10	45	D-182-c-II	〃	明褐色	へら切り	6.0	6.0	12.0	5.4	6.6	

図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考	
11	75	D-182-b-II	椀	黄白色	へら切り	6.0	6.0	12.0	5.4	6.6	
12	95	D-182-a-II	〃	赤褐色	〃	6.0	6.0	12.0	5.4	6.6	
13	97	D-182-c-II	〃	褐色	〃	6.0	6.0	12.0	5.3	6.6	
14	46	C-182-d-II	〃	明褐色	〃	6.1	6.0	12.0	5.2	6.6	
15	25	D-183-a-II	〃	赤褐色	〃	6.0	6.0	12.0	5.1	6.6	図46-5
16	84	D-183-a-II	〃	〃	削り出し	6.0	6.0	12.0	5.1	6.6	
17	21	C-184-c-II	〃	〃	へら切り	6.0	6.0	12.0	5.0	6.6	墨書「山」図版19図46-7
18	47	D-182-a-II	〃	〃	〃	6.0	6.0	12.0	5.0	6.6	
19	170	D-182-b-II	〃	黄白色	付け高台	6.0	6.0	12.0	4.8	6.6	内黒
20	152	C-182-b-I	〃	褐色	〃	6.0	6.0	12.0	4.5	6.6	〃
21	153	D-183-c-II	〃	黄白色	〃	6.0	6.0	12.0	4.3	6.6	〃
22	20	E-177-b-II	〃	黄白色	へら切り	6.0	5.8	12.3	4.8	6.6	墨書「鳥」図版18図46-47

④ a = b 型

図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考	
1	106	C-182-d-II	椀	赤褐色	付け高台	8.0	8.0	14.0	6.5	8.5	
2	27	D-182-c-II	〃	明褐色	〃	7.0	7.0	12.4	5.8	7.5	
3	139	C-181-a-II	小鉢	赤褐色	糸切り	7.0	7.0	18.0	5.8	9.0	内黒
4	22	C-182-d-II	椀	黄白色	付け高台	6.6	6.6	15.7	4.4	8.1	図46-18
5	7	E-177-b-II	〃	明褐色	へら切り	5.8	6.0	13.5	4.2	7.1	図版18、図46-1「鳥」之共伴
6	1	D-182-d-II	〃	黄白色	〃	5.0	5.0	12.7	4.4	6.3	図版17-18図46-2
7	9	D-180-b-II	〃	〃	〃	4.7	5.0	12.0	3.9	6.2	図版17-4図46-3

⑤ a = b × 2 型

図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考	
1	51	D-180-a-II	坏	明褐色	へら切り	8.4	4.2	14.0	3.2	5.0	
2	251	D-181-a-II	〃	〃	付け高台	8.4	4.2	12.4	2.4	4.5	
3	239	C-183-d-II	〃	〃	へら切り	7.0	3.5	11.0	3.0	4.0	
4	244	C-182-d-II	〃	〃	巻きあげ	7.0	3.5	12.0	3.0	4.2	

図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考	
5	245	D-181-c-II	坏	明褐色	巻きあげ	7.0	3.5	12.0	2.8	4.2	
6	253	D-183-a-II	"	"	へら切り	7.0	3.5	13.0	2.7	4.5	
7	214	C-182-b-II	"	"	付け高台	7.0	3.5	13.2	2.2	4.6	
8	233	C-182-a-II	"	"	へら切り	6.6	3.3	12.0	2.4	4.3	
9	69	D-183-a-II	"	黄白色	"	6.0	3.0	14.0	2.4	5.0	図46-9
10	65	C-181-b-II	"	"	"	6.0	3.0	13.0	1.8	4.6	図46-8

⑥ $a = c \times \frac{2}{3}$ 型

図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考	
1	3	D-181-a-II	坏	赤褐色	へら切り	7.5	4.2	10.4	3.5	4.8	図版17-6 図46-16

⑦ $a = b \times \frac{3}{2}$ 型

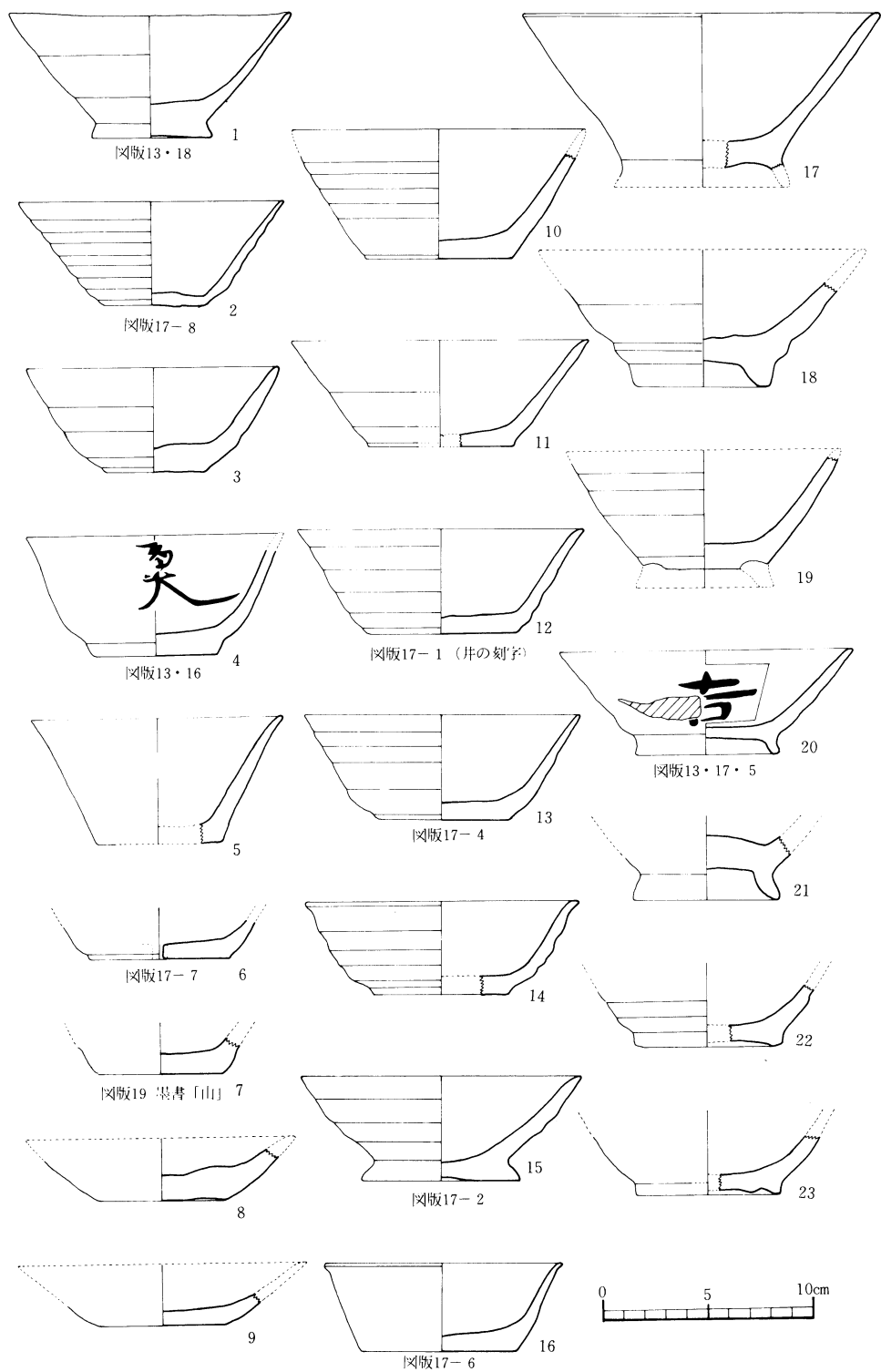
図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考	
1	6	D-181-c-II	坏	黄白色	へら切り	7.6	5.0	13.5	4.2	5.7	図46-15

⑧ $a = b \times 2 = c \times \frac{1}{2}$ 型

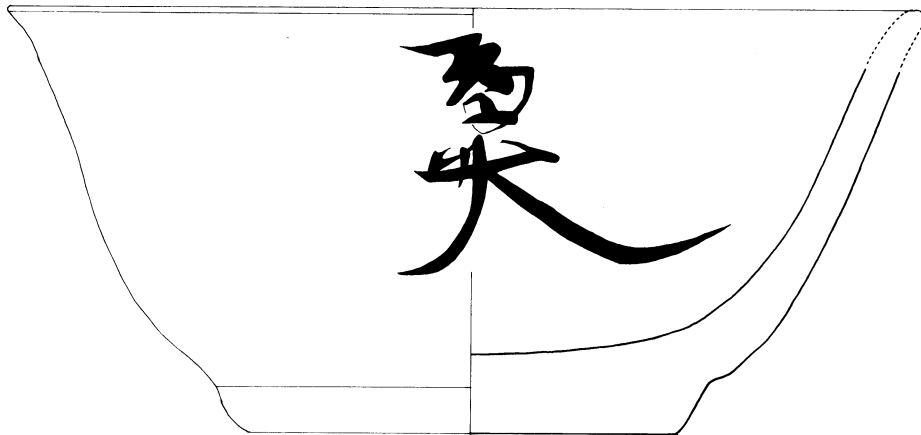
図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考	
1	62	D-183-a-II	坏	赤褐色	へら切り	8.4	4.2	16.8	3.6	4.9	
2	52	C-181-d-II	"	"	"	8.3	4.1	16.6	3.3	4.8	
3	138	E-178-b-II	"	黄白色	付け高台	6.6	3.3	13.2	2.0	4.6	内黒
4	117	C-181-c-II	"	明褐色	"	6.6	3.3	13.2	1.8	4.6	"
5	141	C-183-c-II	"	褐色	糸切り	6.0	3.0	12.0	2.4	4.2	"
6	185	C-182-c-II	"	明褐色	"	6.0	3.0	12.0	2.4	4.2	"
7	188	C-183-d-I	"	"	"	6.0	3.0	12.0	2.4	4.2	"
8	70	C-181-b-II	"	黄白色	へら切り	6.0	3.0	12.0	2.1	4.2	
9	71	D-181-a-II	"	"	"	6.0	3.0	12.0	2.1	4.2	
10	173	D-181-c-II	"	"	"	6.0	3.0	12.0	2.1	4.2	内黒
11	118	D-182-a-II	"	褐色	付け高台	6.0	3.0	12.0	1.7	4.2	"

⑨ その他

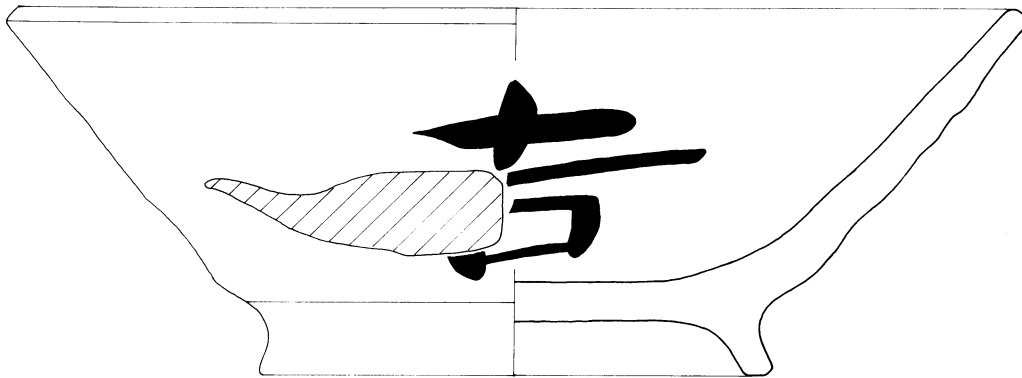
	図面 番号	出土地点	器 種	色 調	製 作 法	a	b	c	d	e	備 考
180	192	D - 182 - d - II	鉢	褐 色				21.0			内黒
181	193	D - 183 - d - II	鉢	黄白色				21.0			
182	17	F - 160 - d - I	鉢	赤褐色	糸切り?	8.4	11.4	16.8	10.4	12.2	



第46図 山神遺跡出土の土師器



土師器・坏・E-177-b-II出土(図版13, 16)



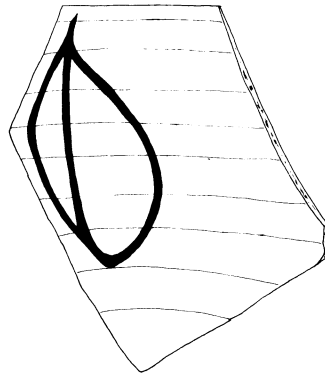
土師器・坏・I-129-b-II出土(図版13, 17~5)



土師器・坏・底部
C-184-c-II出土(図版19)



土師器・坏・口縁部
C-182-c-II出土(図版19)



土師器・坏・口縁部
E-182-b-II・出土(図版19)

第47図 山神遺跡出土の墨書土器

(7) 須恵器

本遺跡出土の須恵器は畑地造成・耕作などで層位的に考察することは困難である。出土遺物の器形のほとんどが小片のみで全体を知り得るものはほとんどない。

1 (図版20-3, 図48-1)

甕の口縁部で復元口径19.2cmを計る。口縁部わずかに外反し、上部外面に小さい凸帯をつくりだし、内外面ともに明瞭なる轆轤使用により調整され仕上げられている。色調は灰色で胎土・焼成ともに良好である。

2 (図版20-3, 図48-2)

甕の口縁部で復元口径22.0cmを計る。口縁部は厚ぼったくわずかに外反し、口唇部断面はやや丸みを帯びており、内外面ともに轆轤使用により調整され仕上げられている。色調は灰白色で胎土・焼成ともに良好で、口縁部外面の一部に黒色の自然釉がみられる。

3 (図48-3)

甕の口頸部で復元口径21.0cmを計る。口縁端部の外面は稜線を有し、内外面ともに轆轤使用により調整され、特に口縁部外面は明瞭な轆轤調整痕跡を残している。頸部内面はへら調整痕が横位に施されたあと縦位にも部分的に痕跡がみられる。色調は赤褐色であるが胎土は灰色で口縁内表面・頸部外面に於いて自然釉がみられる。口縁部上端および内面に吹き出し釉が部分的にみられる。

4 (図版20-3, 図48-4)

甕の口縁部で復元口径20.4cmを計る。口縁部はわずかに外反し、外側上端は稜線を有し、内外面ともに轆轤使用による調整が施されている。色調は灰白色で胎土・焼土ともに良好である。

5 (図版20-3, 図48-5)

甕の口縁部で復元口径19.0cmを計る。口縁部はわずかに外反し、外面上端には稜線を有している。口縁部内面は浅い叩き目調整のあと轆轤使用により調整され仕上げられ、内面は明瞭な轆轤使用により調整されている。色調は黄灰色で胎土・焼土ともに良好である。

6 (図版20-3, 図48-6)

甕の口縁部で復元口径28.4cmを計る。口縁部は外反し、内外面ともにへら調整により一条あるいは二条の稜線を有し、外面は再び立ちあがりながら外反し口唇部となり、さらに轆轤使用により調整され仕上げられている。色調は青灰色で胎土・焼土ともに良好である。

7 (図版20-4, 図48-7)

深鉢の口縁部で復元口径36.0cmを計る。器面内外面ともに轆轤使用により調整され仕上げられている。色調は灰白色で胎土・焼土ともにあまり良くない。外面一部において自然釉がみられる。

8 (図版20-4, 図48-8)

甕の口頸部で、頸部の復元径17.2cmを計る。口縁部上端は欠損しており不明であるが外反している。口縁内外面は轆轤使用により調整され仕上げられている。肩部内面は青海波分が

されている。色調は茶褐色で胎土・焼成ともに粗い。

9 (図版20-4, 図48-9)

甕の口縁部で復元口径10.6cmを計る。口縁部上端外側は欠損しているがわずかに外反し、内外面とも轆轤使用により調整され仕上げられている。頸部から胴部にかけて外面は轆轤使用により調整が施されているが風化により部分的に痕跡を残すのみであり、内面は指先による調整で仕上げられている。色調は灰白色で胎土・焼成ともに粗い。

10 (図版20-4, 図48-10)

胴部より上が欠損しているが壺の底部と思われる。内面ともに轆轤調整による痕跡がみられ、底部はへら調整で仕上げられた平底である。色調は外面で茶褐色、内面で黄灰色を呈し、胎土のしまりはよい。外面は自然釉がみられる。

11 (図版20-4, 図48-11)

胴部より上が欠損しているが壺の底部と思われる。内外面ともにへら調整により仕上げられている。底部縁辺はへら調整を施しているためわずかな稜をもって胴部につながる。色調は茶褐色で胎土・焼成ともに粗い。

12 図版20-6, 図48-12)

表面は叩き目調整で仕上げられ、内面は青海波文が施されている。色調は表面で黄褐色を呈し、内面は青灰色である。

13 (図版20-6, 図48-13)

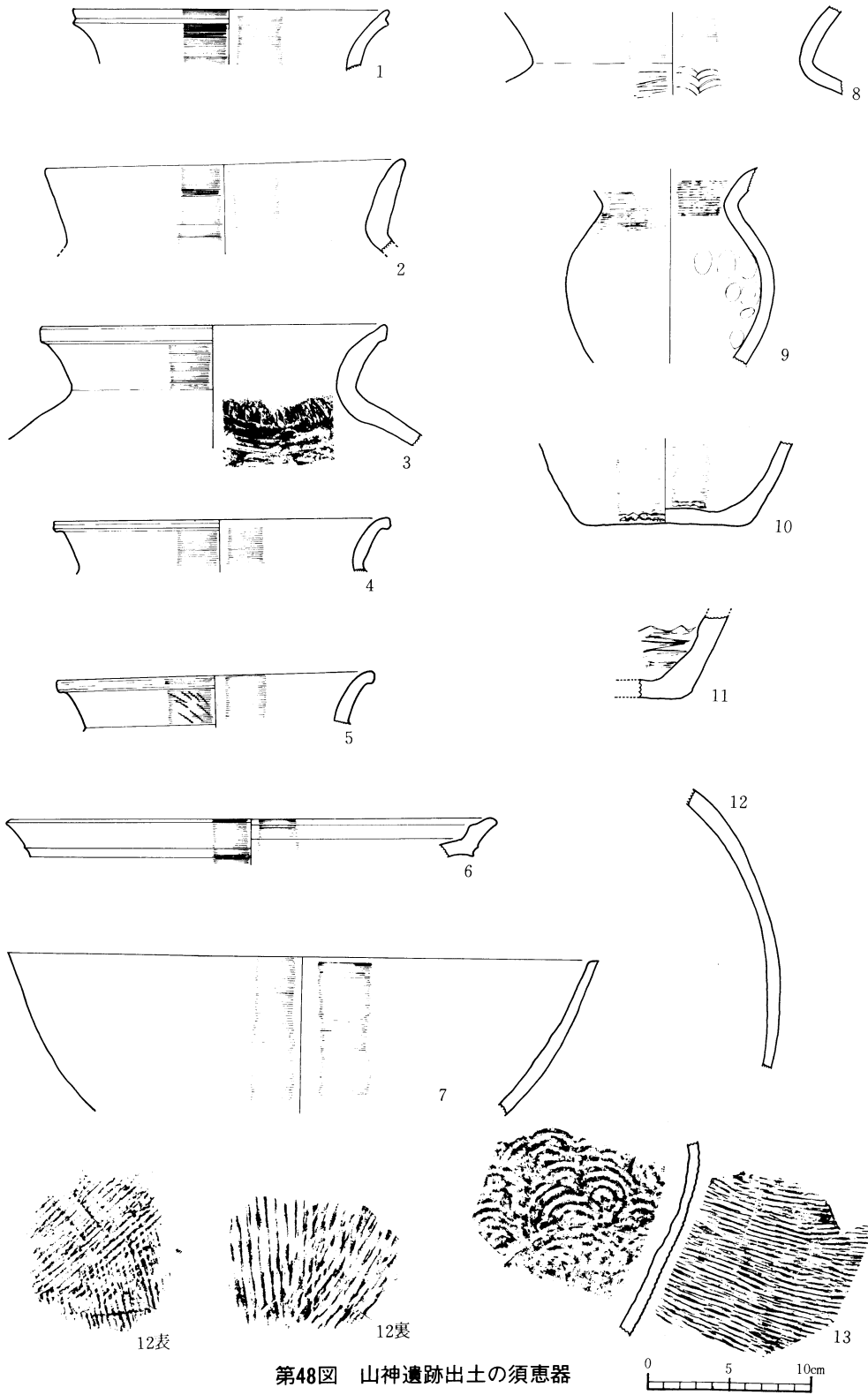
表面は格子目叩き調整で仕上げられ、内面は浅く叩き目調整が行なわれている。色調は内外面ともに黄褐色を呈している。

14 甕 (図版20-2・4, 図48-14)

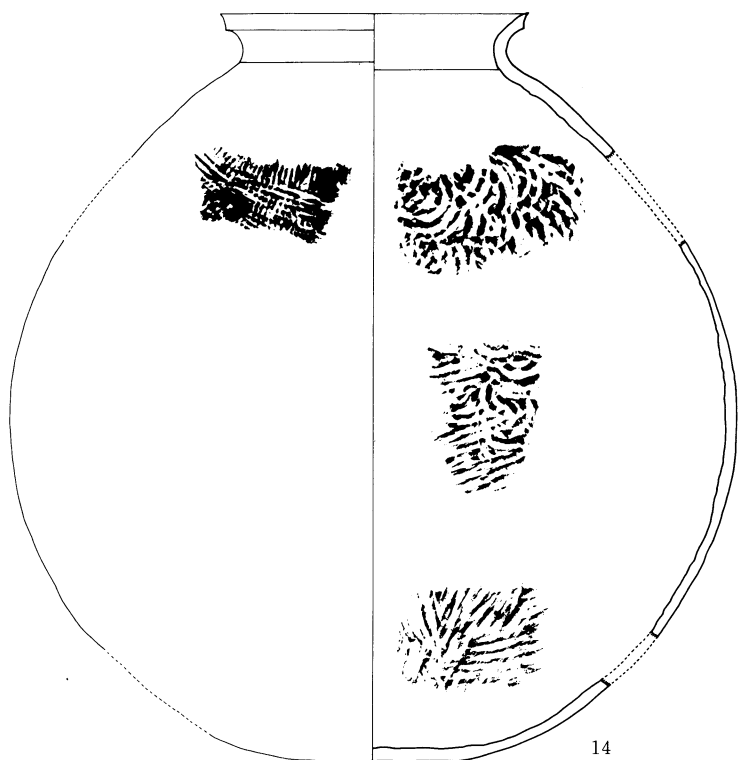
復元口径18.8cm・復元頸部外径15.1cm・胴部最大径42.5cm・器高46.3cm。山神第8地点全面発掘区西側の10m×20mの範囲に小破片となって全面的に散布していた。二次的熱をうけて赤レンガ色になっていたために目立った。整理段階で比較した時5通りの色になっていた。1片だけ本来の色が残っており、濃い灰色を呈していた。器壁は非常にうすく、外面は簾状の叩き、内面は上部が青海波、下部は平行条、胴部は中央部で青海波と平行条のタタキとが重なった部分がある。

15 (図版20-1, 図48-15)

大型甕の口縁部で、復元口径38cm・復元頸部外径21.5cm・口は大きく外反し、上端部は稜線を形づくっている。轆轤使用の調整が施された後、へらで刻み目が連続的に斜につけられている。色調は灰色で、外面は茶褐色の自然釉がかかっている。

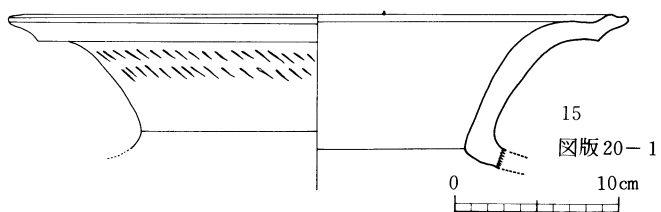


第48図 山神遺跡出土の須恵器



14

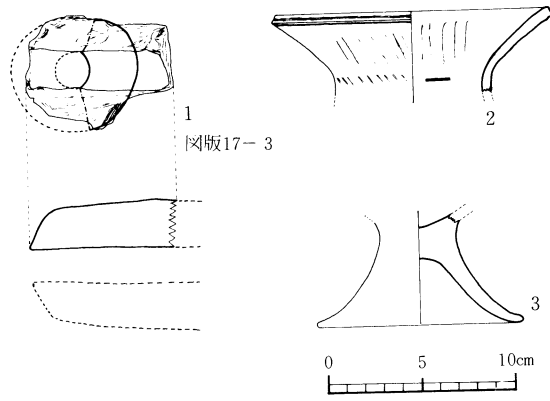
图版20-2、4



15

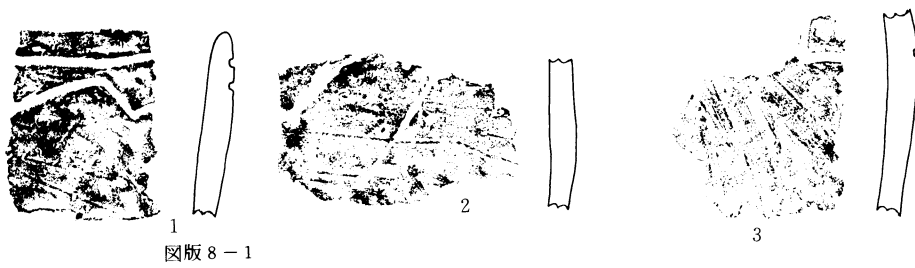
图版20-1

0 10cm

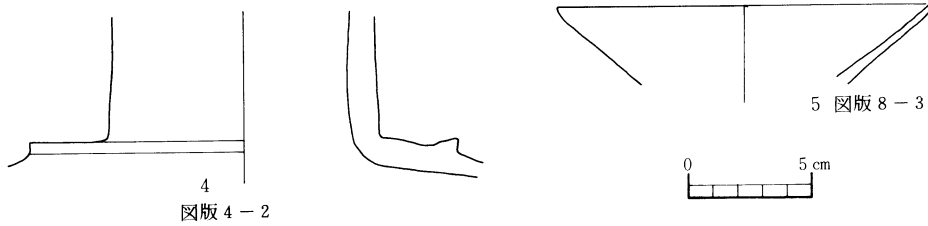


図版17-3

第49図 山神遺跡出土のふいごの羽口

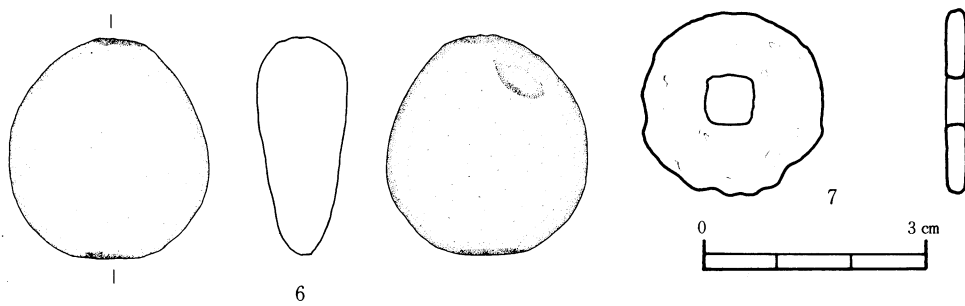


図版8-1



図版4-2

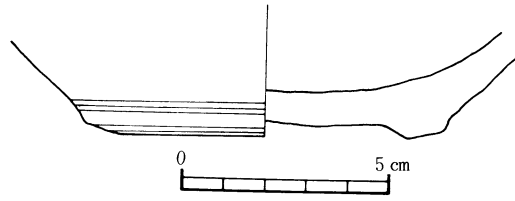
図版8-3



第51図 山神遺跡第10地点溝内出土の遺物

(8) 青磁 (図版20-7, 図50)

高台青磁碗の底部の破片である。高台径 9.0cm。高台は外開きに張り出している。釉は高台内面までかけられ、色調は内外面共に青緑色で内面に、砂の付着がみられる。



第50図 山神遺跡第8地点出土の青磁片

Ⅶ まとめ

この地区の大半が海軍航空隊設営時の削平および茶園作りのための深耕などによって荒され
てはいたものの、幸運にも保存状態のよい部分が残存しており。多くの好資料をえた。とくに
8世紀後半という史的に時代判定ができる黒ニガの最下部に、土師器・須恵器が出土した
ことは、南九州における編年作業にとってひとつのものさしが得られたと考える。

文化課に着任してすでに満3年になろうとしているが、この3年間にあちらを掘りこちらを
掘りと言う開発サイドに追いまくられどおしの状態で、調査結果について想をまとめるゆとり
もない。この原稿も文章の大半は、現場でトレンチのかたわらに立ちながら、作業員に仕事を
まかされる状態の時、書き綴った次第である。したがって、事実をあらあらかしこで述べるの
がせい一杯である。事実のみを述べるのが調査報告書の使命であると言われるが、事実を調査
者がどう理解するかということも問題であり、事実そのものもそんなになまやさしい代物では
ない。ようやく3年前に調査したものを、はじめて報告書として刊行する次第である。

多くの資料好をえたことは調査者にとってほっとした気持もある反面、課題を多く残してく
れた遺跡でもあり、その意味からの重みを感じずる遺跡であった。

曲 迫 遺 跡

- I 遺跡の位置および調査期間
- II 日誌抄
- III 地形
- IV 土層および拡張区の出土状況
- V 遺物
- VI まとめ

I 遺跡の位置および調査期間

遺跡名は曲迫で所在地は鹿児島県始良郡大字麓字論地曲迫である。昭和49年6月28日～7月17日と昭和50年1月27日～3月31日と2回に分けて発掘調査を行なった。

II 日誌抄

昭和49年

6月28日(金)29日(土)

Y・Z - 173～175区のトレンチ調査

7月1日(月)～7月6日(土)

W・Z・Y・Z - 169～172区のトレンチ調査 Y・Z - 170-a 区の拡張

7月8日(月)～7月13日(土)

W・X・Y - 164～171区のトレンチ調査 W・X - 163区の断面図作成

7月15日(月)～7月17日(水)

W・X - 159～163-a 区のトレンチ調査

昭和50年

1月27日(月)～2月1日(土)

R - 140、R・S・T - 148、P・R・S・T - 152区のトレンチ調査

2月3日(月)～2月8日(土)

S・T・U・V - 156区のトレンチ調査

2月10日(月)～2月15日(土)

O・P・Q・R - 156、P・Q・R - 160区のトレンチ調査

2月17日(月)～2月22日(土)

Q・R・S - 164、P・Q - 140、R - 136区のトレンチ調査

2月24日(月)～3月1日(土)

O・P・Q・R - 136、N・O・P・Q - 132、O・P - 128-a 区のトレンチ調査

3月3日(月)～3月8日(土)

O・P・Q・R - 133～135区の拡張区域調査

3月10日(月)～3月15日(土)

O～R - 133～135区の拡張区域調査 平板図作成

3月17日(月)～3月22日(土)

O・P・Q - 128～131、の拡張区域調査

3月24日(月)～3月29日(土)

P・R - 140～143-a 区の拡張区域調査

3月31日(月)

P・Q - 133-c トレンチの掘り下げ及び断面図作成。本日で終業。

III 地形

遺跡は標高 267m のシラス台地に立地し、鹿児島空港の東南端から約 250m 南に位置する。溝辺台地の東側を流れる天降川にそそぐ小川の上流が遺跡近くまで登り谷を形成している。遺跡は谷頭が円弧状に巻きその中央の台地にあたる。ここは「ケンツケ山」（鬮鶏山）と呼ばれ小高い所であったらしい。今でも微高地である。周囲は茶畑であり、谷にはスギ、ヒノキが植林されている。

IV 土層及び拡張区の出土状況

(1) 土層

第Ⅰ層は表土で耕作土である。第Ⅱ層は黒色火山灰層で表土の下に若干残りがみられる。第Ⅲ層は黄褐色火山灰土層で通称「アカホヤ」と呼ばれる。上部は軟質で下部は若干硬質である。第Ⅳ層は赤褐色軽石質火山灰土層でブロック状にみられる。第Ⅴ層は灰褐色火山灰土層で下部に至っては黒褐色を帯びてくる。第Ⅵ層は黒褐色火山灰土層で上部は灰褐色を帯びる。第Ⅶ層は黄褐色軽石質火山灰土層で硬質である。第Ⅷ層は茶褐色火山灰土層で粘質が強い。第Ⅸ層はシラスである。

(2) 拡張区の出土状況

北部は 2×2m の柵堀で中央より南部は 2×20m のトレンチ掘りで調査を行なった。各トレンチの状況は中央部が削平され S・T・U-144~160区は第Ⅰ層からすぐに第Ⅶ層になっている。W・X・Y・Z-160~176区では第Ⅰ層の下は第Ⅲ層から始まっている。O・P・Q・R-129~144区は部分的に第Ⅰ層がみられる。O・P・Q・R-149~165区は谷頭であるため第Ⅱ層が厚く推積している。

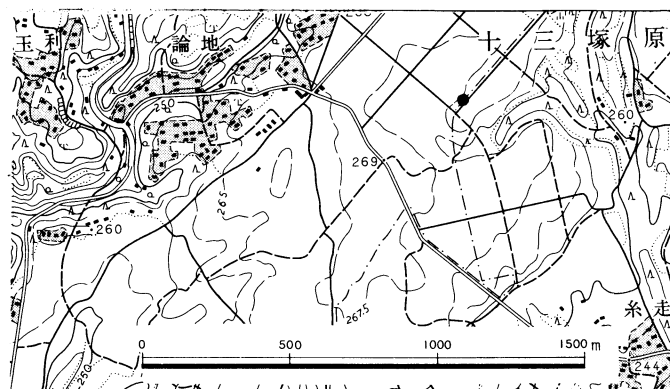
縄文式土器が Z-170-a トレンチの第Ⅲ層に出土し 4×4m に拡張した。同一個体の破片が散布している状態である。近くには直径 3m の地層逆転現象が見られた。

X-173-b トレンチの第Ⅲ層には黒曜石質の石鏃が出土している。

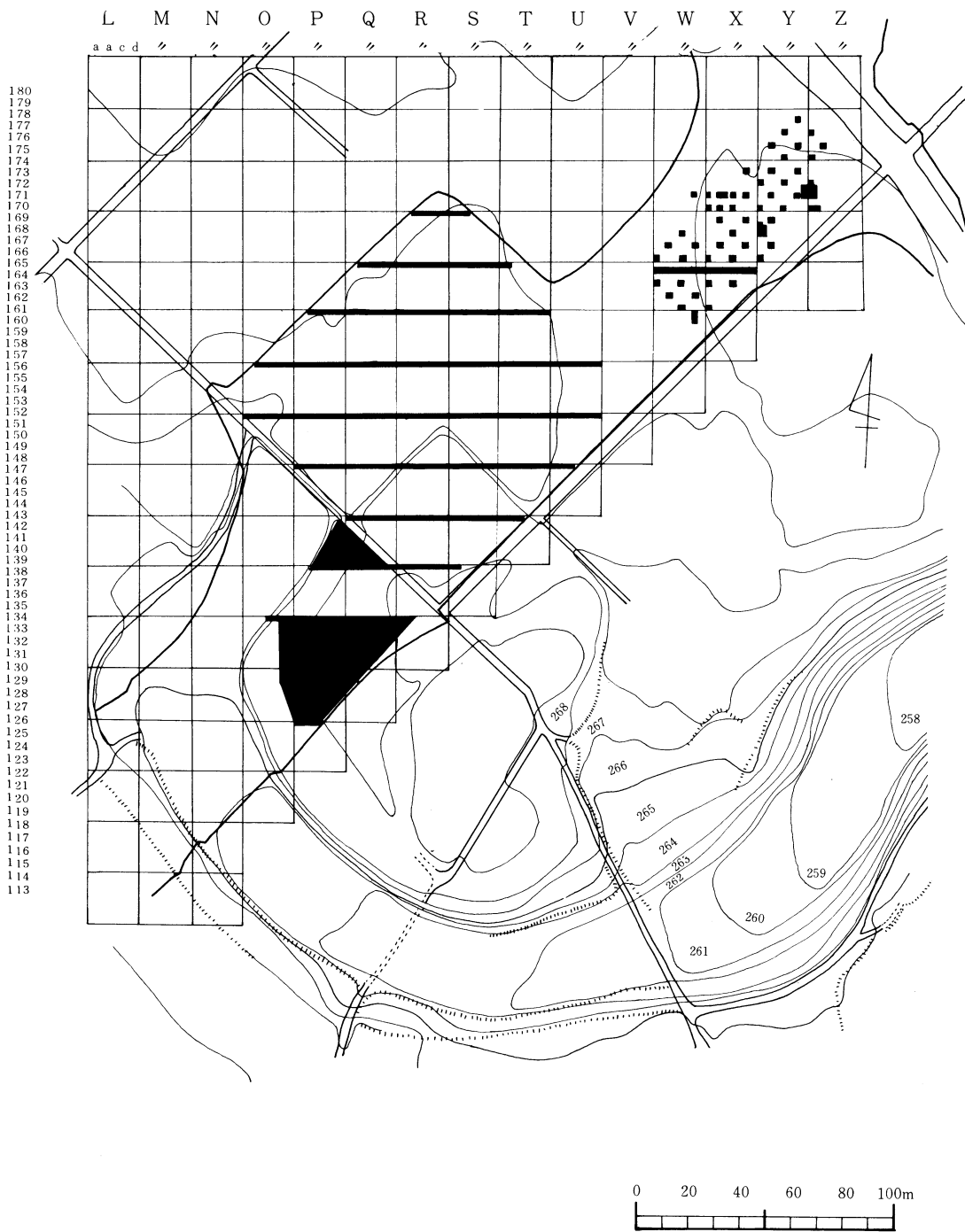
Q-139-c トレンチに第Ⅲ層から石匙が出土したため北に 250m² 拡張したが遺物の出土は 1 点もなかった。

Q-133-b ~d a トレンチに成川式土器片・土師器片・石鏃・手づくね土器が出土した。

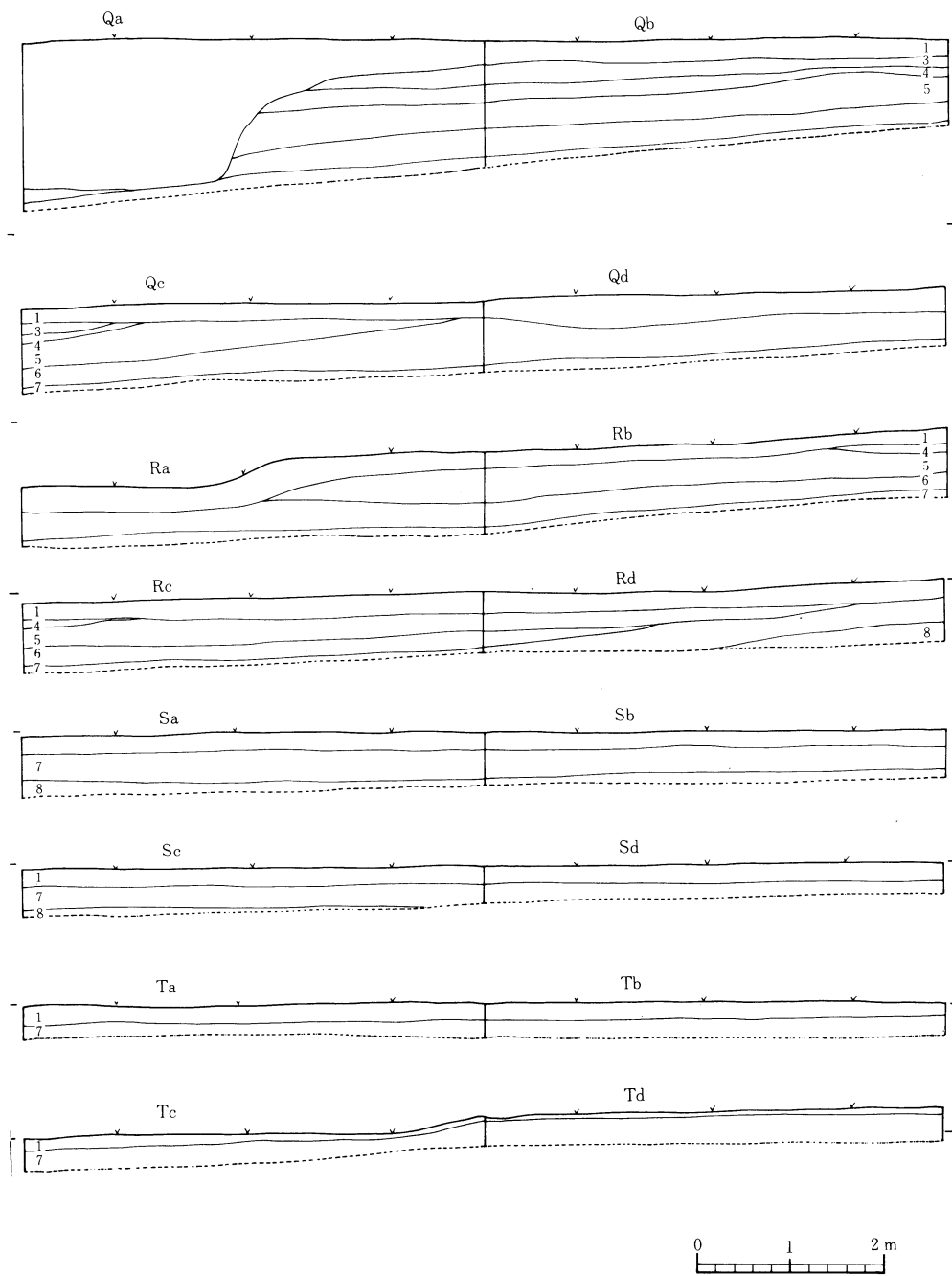
第Ⅱ層が若干残っている状態であった。



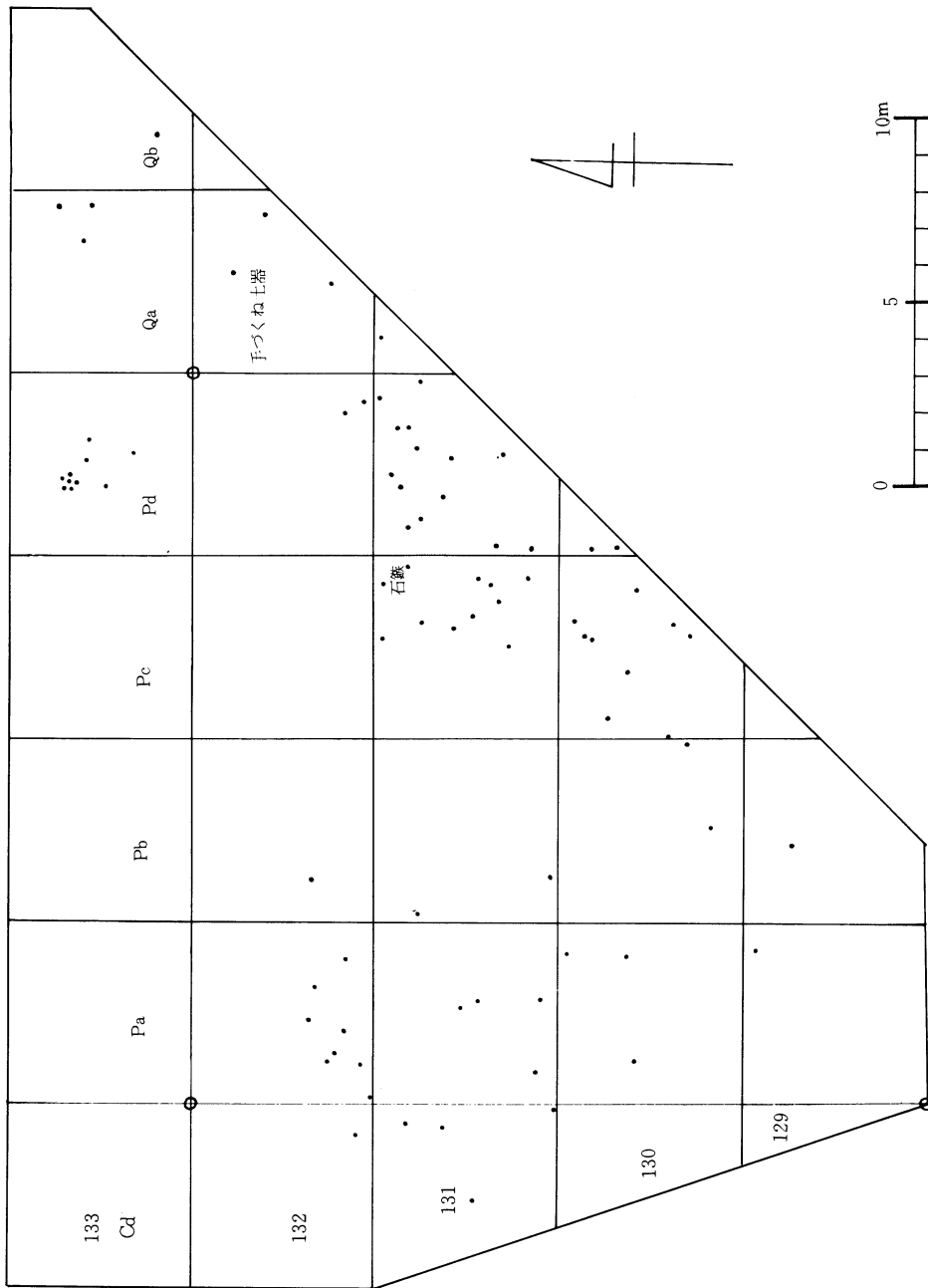
第52図 曲迫遺跡位置図



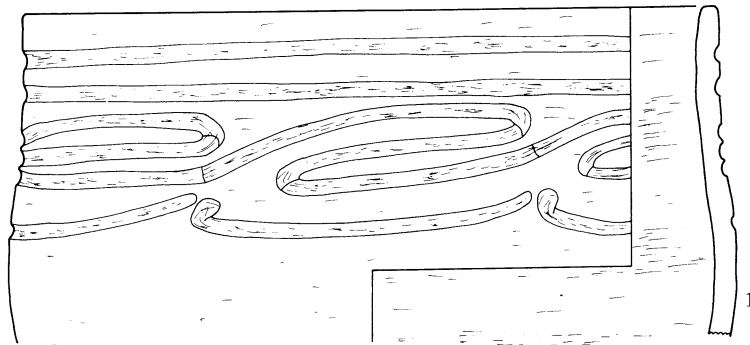
第53図 曲迫遺跡附近の地形図および調査区



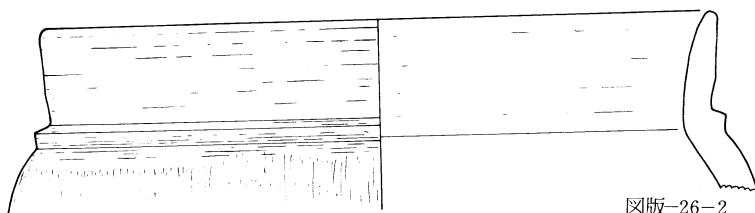
第54図 曲迫遺跡Q~T-152区の北側断面図



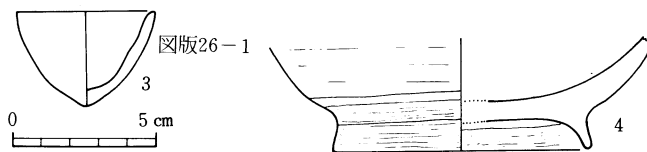
第55図 曲迫遺跡O・P・Q-129~133区の出土状況



図版26-3



図版26-2



第56図 曲迫遺跡出土の土器実測図

V 遺物

(1)土器

1 土師器

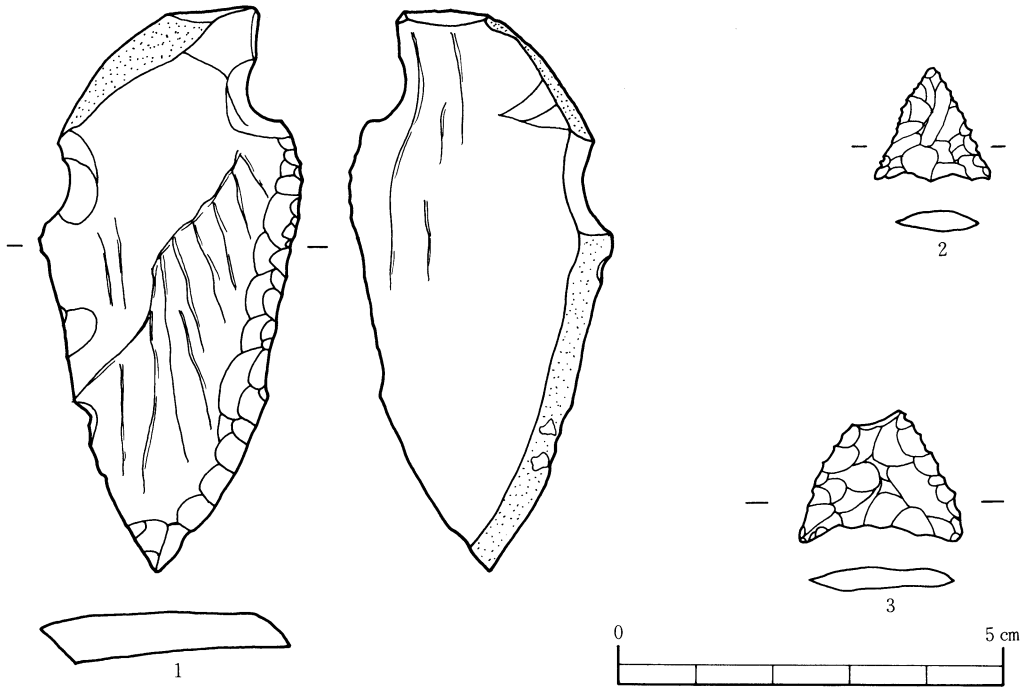
内黒土師器で器面外側は水引痕がみられる。1 cmの高台が付き若干外反する(第56図4)。他には糸切り底の土師器が出土している。

2 成川式土器 (第56図2, 図版26-2)

小破片が多く器形のわかるものは少ない。甕形土器の口縁部や手づくね土器が出土している。甕形土器はく字状をなし頸部に三角突帯を付す。全面に刷毛目調整痕がある。

3 縄文式土器 (第53図1、図版26-3)

Z-170-a区第III層より出土、深鉢形の土器で若干胴が張る。施文は4本の沈線で構成され2本は平行沈線をなしているが3本目はS字状の連続文で4本目は節を付けながら連続波状文を施している。器面外側は撫調整がよく、内側は若干劣る。焼成は良い。器形、施文からみて後期初頭の岩崎上層式土器と思われる。



第57図 曲迫遺跡出土の石器実測図

(2)石器

1 石鏃

X-170-b区の第III層より出土、底辺部が1.5cmで長さ1.5cmの二等辺三角形の石鏃である。石材は黒曜石である。透明度が強い。(第57図2、図版26-4)

P-131-c区の第II層より出土、底辺部が1.3cmで0.2mmの抉りがある。頭部は欠損しているが弧状をした両縁部をなす。石材は安山岩である。(第57図3、図版26-5)

2 石匙

Q-130-c区の第III層より出土、石材は玄武岩である。縦長剥片を利用した縦型石匙で長さ7.4cm、幅3.3cm、厚さ0.6cmである。背部と基部には自然面が残り、刃部は片面調整を行なっている。抉り部は簡単に調整している。(第57図1、図版26-6)

IVまとめ

土地の削平が行なわれていたため、遺跡の保存が悪く散布地程度であった。

縄文式土器片、成川式土器片、土師器片、石鏃等が出土しているが攪乱層に近い層位的につかめない状態であった。石匙も第Ⅲ層中より出土しているが共伴遺物がないために時期不明である。

文献

①賀川光夫 「日本の考古学」九州東南部 昭40年

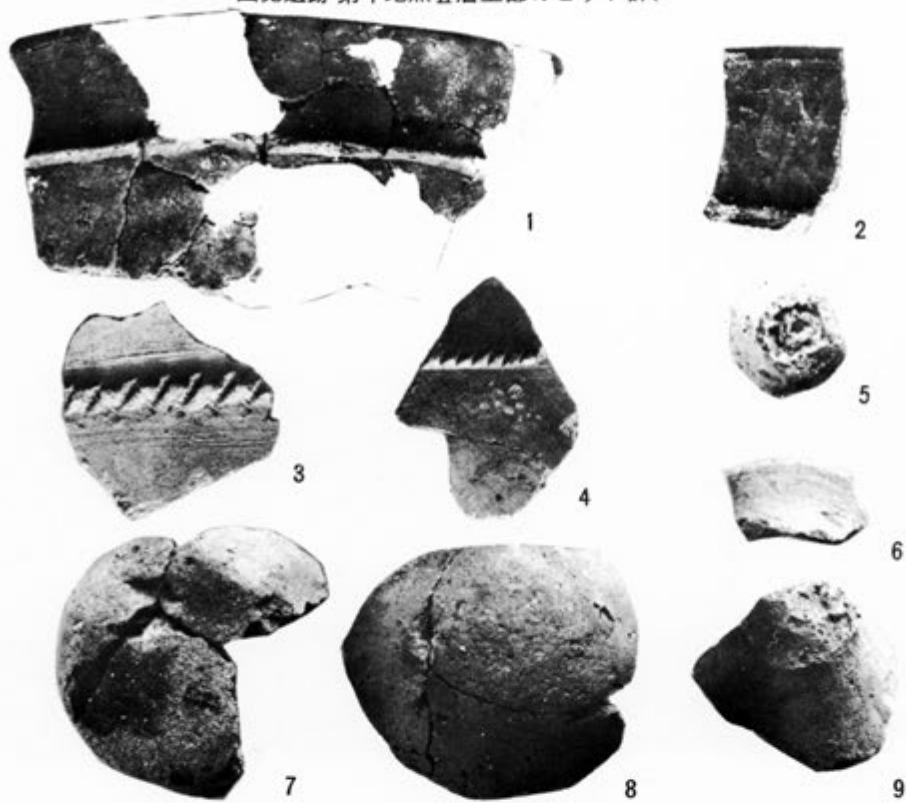
②河口貞徳 「鹿児島県考古学紀要」岩崎遺跡



山神遺跡遠景



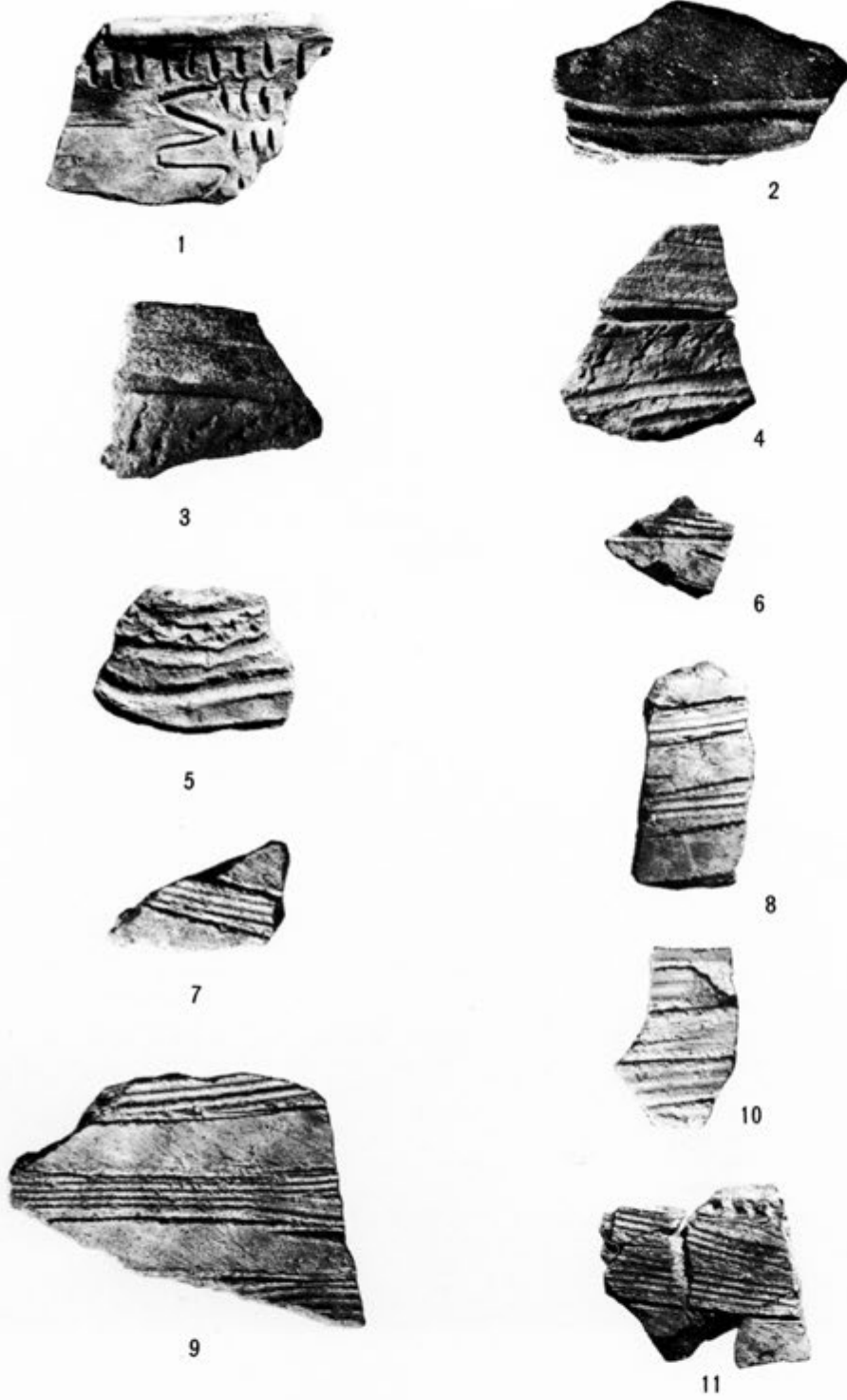
西免遺跡 第1地点Ⅱ層上部のピット群、



西免遺跡出土の成川式土器



柵場遺跡 第Ⅱ層上面と断面



柘場遺跡出土の縄文式土器



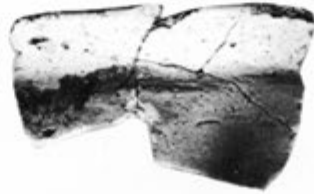
栢場遺跡出土の縄文式土器、山神遺跡出土の縄文式土器



1



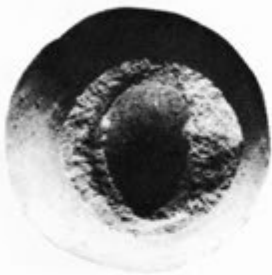
2



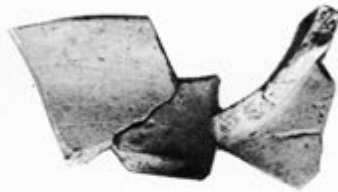
3



4

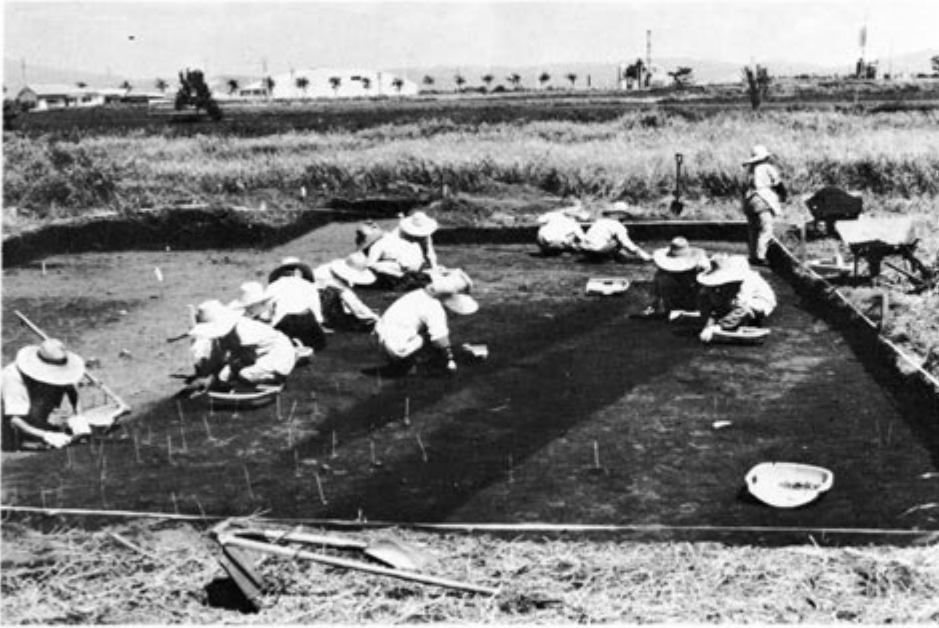


5



6

栢場遺跡出土の壺形土器・成川式土器



山神遺跡 第8地点の溝状遺構



1



2



3

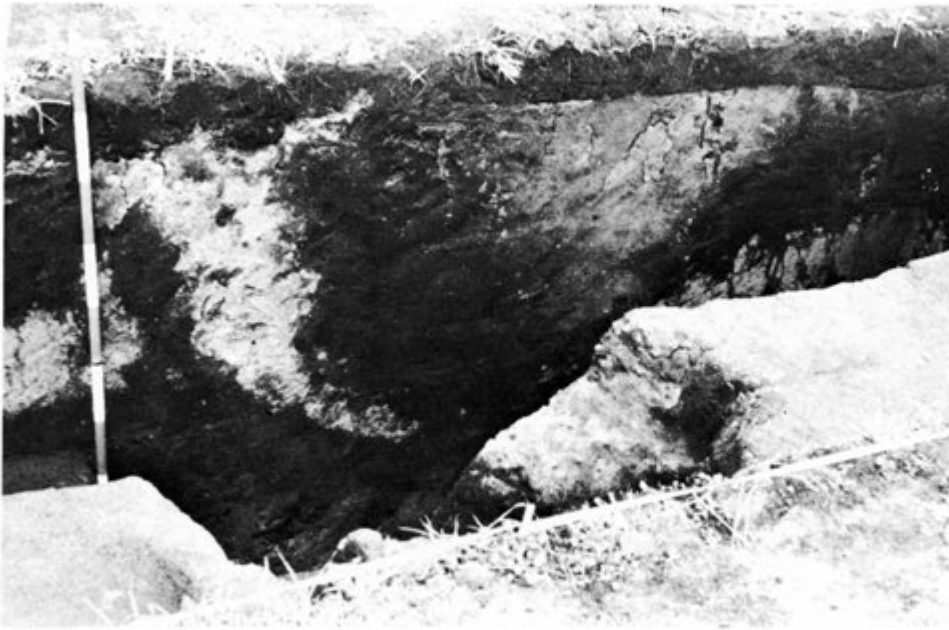
山神遺跡第10地点の溝状遺構と出土遺物



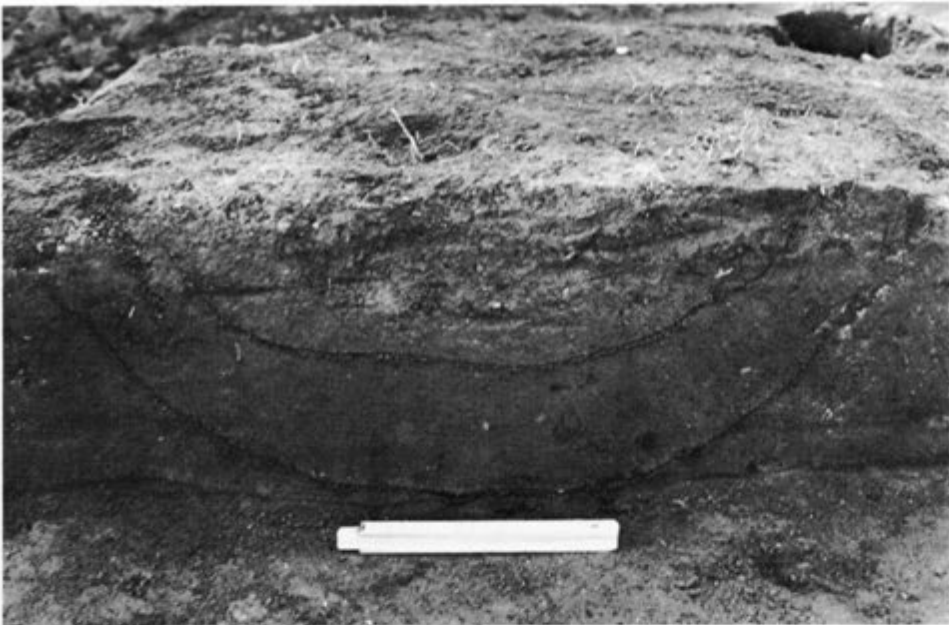
山神遺跡 第8地点の焼土とビット群 (第1号建物遺構)



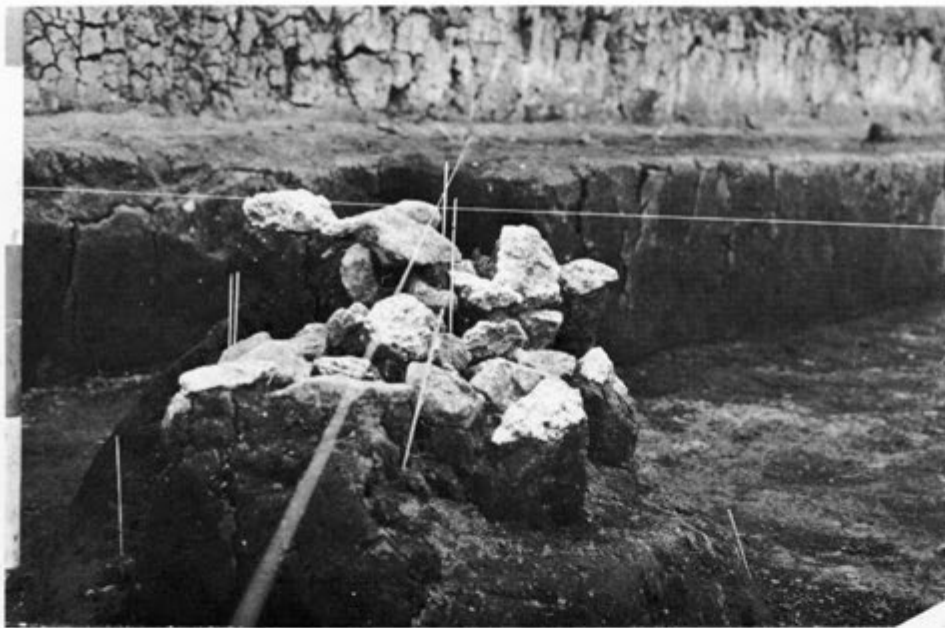
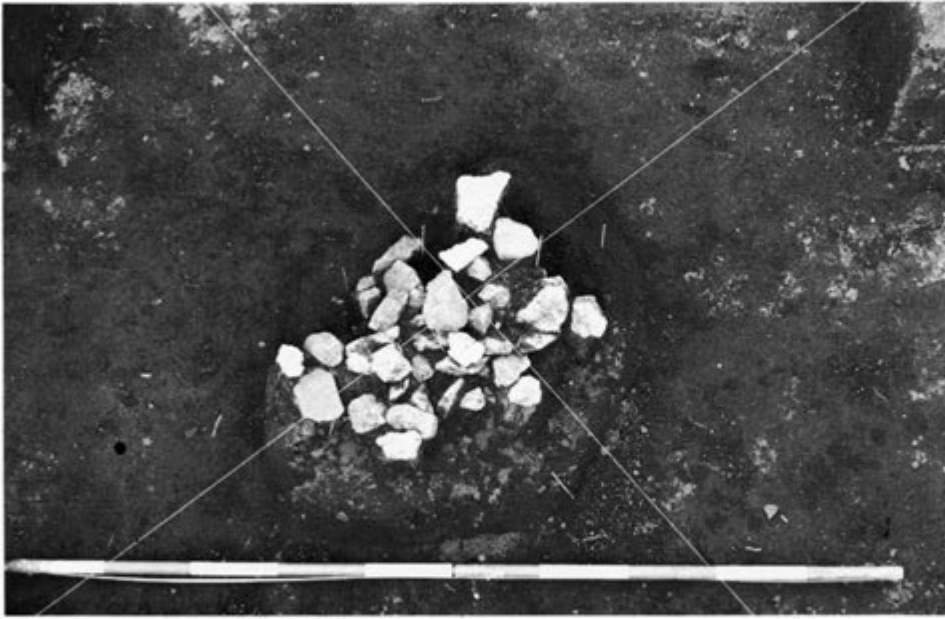
山神遺跡 第9地点の焼土とビット群 (第3号建物遺構)



山神遺跡 第9地点の土層横転の状況



第8地点の焼土の断ち割り面



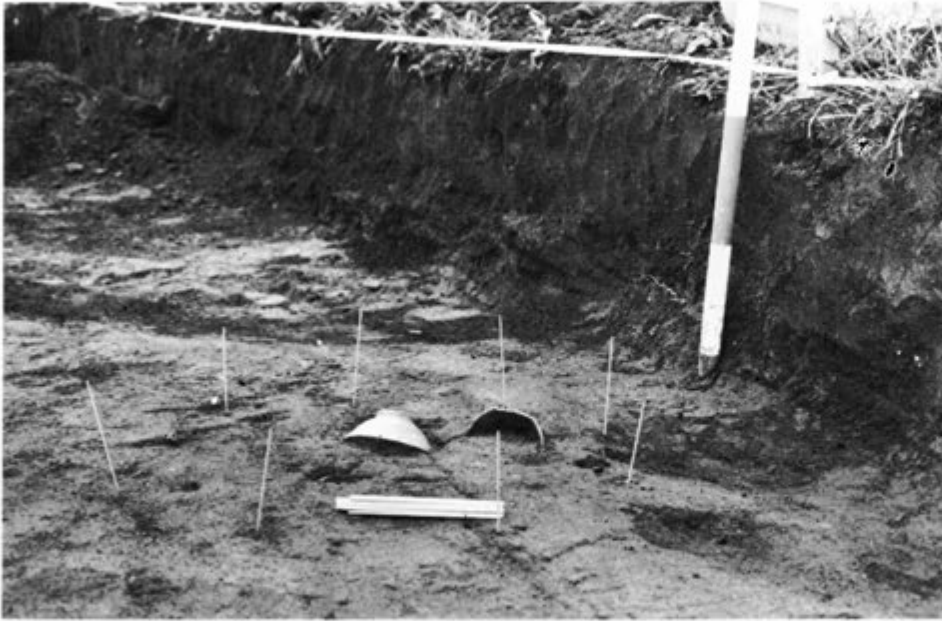
山神遺跡 第10地点の石組遺構



炭化物出土のピットの断ち割り



山神遺跡 第8地点の石匙の出土状況



山神遺跡 第8地点の墨書土器の出土状況



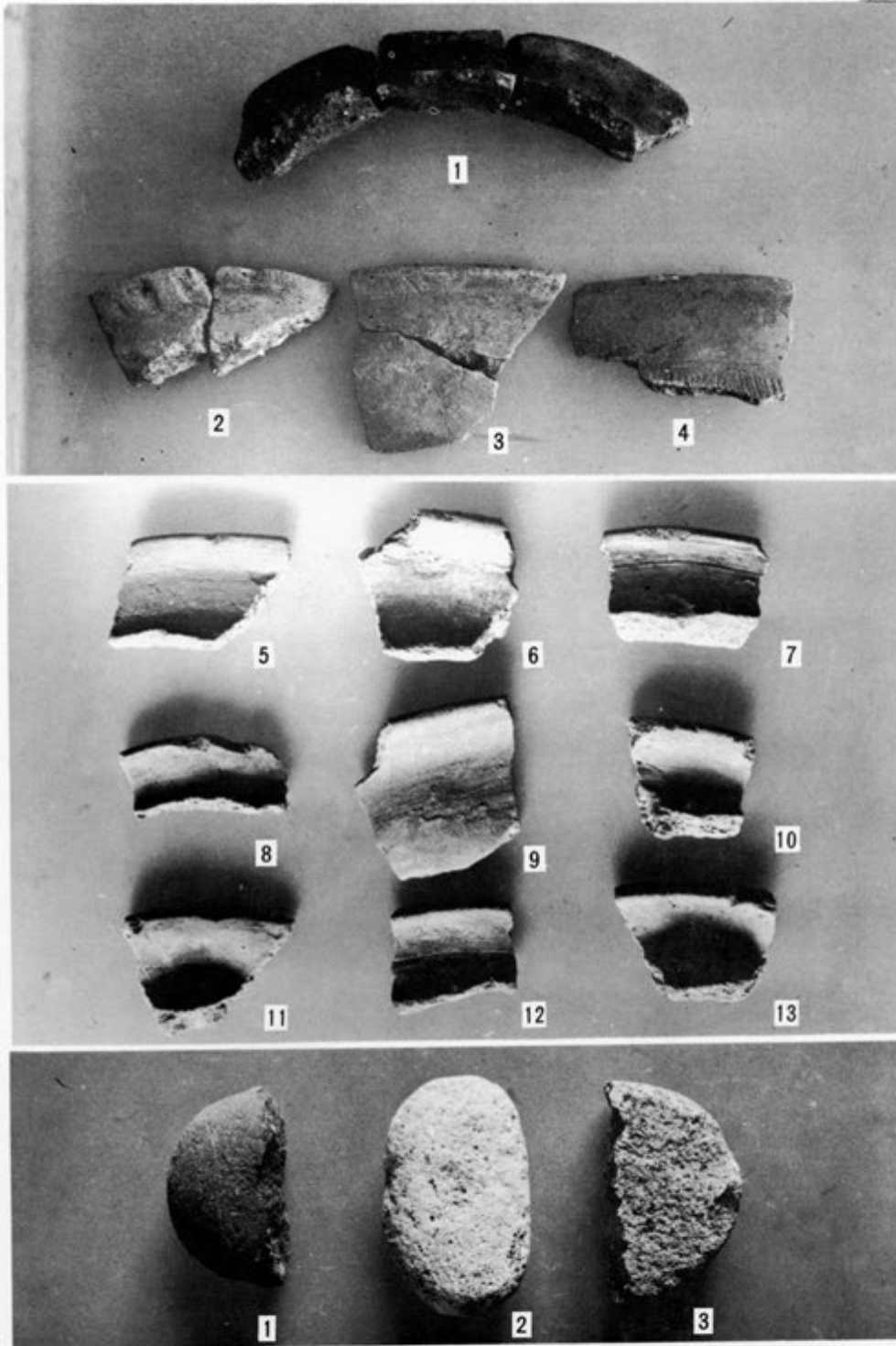
山神遺跡 第10地点の墨書土器の出土状況



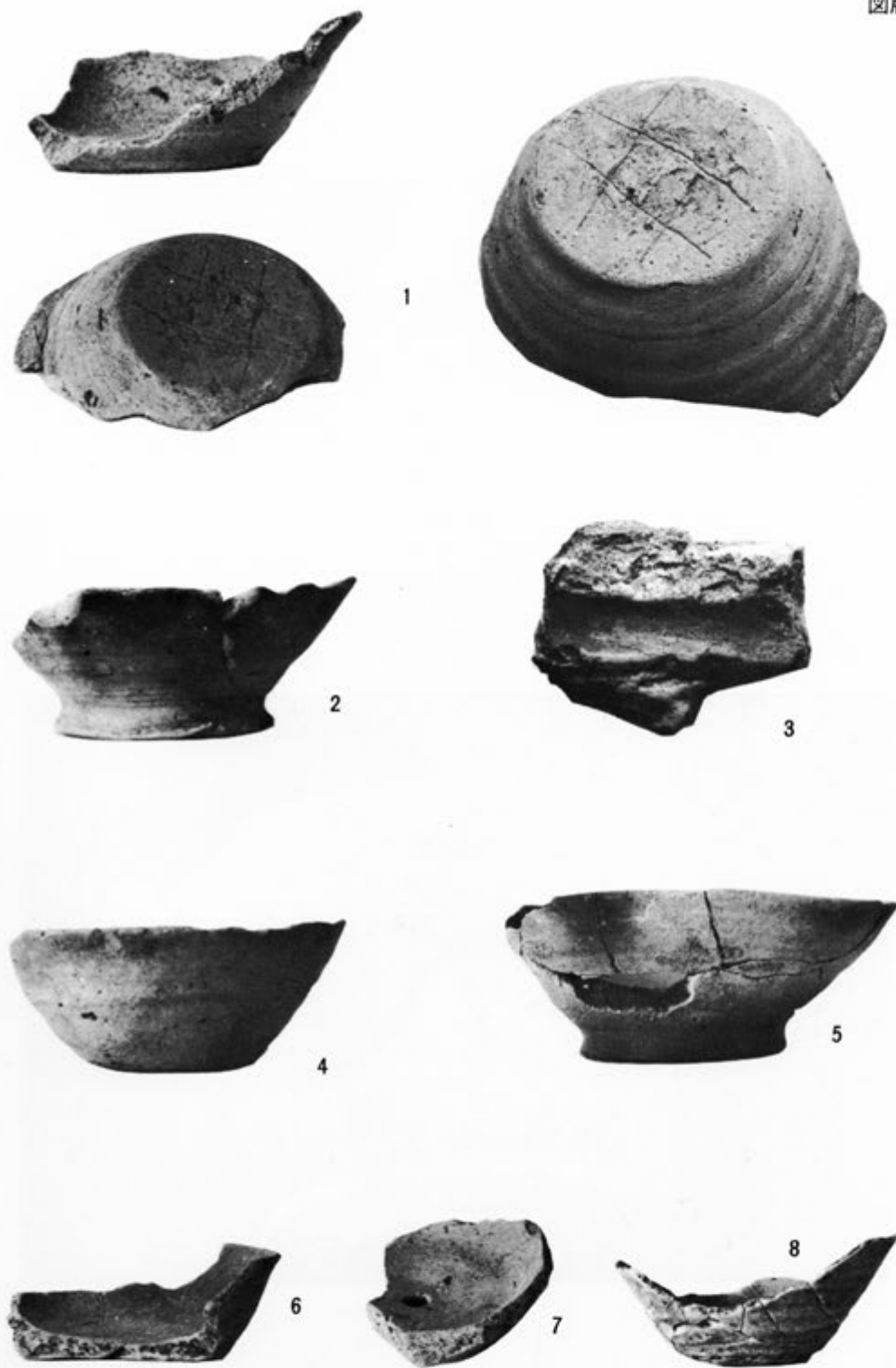
山神遺跡出土の条痕文土器



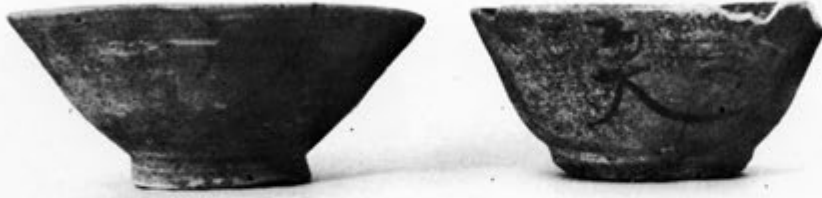
山神遺跡出土の撚糸文土器



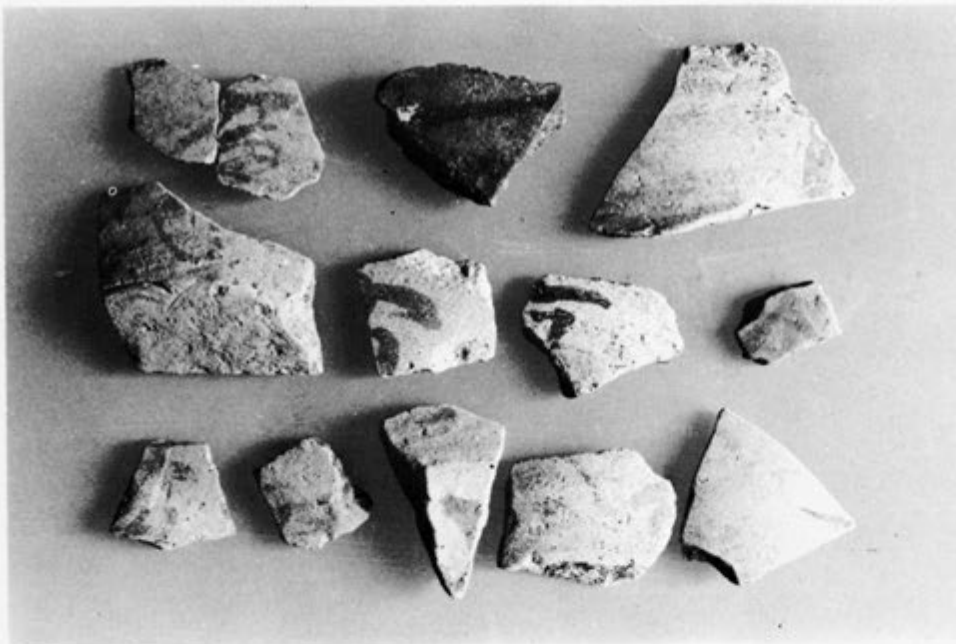
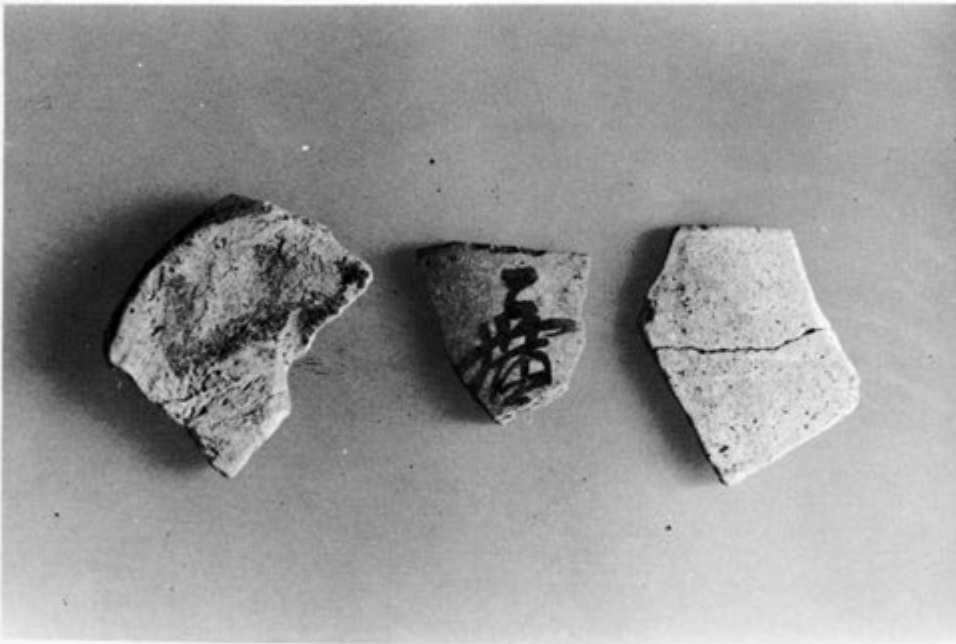
山神遺跡出土の壺形・鉢形土器



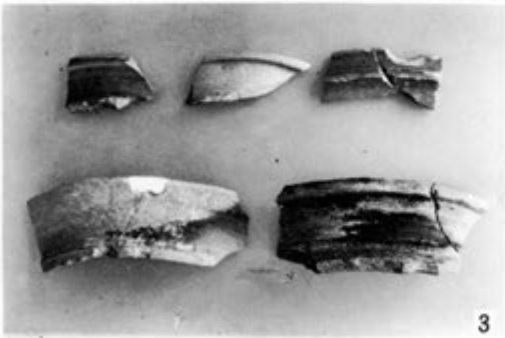
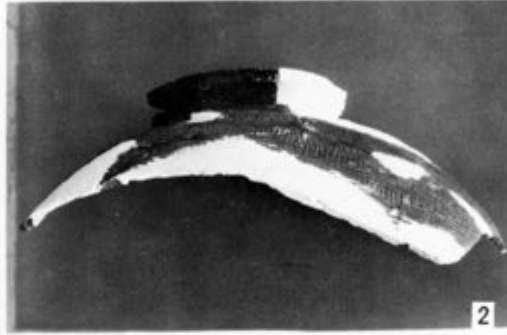
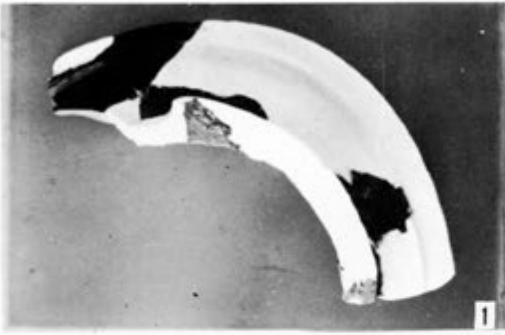
山神遺跡出土の土師器坏



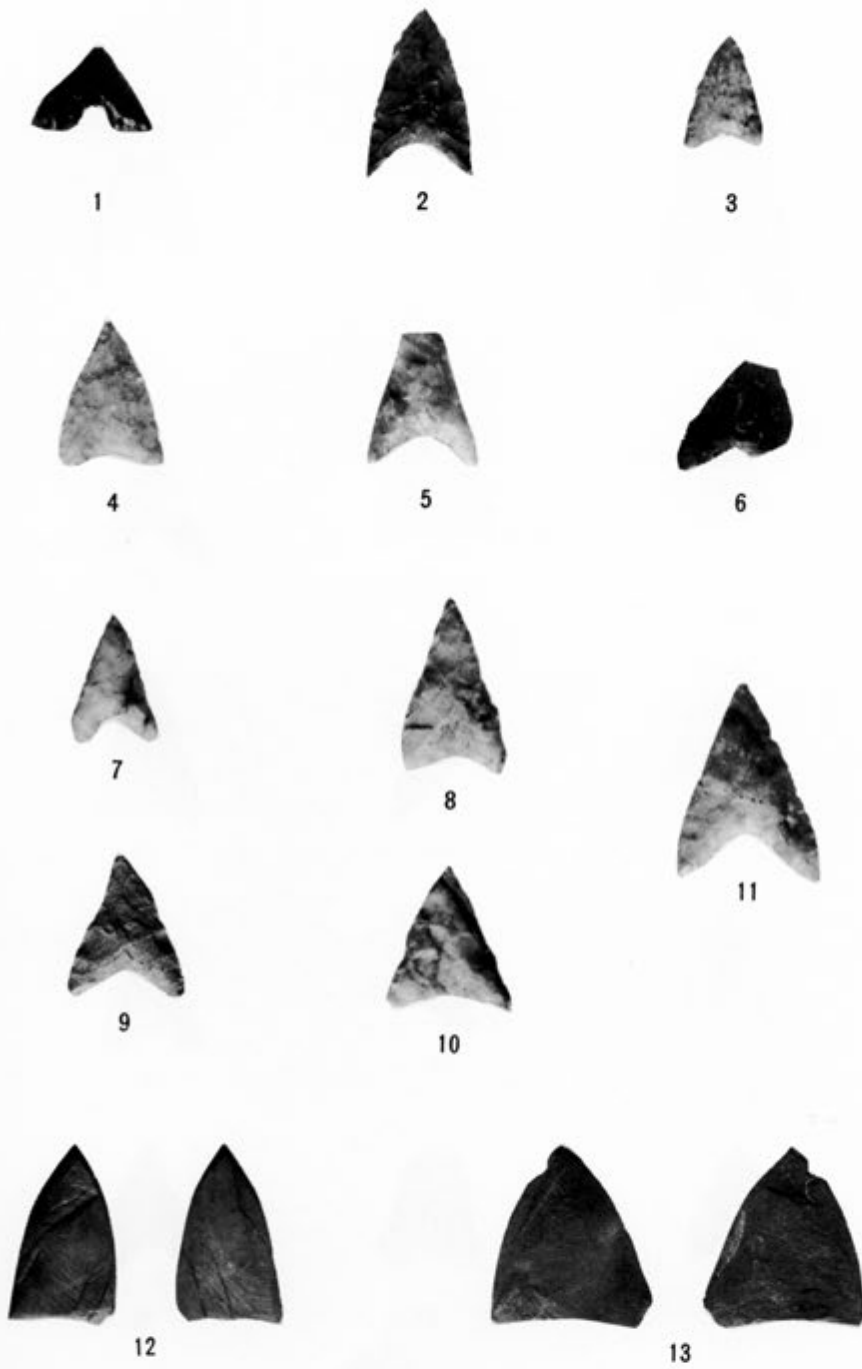
山神遺跡 第8地点出土の墨書土器 (SS撮影と赤外線フィルム撮影)



山神遺跡 第8地点出土の墨書土器片



山神遺跡出土の須恵器・石匙



西免・机場遺跡出土の石鏃



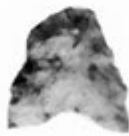
14



16



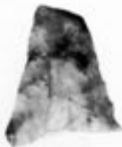
17



18



19



20



21



22



23



24



25



26

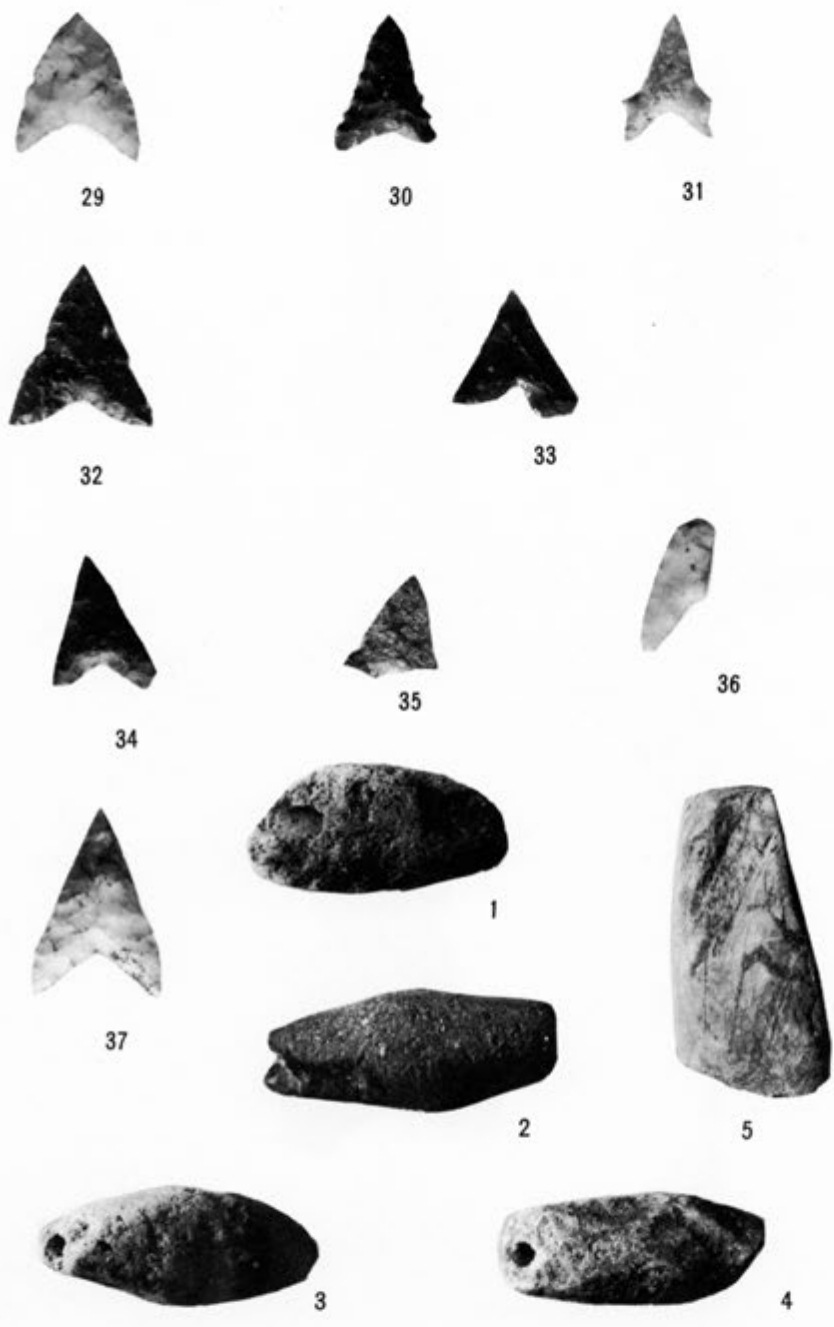


27

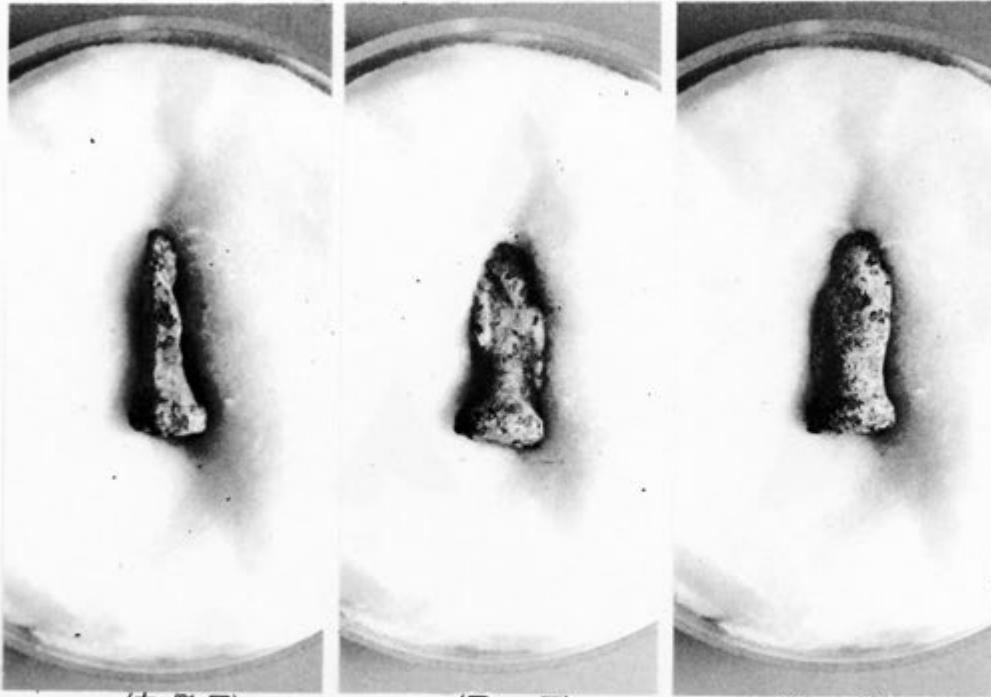


28

山神遺跡出土の石鏃



山神・栢場遺跡出土の石鏃・土錘



(右側図)

(正面)

(背面)



山神遺跡出土の仏像・鉄鏃 (実物大)



曲迫遺跡近景及びトレンチ・出土状況



1



2



3



6



4



5

曲迫遺跡出土の手づくね土器・成川式土器・縄文式土器・石匙・石鏃



北東より望む



南西より望む

縦貫道完成後の遺跡周辺の全景写真

桑ノ丸遺跡

例 言

- 1 この報告書は、九州縦貫自動車道建設によって破壊される予定の遺跡について行なった事前調査のうち、昭和49年度に発掘した桑ノ丸遺跡の調査報告書である。
- 2 発掘調査は、日本道路公団の受託事業として、鹿児島県教育委員会が実施した。
- 3 本書の執筆は、つぎのとおりである。
I・II・III・IV-(1)・(2)-1・2-①・②・⑥・(3)-①
③・(4)-①・(5)-①・②・V-(1)-①~⑨・⑬~⑮・V-(3)……………新東晃一
IV-(2)-2-③・④・⑤・V-(1)-⑫・V-(3)……………中村耕二
IV-(3)-②・V-(1)-⑩・⑪・V-(3)……………青崎和憲
V-(2)・(3)……………牛ノ浜修
- 4 本書で用いたレベル数値はすべて海拔高である。
- 5 発掘調査にあたり鹿児島県文化財専門員河口貞徳氏の指導助言をえた。層序および石器の石材同定について鹿児島大学教育学部石川秀雄教授の助言をえた。陶磁器の鑑定は鹿児島県指定文化財（工芸技術）・竜門寺焼（三彩）技術保持者川原軍二氏の協力をえた。
- 6 図・写真は、執筆者が担当し、編集は、新東が担当した。

本文目次

I	遺跡の位置	159
II	調査の経過	161
III	調査・出土遺物の概要	165
IV	各地点の調査	167
	(1)層位	167
	(2)第1時点の調査	168
	①調査の概要	
	②遺構	
	③出土遺物と土器出土状況	
	(3)第2地点の調査	181
	①調査の概要	
	②遺構	
	③出土土器	
	(4)第3地点の調査	184
	①調査の概要	
	(5)第4地点の調査	185
	①調査の概要	
	②遺構	
V	出土遺物	188
	(1)土器	188
	(2)石器	226
	(3)まとめ	232

図 版 目 次

図版 1	桑ノ丸遺跡遠景（南から）	237
図版 2	第1地点遠景（東から）	237
図版 3	第1地点確認調査（東から）	238
図版 4	第1地点確認調査（南から）	238
図版 5	12類（成川式土器）出土状態	239
図版 6	12類（成川式土器）出土状態	239
図版 7	窯状遺構断面写真	240
図版 8	窯状遺構	240
図版 9	窯状遺構全景	241
図版 10	窯状遺構と断層断面	241
図版 11	円筒土器（2類）出土状態	242
図版 12	円筒土器（2類）出土状態	242
図版 13	第1地点遺物出土状態（III b層）	243
図版 14	角筒土器（2類）出土状態	243
図版 15	第1地点発掘風景	244
図版 16	遺物出土状態（III b層）	244
図版 17	地層横転No.1 検出状態	245
図版 18	地層横転No.1 掘り上げ状態	245
図版 19	地層様転（No.3）断面	246
図版 20	地層横転（No.3）掘り上げ状態	246
図版 21	第2地点遠景（東から）	247
図版 22	III a層の集石	247
図版 23	第3地点落ち込み	248
図版 24	第3地点全景（南から）	248
図版 25	落ち込み	249
図版 26	円筒土器（1類）出土状態	249
図版 27	近世墓検出状態	250
図版 28	近世墓群	250
図版 29	近世墓の供養祭	251
図版 30	近世墓出土の人骨	251
図版 31	1類（吉田式土器）・2類（前平式土器）	252
図版 32	2類（前平式土器）	253

図版 33	2類 (前平式土器)	254
図版 34	2類 (前平式土器)	255
図版 35	2類 (前平式土器)	256
図版 36	2類 (前平式土器) 口縁施文	257
図版 37	2類 (前平式土器) 口縁施文	258
図版 38	1類 (吉田式土器) ・ 2類 (前平式土器)	259
図版 39	3類	260
図版 40	3類	261
図版 41	3類	262
図版 42	3類	263
図版 43	4類 (押型文土器)	264
図版 44	4類 (押型文土器) ・ 5類 (平椀II式土器)	265
図版 45	6類 (塞ノ神A式土器)	266
図版 46	8類 (阿高式土器) ・ 9類 (轟式土器)	267
図版 47	10類 (指宿式系土器)	268
図版 48	11類 (西平式・三万田式土器)	269
図版 49	12類 (成川式土器)	270
図版 50	14類 (須恵器) ・ 15類 (近世磁器)	271
図版 51	15類 (近世陶器)	272
図版 52	石鏃	273
図版 53	石器	274

挿 図 目 次

第1図	桑ノ丸遺跡地形図	159
第2図	桑ノ丸遺跡周辺地図	160
第3図	桑ノ丸遺跡グリッド配置図	165
第4図	遺物類別出土状況図	166
第5図	桑ノ丸遺跡層序	167
第6図	第一地点断面実測図	169
第7図	第一地点平面図（Ⅰ）	171
第8図	窯状遺構実測図	173
第9図	12類完形土器出土状態実測図	175
第10図	土器実測図及拓影	176
第11図	第一地点平面図（Ⅱ）	177
第12図	地層横転実測図	179
第13図	縄文式土器出土状況図	180
第14図	第二地点平面図	181
第15図	集石実測図	182
第16図	第2地点、第3地点断面図	183
第17図	第3地点平面図	184
第18図	第4地点平面図	185
第19図	第4地点断面図	186
第20図	柱穴遺構配置図	187
第21図	1類土器（吉田式土器）	188
第22図	2類（前平式土器－Ⅰ）	193
第23図	2類（前平式土器－Ⅱ）	194
第24図	2類（前平式土器－Ⅲ）	195
第25図	2類（前平式土器－Ⅳ）	196
第26図	2類（前平式土器－Ⅴ）	197
第27図	2類（前平式土器－Ⅵ）	198
第28図	2類（前平式土器－Ⅶ）	201
第29図	2類（前平式土器－Ⅷ）	202
第30図	2類（前平式土器－Ⅸ）	203
第31図	第3類土器（Ⅰ）	207
第32図	第3類土器（Ⅱ）	208

第33図	第3類土器(Ⅲ)	209
第34図	4類(押型文土器)	210
第35図	5類(平椀Ⅱ式) 6類(塞ノ神A式) 7類(塞ノ神B式)	212
第36図	8類(轟式土器) 9類(阿高式土器)	214
第37図	10類(指宿式系土器)	216
第38図	11類(西平式、三万田式土器)	217
第39図	12類(成川式土器-Ⅰ)	218
第40図	12類(成川式土器-Ⅱ)	219
第41図	12類(成川式土器-Ⅲ)	221
第42図	13類(土師器)	223
第43図	14類(須恵器)	224
第44図	15類(近世陶器)	224
第45図	石鏃実測図	227
第46図	石匙、スクレーパー実測図	228
第47図	石器実測図	229
第48図	石器実測図	230

第1表	桑ノ丸遺跡出土土器類別表	166
第2表	1類土器(吉田式土器)一覽表	189
第3表	2類土器(前平式土器・円筒形)一覽表	191
第4表	2類土器(前平式土器・角筒形)一覽表	200
第5表	3類土器一覽表	206
第6表	4類(押型文土器)一覽表	210
第7表	5類(平椀式) 6類(塞ノ神A式) 7類(塞ノ神B式)一覽表	211
第8表	8類(轟式土器) 9類(阿高式土器)一覽表	213
第9表	10類(指宿式土器) 11類(西平・三万田系式土器)一覽表	220
第10表	12類(成川式土器)一覽表	220
第11表	13類(土師器) 14類(須恵器)一覽表	225
第12表	15類(近世陶器)一覽表	225
第13表	石器一覽表	231

I 遺跡の位置

桑の丸遺跡は鹿児島県始良郡溝辺町大字崎森字桑の丸に所在する。

溝辺町を含む始良郡地方は北部鹿児島湾を中心とした馬蹄形の地域で鹿児島県のほぼ中央部である。

これらの地域は更新世の終末頃活動が始まったといわれる始良火山が大量の軽石流を噴出しつつ巨大な陥没カルデラとなった鹿児島湾のうち現在の桜島火山以北にあたる。

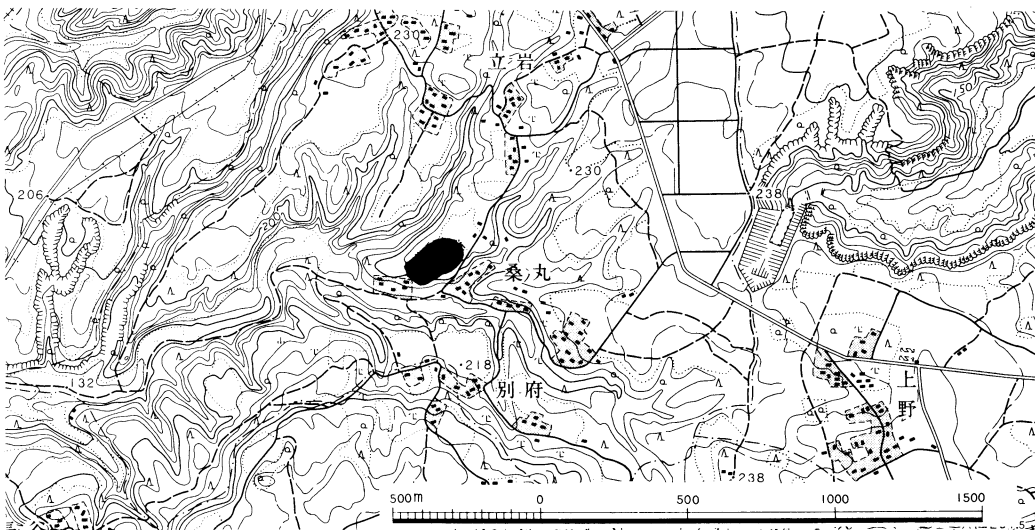
したがって国分、帖佐の沖積平野を経た奥部には急岸の火口壁が東西に走り、その高さは200mに達するところもある。この火口壁に続く背後は広大なシラス台地となる。

溝辺町はこの始良カルデラの北東から北、鹿児島市街地より東北約35kmの位置で、全町の3分の2にあたる地帯がシラス台地におおわれた地域となっている。このため地目もほとんど畑地で水田は台地の縁辺部の開析谷底や蒲生町付近の盆地にわずかに開けているにすぎない。

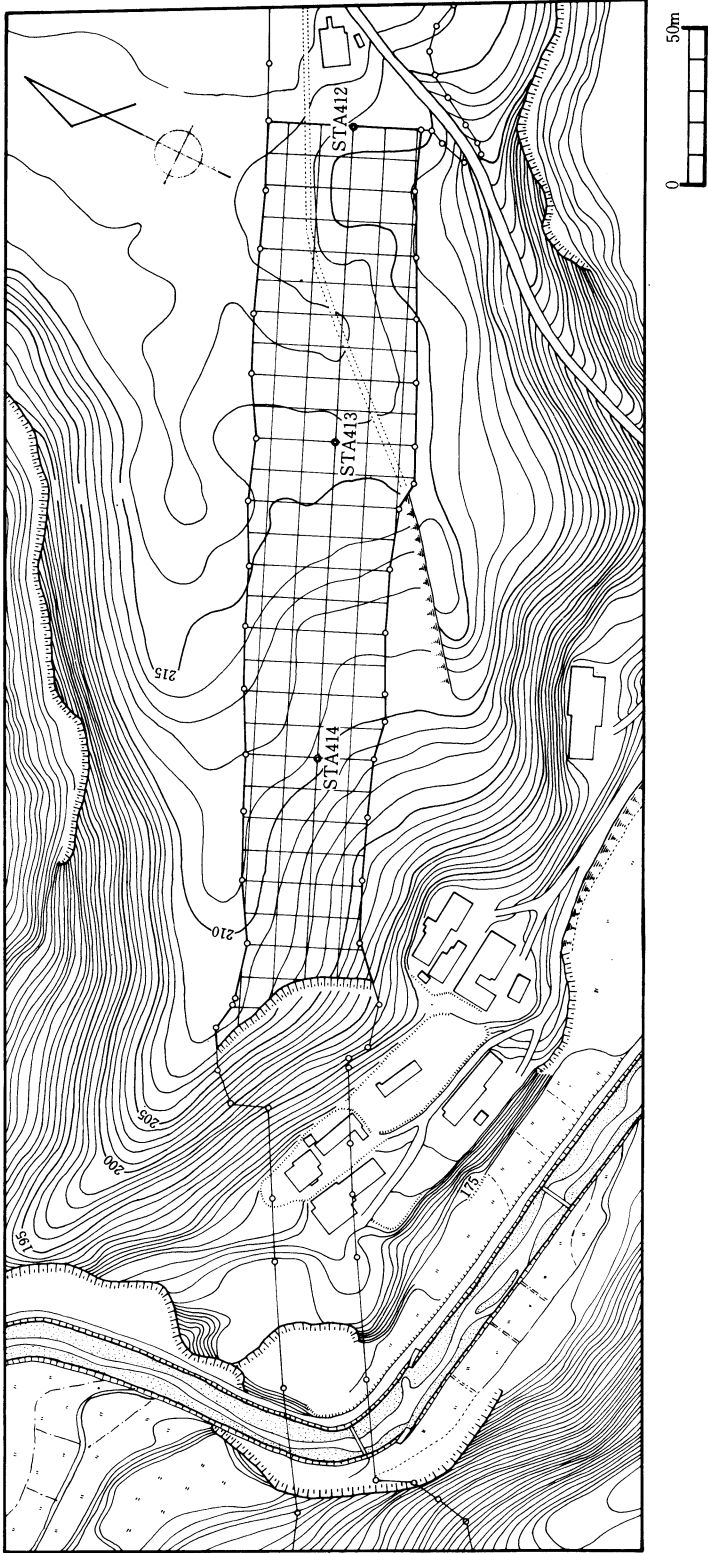
遺跡地はこの溝辺町の南部にあたる。このあたりは台地が火口壁を経て鹿児島湾に至る地域で大小の河川による台地の開析谷が形成される一方、このために台地はえぐられ舌状の台地が谷と交互に位置するといった地形となる。桑ノ丸遺跡は南の桑ノ丸川と西の立岩川が舌状台地先端部で合流するその両河川にはさまれた西面する舌状台地上である。

谷底と台地面との比高は約35m、南側はやや緩やかな傾斜とはなるものの北側は急傾斜となり一見狙立した状況を呈している。台地基部は平坦となり広大な十三塚原台地へとつづいてる。

台地面は現在各畑ごとに段位があるがかつてはほぼ平坦であったものと思われる。遺跡はこの台地全体が推定されるが主体は舌状台地先端部約270mであった。



第1図 桑ノ丸遺跡周辺地図



第2図 桑ノ丸遺跡地形図

II 調査の経過

発掘調査は、昭和49年8月5日から開始し昭和50年4月25日終了した。発掘調査の経過は、日誌抄で略述することにした。

- 8月2日 プレハブ・調査機材・調査機具運搬
- 5日 発掘調査開始。担当新東、牛ノ浜。作業員に対して調査の主旨と作業上留意すべきことについて説明を実施。道路敷内に調査区の設定。伐採作業開始。
- 8日 トレンチ設定、掘り下げに入る。トレンチは西から番号をつける。トレンチ11、13を調査開始。工事用道路の関係を考えてB区に南北トレンチを入れる。
- 10日 トレンチ11、調査続行。1層下部より成川式土器・土師器出土。III層において縄文式土器片らしきもの確認。
- 15日 トレンチ11・13調査続行。連日の猛暑のため作業員の出席が悪くはかどらず。
- 16日 始良・伊佐地区文化財担当者会議現場視察。
- 22日 トレンチ9設定、掘り下げ開始。
- 26日 トレンチ7設定、掘り下げ開始。これまでのトレンチは南北トレンチであったが、東西方向にもトレンチを入れて確認することにした。8・9-B区に横トレンチ設定、掘り下げ開始。
- 27日 トレンチ1・3・5設定する。トレンチ5は掘り下げ開始。
- 29日 トレンチ5・7に溝を確認。II層に掘り込まれている。6・7-B区に横トレンチを設定。掘り下げ開始。
- 9月2日 4・5区に横トレンチ設定、掘り下げ開始。トレンチ3掘り下げ開始。
- 3日 横トレンチの4区より磨製石鏃出土。
- 4日 トレンチ1設定、掘り下げ開始。トレンチ3は終了。
- 5日 トレンチ1・3と4・5区の横トレンチに溝を確認。溝中より近世陶器出土。
- 10日 トレンチ4設定、掘り下げ開始。入道遺跡の作業員20人合流。
- 11日 近世溝の平板実測。トレンチ11の断面図作成、渡辺調査員応援。トレンチ1において縄文式土器検出。
- 12日 平板実測。トレンチ1掘り下げ続行。III層中が縄文前期の包含層であることを確認。
- 14日 トレンチ2と2・3区の横トレンチの断面実測。トレンチ4掘り下げ続行。
- 17日 犀川文化課長視察。
- 18日 トレンチ3・4・5掘り下げ続行。
- 21日 調査員会議。工事用道路敷内に遺物包含層が確認されたので、本道部分へのグリッド調査へ移る。

- 24日 1 C区、1 D区から平面調査続行。
- 26日 1 C区、1 D区、2 B区平面調査。2 B区で成川期の手担土器出土。
- 28日 1 B区、1 C区平面調査続行。河野主任文化財研究員来跡指示をうける。
- 30日 1 B区、1 C区平面調査続行。1 E区、1 F区設定、掘り下げ開始。表土排除。弥生式土器片多数出土。トレンチ4は、範囲確認調査。Ⅲ層上部で塞ノ神式出土、Ⅲ層下部で前平式土器出土。
- 10月3日 2 D E区、3 D E区に確認のための東西トレンチ設定。表土排除開始。
- 7日 2 D E区、3 D E区の東西トレンチ続行。
- 8日 トレンチ5・7設定。表土排除開始。2 D E区、3 D E区続行。
- 11日 トレンチ5・7掘り下げ続行。2 D E区、3 D E区続行。
- 14日 6・7 D区に横トレンチ設定。掘り下げ開始。このトレンチより近世墓検出。
- 16日 6・7 D区の横トレンチ掘り下げ続行。近世墓3個掘り下げ。
- 21日 調査員会議。S T A412～S T A413の間の遺跡確認を急ぎ遺跡範囲を把握するようにとのこと。よって17区以東にトレンチを設定することを計画。
- 22日 S T A412～413の草木の伐採。トレンチ17設定、掘り下げ開始。
- 26日 トレンチ17掘り下げ続行。Ⅲ b層より吉田式土器が完形に近い状態で出土。
- 28日 トレンチ17掘り下げ続行。トレンチ19設定（A～F区）掘り下げ開始。牛ノ浜主事山神遺跡の調査へ、かわって青崎主事当遺跡調査員へ。
- 30日 トレンチ19掘り下げ続行。トレンチ21設定（A～F区）。
- 11月1日 トレンチ23設定、掘り下げ開始。トレンチ19、21掘り下げ続行。トレンチ19は、Ⅰ層からⅢ層までは削平されている。
- 6日 トレンチ21掘り下げ終了。トレンチ23掘り下げ続行。トレンチ25設定、掘り下げ開始（A～D区）。
- 8日 トレンチ23、25区掘り下げ続行。トレンチ25より指宿式土器出土。トレンチ27設定。
- 11日 トレンチ23、25、27掘り下げ続行。21～27区のC区に東西トレンチ設定。トレンチ25平板実測、写真撮影。
- 15日 トレンチ25、27黒褐色火山灰層まで終了。18 C、D区にグリッド設定、平面掘り下げ開始。トレンチ19断面実測図作成。
- 20日 17 C、18 C D区平面調査続行。13 B C区グリッド設定、掘り下げ開始。
- 26日 17 C D、18 C D区平面調査続行、黒褐色の上面検出に入る。16、17 E区に5×10mのグリッド設定、掘り下げ開始。13 B C区の平面掘り下げ続行。
- 30日 13区の平面掘り下げ続行、Ⅲ層に入る。17 C区、18 C D区平面掘り下げ続行。18～19区にかけては、Ⅳ層の黒褐色火山灰層は、攪乱をうけて存在しないところもある。
- 12月4日 この間、平面調査続行。Ⅱ層の黄褐色火山灰土層の推積が厚く、排土に苦労する。13 B C区平面掘り下げ続行。17 C区、18 C D区掘り下げ続行。16、17 E区続行。

- 12月5日 トレンチ13のDEF区設定、掘り下げ開始。DEF区の確認を行う。
- 9日 トレンチ13掘り下げ続行。17C、18CD掘り下げ続行。16、17E区掘り下げ続行。
- 11日 17C区、18CD区掘り下げ続行。縄文前期層に出土遺物はほとんどみられない。16
17E区掘り下げ続行。13BC区掘り下げ続行。
- 12日 17C区、17CD区掘り下げ終了。Ⅳ層に落ち込みがみられたが他に遺構は存在せず。
遺物は、トレンチ調査によって確認された吉田式土器のみであった。平板実測、写
真撮影。13BC区掘り下げ続行。4BC区にグリッドを設定、平面調査開始。
- 16日 13BC区掘り下げ続行。4BC区掘り下げ続行。トレンチ9の調査終了。中村主事
調査に加入。
- 19日 13BC区掘り下げ続行。13C区の北壁断面図作成。トレンチ13断面図作成、13区第
2地点はほぼ終了し、主体を第1地点の平面調査に移す。1B区、4BC区、6B
C区掘り下げ続行。
- 23日 1BC区、4BC区、6BC区掘り下げ続行。Ⅲa層の検出が終了しⅢb層に移り
4C区-Ⅲb層中より角筒土器の破片出土。前平式土器に併う遺物である。
- 24日 4BC区縄文前期層まではほぼ終了。1BC区、6C区掘り下げ続行。作業員の作業
は今日で終了。
- 26日 実測図作成。東西トレンチ22~27(C区)。トレンチ25(A~F区)。トレンチ21(A
~F区)。
- 27日 実測図の整理、事務所の整理を行う。現場作業は今日まで。
- 1月8日 新年度作業開始。雨の為、作業は午前中。1BC区、4BC区、6BC区の縄文前
期(Ⅲb)層検出作業。多量の前平式土器片がみられる。
- 10日 6BC区終了。5B区グリッド設定。排土の捨て場がないので6BC区の遺物の出
土していないところに排土を置く。2C区グリッド設定、表土排除開始。24、25B
C区盛土排除作業にかかる。トレンチ7(DEF区)終了。断面実測図作成。
- 14日 4BC区終了。平板実測。5C区Ⅱ層掘り下げに入る。2D区、3C区グリッド設
定、表土排除にかかる(以上第1地点)。24、25BCD区盛土及び表土排除。
- 22日 1、2D区Ⅲ層掘り下げ、5C区Ⅲ層の縄文前期層まで終了。4DE区グリッド設
定、表土排除開始。3C区表土排除続行。25、26BCD区表土排除続行。5D~7
DC区に検出された近世墓は、子孫の下桑の丸部落住人で掘り上げ、改葬がなされ
ることに決定する。墓穴の検出、掘り上げに協力する。
- 27日 1D区、2D区、3C区縄文前期層(Ⅲb層)検出に入る。1CD区北壁の断面に
のぞいていた遺構の検出に入る。成川の窯状の遺構。
- 30日 1E、4DEⅡ層掘り下げ続行、3D区グリッド設定。2D区に出土していた完形
の成川式土器の実測、写真。
- 2月2日 雨のため遺物整理。1~6、A~E区の層位区分。池畑主事今日から調査に加入。

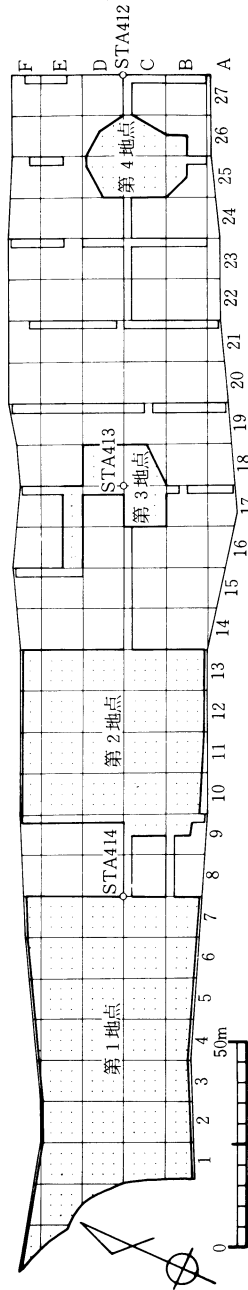
- 5日 1 E区Ⅲ a b層検出終了。2 E区はⅡ層まで。東西トレンチ 8～12まで断面実測図。
下桑ノ丸部落近世墓掘り上げ開始する。
- 8日 2 E区縄文前期層掘り下げ終了。3 D区、4 D E区、5、6 E区続行。
- 10日 3 D E区、4 D E区、5 D E区掘り下げ続行。4 D E区は、縄文前期層以下の遺物
確認のためトレンチで深掘りを開始。下桑ノ丸部落の近世墓の掘り下げ続行。
- 15日 3 D区Ⅲ b層検出。1～3 C区終了。第1地点がほぼ終了するので、第2地点にグ
リッドを設定する。10、11、12 B C区の設定。掘り下げ開始。
- 24日 10～12 B CⅡ層掘り下げ続行。続行していた25、26 B C区は、Ⅲ層掘り下げ開始。
- 26日 10～12 B CⅢ層掘り下げ続行。25、26 B C区の出土遺物の平板実測。
- 3月7日 10～12 B C区Ⅲ層遺物検出。10、11区平板実測。
- 11日 3 E区、6 D E区、4 D E区の遺物平板実測図作成。10～12 B C区Ⅲ b層検出続行。
- 17日 5、6、7 D E区Ⅲ b層の検出。県文化財専門委員河口貞徳（考古学）、同石川秀雄
（地質学）調査指導。
- 24日 10、11 D E区仕上げ作業。8、9 B C区の盛土を機械力で排土。10～13 D E区も。
- 25日 10～13 D E区平面掘り下げにかかる。8、9 B C区も開始。
- 31日 8、9 B C区Ⅱ層の遺構検出。10～13 D E区Ⅱ層検出続行。
- 4月7日 8、9 B C区Ⅱ層掘り下げ続行。10～13 D EⅡ層からⅢ層掘り下げ。
- 8日 11 E区に完形に近い縄文式土器出土。8、9 B C区続行。10～13 D E区続行。
- 11日 10～13 C D E区におけるⅢ層は、遺物を包含しない。8、9 B C区平板実測。
- 15日 8、9 B C区Ⅲ層平面掘り下げ続行。有村八郎課長補佐遺跡来訪。
- 21日 8、9 B C区のⅢ b層の調査終了。10 D E区のⅢ b層終了。
- 23日 掘り下げ終了。実測図終了。
- 24日 発掘調査器具、機材整理をおこない次の調査予定地葛根塚遺跡へ運搬。
- 25日 桑ノ丸遺跡調査終了。

III 調査・出土遺物の概要

昭和48年8月に実施した分布調査においては、次のような遺物が表面採集されている。縄文式土器片、弥生式土器片、土師器片、須恵器片などの土器類とチャート、黒曜石片などである。また、ごぼう畑耕作中に土師器の完形品や坏や丸底の底部などが出土している。

桑ノ丸遺跡の発掘調査は、昭和49年8月5日から開始された。最初に、昭和47年度8月におこなった分布調査の結果にもとずいて、当桑ノ丸遺跡の調査方法の検討を実施する。その後、遺跡が所在する路線敷内に、調査区の設定を行なう作業から始めた。路線予定地の中心杭であるSTA412とSTA413を基軸にして、10m×10mを基本とするグリッドを設定する。遺物の散布状況によると、舌状台地の中ほど(STA413)に集中してみられ遺跡の存在が推定されるが、調査区は、舌状台地の先端からSTA412まで設定することにした。そして調査区は、舌状台地先端部から出発してSTA412まで設定、1区～27区と呼ぶことにした。中心杭を基軸とした基準線から南の路線予定区域は、10m×10mの基本グリッドが3個設定されるので南から北へA、B、C区とした。そして基軸から北へはD、E、F区と呼称した。このようにして、10m×10mの基本グリッドは、1B区あるいは25C区と呼称することにした。

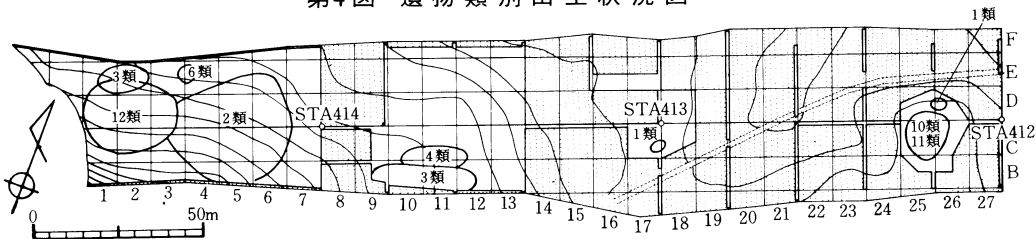
調査は、遺跡の範囲を確認するために各区の南側に2m×10mのトレンチを設定し確認調査を実施することから開始した。確認調査のトレンチは、工事用道路を加味し、奇数区のB区の東側に設定しトレンチ○と呼ぶことにした。確認調査の結果、包含層及び遺物の出土範囲が限定されるため、調査の便宜上、調査地点名を付記することにした。そして、1区～7区までを第1地点、9区～13区までを第2地点、17区～18区を第3地点、25区～26区を第4地点と呼ぶことにした。確認調査終了後、本調査を開始した。



第3図 桑ノ丸遺跡グリッド配置図

本調査は、各地点ごとにおこない、各地点ごとに整理することにした。報告書の作成にあたっては、各地点ごとに調査の概要を記し遺構の説明と出土遺物の概要について記する方法をとった。出土遺物については、1地点から、4地点までを一括してあつかい土器と石器にわけてそれぞれ個々に記載することにした。出土土器は、各形式ごとに分類する方法をとり列記し説明することにした。縄文式土器、1類から11類に類別が可能であった。これは、桑ノ丸遺跡において出土した層位順に記載したものであって、編年位置を示すものではない。たとえば、塞ノ神B式土器・阿高式土器・轟式土器などは、数片の出土であって層位的に出土してもその実体を知る量ではなかった。次に、縄文式土器以外に成川式土器・土師器・須恵器・近世陶器の種類がみられる。これらは、その種類に類別番号を記載し、12類から15類とした。遺物は、この類別に説明をおこなった。詳細は、下記表に示した。

第4図 遺物類別出土状況図



第1表 桑ノ丸遺跡出土土器類別表

桑ノ丸遺跡類別	形式	特徴	出土地点	図遺物番号	頁	文献
1類	吉田式土器	凹筒土器・口縁部わずかに外反・端部に平縁・胴部文様貝殻押引文・底部にキザミ	第3地点 第4地点	0001～ 0004	186	河口貞徳「南九州出土の条痕文土器」 石器時代1号
2類	前平式土器	凹筒土器・口縁端部にキザミ施文・胴部は貝殻条痕文・角筒土器	第1地点	0005～ 0083	187	河口貞徳「鹿児島県における貝殻条痕文土器について」 鹿児島考古第4号
3類		貝殻施文具による、楯目及び羽状施文口縁端部が内傾し、内湾する。	第1地点 第2地点	0084～ 0118	202	
4類	押型文土器	山形押形文・楯目押形文・底部は平底	第1地点 第2地点	0119～ 0128	208	寺師見国「南九州の押型文土器」古代文化 河口貞徳「出水貝塚」鹿児島県文化財報告書
5類	平椀式土器	口縁端部肥厚、凹縁文で文様、頸部に凸帯がつく	第4地点	0129	209	河口貞徳「塞ノ神式土器」鹿児島考古第6号
6類	塞ノ神A式土器	口縁部凹縁文、胴部燃糸格子目文	第1地点 第4地点	0130～ 0139	211	河口貞徳「塞ノ神式土器」鹿児島考古第6号
7類	塞ノ神B式土器	口縁部、連続貝殻刺突文	第2地点	0140～ 0141	211	河口貞徳「塞ノ神式土器」鹿児島考古第6号
8類	轟式土器	口縁部分に4条のミズバレ凸帯	第1地点	0142～ 0143	211	松本雅明他「轟式土器の編年」 考古学雑誌47-3
9類	阿高式土器	口縁部分に凹縁文	第1地点	0144～ 0145	211	
10類	指宿系土器	2本の凹縁を基本に曲線文・直線文	第4地点	0146～ 0150	212	河口貞徳「南九州に於ける縄文式文化の研究」 鹿児島考古学紀要第3号
11類	西平・三万田式土器	頸部「く」の字形 黒色研磨 磨消縄文、凹縁文、連点文	第4地点	0151～ 0155	213	
12類	成川式土器		第1地点	0156～ 0176	219	文化庁「成川遺跡」
13類	土師器		第1地点 第2地点 第4地点	0177～ 0189	220	
14類	須恵器		第2地点 第4地点	0190～ 0191	220	
15類	近世陶器	香炉・高坏の仏具胎釉・化粧土に透明釉のもの	第1地点	0192～ 0200	222	

IV 各地点の調査

(1) 層位

層位は、表層からシラス層までをⅣ層に分離した。畑の耕作土がある地域と無い地域が存在するので耕作土を表層とし、それ以下をⅠ層からⅣ層までに区分した。

表層 現在および過去において畑地耕作がおこなわれ休耕されているところの層である。第1地点においては、舌状台地の先端部という地理的条件も加わり耕作土はみられない。第2地点より以東の地点は、台地も平坦であり長期にわたる耕作の跡がみられ厚い耕作土層がある。ゴボウなどの深耕の跡もみられる。

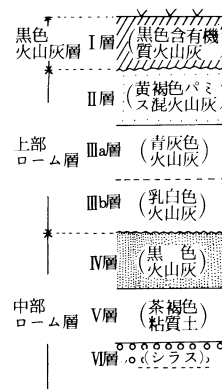
Ⅰ層（黒色含有機質火山灰層） 黒色を呈し上層においては、植物質の腐植物がみられる火山灰層である。第1地点においては、表層にこのⅠ層がみられる。他の地点は、耕作土の下層に残存し耕作による攪乱を免れている。このⅠ層中からは、13類の土師器がみられる。また、Ⅰ層下部からⅡ層との接点において13類土器（成川式土器）が出土する。

Ⅱ層（黄褐色パミス混火山灰層） 黄褐色の火山灰層にパミス混入の多い部分が認められ厳密には分層すべきところであるが、当遺跡では一層として処理した。第1点においては、上層から9類土器（阿高式土器）が出土し、また、第4地点では、10類土器（指宿式土器）およびⅡ類土器（西平式土器）が出土している。

Ⅲ a層（青灰色火山灰層） このⅢ層は、上層と下層においては明確に層位の違いが認められるが分層するにあたってはその区別は明確ではなく暫移層となっている。そのため a層および b層として区別することにした。a層は、青灰色を呈し粘質が強く固い。第1地点においては、この a層に6類土器（塞ノ神 A式土器）が出土している。また、a層の下部および b層との暫移部分に4類土器（押型文土器）が出土している。

Ⅲ b層（乳白色火山灰層） 色調は、乳白色を呈する。Ⅲ aと土質を比較すると若干砂質を帯びているようである。Ⅲ b層中に1類土器（吉田式土器）、2類土器（前平式土器）および3類土器が出土している。これらの土器は、Ⅲ b層の下部で次層に接するところに集中して出土している

Ⅳ層（黒色火山灰層） 黒色を呈する火山灰層である（無遺物層）。第1地点から第4地点にわたり全面に拡っている。この黒色火山灰の下層には、黄褐色のパミス層が混在している。このパミス層は、鹿児島市吉野台地周辺においては



第5図 桑ノ丸遺跡層序

厚く純粋な推積が60cm～80cmみられるが、当遺跡においては、黒色火山灰層に混入した状態であった。分層すべきところであるが当遺跡においては、一括してとりあつかった。

V層（茶褐色粘質土） 色調は、茶褐色のチョコレート色を呈するものである。この層から細石器を出土する遺跡がみられるが、当遺跡においては、確認されなかった。

VI層（シラス） 上層は、軽石が多いが、下層は、いわゆるシラス層である。この層は、40mから100m推積しているといわれている。調査においては、基盤層としてあつかう。

(2) 第1地点の調査

1 調査の概要

第1地点は、舌状台地の先端部南側傾斜面に位置している。台地の西側裾を桑ノ丸川が南流する好条件に面した場所である。川を渡る縦貫道橋梁建設のため、舌状台地先端部を掘削中に縄文式土器の条痕文土器の細片が採集された。

確認調査の結果、舌状台地先端部においては、1区から6区まで遺物の出土が確認された。したがって、1区から7区までの縦貫道道路敷部分を全面的に平面調査を行った。調査の便宜上、第1地点と呼称することにした。平面調査における遺溝、遺物の種類について列記すると次のようなものがある。

確認調査において検出された近世墓は、5・6・D・E区に拡がり総数において66基確認されている。溝状の落ち込みは、3本検出されたがいずれも近世墓群の方向にむいていることや溝の状態と遺物などから察して近世墓群に関係する墓道と推定された。

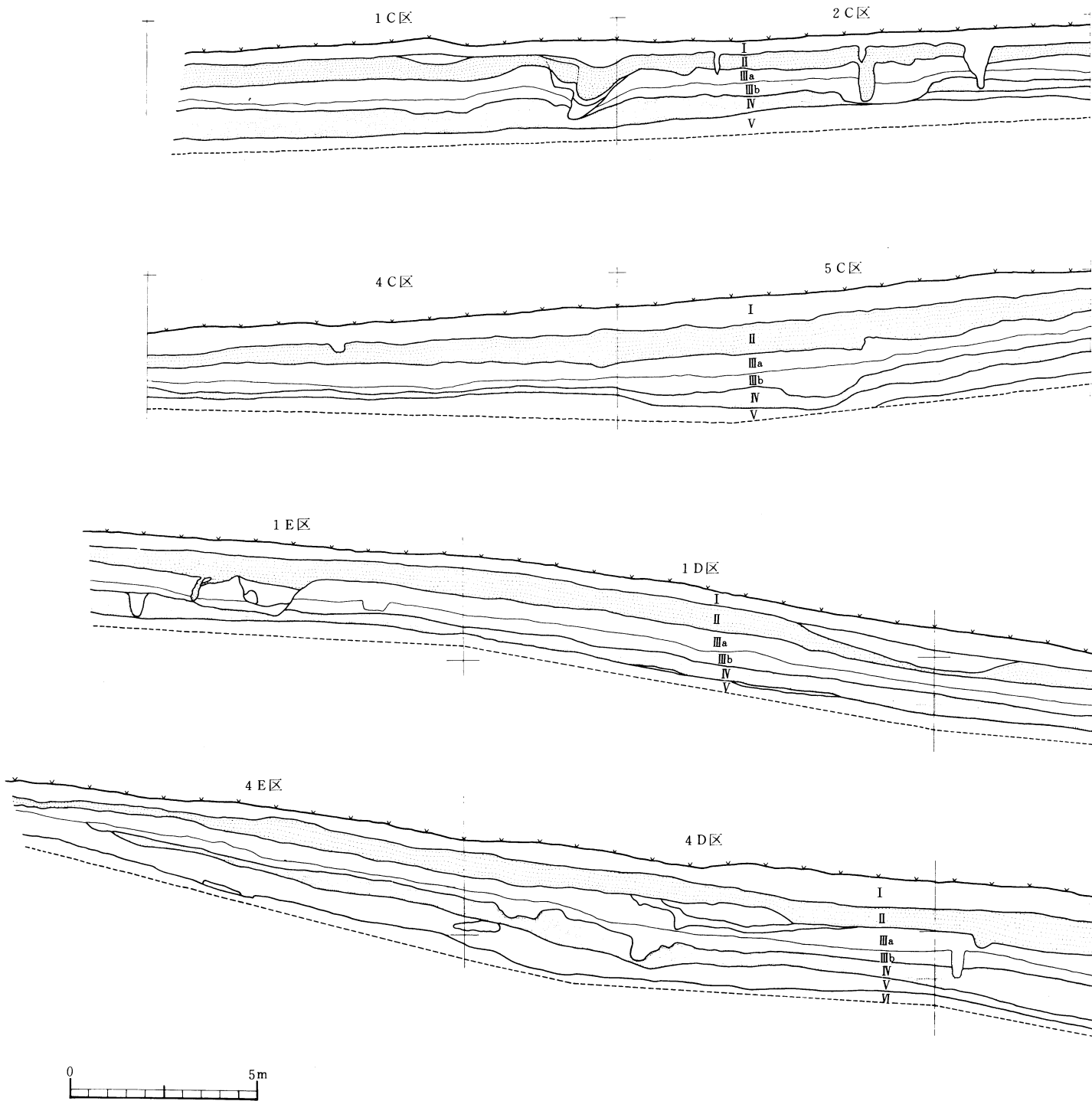
I層とII層の接点から出土する12類土器（成川式土器）は、ほとんどが散乱の状態に出土しているが、ピットの中に置かれた状態の完形壺が1個発見されている。その他に12類の遺物を含み炭火物を敷いた落ち込が発見されている（窯状遺構）。この時期に併うと考えられる磨製石鏃は、確認調査で出土した2本以外は出土していない。

確認調査においてII層から出土した8類土器（轟式土器）および9類土器（阿高式土器）はそれ以外には、平面調査においては出土していない。

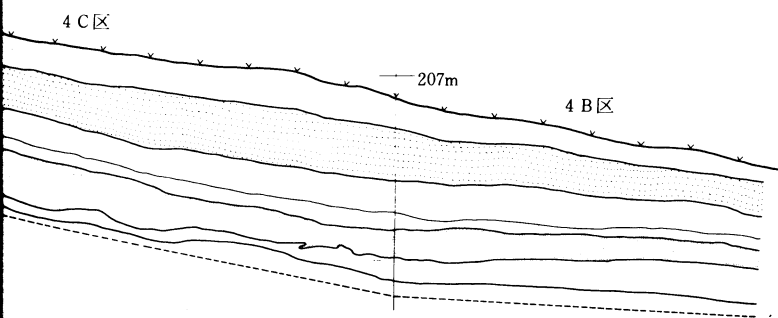
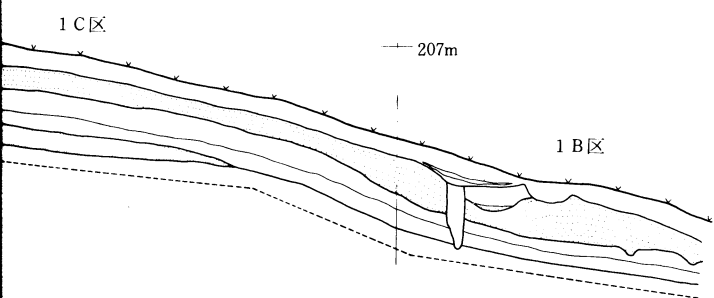
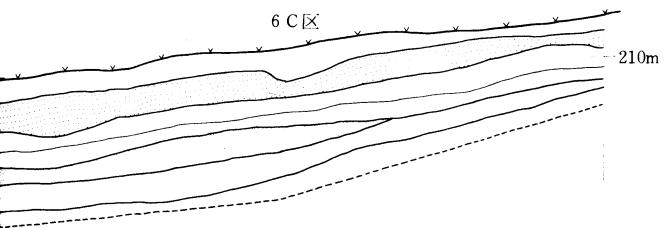
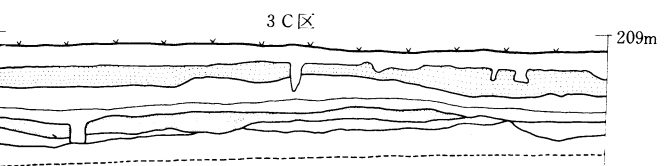
III層の平面調査においては、多量の縄文式土器と石器が出土したが遺構は確認されていない。2類土器（前平式土器）が出土するIII b層下部において自然礫群がみられた。しかしながら、その量はまばらであり、いわゆる集石遺構は発見されていない。住居址様の円形および楕円形の落ち込みが4ヶ所検出されたが、調査・検討の結果地層の逆転であることが判明した。その他に局所的な断層も一ヶ所確認された。

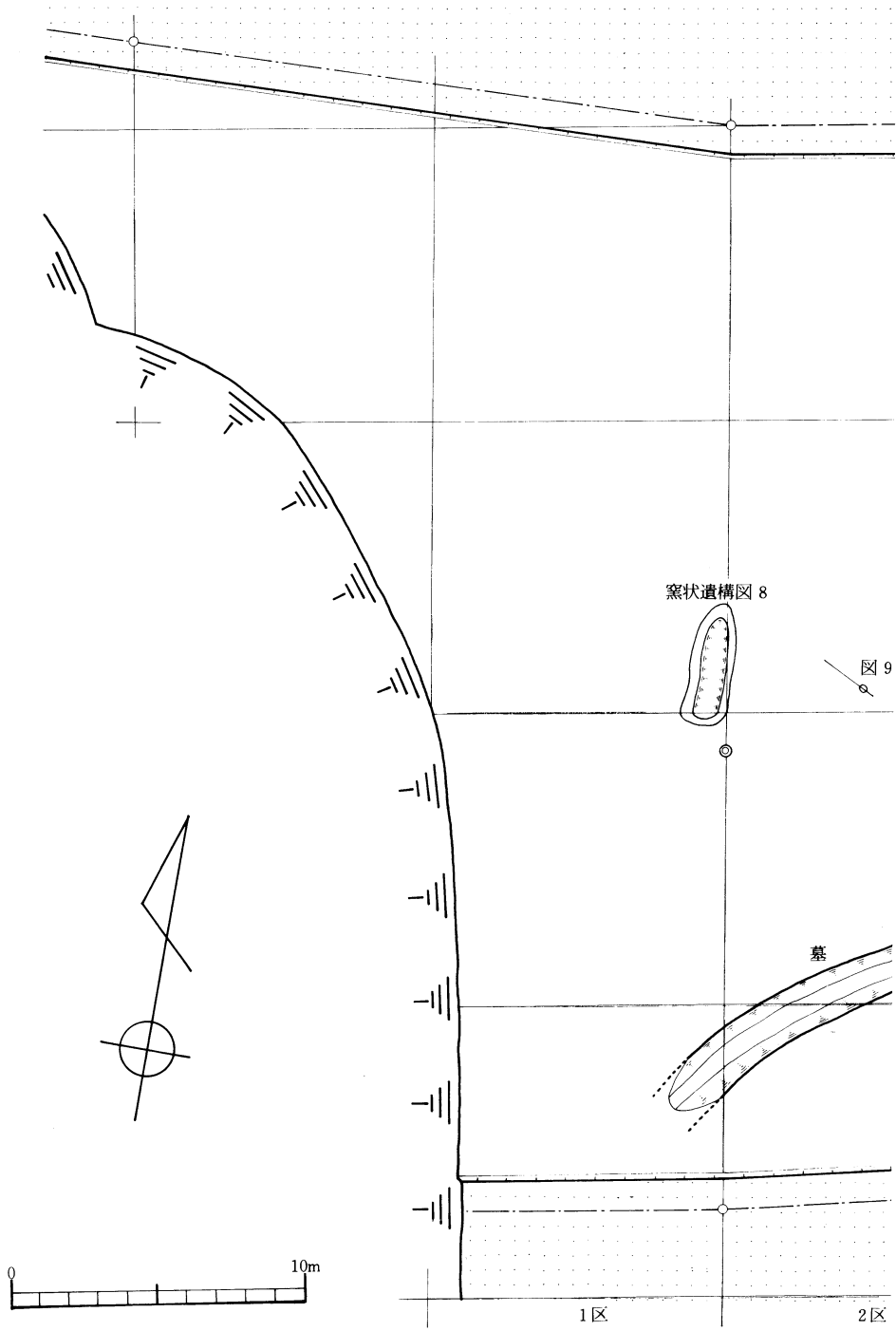
出土土器は、2類土器が最も多く当遺跡を代表する遺物といえる。その他に、3類土器・4類土器（押型文土器）・6類土器（塞ノ神A式土器）・8類土器（轟式土器）・9類土器（阿高式土器）・12類土器（成川式土器）・14類土器（近世陶器）がみられる。

出土石器は、I層下部から磨製石鏃2点とIII b層に共う石器として石斧と磨石がみられる。

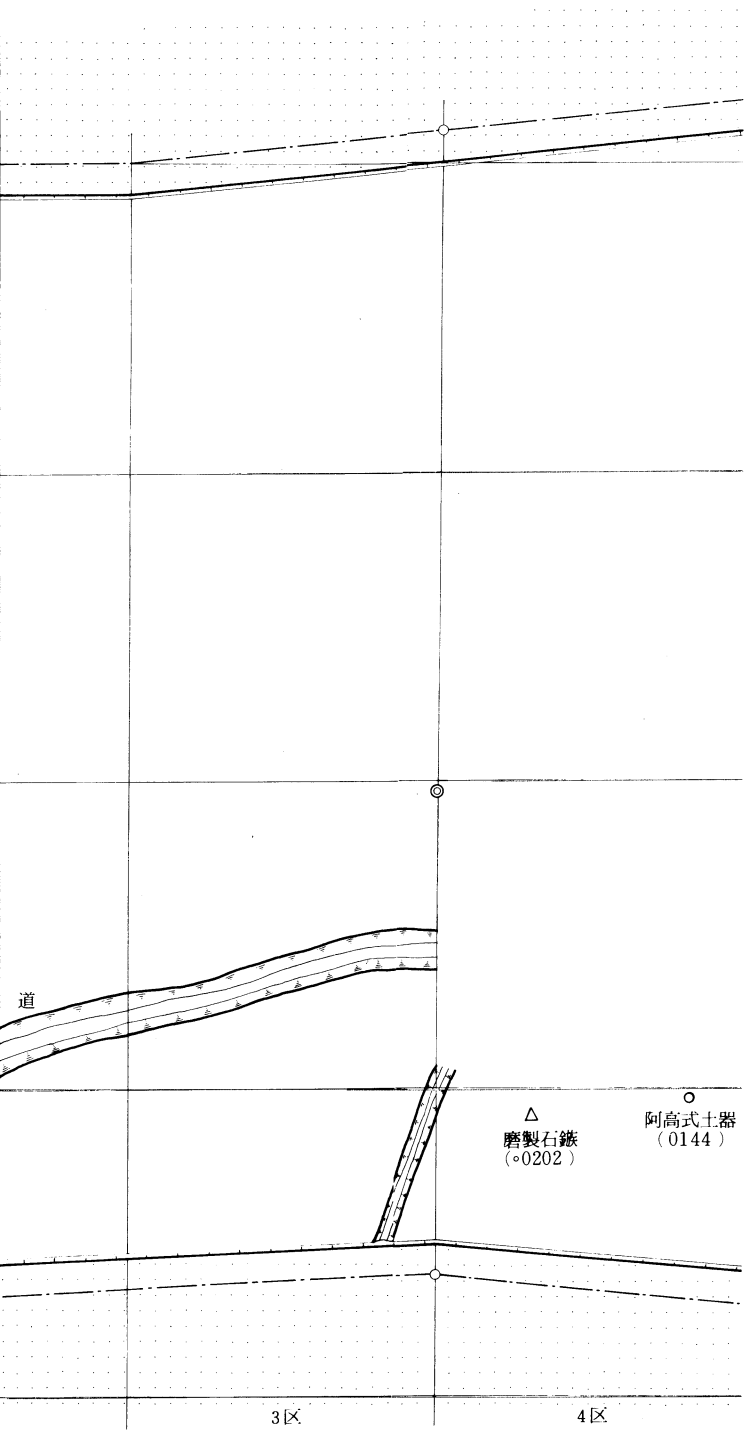


第6图 第1地点断面实测图

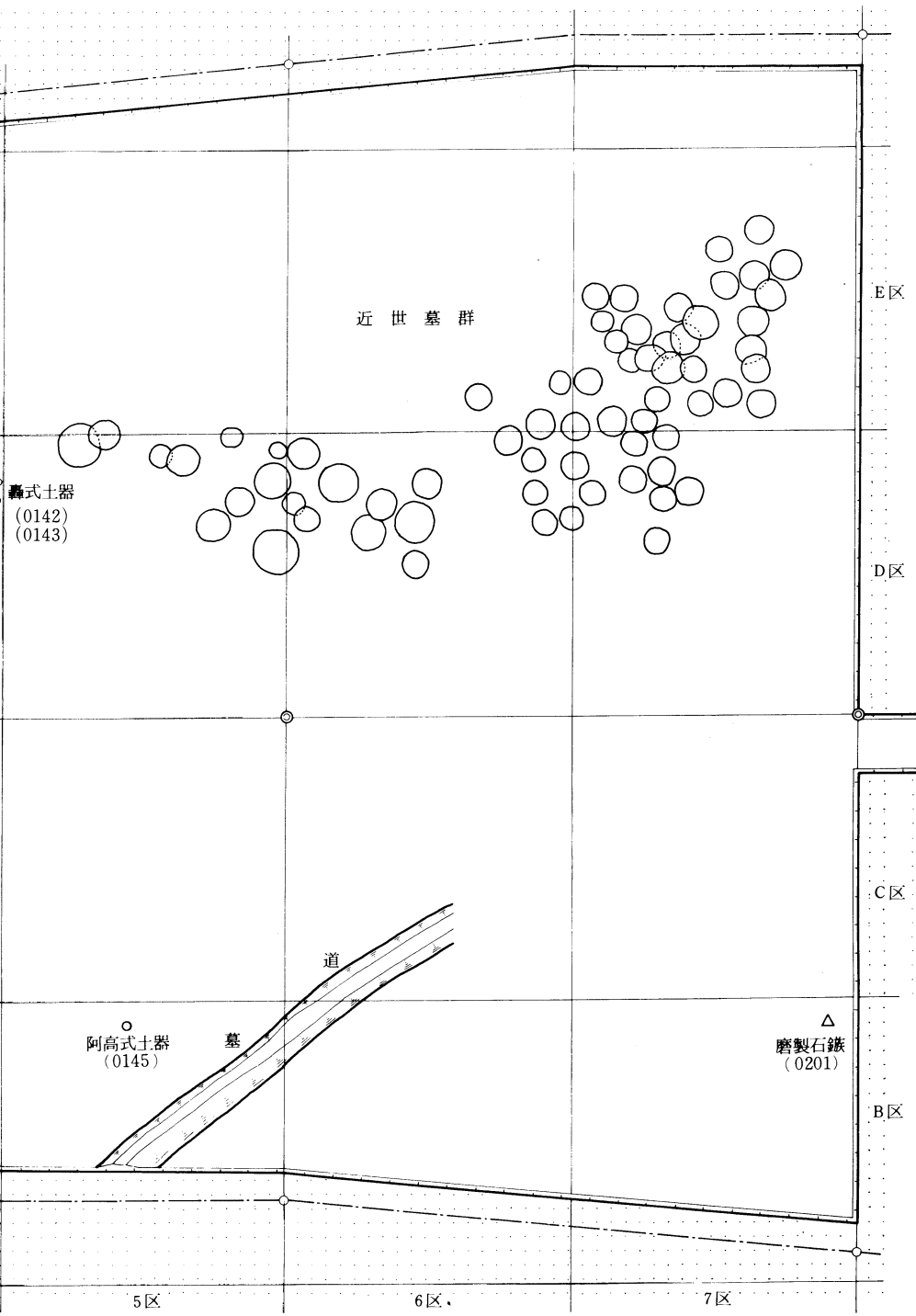


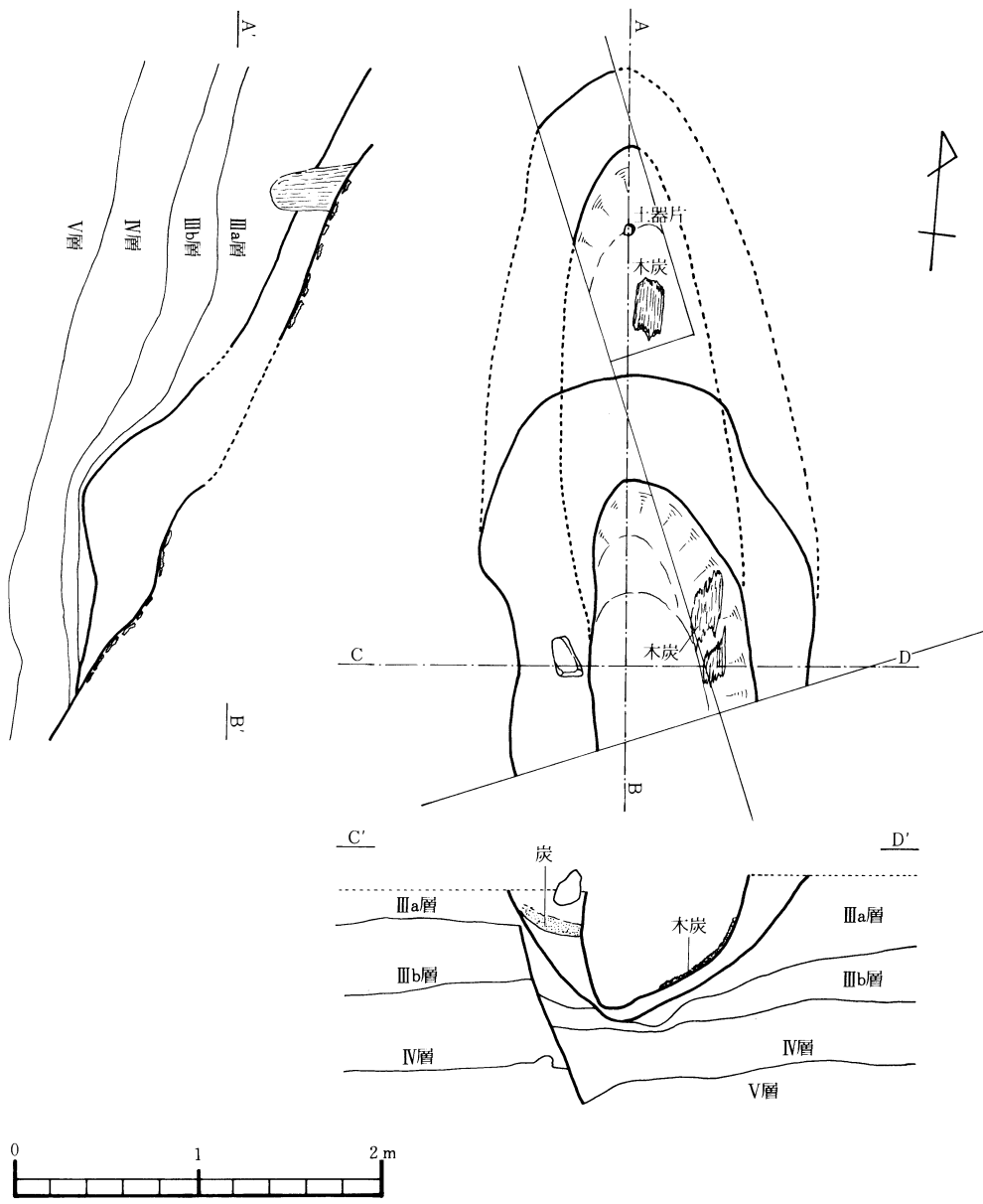


第7图



第1地点平面図(I)





第8図 窠状遺構実測図

2 遺構

①近世墓と墓道（第7図）

近世墓は、5 D・6 D・7 D E区に集中して発見された。総数は、66基である。いずれも、正円形に近いきれいな掘り込みである。深さは、1.3m程度のものである。掘り込みの径は、1.6mの最も大きいものから0.6mの小さいものまでみられる。墓穴の底のほうは、空洞をなすものもみられる。墓穴の底には、人骨と共に棺桶の残片や釘金具が残っているものがある。

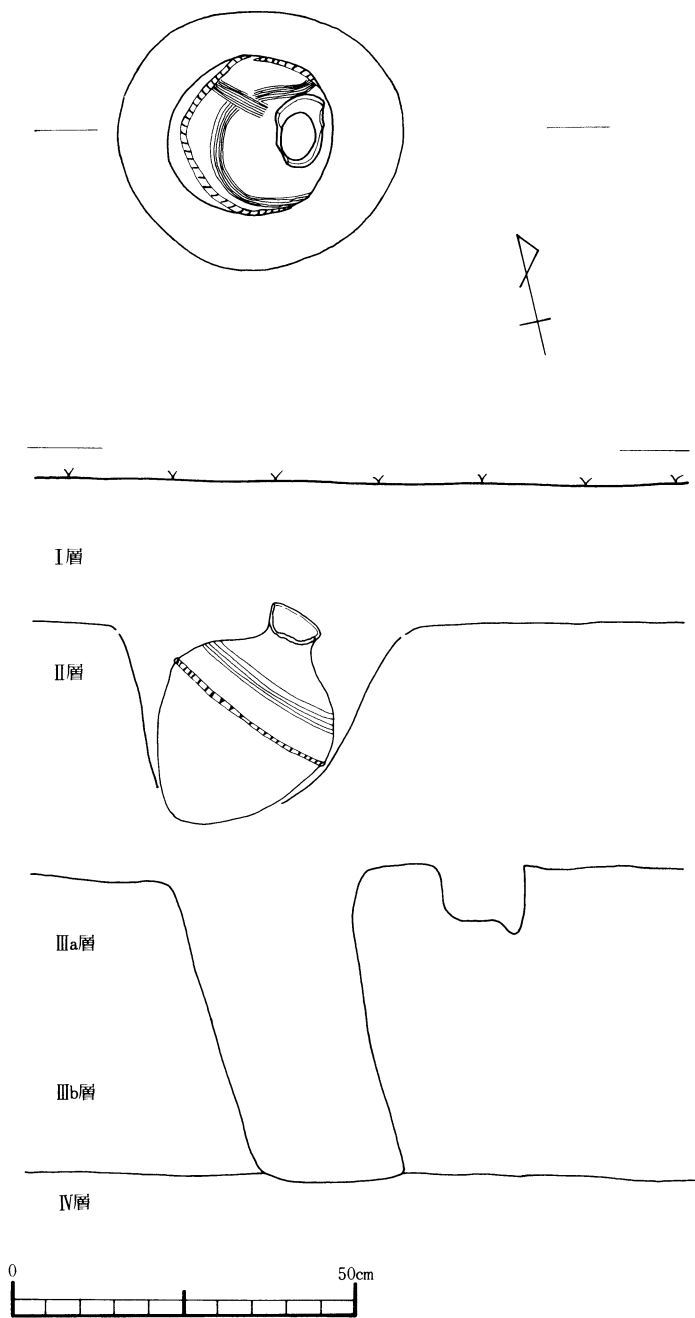
縦貫道敷地外の台地南側傾斜地の山林の中に、墓石の断片が残存していた。また、聞き込み調査における古老の話によると「昔、台地南側の裾部に墓石が積重ねて置れていた」ということである。が、現在の住人の中には、ここを墓地としていたことを記憶している人はいない。現在の墓地は、発見された墓より300m余り東側にある。下桑ノ丸部落に所属する墓地である。溝が、1 B・2 C・3 Cと3 Bと5 B・6 Cにかけて3本検出された。そのうちの2本は、1.7mから1.3mの背巾をもつものであるが、3 Bのものは、0.5mの狭いものである。溝の断面中には、大正3年の桜島大爆発の火山灰といわれる青灰色の灰層が推積しているのがみられる。溝の底面および周辺からは、近世陶器や磁器の破片が多数出土した。3本の溝は、いずれも近世墓群の方向をむいていることや溝の状態などから察して近世墓群に関係する墓道と推定した。尚、確認調査において近世墓と確認された時点で日本道路公団と下桑ノ丸部落の協議が行なわれた。その結果、墓の掘り下げが行なわれ骨や副葬品は、現在の墓地に改葬されることになった。

②窯状遺構（第8図）

1 D区の東南方向の角に、長径が3.6mで短径が1.8mの登窯状の遺構が検出された。床面および壁面と考えられる部分には、II層（黄褐色）に類似する粘土で築かれている。内面は、巾0.9m、長さ3.2m残存している。壁面にあたる部分の高さは、基部において0.7m残存している。遺構の基部の傾斜は、約30度であり後方に行くに従って約25度の緩傾斜となる。内面の床面と壁面にあたる部分には、火をうけた痕跡が確認される。その上面には、木炭や灰が多量に残存している。後方部の床面には、12類（成川式土器）に伴う丹塗土器の細片が1点密着する状態で確認されている。この窯状遺構が検出された1 D区の周辺区（1 B、2 B・D、3 B・D）においては、多量の12類土器が出土している。窯状遺構の5m東方には、下記の12類土器の完形品がピットに入った状態で出土している。この窯状遺構は、層位と遺物から判断すると12類（成川期）の時期に築かれたものと推定される。形態から察すると登窯と考えられるが、土器を焼くためのものか他に使用したものか現状では不明である。

③12類完形土器出土状態（第9図）

完形土器は、第1地点の2 D区におけるI層（黒色火山灰層）下部より出土した。この周辺から他にも壺・甕・丹塗土器などが集中して出土しているが、いずれも成川式土器と称され



第9図 12類完形土器出土状態実測図

るものであり当遺跡においては12類にあたるものである。

完形土器の出土した地域は、舌状台地の先端部近くであり南側にゆるやかな傾斜がみられる。遺物の散布がみられるところは若干平坦面を呈した部分である。

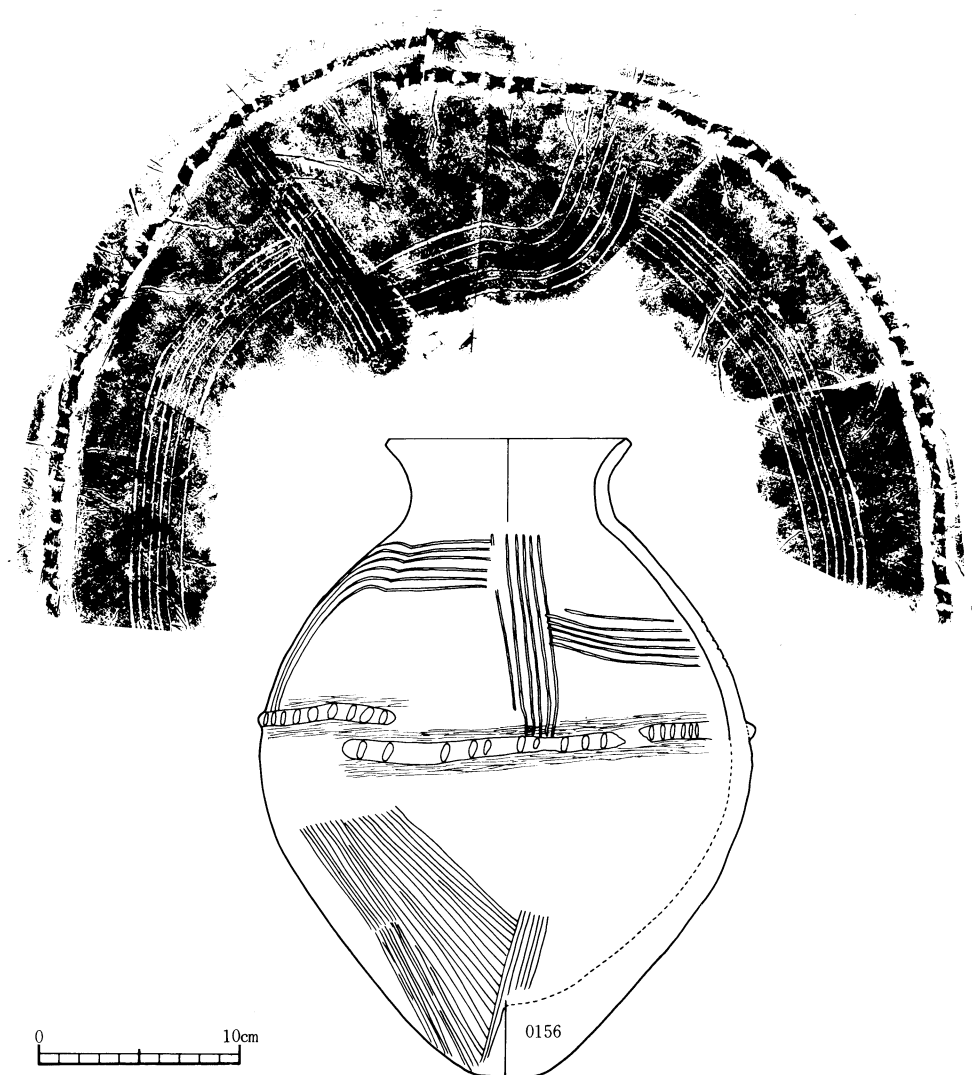
完形土器は、第II層（黄褐色パミス混火山灰層）に掘り込んだ径40cm、深さ25cmの円形のピット中に出土している。土器は、約60度の傾きをもって底部を下に口縁部を上状態に出土している。土器内部の土からは、炭化物が微量に検出されただけである。

④12類完形壺（第10図）

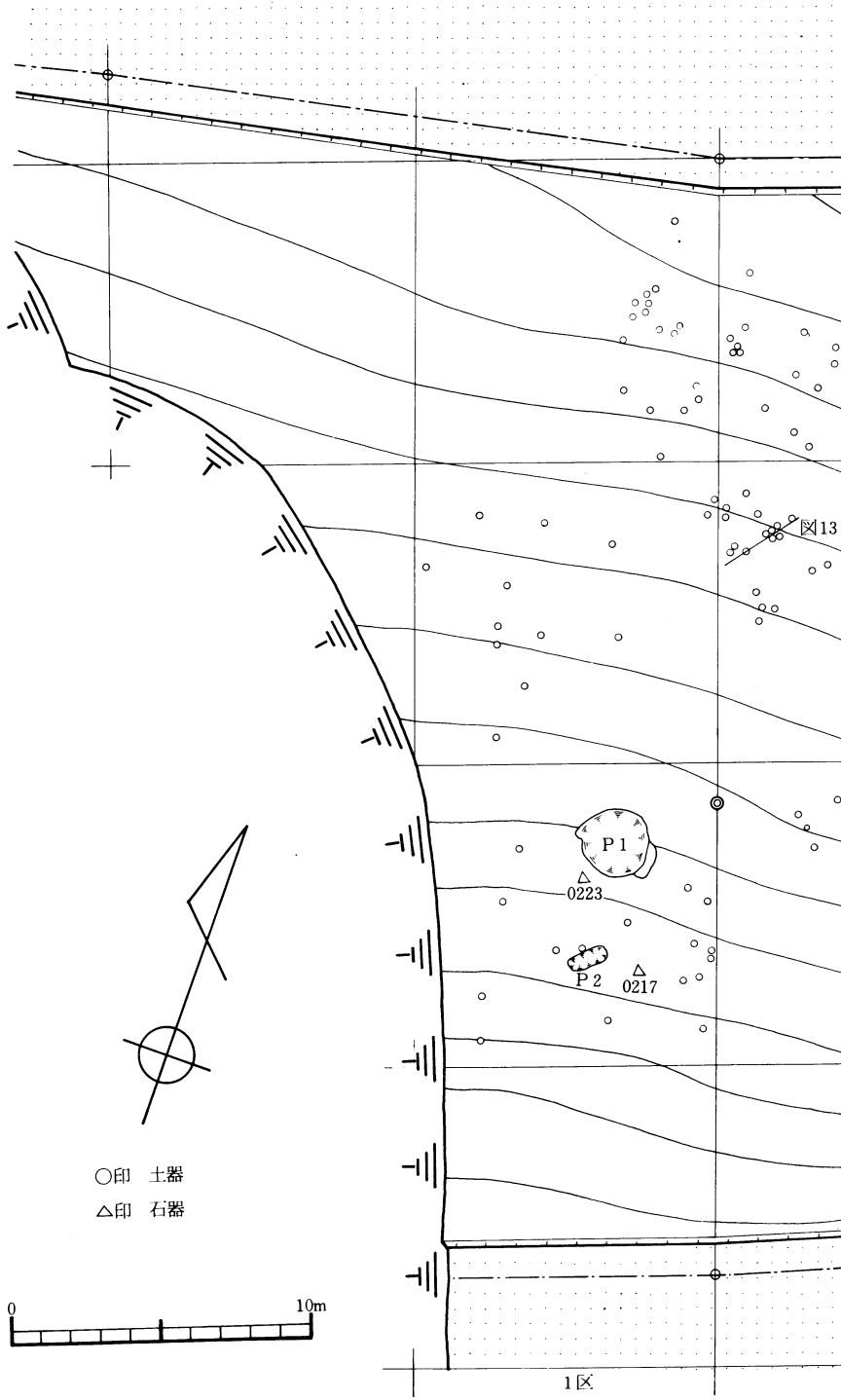
出土した土器について説明すると次のようになる。

胴部がやや球形状に張った器体で、胴部最大幅(24.6cm)がほぼ中位の高さにある。底部は径3.4cmの尖底に近い平底であり、器高は32cmを測る。胴部からしまってきた頸部は外びらきの短い頸部を有する器形である。胴部最大幅の位置に幅約0.8cm、厚さ0.4cmのはりつけ突帯をめぐらす。しかしこの突帯はつながらず上下にすれちがう。又、突帯には布目圧痕が見られる刻目が施されている。この土器の

大きな特徴はヘラ状の施文具による沈線文を頸部から胴部にかけて施していることである。6条の沈線を頸部より突帯上部まで縦にひき、その縦位の沈線を中心に右方向に6条の沈線を横位に巻めぐる。左方向には同じく6条の沈線で重弧状の文様を施す。突帯のはりつけ部分はハケによる横なでの調整を行ない、胴部突帯以下は斜位のヘラ調整を施す。成川式系統の土器でヘラ状施文具による文様を施す土器は指宿市に舟を描いたもの、鹿児島市吉野町七社遺跡に魚を描いたものがある。又、下甕村手打の大原・宮園遺跡にヘラによる沈線を描いたものが見られる。



第10図 土器実測図及拓影



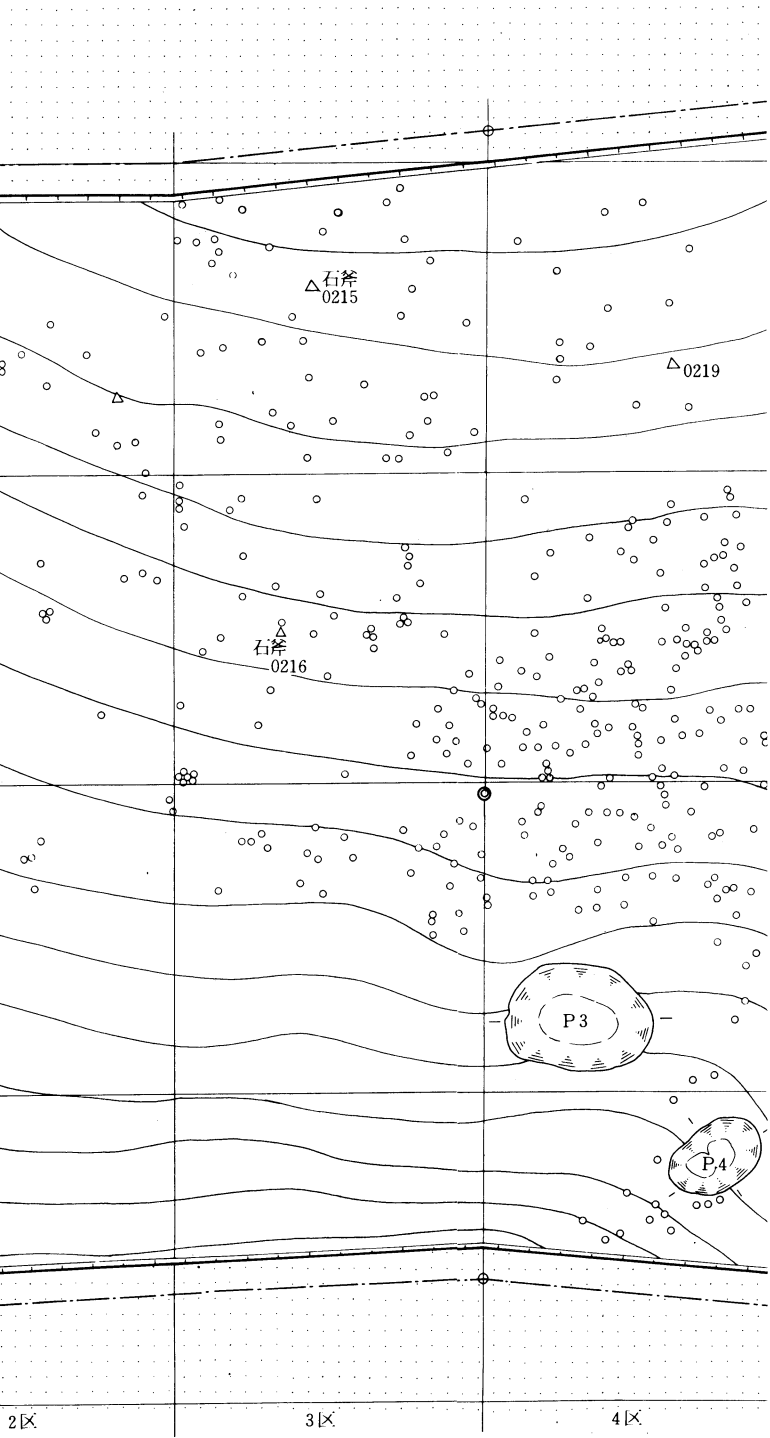
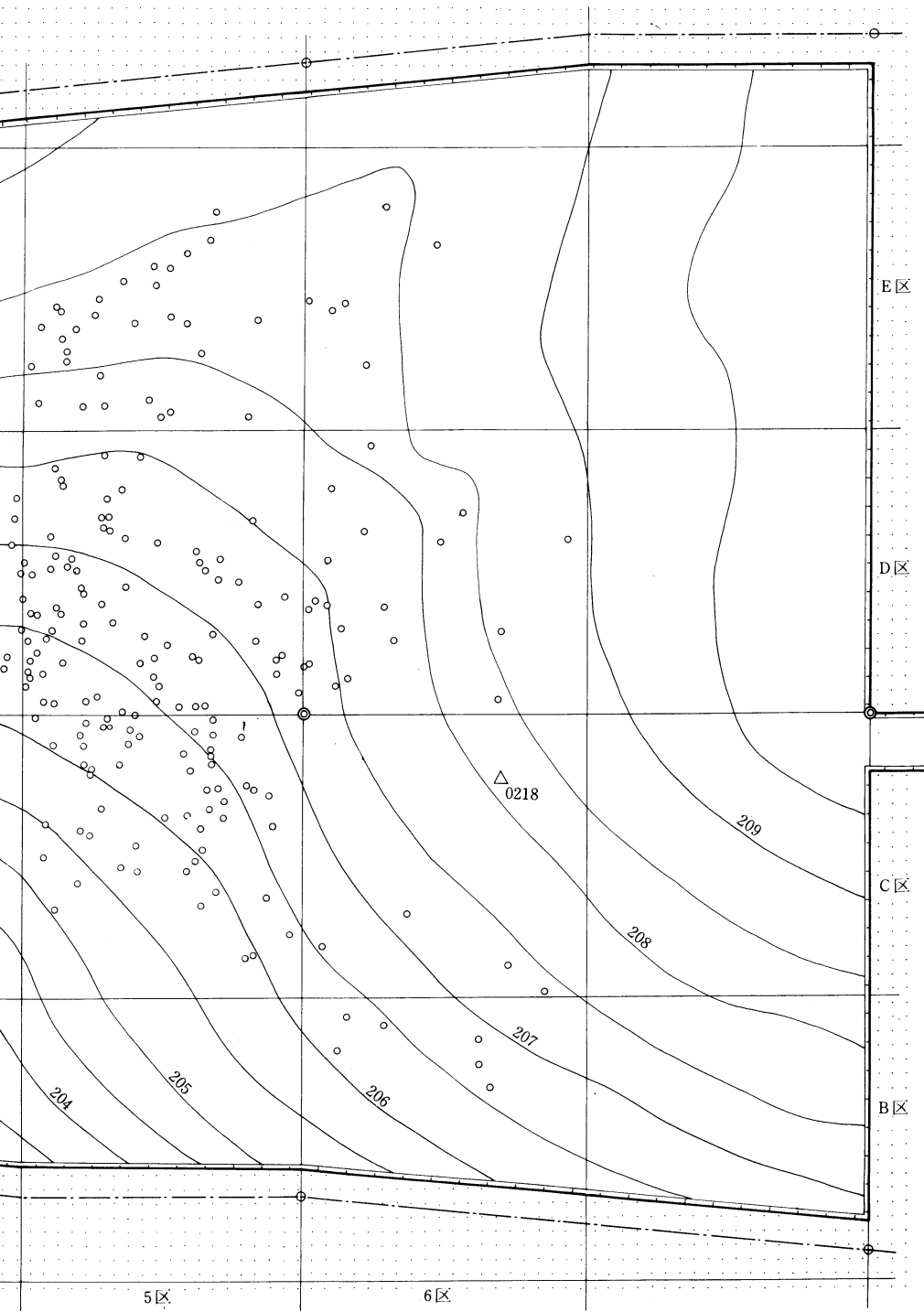


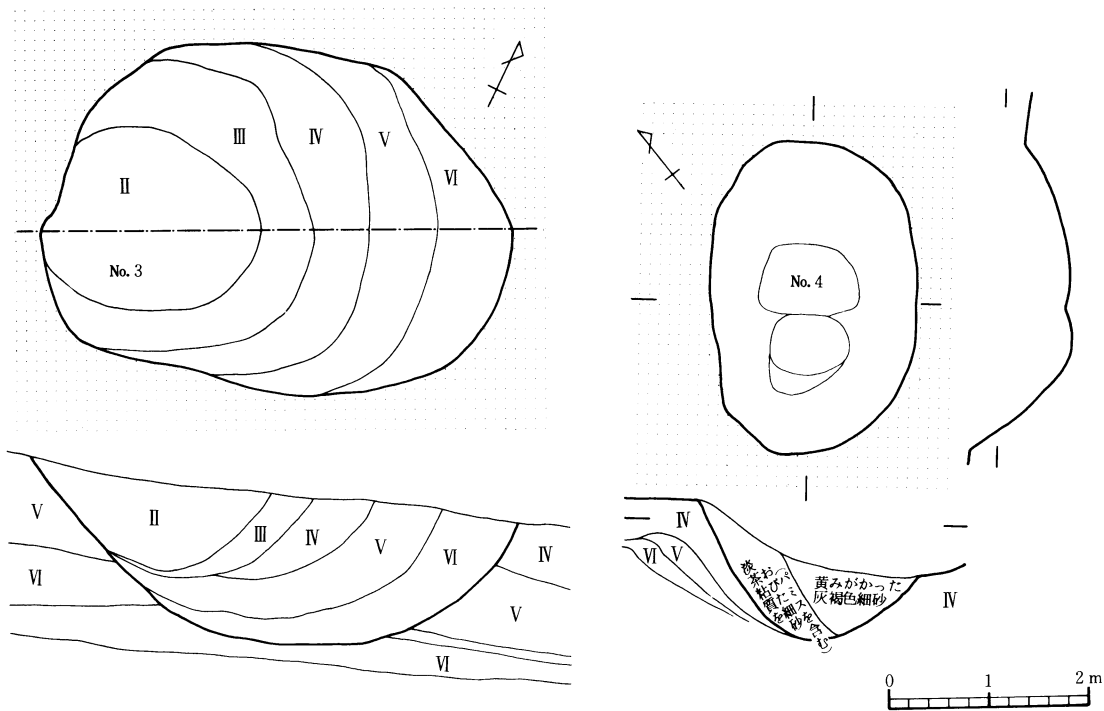
図 第 1 地点平面図 (II) (III b層地形図と 2類土器)



⑤ 4-C区及び4-Bにおける地層の境曲部について

4-C区においてはV層（茶褐色粘質土層・チョコレート色）及びIV層（黒色火山灰層）の上面において長径2.4m、短径1.8mで深さ約0.8mの境曲が見られる。II層（黄褐色パミス混入の火山灰層）III a層（青灰色土層）、IV層、V層、VI層（シラス層）が横転した状態で落ち込み状にIV層、V層、VI層まで入りこんでいる。境曲の最下部であるVI層の下面においては正常な土層と接する部分が鮮明でなくVI層下部の細砂等が混入して荒れた状態である。又当遺跡において2類の土器の主たる包含層であるIII b層（乳白色土層）は見られない。4-B区においては長径1.5m、短径1.0mのだ円形の落ち込みが見られる。落ち込み内の埋土は淡茶色で粘質を帯びている細砂（パミスを含む）と黄色がかかった細砂である。一見遺構ではないかと考えられるが、断面を見ると境曲により生じた窪地であり、傾斜の強い部分であるために人為的な落ち込みと見まがえるような埋土の状態になったものと思われる。

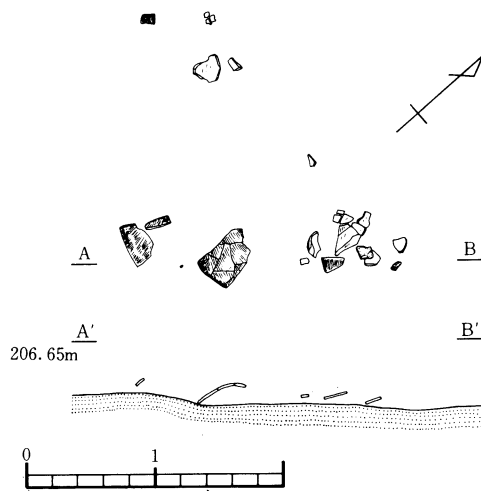
このような局所的な地層の境曲や小断層は桑ノ丸遺跡をはじめ溝辺台地には各所に見られる現象である。鹿児島大学の石川秀雄教授によると、このような地層の変化の形成時期は上部ローム層が推積したあとであり、黒色火山灰層が推積する以前ではないかということである。おそらく当時においては活発な火山活動や地殻変動が起これりこのような地層の変化が生じたものと思われる。



第12図 地層横転実測図

⑥出土遺物と土器出土状況

発掘調査に従って、出土遺物を概述すると次のようになる。近世墓に伴って15類(近世陶器)が出土している。これは、近世墓周辺と墓道にみられるものである。陶器は、竜門寺焼であり香炉など仏具の他に碗類がみられる。I層中からは、土師器(13類)が出土している。I層下部においては、12類と称する成川式土器が出土している。これらは、舌状台地の先端部に一群となって出土しているものであり中に完形壺が前記したような形で発見され窯状遺構が存在するという特異な様相を呈している。次にII層の黄褐色土層中より9類土器(阿高式土器)と8類土器(轟式土器)がみられる。いずれも2片という小量であり、特に8類土器(轟式土器)については、疑問の残る出土層位といえる。II層以下は、III a層とIII b層であり、いずれも縄文前期層に比定される層位である。当遺跡において第1地点は、このIII層が最も広くみられるところであり、その出土遺物は多い。III a層からは、6類土器(塞ノ神A式土器)と4類土器(押型文土器)がみられる。III b層からは、若干の3類土器と2類土器(前平式土器)がみられる。3類土器は、第2地点で出土したものと同類でありこれまでの形式にはみられないものである。また、3類土器と2類土器は、その出土範囲の中心は重ならない。第1地点においては、2類土器が広い範囲で最も多量に出土している。この2類土器には、円筒土器と角筒土器がみられる。2類土器は、III b層下部にみられIV層上面に密着した状態のものもある。出土状態は、ほとんどが細片化し散在して出土しているが、その場で押しつぶされた状態の完形品の出土も数ヶ所でみられる。円筒土器の完形品は、2個体出土し、角筒土器の完形に近いものは、3個体みられる。石器は、I層下部でII層上面に位置するところに磨製石鏃が2本検出されている。III b層においては、石斧と石ケン状石がみられる。特に石ケン状石は、III b層の所産と考えられ、前平式土器に伴うことが明確となった。

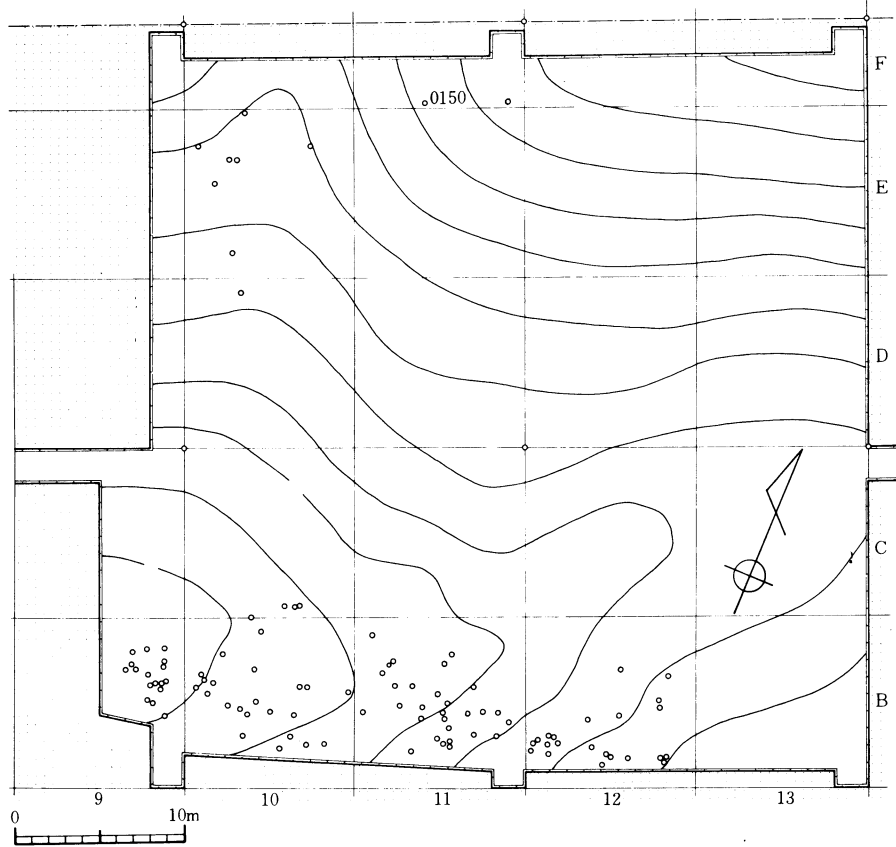


第13図 縄文式土器出土状況図

(3) 第2地点の調査

①調査の概要

第1地点から第2地点へ移行すると、8区付近で一段高くなり平坦地となっている。第1地点は、丘陵の自然地形を残しているが第2地点は平坦化され畑が営なまれている。その段は、高い所で約1.5mにおよんでいる。東方15区のところにおいてさらに一段高くなり平坦な畑地が見られる。これらの平坦地から土師器片などの散布が見られる。この段によって区限られた9区から13区までを調査の便宜上第2地点と呼ぶことにした。この平坦地は、近年の農地整備事業において重機における大がかりな整備によるものであり、遺跡の攪乱が予想された。第2地点は、9区、11区、13区にトレンチを設定し確認調査から開始した。確認調査の結果、B・C区のⅢb層に縄文式土器の包含を確認した。地形は、平坦を呈しているが農地整備事業において相当量の土の移動が行われたことが確認された。北側のD・E区は、II層まではほとんど削平されて消滅している状態である。そして削平された土は、B・C区に盛られている。B・



第14図 第2地点平面図

C区においては、縄文層（Ⅲb）に至るには約1.5m～2mの深さである。

第2地点においては、遺構は検出されていない。ただ、13C区のⅢa層において、自然石の比較的密集した状態が検出されている。

出土遺物は、縄文式土器が多種にわたってみられ10E区の一部と9～12B区に集中して出土した。9～12B区においては、3類土器と4類土器（押型文）が多量にみられる。その他の出土土器としては、2類土器（前平式土器）の角筒土器片2点と7類土器（塞ノ神B式土器）片2点が混在している。

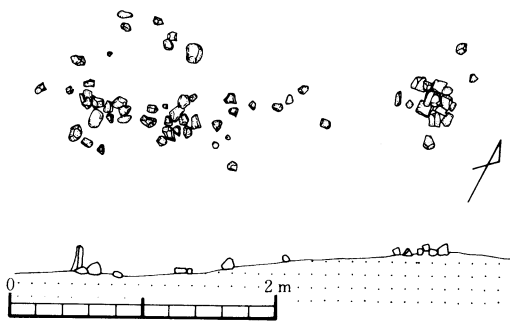
②集石について

1号、2号集石は13C区の第Ⅲa層に検出された。1号集石は握拳大の角礫、円礫17個が長径40cm、短径40cmの円形状に、一応まとまりを成して出土した。2号集石の出土状況は数個がまとまっているものの、バラツキが大きく、四方に散在し、攪乱を受けているものと思われる。また第Ⅲb層にも同様な小礫が数多くみられるが、そのほとんどが散乱して点在している。礫や集石の周辺を詳細に観察したが、木炭、灰の残存や腐蝕物の付着など、痕跡は認め得なかった。素材としては輝石安山岩がほとんどである。

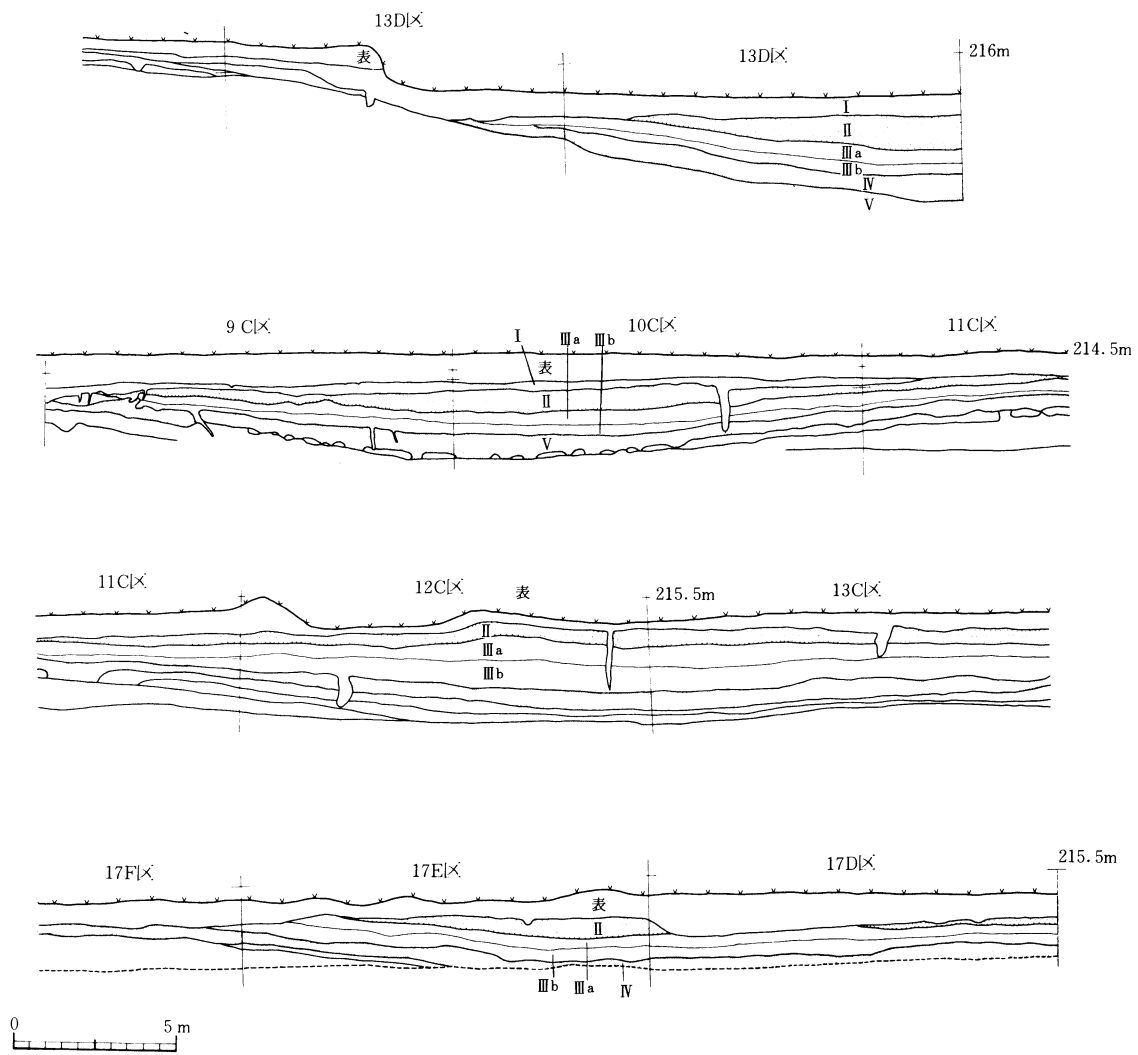
この種の集石は、本県においては縄文時代前期の遺跡である「北手牧遺跡」、「花ノ木遺跡」など、一遺跡に数基の発見例をみるが、その性格など定かでない。

③出土土器

1層出土の土師器、須恵器を除くと他の遺物は、縄文前期に比定されるⅢa層およびⅢb層からその出土がみられる。いずれも縄文前期の遺物である。Ⅲa層中より、7類土器（塞ノ神B式土器）が2片出土している。次にⅢa層とⅢb層の暫移部分に4類土器（押型文土器）が出土している。当遺跡においては、押型文土器は第1地点と第2地点の両地点にみられる。2類土器に含めた角筒土器片2片もほぼ同層位から出土している。次にⅢb層に主体を占める3類土器が多量に出土している。第1地点にも若干出土しているがⅡ類土器（前平式土器）と層位を同じくすることから近隣の文化と考えられるものである。これまで形式区分のなされていないものであり当遺跡を代表するものとなろう。



第15図 集石実測図

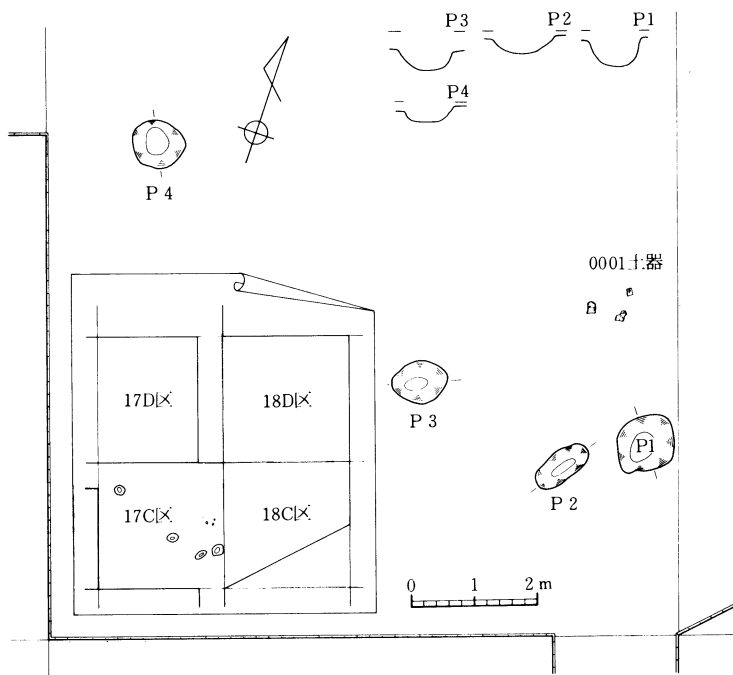


第16图 第2地点·第3地点断面图

(4)第3地点の調査

①調査の概要

第1地点の東端の15区付近で再び一段高くなり平坦な畑が営まれねいる。分布調査の折、この平坦な畑地には、若干の弥生式土器・土師器細片の散布が認められた地域である。20mピッチでトレンチを設定し確認調査をおこなった結果、15・19・21・23の各トレンチにおいては、遺物を包含するII層及びIII層はすでに削平されている状態であった。しかしながら、17区の特レンチにおいて完形に近い状態の1類土器（吉田式土器）が出土したため、この17C区を中心に平面調査を行った。この地点が、第3地点である。1類土器を包含したIII b層は、19区から以東においてはすでに削平されている。平面調査の結果、IV層下の黄褐色パミス層において、80cmから90cmの円形及び楕円形の落ち込が4ヶ所確認された。17C区においては、IV層下部の黄褐色パミス層が比較的しっかり残っているところである。このIV層下部にIV層上部の黒色火山灰層を流入した落ち込みが検出された。この落ち込みは、円形及び楕円形の人工的形状を示すものであるが、遺物は発見されず、無遺物層の黒色火山灰層が流入したものであり性格は不明である。出土遺物は、表層（耕作中）18D区から出土した磨製石斧とIII b層（17C区）より出土した1類（吉田式土器）のみで他にはみられない。

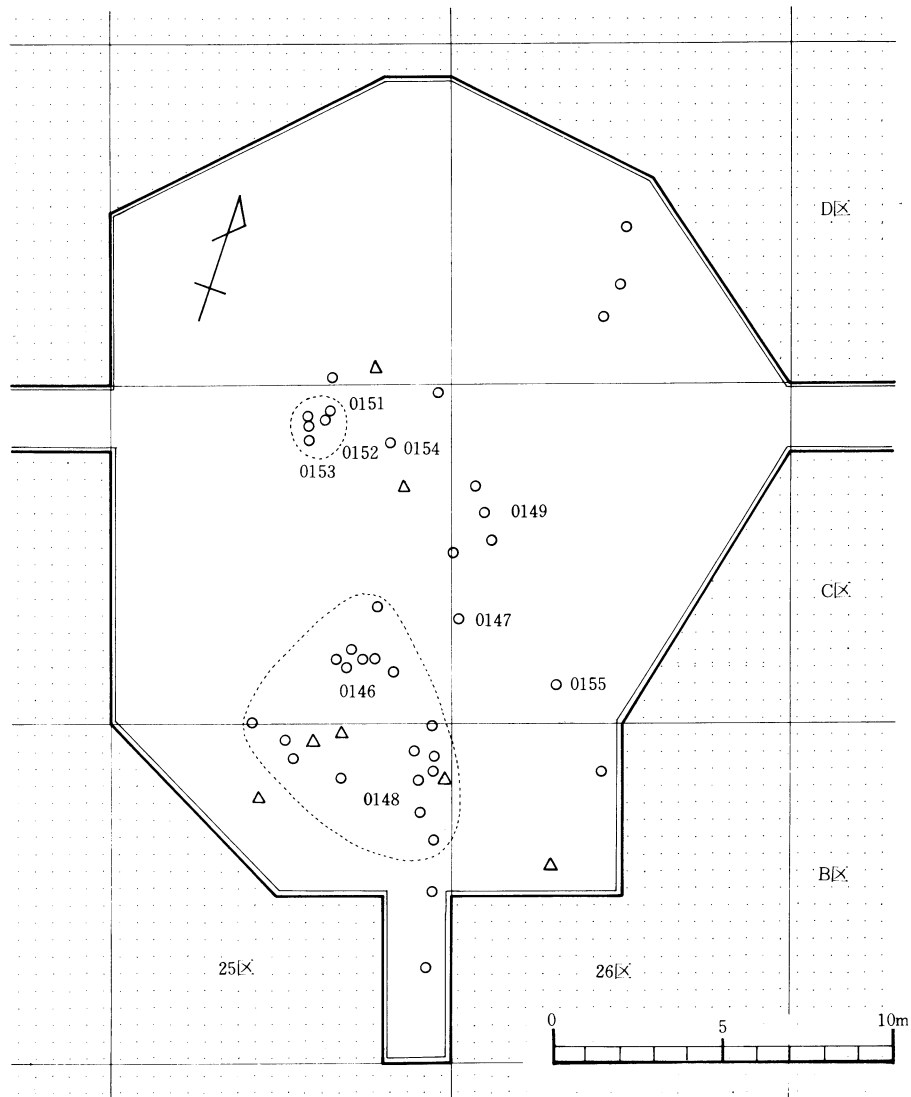


第17図 第3地点平面図

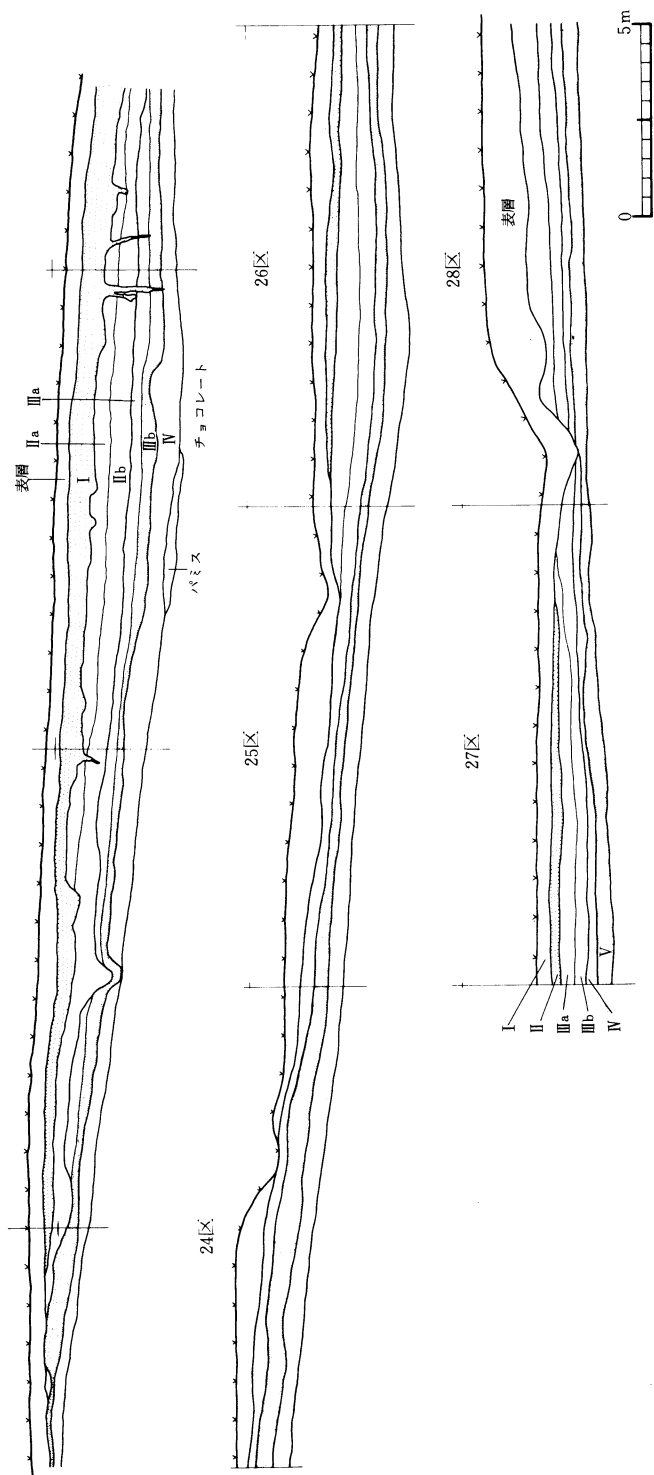
(5)第4 地点の調査

①調査の概要

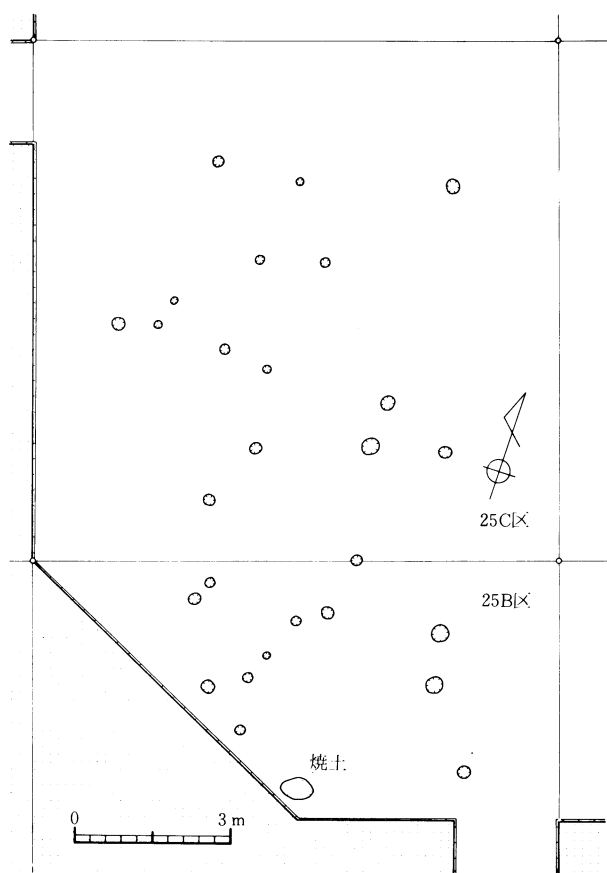
25・26区付近は、周辺の地形よりも一段低くなり南の方へ傾斜している。この谷状の窪みを形成する中央部分にトレンチ25を設定し確認調査をおこなったところ次のような遺物が出土した。I層黒色火山灰層下部から土師器杯、II層（黄褐色パミス混火山灰層）から縄文式土器（後期）片が出土した。さらに、調査を進めるとIII b層からは、縄文前期に比定される平拵II式が確認された。次に谷を横切るように東西トレンチを設定し、遺跡の範囲を確認した。確認調



第18図 第4 地点 平面図



第19図 第4地点断面図



第20図 柱穴遺構配置図

査において遺跡の範囲を限定し平面調査を行なった。その結果、II層上面において柱穴群が確認された。I層下部において土師器が確認されている。柱穴群は、II層に掘り込んでいたところからこの土師器の時期と推定される。II層中からは、ある程度まとまった量の10類土器（指宿式系土器）及び11類土器（西平式・三万田式土器）が出土している。しかしながら、遺構は確認されなかった。III a層においては25B区より6類土器（塞ノ神A式0130）が1片出土

している。III b層においては、25C区より5類土器（平拵II式0129）が1片出土した。

②柱穴遺構と焼土塊（第20図）

I層を掘り下げると、II層の黄褐色火山灰層が検出される。このII層に掘り入れて約15cmから30cmの大きさのピット（柱穴）群と一ヶ所の焼土塊が検出された。ピットは、深さ5cm程度のものであるが、その痕跡を残すだけのものもみられる。柱穴の径は、約15cm程度の小さいものと約30cm程度のものが不規則に検出され、建物跡の柱配列は確認されなかった。柱穴の検出面と同じくして、焼土塊がみられる。これは、柱穴群と関連するものと考えられるが、詳細は不明であった。尚、時期は、I層下部とII層上面にみられる13類土器の時期に比定される。

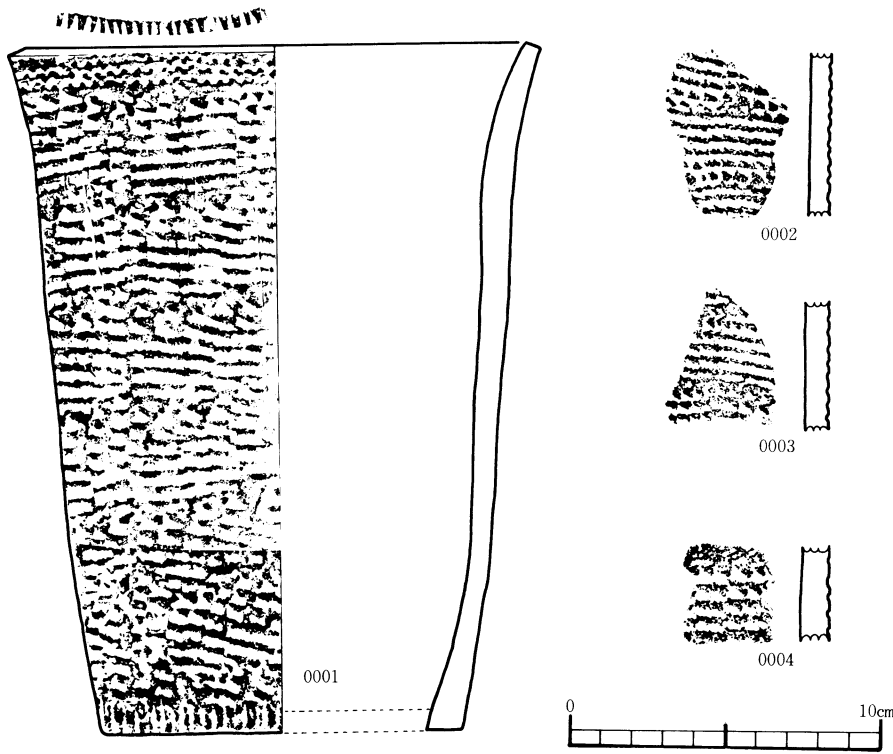
V 出土遺物

(1) 土器

出土土器は、便宜的に型式および種類ごとに記載する方法をとり1類から15類に類別した。1類から11類が縄文式土器、12類が成川式土器、13類が土師器、14類が須恵器、15類が近世陶磁器である。以下、これに従って記載していく。

① 1類 (吉田式土器) (第21図)

1類土器は、完形品1・胴部破片3が出土した。17-D区(3地点)に完形品(土器番号0001)が出土し、26-B区(4地点)に破片(0002~0003)3個が出土している。出土層位は、いずれもIII b層と呼ぶ乳白色土(微砂混粘質土)層中である。土器0001は、口縁径17cm底径11.5cmを計り高さが22.4cmの円筒形の土器である。器壁の厚みは、1.0~0.8cmである。器形は、口縁部がわずかに外反し底部近くでわずかに狭まる円筒土器である。口縁端部は、平坦でありそ



第21図 1類土器(吉田式土器)

のうえに3～4mm間隔に正確な沈線が刻まれている。口縁部外側には、横位平行に貝殻腹縁棘突による3条の沈線が施されている。器面胴部は、貝殻腹縁による横位の押し引き手法で施文されている。底部外面は、3～4mm間隔で長さ1cm程度の沈線が刻まれている。内面は、ヘラ磨き状に整形されている。0002～0004は、いずれも細片である。厚さにおいて若干の差異がみられるが、整形手法・胎土焼成とも近似点がみられ同一個体と考える。

1 類土器、器形・整形・施文からみて吉田式土器と考えられるが、当遺跡出土のものには、吉田式土器の特徴とするクサビ形貼布文はみられない。

第2表 1 類土器 (吉田式土器) 一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法 量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
0001	17-D III b	円筒土器 (完形)	口径7cm 底径4.5cm 高さ22.4cm 器厚0.8-1.0	口縁部が外反	口縁端部が平担(沈線) 口縁外側貝殻腹縁の棘突線	若干石英粒混	普通	暗褐色	同一個体?
0002	26-B III b	円筒土器 胴部			貝殻押し引き文		普通	明褐色 暗褐色	
0003	26-B III b	円筒土器 胴部			貝殻押し引き文		普通	暗褐色	
0004	26-B III b	円筒土器 胴部			貝殻押し引き文		普通	暗褐色	

② 2 類 (前平式土器)(第22図～30図)

桑ノ丸遺跡では、この2類土器が第1地点のIII b層から顕著に認められ、当遺跡を代表する土器群の一つである。2類土器には、円筒土器と角筒土器の2種類の器形がみられる。

A 円筒土器

円筒形を呈し貝殻およびヘラ状の施文具によって口縁端部に連続刺突文を施し、胴部には貝殻条痕文を施す一群の土器である。口縁端部の連続施文には、数種類のバリエーションが認められる。a 口縁端部が凹凸をなすもの、b 圧痕文を連続施文するもの、c 連続刺突文を施すものに区別される。なお、cにおける連続刺突文には、貝殻とヘラ状施文具によるものに区別され、次のように細分される。C-Iヘラ状施文具による連続刺突文(単斜) C-II貝殻施文具による連続刺突文(単斜) C-IIIヘラ状施文具による羽状連続刺突文(複斜) C-IV貝殻施文具による羽状連続刺突文(複斜)。

a 口縁端部が凹凸をなすもの(0005、0006) 口縁端部が凹凸をなし、口縁端部内面に段をもつのが特徴である。0005は、口縁端部外面に貝殻施文具による連続刺突文が施されている。いずれも口縁部が直口した円筒土器である。内面は、横方向のヘラ状削りでていねいに整形され、外面の条痕は薄い。石英粒の混入がみられる。

b 圧痕文を連続施文するもの(0007、0008) いずれも刺突の手法ではなく、押圧の手法である。0007は施文具は明確ではないが、指圧状の痕跡と考えられる。0008はハイガイ等の貝殻の肋の背の部分を押圧した痕跡を残している。また、その下段には圧痕文と並行して、貝殻縁による連続刺突文が施されている。内面は横ナデの整形がみられ、外面には斜めの強い条痕がみられる。

連続刺突文を施すもの 連続刺突文の施文具には、へら状のものと貝殻にもるものとの2種類に区別される。2類土器においては、Cが主体で数量的にも最も多い。

Cーイへら状施文具による連続刺突(単斜)(0009~0018) 刺突文は、約1.0cm巾で約0.5cm間隔に規則正しく1列に施文されている。ほとんどが左さがりに斜めに刺突されているが、なかには右さがりもみられる(0007)。0014は、巾が約2.0cmありへら切りの手法である。器形は口縁部がほとんど直口する。口径は、計測できるものが2点あり、0017が20.5cm、0018が17.3cmを計る。口縁端部は、平坦を呈するのが普通であるが、その巾は、口縁端部にへら状連続刺突文が斜に施されるため、器厚の約半分の巾である。なかには、整形上丸味を帯びるもの(0012、0016)や、へら状連続刺突文が、口縁部内壁近くまで施文され断面が三角形を呈するもの(0015)もある。また、へら状連続刺突文が施されたため、その部分が肥厚するもの(0012)もみられる。内面の整形は、口縁端部においては横ナデであり非常にていねいである。それ以下、胴部内面においてはへら削りの整形がみられる。外面の整形は、連続刺突文より以下は横位および斜位に貝殻条痕文が施されている。なかには、条痕文の強いもの(0014)もみられる。

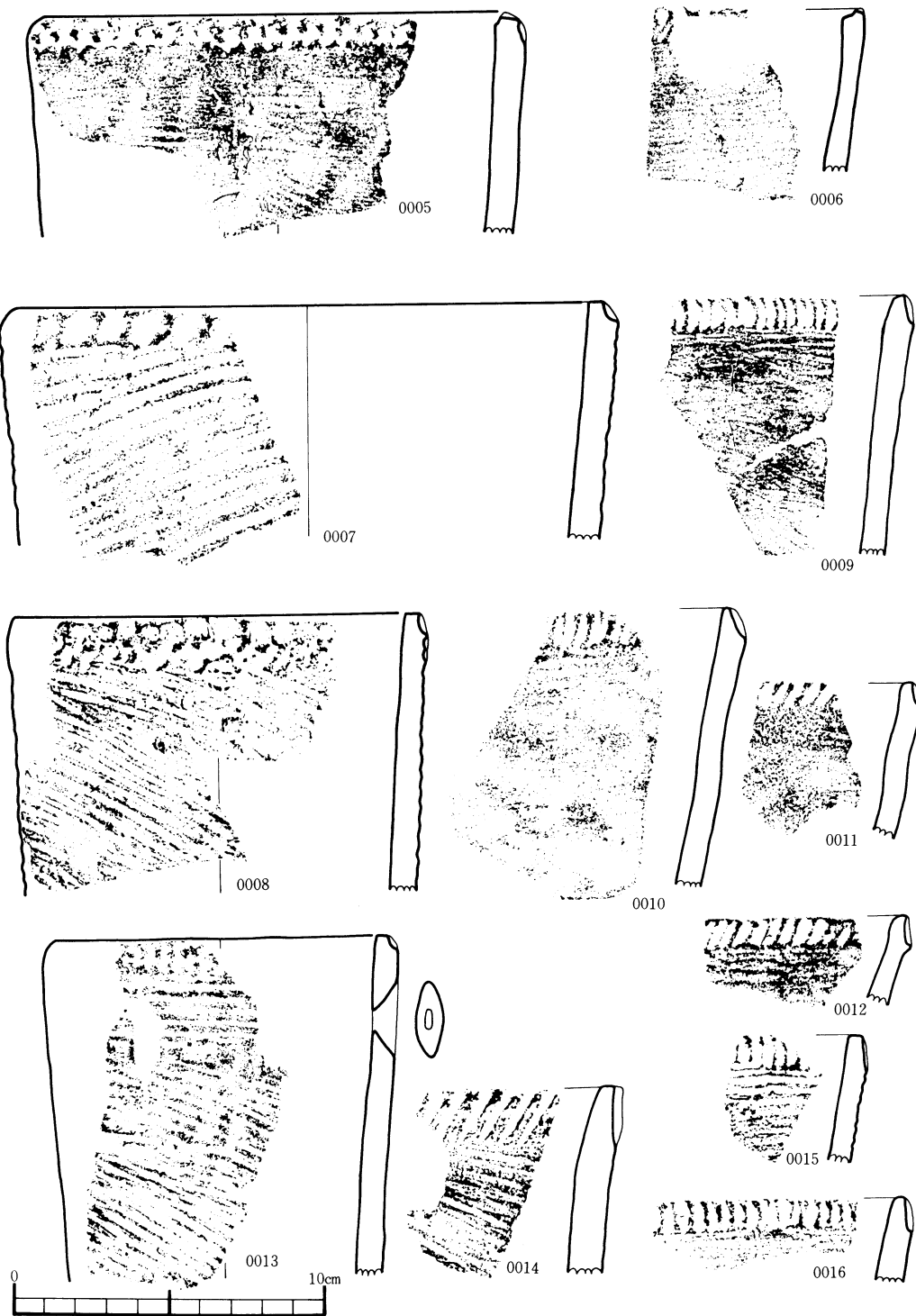
Cーロ貝殻施文具による連続刺突文(単斜)(0013、0019~0052)前記したへら状連続刺突文と同じ形で同じ部位に、貝殻の施文具で1列に連続に刺突文が施されているものである。貝殻連続刺突文は、斜位に施されるもの以外に縦位にていねいに施されるものが多い。器形は、口縁部が直口するが、口縁端部が若干内湾するもの(0029、0038)もみられる。口縁部は、平坦なもの(0021、0032)や丸味を帯びるもの(0022、0052)や断面が三角形を呈するもの(0028、0043)がある。口縁端部が平坦をなすものの中に、器形と同じ厚みの平坦を残し連続刺突文は口縁部側面に施されるもの(0045)もみられる。外面の整形は、連続刺突文以下において横位の貝殻条痕文が多い。内面は、口縁端部近くにおいて横ナデ調整をおこないそれ以下胴部中央付近までは横方向にへら削り整形がおこなわれ、以下底部までは縦方向のへら削りがみられる。0044は、底部を若干欠損しているがほぼ完形な円筒土器である。口径は17.9cm、現存高29.4cmを計り底部付近は13.8cmのまさに円筒形を呈した器形である。口縁端部には、貝施文具による連続刺突文が施されそれ以下底部まで縦・横位の貝殻条痕文がみられる。貝殻条痕文は、非常に強く荒い表現で施されている。底部外面は、欠損して若干しか残っていないが縦位の沈線は無いようである。内面は、口縁部近くは横方向のていねいなへら削りの手法がみられ、それ以下底部までは縦方向の荒いへら削り整形である。口縁部分に穿孔のあるもの(0013、0023、0044、0053)がみられる。

Cーハへら状施文具による羽状連続刺突文(複斜)(0053~0057)口縁部外側に2段にへら連続刺突文が施されるものであり、羽状に規則的に施文されている。上段の連続刺突文は、口縁端部の内面近くまで施され普通平坦面はみられない。器形は、これまでの一段の連続刺突文と同じである。0053は、比較的太い2段のへら状連続刺突文が口縁端部外側の器面に施されている。口縁端部は、内傾している。口縁径は、17.9cm、底部近くは、15.8cmの円筒形を呈している。

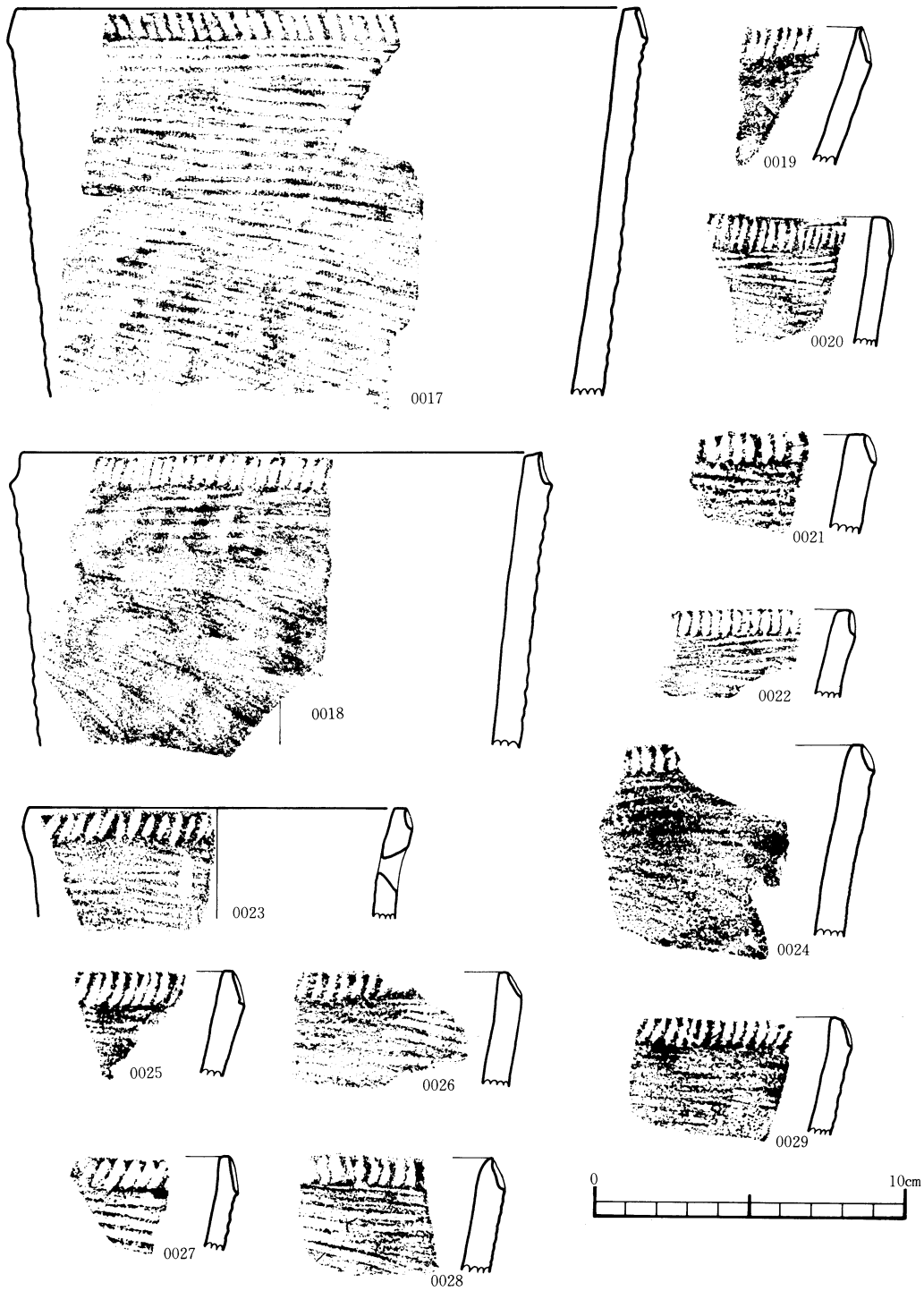
第3表 2類土器（前平式土器・円筒形）一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法 量	形 態 の 特 徴	手法・文様の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考	
0005	4 D-IIIb	口縁部	口径 1.6cm 器厚 0.9cm	口縁直口	口縁端部凹凸、胴部の条痕うすい	石英細粒混	良好	黄褐色	口縁部の凹凸の下に貝による連続刺突文	
0006	2 E-IIIb	口縁部	器厚 0.5~0.7cm	口縁直口・内側に段をもつ		石英細粒混	良好	黄褐色	口縁端の凹凸の下にヘラによる連続刺突文	
0007	3 D-IIIb	口縁部	口径 19.7cm 器厚 1.0cm	全体にわずかに外反	指圧文・条痕が強い 口縁部貝殻助背の押圧条痕が強い	内面:石英粒混 外面:石英粒混	普通	暗褐色		
0008	1 B-IIIb	口縁部	口径 13.5cm	口縁直口		石英小粒混	良好	赤褐色	貝助背押圧文の下に貝連続刺突文	
0009	3 D-IIIa	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口	ヘラによる連続刺突文	石英粒混	良好	黒褐色		
0010	4 D-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	全体にわずかに外反		石英粒混	普通	褐色		
0011	4 D-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm				普通	褐色		
0012	5 D-IIIb	口縁部	器厚 0.6cm	連続棘突のところか厚い		石英・雲母混	普通	黒褐色		
0013	2 C-IIIb	口縁部・胴部	口径 11.5cm 器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	口縁:黒褐色 胴部:赤褐色	2.5cm×0.9cmの穿孔がみられる。口縁部近くススが多い	
0014	4 B-IIIa	口縁部	器厚 1.1cm	棘突より連続ヘラ切口縁部わずかに外反		石英粒混	普通	黒褐色	連続ヘラ切り	
0015	4 D-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm			石英粒混	良好	褐色		
0016	3 D-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm			石英粒混	良好	黒褐色		
0017	5 D-IIIb	口縁部	口径 20.5cm 器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	良好	黒褐色		
0018	3 D-IIIb	口縁部	口径 17.3cm 器厚 1.0cm	口縁直口		石英粒混	良好	黒褐色		
0019	1 D-IIIa	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		貝による連続刺突文	石英・雲母混	普通	赤褐色	
0020	5 D-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口			石英混	普通	赤褐色	
0021	4 D-IIIb	口縁部	器厚 1.0cm	口縁直口			石英混	普通	褐色	
0022	4 D-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口			石英・雲母混	普通	黒褐色	
0023	4 D-IIIb	口縁部	口径 12.5cm 器厚 0.7cm	口縁わずかに外反			石英混	普通	褐色	1.7cm×0.5cmの穿孔がみられる
0024	3 D-IIIb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口			石英粒多し	普通	黒褐色	部分的に赤褐色
0025	4 C-IIIb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口	石英・雲母		良好	黒褐色		
0026	3 D-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口	石英混		普通	褐色		
0027	5 C-IIIb	口縁部	器厚 0.6cm	口縁わずかに内反	石英混		普通	褐色		
0028	5 C-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口	石英粒混		普通	黒褐色		
0029	5 E-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁わずかに内湾	石英粒混		普通	黒褐色	スス付着がみられる	
0030	4 C-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口	石英粒混		普通	赤褐色		
0031	4 D-IIIb	口縁部	器厚 0.6cm	口縁わずかに内湾			普通	黒褐色		
0032	1 D-IIIb	口縁部	器厚 1.0cm	口縁直口			普通	赤褐色		
0033	4 D-IIIb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口		普通	黄褐色			
0034	3 E-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口	石英粒混	普通	赤褐色			
0035	3 D-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口	石英粒混	良好	黒灰色			
0036	4 D-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口・端部肥厚	石英粒混	普通	黒褐色			
0037	3 C-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口	石英粒混	普通	赤褐色			
0038	4 B-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁内湾	石英粒混	普通	黒褐色			
0039	4 D-IIIb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口	石英粒混	普通	黄色			

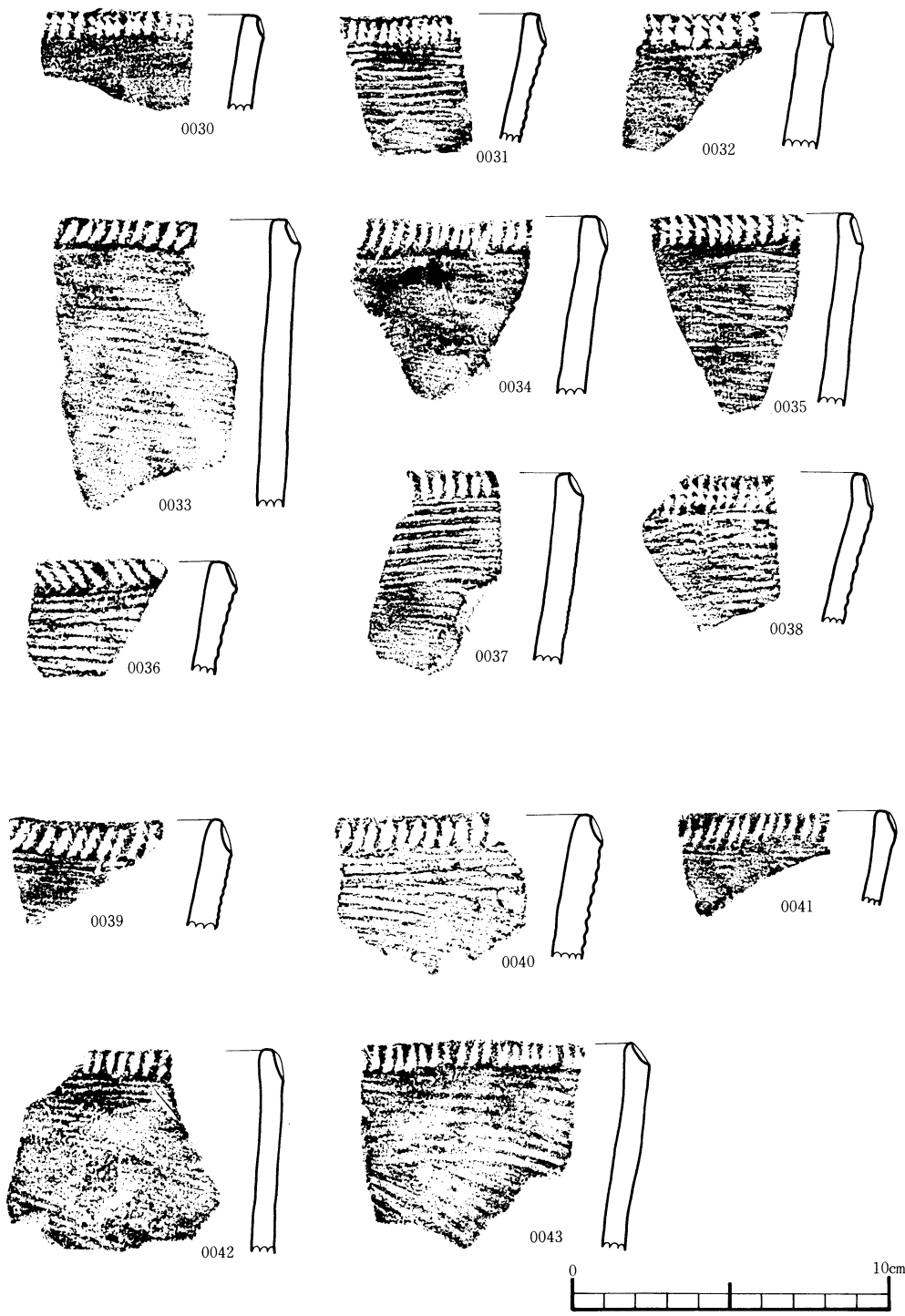
遺物番号	出土区層位	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0040	4 B-IIIb	口縁部	器厚 1.0cm	口縁直口	貝による連続刺突文	石英粒混	普通	赤褐色	
0041	4 B-IIIa	口縁部	器厚 0.6cm	口縁直口		石英粒混	普通	暗褐色	
0042	4 C-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		石英粒混	普通	黄褐色	
0043	3 D-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		石英粒混	普通	暗褐色	
0044	4 C-IIIb	口縁部・胴部	口径 19.7cm 現存高 29.4cm	口縁直口			普通		
0045	4 C-IIIb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口		石英粒混	普通	黒褐色	
0046	4 C-IIIb	口縁部	器厚 1.0cm	口縁直口		石英粒混	普通	赤褐色	
0047	4 D-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	褐色	
0048	3 D-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		石英粒混	普通	黒褐色	
0049	4 D-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	黄褐色	
0050	4 D-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	黄褐色	
0051	4 C-IIIb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口		石英粒混	普通	黄褐色	
0052	3 D-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	黄褐色	
0053	4 C-IIIb	口縁部・胴部	口径 17.9cm 現存高 26.5cm	口縁直口 口縁施文のところ肥大		石英粒混	普通	口縁近く黒褐色 色他は赤褐色	2.9×0.7の穿孔が3孔
0054	3 D-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		石英粒混	普通	黒褐色	
0055	2 E-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口	ヘラによる羽状棘突	石英粒混	良好	黄褐色	
0056	5 D-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口		石英粒混	普通	赤褐色	
0057	3 C-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英粒混	普通	黒褐色	スス付着
0058	5 D-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口	貝による羽状の棘突		普通	黒褐色	スス付着
0059	4 D-IIIb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口			普通	赤褐色	
0060	3 D-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁直口		石英・雲母混	普通	黒褐色	
0061	4 D-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁直口わずかに肥厚			普通	黒褐色	
0062	3 D-IIIb	底部	底部径 14.8cm 底部厚 1.8cm		底部端部に縦沈線		普通	黄褐色	
0063	3 D-IIIb	底部	底部径 8.8cm 底部厚 1.1cm		底部端へラ削り	石英粒混	普通	黄褐色	
0064	3 C-IIIb	底部	底部径 13.5cm		底部端まで条痕		普通	黄褐色	
0065	3 D-IIIb	底部	底部径 6.9cm		底部端まで条痕	石英粒混	普通	黒褐色	
0066	4 D-IIIb	底部	底部径 10cm		底部端へラ削り	石英粒混	普通	赤褐色	
0067	4 C-IIIb	底部	底部径 12.3cm		底部端まで条痕		普通	赤褐色	
0068	3 C-IIIb	底部	底部径 10.8cm		底部端へラ削り	石英粒混	普通	黒褐色	
0069	3 C-IIIb	底部	底部径 12cm		底部端へラ削り		普通	赤褐色	
0070	4 D-IIIb	底部	底部径 11cm		底部端へラ削り		普通	黒褐色	
0071	3 D-IIIb	底部	底部径 11.8cm		底部端まで条痕		普通	赤褐色	
0072	2 D-I	底部	底部径 11cm 底部厚 1.3cm		底部端へラ削り	石英・雲母	普通	黄褐色	
0073	3 C-IIIa	底部	底部径 10.2cm 底部厚 0.9cm		底部端へラ削り		普通	赤褐色	
0074	3 D-IIIb	底部	底部径 10.2cm 底部厚 0.9cm		底部下端まで条痕		普通	黄褐色	



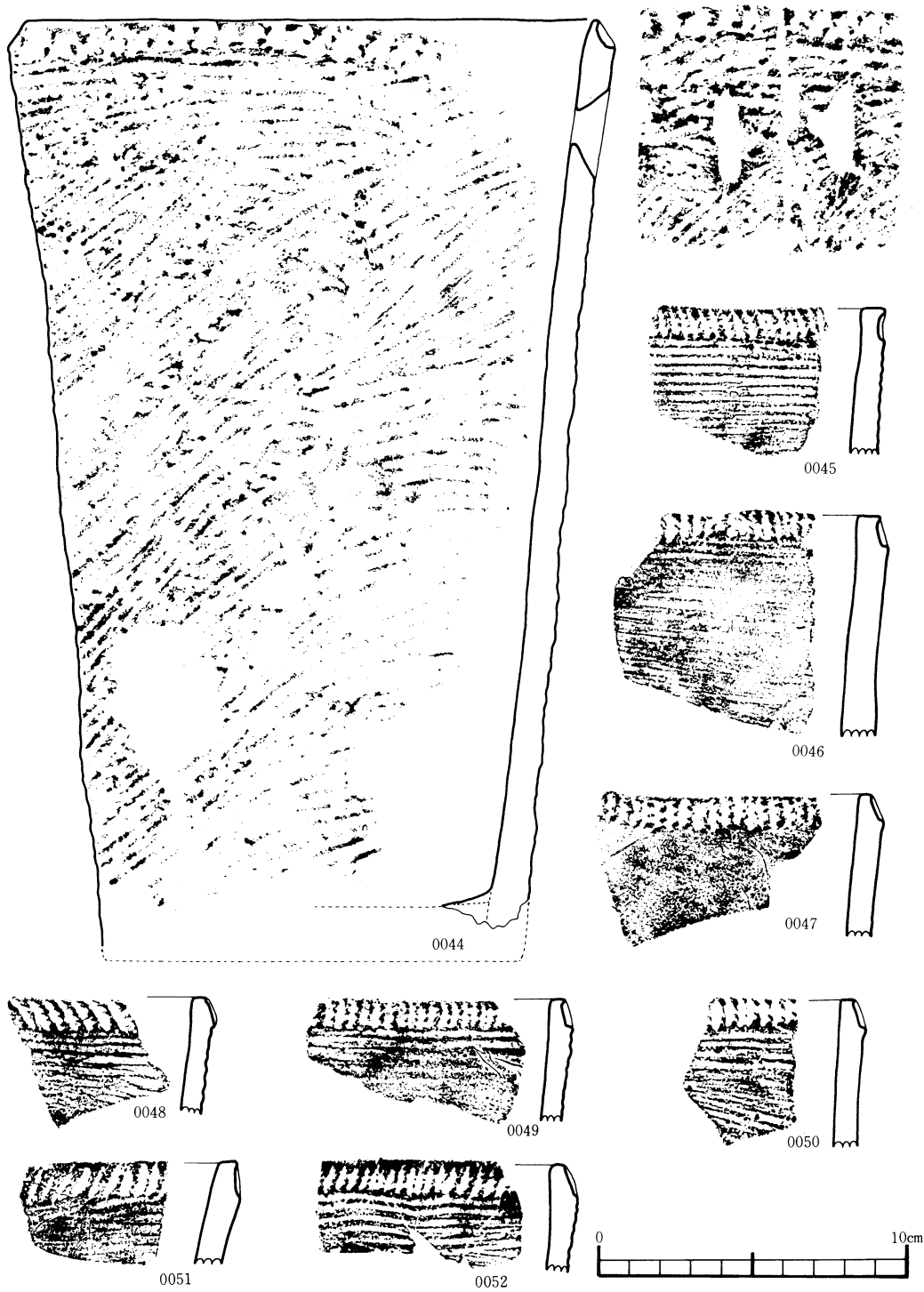
第22図 2類 (前平式土器—I)



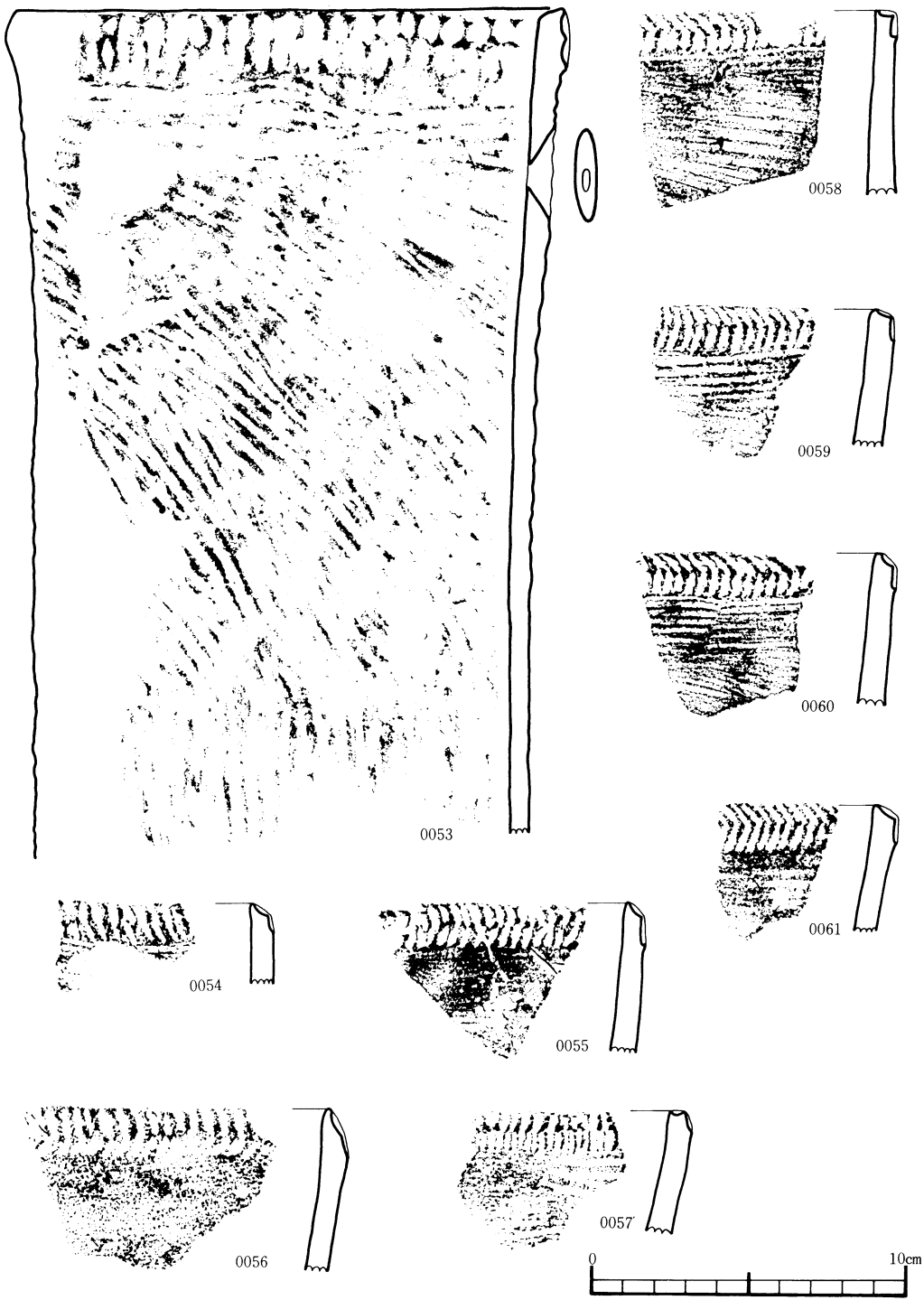
第23圖 2類 (前平式土器—II)



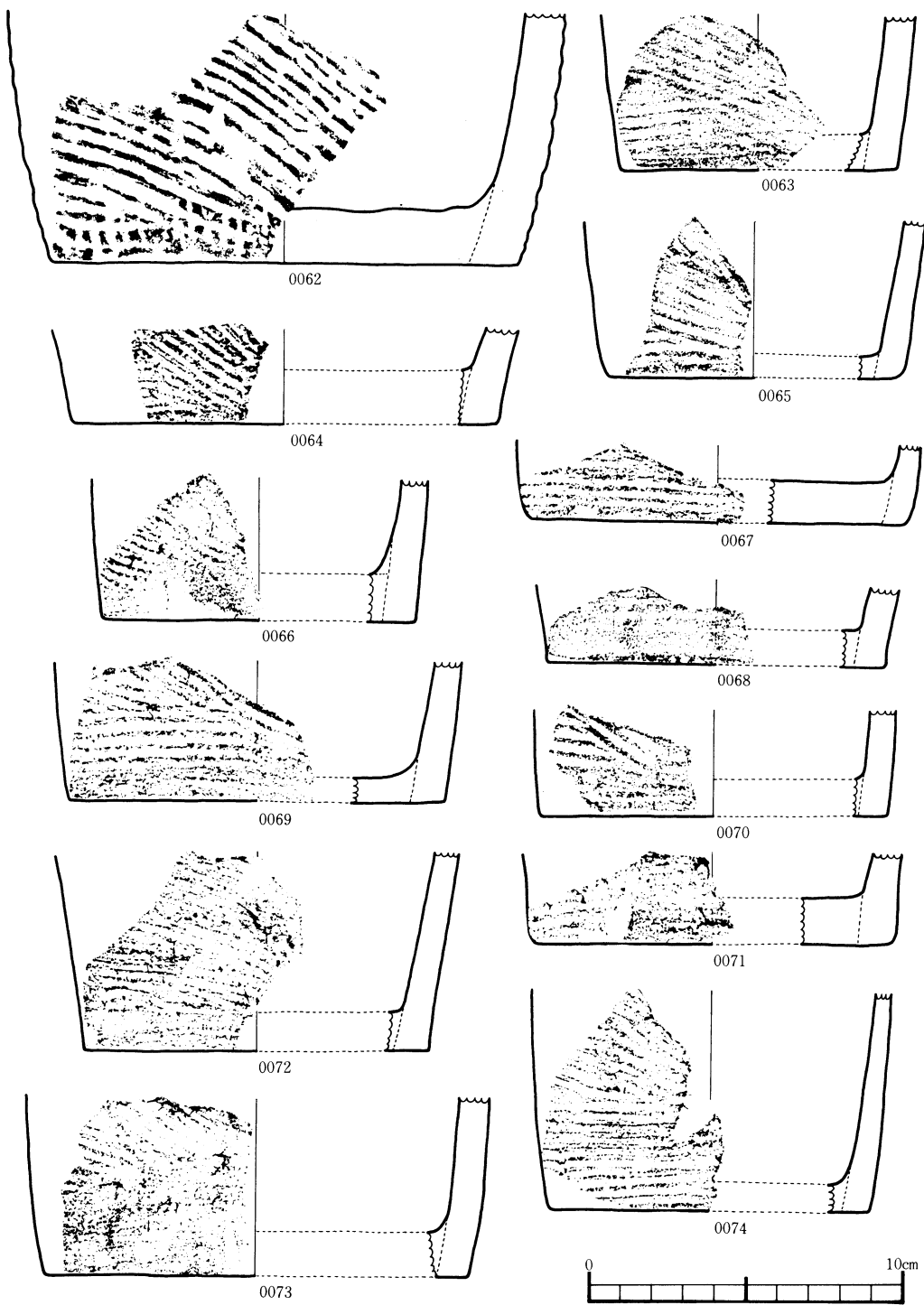
第24図 2類 (前平式土器—Ⅲ)



第25図 2類 (前平式土器—IV)



第26图 2類 (前平式土器—V)



第27図 2類 (前平式土器—VI)

器面には、口縁部付近では横方向に、胴部は斜方向に底部付近では縦方向に太い貝殻条痕文が施されている。

D—二貝殻施文具による羽状連続刺突文施文具に貝殻を使用している以外は、C—ハにみられるものとはほとんど同じである。

2 類土器の底部

底部径は、6.9cmのものから14.8cmの大きさまでみられるが10cm前後のものが多い。底部は、平底であり正円に近い平面を呈する。底部と胴部の接着は、底部円盤の外側に粘土帯を貼付ける方法をとっている。底部からわずかにふくらみをもって胴部に拡がって円筒形をなすものと底部からふくらみをもたずに直線的に胴部へ移行するものとがみられる。底部外側面の整形は、下端まで貝殻条痕が施されそのうえから縦の沈線が施されるもの(0062)と貝殻条痕が施され下端においては横方向に条痕を施し器形を整形するもの(0065、0067、0074)と下端においてはヘラ削りで器形を整形するもの(0063、0066、0073)などがみられる。底部内面は、ヘラ削りの整形がみられる。

穿孔のある土器(0013、0023、0044、0053)

口縁部近くに、穿孔のあるものがみられる。外面から凸レンズ形の平面形に穿孔がおこなわれ内面に至ると狭い孔で貫通するものである。0013は2.5cm、0023は1.4cm、0044と0053が3cmの長さの穿孔である。いずれも貝殻条痕整形後、荒いタッチで穿孔されている。これらの穿孔は、0013と0044をみると二孔が対におこなわれ、穿孔と穿孔の間が縦方向に破れている。穿孔と穿孔の間は、0013が3.7cm、0044が3.5cmから4cmを計る。0044には、2対の穿孔が3ヶ所におこなわれ、いずれも穿孔間が縦に破れている。

B 角筒土器

当遺跡においては角筒土器が、第1地点と第2地点をあわせて9点出土している。第1地点出土のものは、2類(前平式土器)の円筒土器に伴って出土したものである。底部を除きほぼ全形を知り得るものが3個体(0075、0076、0079)ある。そのほかに口縁部片が2点、胴部片が1点、底部片が1点出土している。また、第2地点においては、胴部片2点がみられる。当遺跡でみられる角筒土器は、器形および施文上の共通性がみられるが、細部の施文においてそれぞれ特徴がみられるので個々について説明する。

0075の土器 底部を除きほぼ全形を知り得るものである。口縁端部において一辺が12cmの方形を呈する角筒土器である。現存高は、18.5cmを計る。方形の角部において陵をもち、辺の中央部が最も低くその差は2.1cmを計る。口縁端部は、若干内傾する平坦面をもちそのうえには規則正しいキザミが施されている。口縁部外面には、約1.7cmの文様帯がみられその境に並行する2列の貝殻腹縁刺突線が施されている。文様帯中には、貝殻の肋部2つを施文具とした貝殻連続刺突文が施されている。口縁部文様帯以下胴部にかけては、地文に規則正しい貝殻条痕文がみられる。この条痕文は、円筒土器にみられる荒いタッチの縦横方向の条痕文ではなく約0.2

cm程度間隔に平行する沈線文(凹線文)である。角部においては、巾約1cmのところ規則正しく上方へ施文するものであり条痕自体も文様を意図したものと考えられる。角部には、2個繋ぎの楕円形の連続刺突文が縦位に施されている。胴部の条痕文の上から文様が施文されている。口縁部文様帯の貝殻腹縁刺突線の一部を一辺に利用した鋸歯文が3個連続して施文されている。鋸歯文は、他の2辺も貝殻腹縁刺突線である。三個の鋸歯文の頂点からは下方に2条1組の平行する波状文がみられる。

0076の土器 底部を除きほぼ全形を知り得るものである。口縁端部では一辺が10cmの方形を呈するが、胴部においては径11.7cmの円筒形になるものである。現存高は、22.5cmを計る。方形の角部においては陵をもち中央の低いところとの差は、0.7cmである。口縁端部は、0075と同じく若干内傾する平坦面に規則正しくキザミが施されている。同じく口縁部には文様帯がみられ境には貝殻腹縁刺突線(1条)が施されている。文様帯には、貝殻の肋部1個を施文具とした貝殻連続刺突文が施されている。口縁部文様帯以下胴部にかけては、地文に貝殻条痕文がみられるが、規則正しく水平に施された条痕文はむしろ凹線文ともいべきものでいねいに施文されたものである。角部と一辺の中央部には、2個繋ぎの楕円形の連続刺突文が縦位に施されている。角部から発する2条の平行凹線文は、中央部に集りて菱形を作っている。

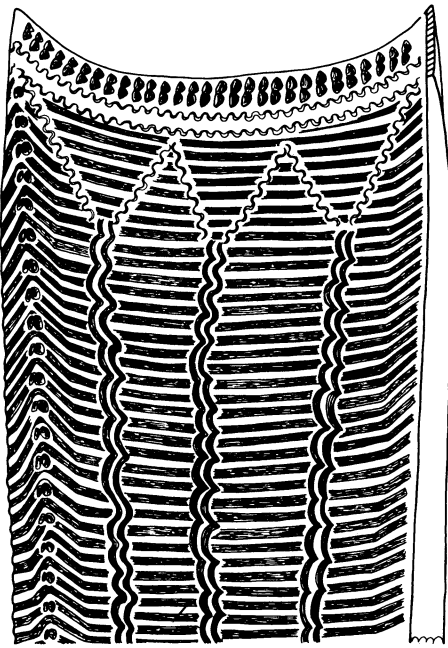
0077の土器 角筒土器の口縁角部の一部である。口縁端部は、若干内傾する平坦面に規則正しいキザミが施されている。口縁部には、一条の貝殻腹縁刺突線によって区切られた文様帯があり貝殻の肋部3個を施文具とする貝殻刺突文が施されている。角部には、連続刺突文が縦位に施されている。地文の貝殻条痕文は、角部においては斜位に施され中央部では水平に施されている。貝殻条痕文のうえから巾0.5cmのクシ描き沈線が縦位に施されている。

0078の土器 胴部の一部であるが、0077の土器と類似するもので同一個体と考えられる。施文はほとんど同一であるが、縦位に施されるクシ描き沈線が波状を呈するところがみられる。

0079の土器 底部を除きほぼ全形を知り得るものである。口縁部において一辺が10.3cmの角筒土器である。現存高は、26.5cmを計る。角部において陵をもち最も低い中央部との差は1.8

第4表 2類土器(前平式土器・角筒形)一覧表

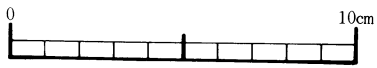
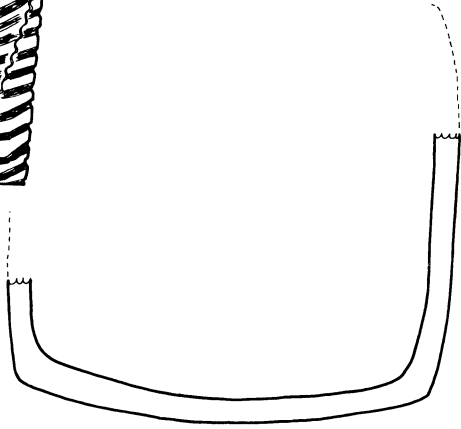
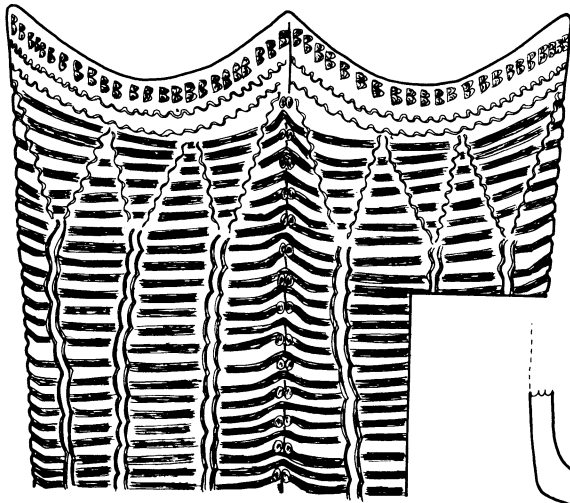
遺物番号	出土区層位	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0075	5D-IIIb	口縁部 胴部	口縁部一辺長 12cm 器厚 0.8cm					黒褐色	
0076	3D-IIIb	口縁部 胴部	口縁部一辺長 10cm 器厚 0.8cm	上方角筒、下方円筒		石英粒混	普通	黄褐色	
0077	4B-IIIb	口縁部	器厚 0.4cm			石英粒混	良好	茶褐色	口縁部一辺長(推定)9cm
0078	4B-IIIb	胴部						黒褐色	
0079	4B-IIIb	口縁部 胴部	口縁部一辺長0.3cm 器厚 0.8cm						
0080	5D-IIIb	底部	底部厚 1.3cm		底部側面に縦の沈線	石英粒混	良好	褐色	
0081	4B-IIIa	口縁部	器厚 0.5cm				良好	赤褐色	
0082	13B-IIIa	胴部	器厚 0.5cm	器壁が薄い	地文に斜貝殻条痕 縦並列に貝殻刺突文	石英粒混	良好	黄褐色	
0083	13B-IIIb	胴部	器厚 0.9cm		地文に斜貝殻条痕 縦並列に貝殻刺突文	石英粒混	良好	黄褐色	



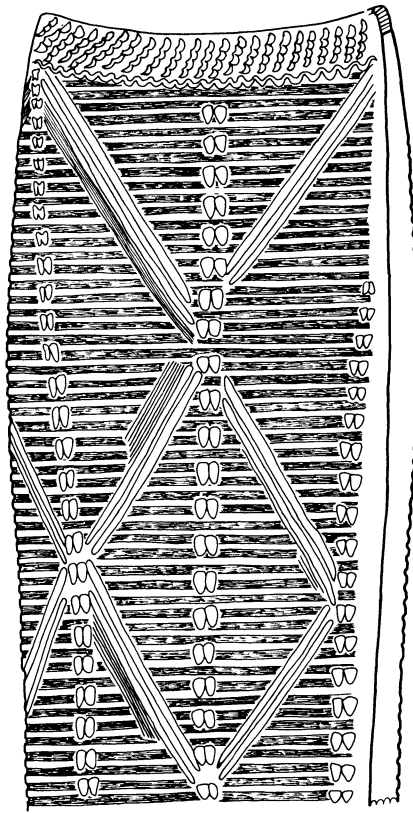
0075



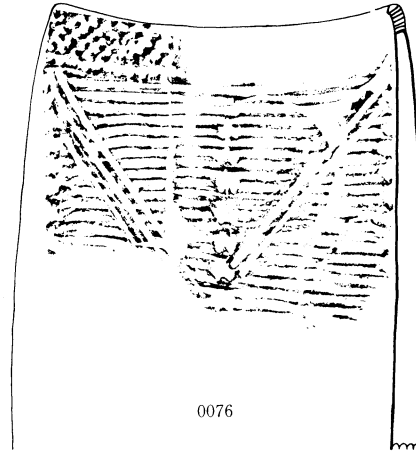
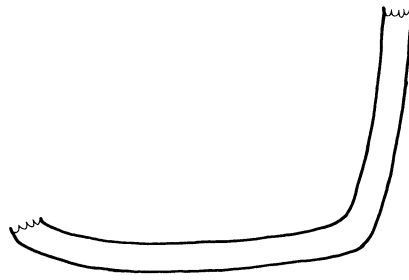
0075



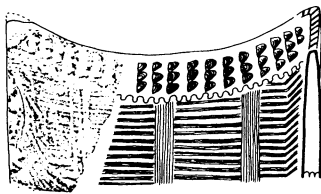
第28图 2類 (前平式土器— VII)



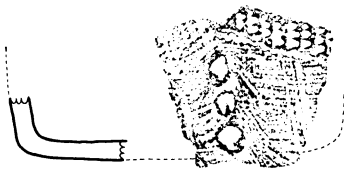
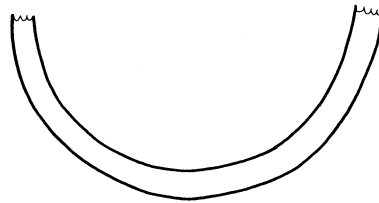
0076



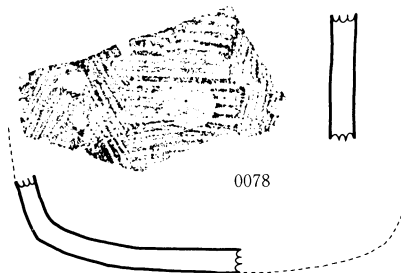
0076



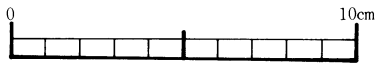
0077



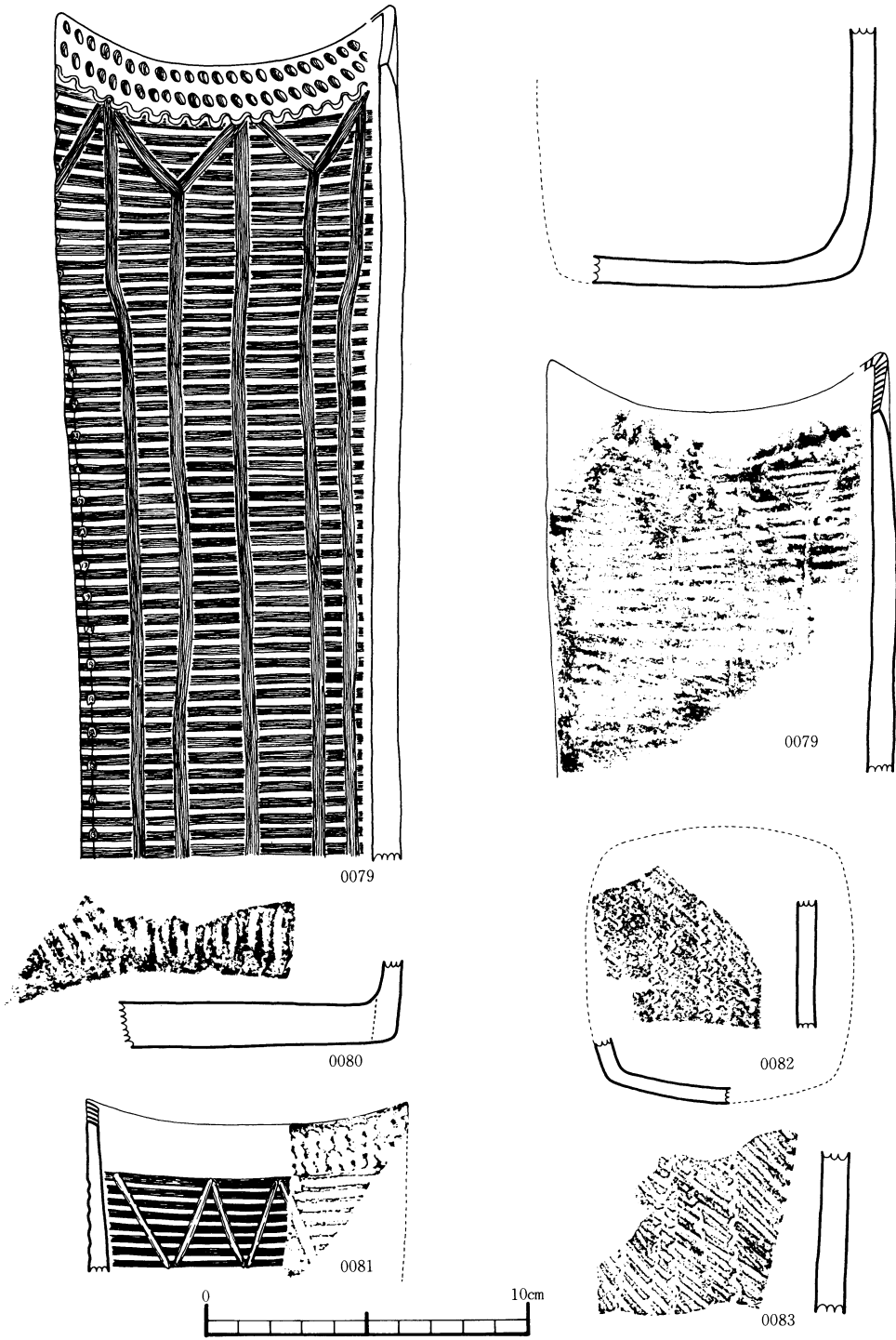
0077



0078



第29図 2類 (前平式土器—VIII)



第30图 2類 (前平式土器—IX)

である。口縁端部は、若干内傾する平坦面をもちその上には規則正しいキザミが施されている。

口縁部には、一条の貝殻腹縁棘突線によって区切られた文様帯があり2列の連続する棘突文が施されている。角部には、縦位に棘突文が施されている。器面には、水平にでない凹線文が施されている。凹線文は、貝殻施文具によってでないに施された条痕の一種と考えられる。口縁部文様帯の下方には、ヘラ状の施文具による鋸歯文が描かれている。鋸歯文の頂点からは、下方に直線のヘラ描と考えられる直線文が施されている。

0080の土器 当遺跡で見られる唯一の角筒土器の底部である。底部粘土版の外側に粘土帯を貼り付ける方法がとられている。底部外面には、縦の沈線がみられる。底部底の厚さは1.3cmを計りかなり厚い。

0081の土器 角筒土器の口縁角部の一部である。口縁端部は、若干内傾する平坦部に規則正しいキザミが施されている。口縁部には文様帯を形成するが、貝殻腹縁棘突線の区切りはみられない。文様帯には、貝殻の2つの肋を施文具にして2段の棘突文を施す。器面には、地文として貝殻による凹線文がみられ、そのうえからヘラ状施文具による鋸歯文が描かれている。

0082と0083は、いずれも第2地点出土のものである。胴部のみであるが、これまでの第1地点出土のものとは若干異なる整形、施文と考えられる。器面は、非常に硬質であり斜めの条痕がみられる。そのうえから貝殻腹縁を棘突した線文が施されている。

③ 3類 (0084~0118) (第31図~33図)

第3類に類別した土器は、これまでに設定された土器形式にはみられない土器群である。第1地点の1-D、2-D区を中心に出土する一群と、第2地点の10-B・11-B区を中心に出土する一群がみられる。第1地点においては、IIIb層から出土し、第2類(前平式土器)と出土層位を同じくする。若干、上層のIIIa層からは押型文が出土している。第2地点では、第3類の土器群のみがIIIb層から出土しているが、その上層のIIIa層において押型文が出土している。しかしながら第2地点においては、IIIa層とIIIb層の区別が難しい層序をなし、押型文もIIIb層の上部にみられる部分もある。第3類土器の器形は、口縁部が内湾している。口唇部は、平縁を呈し内傾しているのが特徴である。底部の出土は少ないが、平底を呈し胴部に移行するにしたがってかなりふくらみをもつ。第3類としてあげた土器は、器形・施文上いずれも類似点がみられるが、文様の施文において6つのタイプに細分される。

3-a類 (0084・0085) 第2地点(0084)と第1地点(0085)に口縁部が1点ずつ出土している。器形は、口縁部が内湾する鉢状のものであり口径は24cmを計る。口唇部は、平縁で内傾している。器壁は、均厚であり1.3cmを計る。文様施文は、口縁部外面に5本組のクシガキ沈線が口縁部に沿って横走している。沈線の間は、0.2cmとかなり太いものである。それらが5本1組で2cm程度の文様帯を作っている。この文様帯以下胴部にかけては、縦走する沈線が施されている。縦走する沈線は、5本のクシガキ沈線をもってゆるやかな流水文を描いているが、横走する口縁部をめぐる沈線と同じ施文具と考えられる。内面は、大粒の砂粒(石英)を

含むがへら磨き状にていねいな整形で光沢がみられる。

3-b類(0086) 第2地点出土のものであるが、第3類土器中においては特異な器形・文様である。胴部付近で細く、口縁部にいくにつれて広がる挿鉢状の器形を呈している。口縁端部外面は、わずかながら肥厚する。口唇部は、平縁である。口縁部径は19.9cm・器厚は1.0cmを計る。口縁端部外面の肥厚部分には、3本組のクシ状の施文具で斜方向に沈線が施されている。肥厚部分の連続斜沈線の施された巾は、2.0cm～2.5cm程度あり、器厚は1.4cmを計る。

3-c類(0087～0092) すべて第2地点の出土であるが、0088を除くと同一個体とも考えられる。器形は、口縁部が内湾し口唇部は平縁で内傾するもので第3類土器の基本的器形である。4条あるいは5条のクシ状の施文具で、巾1cm程度の長さに沈線を施したものである。沈線の初めと終りがていねいであり、沈線自体強く施文されている。クシ描き沈線が羽状に施文されるところと斜めに施文しながら横方向に連続施文されるところがあり規則性はない。器厚は、1.2cm～1.4cmを計る。胎土に石英を若干含み焼成は良好である。色調は、赤褐色から黒褐色を呈している。内面は、へら磨き状にていねいに整形され光沢を帯びている。

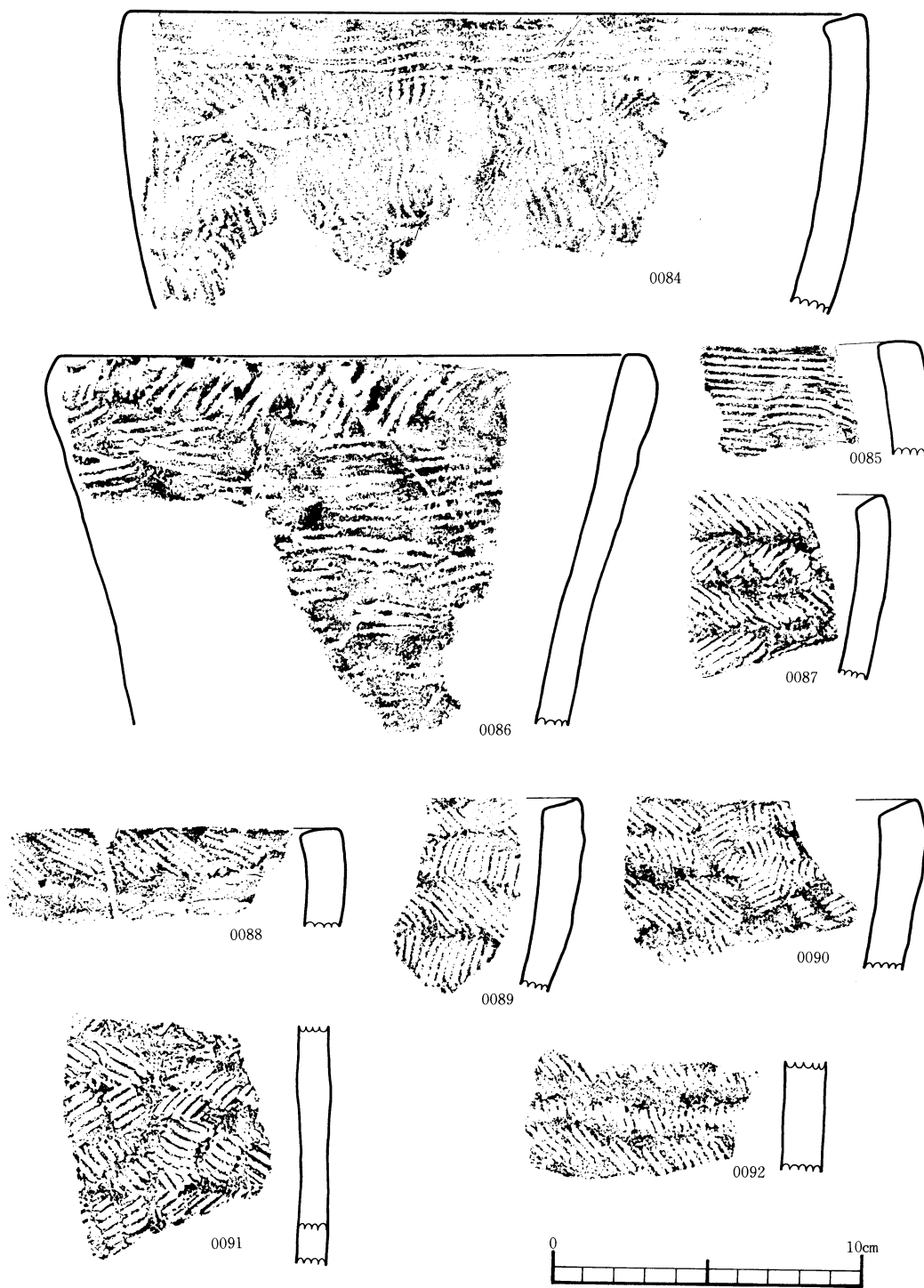
3-d類(0093・0096～0111) 第1、第2両地点から出土している器形は、口縁部が直口し口唇部が内傾するもの(0093・0096・0097)と、口縁部が内湾し口唇部が内傾するもの(0106～0108)の両方がみられる。底部径16.7cmのかなり大形の底部が出土している。底部厚みは、0.8cmで薄い。底部と胴部片からみると、胴部においてかなりふくらむ器形と推定される。外面は凹凸がみられるが、整形はていねいであり、内外面ともへら磨きの手法がみられ光沢を帯びている。文様は、クシ状の施文具で器面に無雑作に浅い沈線を施文したものである。0101～0105は、沈線の間隔がそろったクシ状の施文具を使用している。他のものはクシ描き沈線ではあるが不ぞろいである。

3-e類(0094・0095・0013～0015) 第1・第2両地点から出土している。第1地点出土のものに口縁部が直口する(0094・0095)器形がみられる。器面の文様は、クシ描き沈線が羽状に施されているものである。0094と0095は、3条のクシ状施文具で等間隔に強い沈線が羽状に施こされているが、0112～0114は、不ぞろいのクシ状施文具で羽状を施している。3-e類は、クシ描き沈線で羽状文を施文しているのが特徴である。

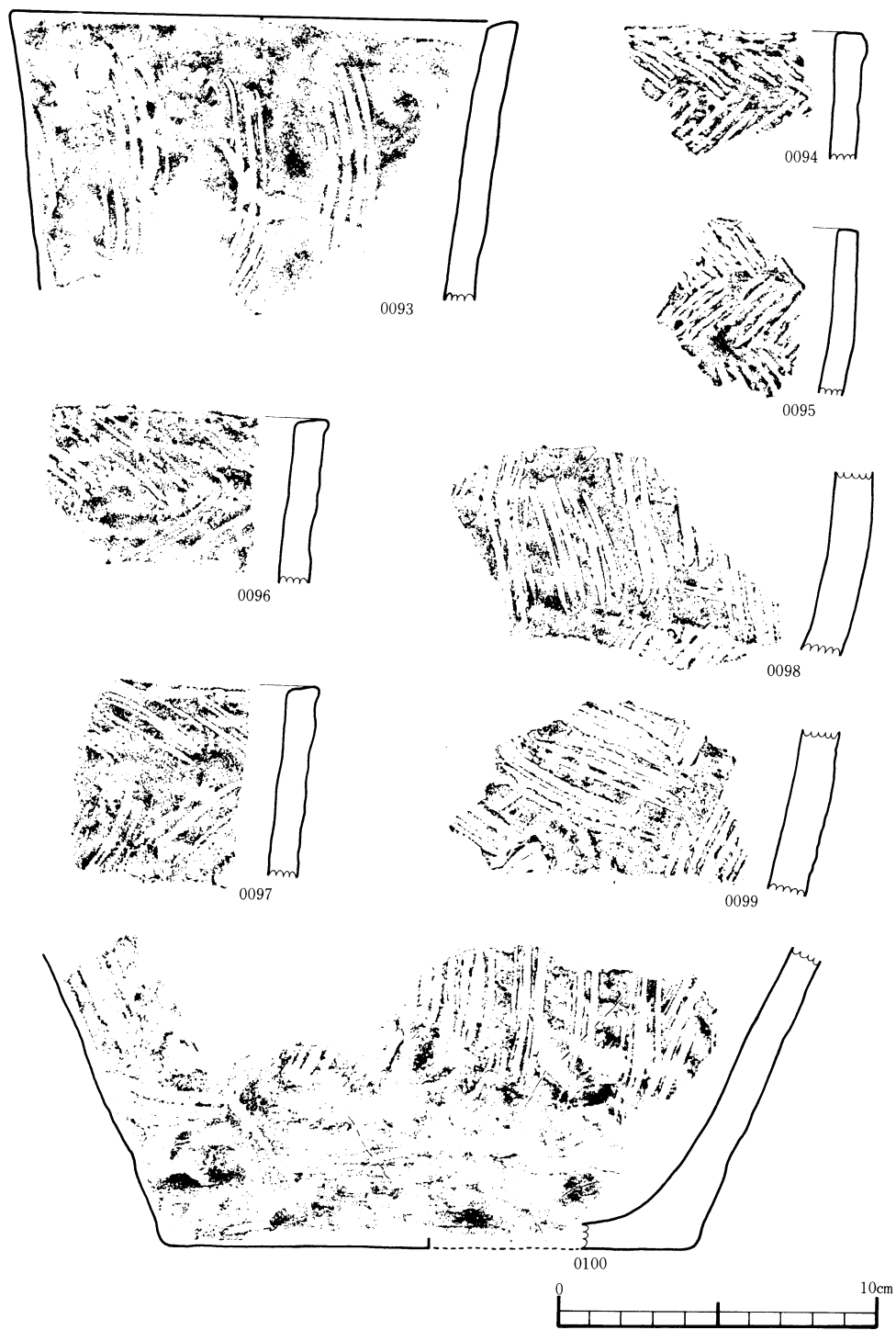
3-f類(0115～0118) いずれも第2地点の出土である。口縁部2点、底部2点が出土している。口縁径12.2cm(0115)と14cm(0116)と、底部径6.6cm(0117)と(0118)がある。器形特徴は、口縁部が内湾し、口唇部が丸味を帯びるもの(0115)と、口縁部が内湾し口唇部が内傾するもの(0116)がみられる。底部は平底である。文様はみられないが、0117にへら状の施文具で無雑作に施文した跡が残る。口縁部、底部とも手担状の整形であり、器面には凹凸がみられる。

第5表 3類土器一覽表

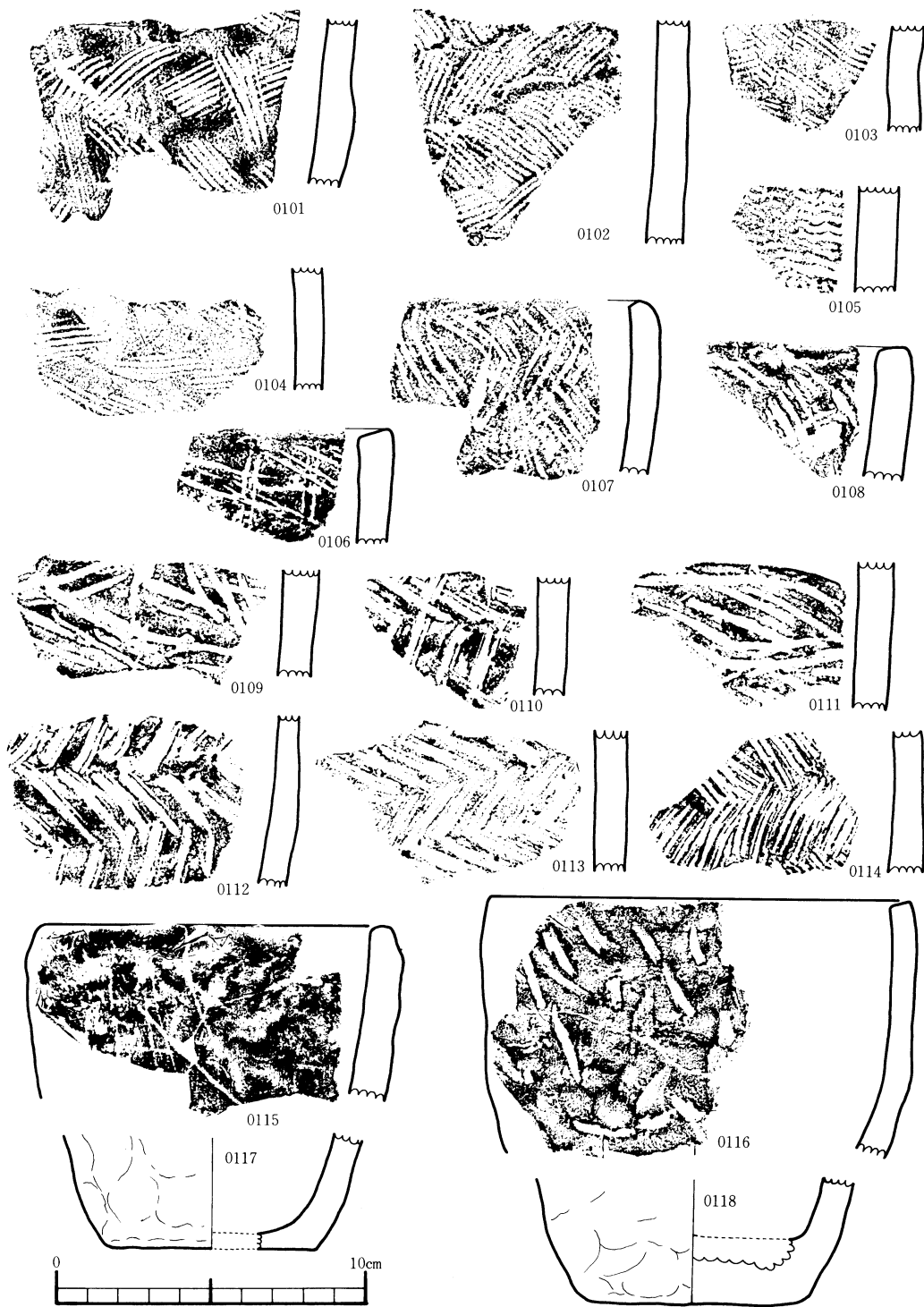
遺物番号	出土区層位	器種・器部	法 量	形 態 の 特 徴	手法・文様の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
0084	10B-IIIb	口縁部	口径 24cm 器厚 1.3cm	口縁部内湾	五条沈線	石英粒混	良好	茶 褐 色	
0085	1E-IIIb	口縁部	器厚 10.2cm						
0086	10B-IIIb	口縁部	口径 19.9cm	口縁部全体に外反	口縁端斜に沈線	石英粒混	良好	黄 褐 色	
0087	10B-IIIb	口縁部	器厚 1.0cm	口縁部若干内湾	4条の短線を連続施文	石英粒混	良好	黒 褐 色	
0088	13B-IIIb	口縁部	器厚 1.2cm	口縁部若干内湾		石英粒混	良好	黄 褐 色	
0089	10B-IIIb	口縁部	器厚 1.2cm			石英粒混	良好	黒 褐 色	
0090	10B-IIIb	口縁部	器厚 1.4cm			石英粒混	良好	赤 褐 色	
0091	10B-IIIb	胴部	器厚 1.2cm			石英粒混	良好	赤 褐 色	
0092	10B-IIIb	胴部	器厚 1.3cm			石英粒混	良好	明 褐 色	
0093	2E-IIIb	口縁部	口径 1.6cm 器厚 1.0cm	口縁部直口 口縁端部は内傾する		4条~5条のひっかき状の沈線	石英粒混 長石粒混	良好	茶 褐 色
0094	1D-IIIb	口縁部	器厚 0.8cm	口縁部直口	3本のクシガキ沈線で羽状施文	石英・長石 雲母混入	良好	赤 褐 色	
0095	1D-IIIb	口縁部	器厚 0.7cm	口縁端部は平縁				良好	赤 褐 色
0096	1D-IIIa	口縁部	器厚 0.9cm	口縁直口 口縁端部は平縁で内傾する	3本のクシガキ沈線で羽状施文(0095よりはあらい沈線)	石英・長石 細粒混	良好	黄 褐 色	
0097	2D-IIIb	口縁部	器厚 0.9cm			石英・長石 細粒混	良好	黄 褐 色	
0098	1E-IIIb	胴部	器厚 1.2cm	器面に凹凸がみられる	数条のクシ状施文 で沈線を施す	石英・長石 細粒混	良好	黄 褐 色	
0099	1E-IIIb	胴部	器厚 1.2cm			石英・長石 細粒混	良好	黄 褐 色	
0100	1E-IIIb	底部	底部径 16.7cm 底部厚 0.8cm	底部からの立上りは広がる		石英・長石 細粒混	良好	黄 褐 色	
0101	10B-IIIb	胴部	器厚 1.1cm	器面に凹凸がある。	数条のそろったクシ描き沈線	石英粒混	良好	赤 褐 色	
0102	10B-IIIb	胴部	器厚 1.1cm			石英粒混	不良	黄 褐 色	
0103	10B-IIIb	胴部	器厚 1.0cm			石英粒混	普通	暗 褐 色	貝施文具によることがわかる
0104	10B-IIIb	胴部	器厚 0.9cm			石英粒混	普通	黄 褐 色	
0105	10B-IIIb	胴部	器厚 1.3cm			石英粒混	普通	赤 褐 色	
0106	11B-IIIb	口縁部	器厚 1.1cm		クシ描き沈線	石英粒混	良好	黄 褐 色	
0107	11B-IIIb	口縁部	器厚 0.9cm	口縁部若干内湾		石英粒混	普通	赤 褐 色	
0108	11B-II	口縁部	器厚 12cm	口縁内湾		石英粒混	良好	黄 褐 色	0107に同じ
0109	11B-II	胴部	器厚 1.0cm		不ぞろいのクシ描き沈線	石英粒混	良好	赤 褐 色	
0110	10B-IIIa	胴部	器厚 10cm			石英粒混	良好	赤 褐 色	
0111	11B-IIIb	胴部	器厚 1.0cm			石英粒混		黄 褐 色	
0112	10B-IIIb	胴部	器厚 0.7~0.8cm		不ぞろいのクシ描き沈線の羽状文	石英粒混		赤 褐 色	
0113	10B-IIIb	胴部	器厚 1.0cm					赤 褐 色	
0114	10B-IIIb	胴部	器厚 0.9cm			石英粒混	良好	茶 褐 色	
0115	11B-IIIb	口縁部	口径 12.2cm 器厚 1.1cm	手づくね状の粗精な作りで凹凸がある。	無文に近い状態である。ヘラで雑に施文した跡が残る。	石英粒混	良好	赤 褐 色	
0116	10B-IIIb	口縁部	口径 14.0cm 器厚 0.8cm			石英粒混	良好	赤 褐 色	
0117	10B-IIIb	底部	底部径 6.6cm 底部厚 0.5cm			石英・長石 微粒混	良好	黄 褐 色	
0118	11B-IIIb	底部	底部径 7.5cm 底部厚 2.2cm			石英・長石 微粒混	良好	黄 褐 色	



第31図 第3類土器 (I)



第32図 第 3 類 土 器 (II)



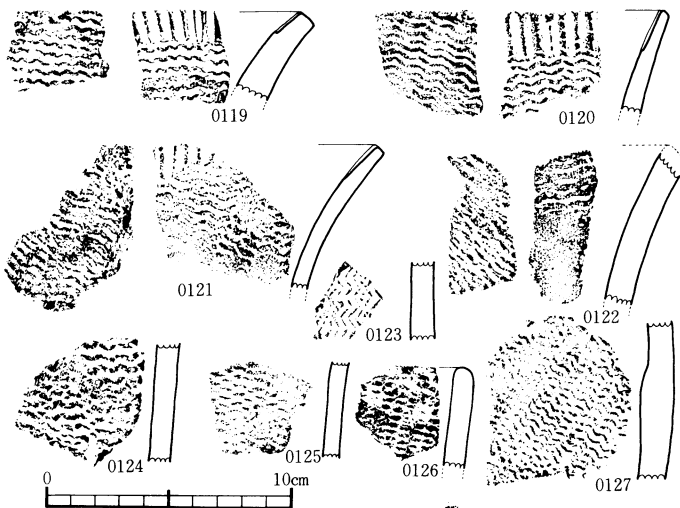
第33图 第三类土器(III)

④ 4類（押型文土器）0119～0128（第34図）

第4類土器は、総数で20片出土している。そのうち2片が楕円押型文であり、他は山形押型文である。第1地点で9片、第2地点で11片の出土であった。出土層位は、第1地点においてはⅢa層と称する青灰色層中であり、第2地点においては、Ⅲb層と称する乳白色層（微砂混

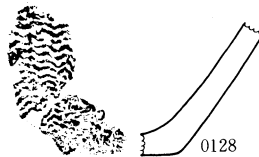
第6表 4類（押型式土器）一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0119	10B-Ⅲb	口縁部	器厚 0.9~1.4cm	口縁部外反 口縁端部平縁	山形	石英粒混	良好	黄褐色	
0120	3E-II	口縁部	器厚 0.5~0.8cm	口縁部外反 口縁端部平縁	山形	石英粒混	良好	明褐色	
0121	3E-II	口縁部	器厚 0.6cm	口縁部外反 口縁端部平縁	山形	石英粒混	良好	明褐色	
0122	10B-Ⅲb	口縁部	器厚 1.1cm	口縁部外反 口縁端部破損	山形	石英粒混	良好	黄褐色	
0123	11B-I	胴部	器厚 0.9cm		山形	石英粒混	良好	褐色	
0124	13C-Ⅲa	胴部	器厚 0.9cm		山形	石英粒混	良好	明褐色	
0125	2C-Ⅲa	胴部	器厚 0.6cm		山形	石英粒混	良好	明褐色	
0126	4C-Ⅲa	口縁部	器厚 0.8cm	口縁部直口 口縁端部丸縁	楕円	石英粒混	良好	赤褐色	
0127	1D-Ⅲa	胴部	器厚 1.1~1.3cm	器厚にふくらみ	山形	石英粒混	良好	明褐色	
0128	11B-Ⅲb	底部	器厚 0.9cm 底部厚 0.8cm	底部平底	山形	石英粒混	良好	黄褐色	



第34図 4類（押型文土器）

粘質土) 中の上層である(第2地点においては、層位の区別が難しくⅢa層との暫移も考えられる)。実測図は、器形・文様の表現可能なものを10点あげた。山形押型文は、口縁部が若干外反している。いずれも口縁端部(口唇部)は、平縁を呈する。山形押型文の外面の施文は、横走するもの(0119)



と斜走するもの(0120~0122)とが見られる。内面の施文は、原体を擦痕することによって生じるといわれる原体条痕文が口唇部に向って施文されている。その内側には、山形押型文が横走して施文されている。押型文は、いずれも小型の山形施文である。器壁の厚みは、0.6cmの薄いものから1.4cmの厚いものが見られる。なお山形押型文には、底部が1点出土している(0128)。底部は、平底を呈し下端1cmのところまで山形押型文が施文されている。楕円押型文(0126)は、口縁部は直口している。口縁端部(口唇部)は、へら状のもので整形され丸味を帯びている。施文は、外面だけに楕円押型文がみられ内面は無文である。胎土は、山形押型文・楕円押型文いずれも石英微粒が混入している。色調は、明褐色を呈する。

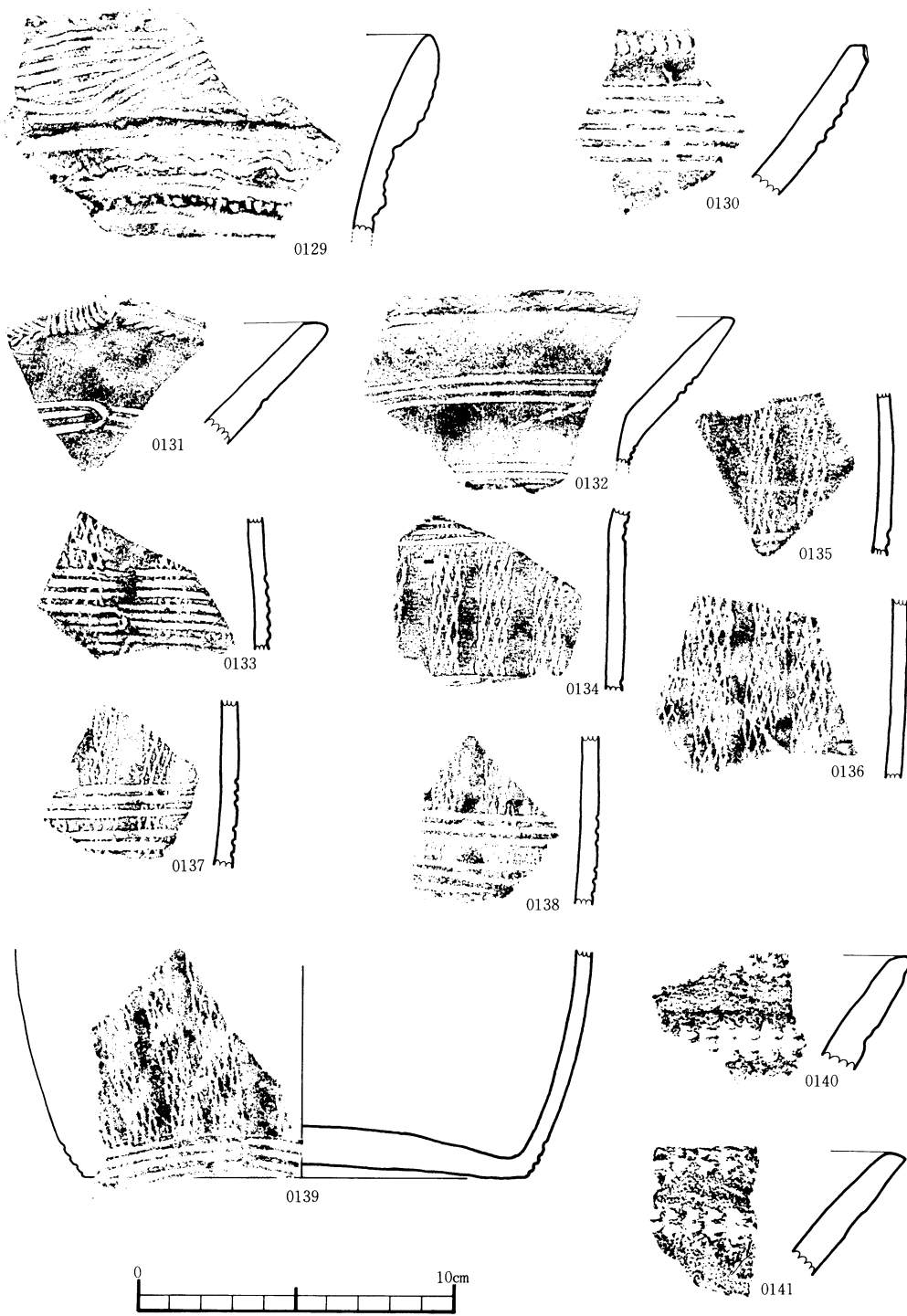
⑤ 5類(平椀II式土器0129)(第35図)

頸部から口縁部にかけてのもの1点が出土している。25C区(第4地点)のIIIb層(乳白色土層)中から出土したものである。器形は、頸部から口縁部にかけて外反し口縁部は肥厚して口唇部は丸味を帯びる。頸部には、凸帯がみられる。文様は、頸部凸帯部分にキザミが施されている。頸部凸帯と口縁部肥厚部分の低いところには、凹線文が施されている。2本の並行凹線文の間に1本の波状凹線文が施文されている。口縁部の肥厚部分には、数条の並行凹線を施文し、そのうえには5条の凹線文を波状に施文し文様効果をあげている。口縁端部(口唇部)の丸味を帯びた部分には連続キザミが施されている。内面は、無文であるが非常にいねいにへら磨き状に仕上げている。胎土は、石英微粒を若干含んでいるが、焼成とも良好である。色調は、黒褐色を呈する。第5類土器は、その形態・文様から平椀II式土器に比定されるものである。

第7表 5類(平椀式) 6類(塞ノ神A式) 7類(塞ノ神B式) 一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法	量	形態の特徴	手法・文様の特徴	胎土	焼成	色調	備考
0129	25C-IIIb	口縁部	器厚 肥厚部	0.7cm 1.2cm	口縁部が肥厚し頸部に凸帯が着く	肥厚部分に凹線文が施され、凸帯にはキザミが施文	石英細粒混	良好	黒褐色	平椀II式で塞ノ神A式とは区別される。
0130	25B-IIIa	口縁部	器厚	1.0cm	口縁部は「く」字に外反	中央に6条の凹線 口縁端部連続キザミ	石英粒混	良好	黒褐色	
0131	4E-IIIa	口縁部	器厚	0.9cm	口縁部波状部の稜の低いところ	口縁部外面中央の3条の凹線のつなぎ部分のみがみられる	石英粒	良好	赤褐色	口縁端部は羽状沈線
0132	4E-IIIa	口縁部	器厚	0.8cm	口縁部「く」字に外反	口縁部外面中央に3条の並行凹線、頸部にも同じ凹線施文	※	良好	赤褐色	口縁端部は羽状沈線
0133	3E-IIIa	胴部	器厚	0.4cm		縄文格子目文	石英細粒混	良好	赤褐色	
0134	4E-IIIa	胴部	器厚	0.6cm	頸部近くの胴部		石英粒混	良好	赤褐色	スス付着
0135	4E-IIIa	胴部	器厚	0.4cm		沈線と沈線の間が4.2cm縄文網目文の巾0.8cm	石英粒混	良好	赤褐色	
0136	3E-II	胴部	器厚	0.5cm			石英粒混	良好	赤褐色	
0137	4E-IIIa	胴部	器厚	0.5cm		縄文網目文の後に凹線が施されている	石英粒混	良好	赤褐色	0133と近く
0138	5E-IIIa	胴部	器厚	0.5cm			石英粒混	良好	赤褐色	0137に近く
0139	5E-IIIa	底部	底部径 底部厚	14cm 1.2cm	底部は上げ底	底部外両端に3条の凹線文	石英粒混	良好	赤褐色	
0140	10B-IIIa	口縁部	器壁厚	0.9cm	口縁部外反	口縁外面に貝殻連続棘突文が平行に施文	石英粒	不良	黄褐色	
0141	10B-IIIa	口縁部	器壁厚	0.9~1.0cm	口縁部外反		石英粒	不良	黒褐色	

※印 石英粒の混入がみられるが器面はきれいだ。



第35図 5類(平椀Ⅱ式)、6類(塞ノ神A式)、7類(塞ノ神B式)

⑥ 6類 (塞ノ神A式土器0130~0139) (第35図)

第6類土器は、第4地点に1点(0130)出土したほかはすべて第1地点出土のものである。第4地点出土のものは、口縁部破片のみであるが、第1地点出土のものは、同一個であり全体の器形を知ることはできるが復元は不可能である。0130は、「く」字に外反する口縁部である。口唇部は、平坦面の外側に斜めにキザミが施されている。口縁部の中央に6条の並行な凹線文が施文されている。口縁部は、若干内湾しているようである。器厚は、1.0cmを計る。胎土に大粒の石英粒を含むが器面の整形は非常に良好である。第1地点出土のもの(0131~0139)は、同一個体であり口縁部・頸部・胴部・底部のそれぞれの器形・文様は知ることができる。口縁部(0131・0132)は、「く」字口縁であり口縁部は波状の陵がある。口縁端部は、平坦面をなしその上にていねいな羽状キザミを施文する。波状の陵がある。

⑦ 7類 (塞ノ神B式土器0140・0141) (第35図)

頸部から口縁部にかけての破片が、2点出土している。いずれも10B区(第2地点)のIIIa層(青灰色土層)中から出土したものである。器形は、いずれも「く」字形に口縁部が外反するものである。口縁外面には、貝殻縁による2条の連続刺突文が並行に施文されている。胎土は、非常にあらく石英粒を混入し焼成もあまり良くない。第6類土器は、塞ノ神B式に類するものである。

⑧ 8類 (轟式土器0142・0143) (第36図)

口縁部破片2点が出土している。いずれも4E区(第1地点)のII層(黄褐色パミス層)から出土している。器形は、いずれも口縁部が直口し口縁端部は平縁でありその部分に斜のキザミが連続して施されている。口縁部外面には、地文の条痕の上に粘土帯をはりつけ、それを指頭でつまんだ隆起線文を4条めぐらしている。内面には、斜めのあらい条痕が施されている。胎土は、あらく石英粒を混入している。色調は、暗茶褐色を呈している。第7類は、轟式土器に比定されB式に類するものである。

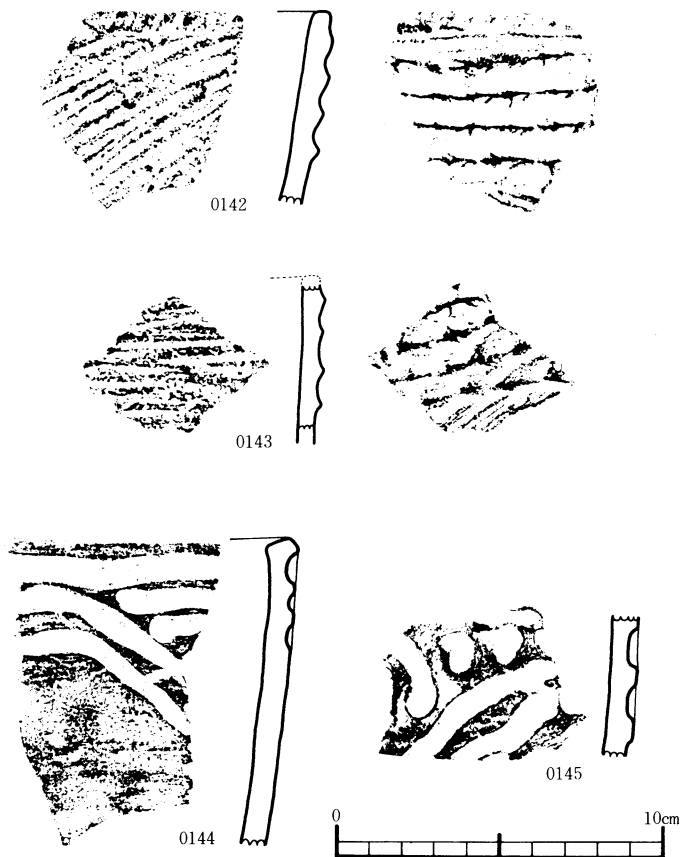
⑨ 9類 (阿高式土器0144・0145) (第36図)

頸部から口縁部にかけてのものが2点出土している。頸部から口縁部にかけては直口し、その部分に巾1cm程度の凹線文が直線や曲線や連点文などを配して施文されている。器厚みは、

第8表 8類(轟式) 9類(阿高式) 一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法 量	形 態 の 特 徴	手法・文様の特徴	胎 土	焼 成	色 調	備 考
0142	4E-II	口縁部	器厚 0.7cm 凸帯部 0.9cm	口縁直口	口縁部4本のみみずばれ、凸帯端部にキザミ			暗茶褐色	
0143	4E-II	口縁部	器厚 0.5cm 凸帯部 0.7cm					暗茶褐色	
0144	4B-II	口縁部	器厚 0.8cm	口縁わずかに内湾	0.8cm間の凹線文 竹管状の施文具	石英細粒混	良好	茶褐色	
0145	5B-II	口頸部	器厚 0.8cm					石英細粒混	良好

0.8cm程度でさほど厚くない。器面は、内外面ともていねいな仕上げであり、若干石英微粒を含んでいる。色調は、茶褐色を呈している。第8類土器は、阿高式土器に比定している。



第36図 8類（轟式土器）・9類（阿高式土器）

⑩ 10類（指宿式系土器）（第37図）

10類土器は第II層中（黄褐色火山灰土層）に出土する。出土総数はわずかに4点のみである。0146は口径25.1cmを計る深鉢である。口縁部は直行を呈し、胴部でわずかに丸味を帯び底部へ続く。口唇部は4つの陵を有す。器面は「くし」状の施文具でもって調整を行ない2本の沈線を基本に曲線文様を施す。口唇部の陵に5個の押圧文を施す。内面は「ヘラ」でもって横ナデ調整を行なっている。胎土には雲母、石英を含み、きめの細かい胎土となる。焼成は良好。色調は褐色を呈す。

0147は頸部から口縁にかけて直行する土器片である。口径29.4cmを計る。口唇部はフラットに仕上げ、凹線文を施す。文様は頸部に2本の横位凹線の直線文に囲まれた2本の平行沈線の直線文を基本とする山形の連続文様を施す。器面は、内外面とも横ナデ調整。胎土に雲母、石英を含む。焼成はやや軟質。色調は灰褐色を呈す。

0148は口縁部は直行ないし、わずかに内湾する。4つの陵を有す深鉢である。口径31cmを計る。内外面とも横ナデ調整で雑な仕上がりである。口唇部の陵は、粘土のはり付けの痕跡が認められる。頸部に左側から刺突連続文を3条施文する。胎土に雲母、石英を含む。焼成は良好。色調は赤味を帯びた褐色を呈す。

0149は陵をもつと思われる土器片である。小片の為、口径は定かでない。口縁部近くに、中央に凹みのある突起を有す。口唇部にキザミ目文、内外面とも、2本の沈線による曲線文様を施文する。胎土に雲母、石英を含み、比較的密である。焼成は良好。色調は褐色を呈す。

0150は器台の小片である。底部径9.8cmを計る。器台の上部構造は破片の為、定かでない。器壁にキザミ目文を施した、はりつけ突帯を有す。又、脚部に4個の突起を施す。器台は中空で上半部に5個(推定)の透しを施している。土器は風化が著しく、剝落を受けている。胎土に雲母、石英を含む。焼成は良好。色調は赤みを帯びた褐色を呈している。

① 11類(西平式・三万田式土器)(第38図)

11類の土器は、第II層中(黄褐色火山灰土層)に出土する。全体的に数量は極めて少ない。

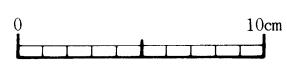
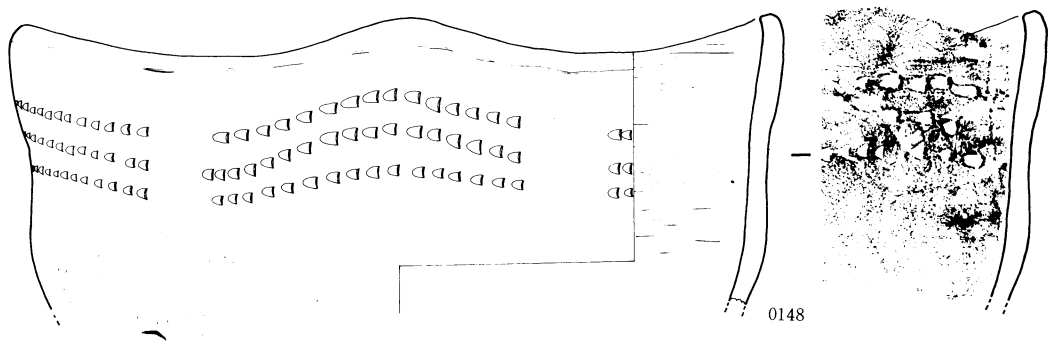
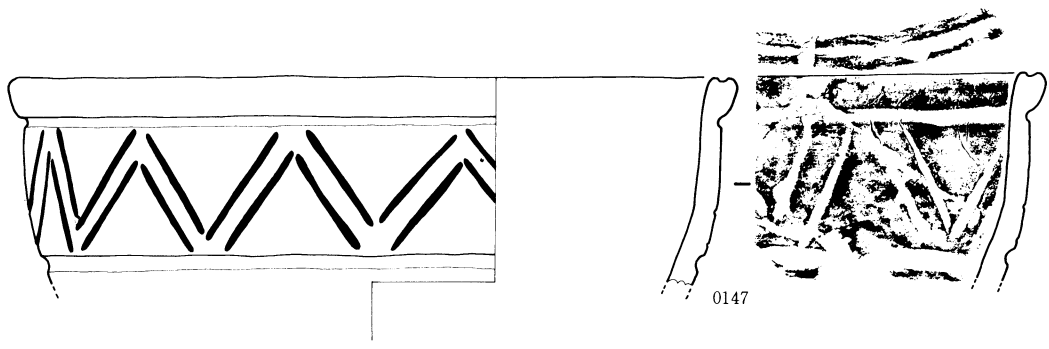
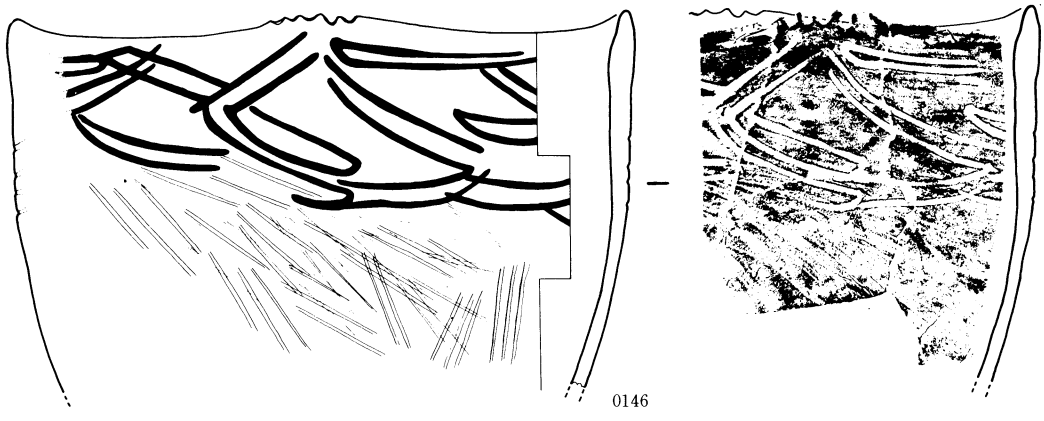
0151は、口径41.2cm、底部径8.4cm、復元高36.2cmを計る黒色研磨の深鉢である。器形は頸部で「く」の字型に折れ、口縁部は逆に「く」の字型に内湾する。胴部は胴張りを呈し底部へと続く。底部はわずかに上げ底を呈す。器壁は全体的に薄く焼成はきわめて良い。胎土に雲母や石英を混入している。

0152は口径24.2cmの黒色研磨の深鉢である。器形は張りをもち底部へと続く。完通していない穴を施す。内外面ともよく研磨されている。胎土には雲母、石英を混入し、焼成はきわめて良い。

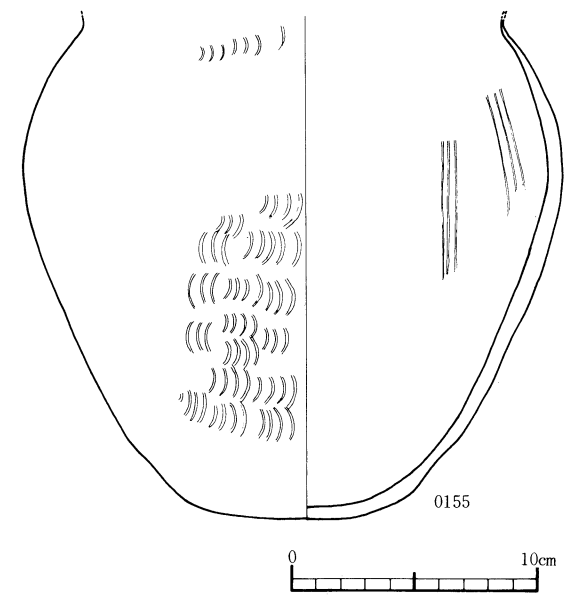
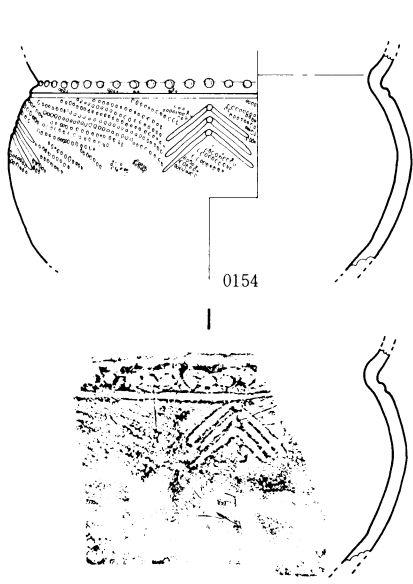
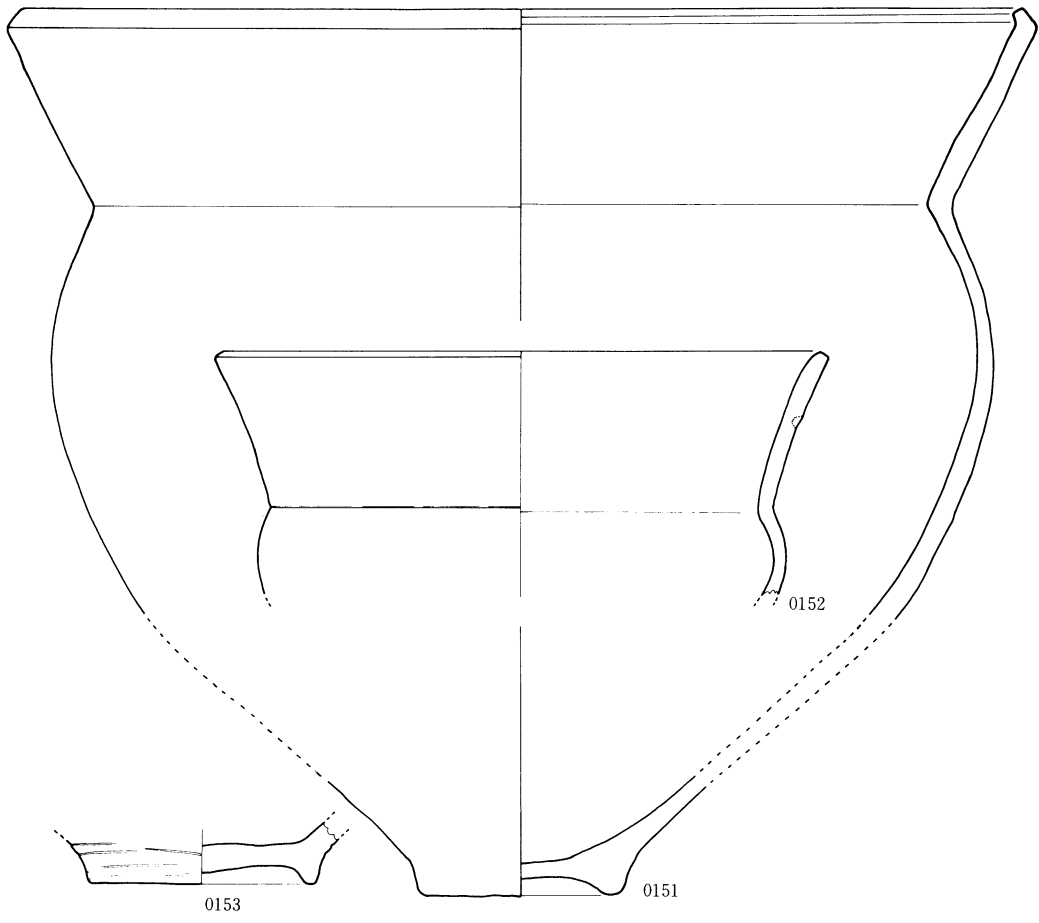
0153は底径9.2cmを計る底部である。比較的しっかりした脚をもち、立ち上がりに横ナデ調整の為の痕跡を認める。

0154は器形から西平式土器と思わせるが、文様がないことや、黒色研磨がみられることなどから0152、0153と同様三万田式土器系統の土器に想定する。0154は西平式土器の深鉢である。頸部はくびれ外反しながら縁部へと続き、胴部は丸味を帯びる。胴部から頸部にかけて、文様を集中して施している。胴部に縄文をころがし、頸部にそって沈線を廻らし、その上部に連点文を施す。胴部には3本の沈線を基本とし山形文と山形の頂部に刺突文を施し、それを一単位とし計4ヶ所に施文している。内面の調整は雑な仕上がり。胎土に雲母、石英粒を混入。焼成は良好。頸部にスス附着。色調は褐色を呈す。西平式土器である。

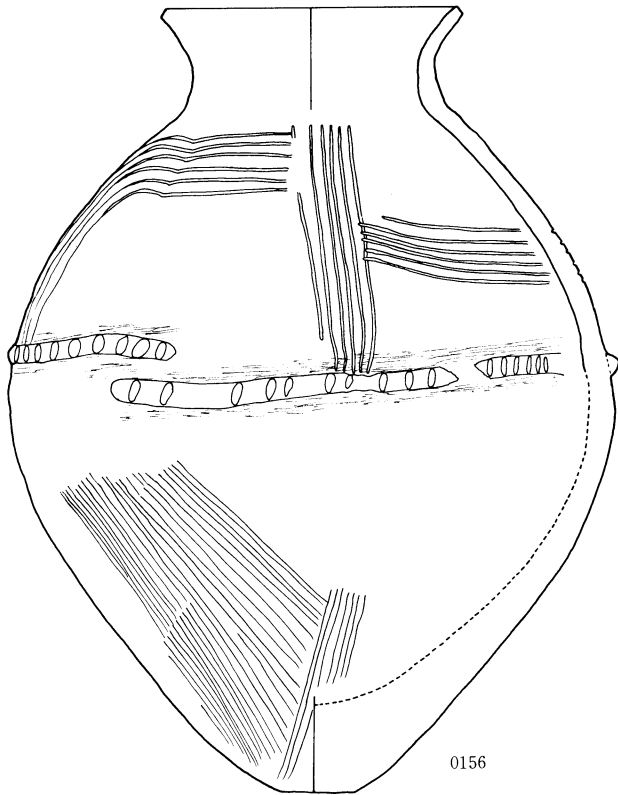
0155は復元口径17cm、器高28cmを計る深鉢である。口縁部はきわめて薄くわずかに外反を呈す。頸部はしまり、胴部は厚く丸味を帯び、直線的に底部へと続く。底部は丸味を帯びた平底状を呈す。器面全体に貝殻腹縁による「ヒッカキ」文を施す。頸部にも部分的に同様な痕跡が認められる。



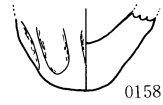
第37図 第10類 (指宿式系土器)



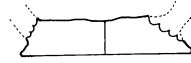
第38図 11類 (西平式、三万田式土器)



0156



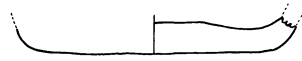
0158



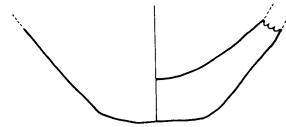
0159



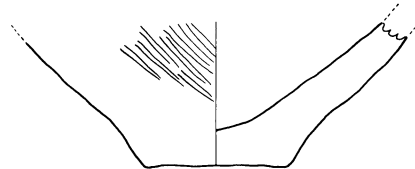
0160



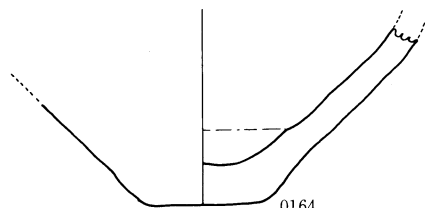
0161



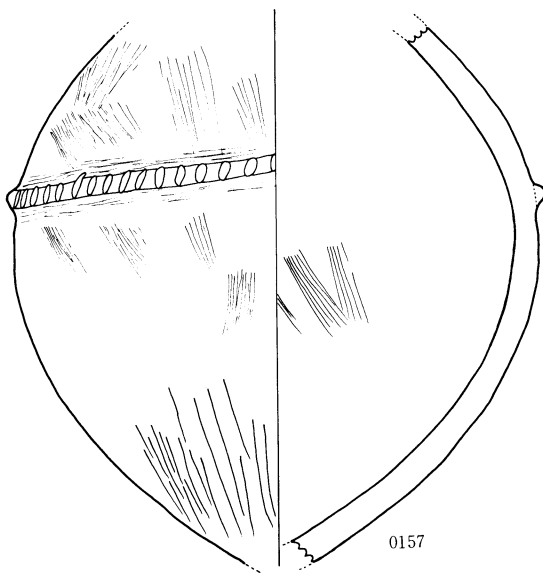
0162



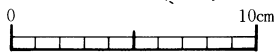
0163



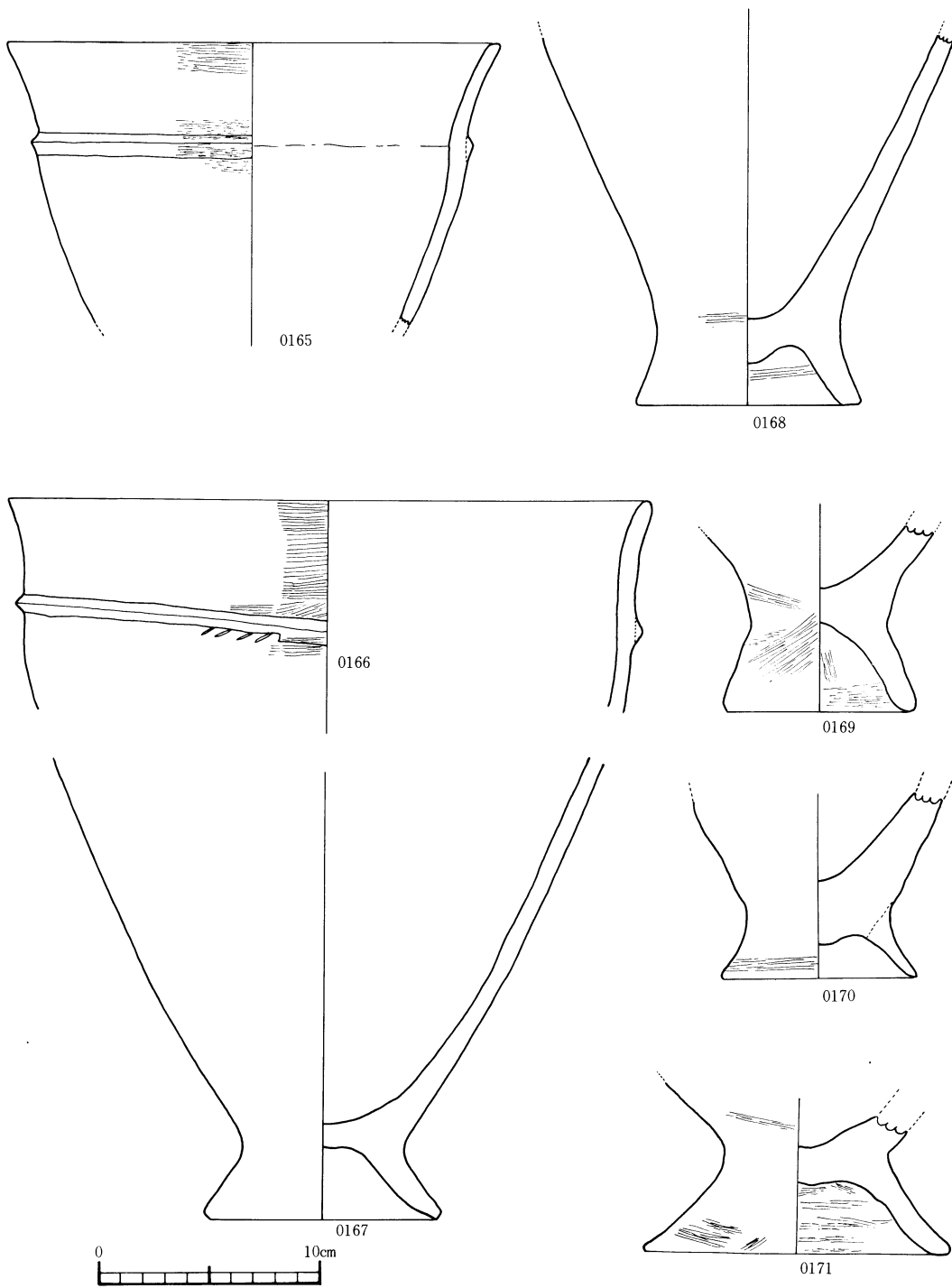
0164



0157



第39図 12類 (成川式土器—I)



第40図 12類 (成川式土器— II)

第9表 10類（指宿式土器）11類（西平・三万田式土器）一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法 量	形 態 の 特 徴	手法・文様の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
0146	25-B	深鉢口縁部	口 径 25.1cm	1. 胴部は直行し、若し胴張り、1. 胴部は4つの腹を有す。	2本を基本にする沈線文、腕に押圧文、貝殻調整	雲母・石英	良好	褐色	
0147	25-B	深鉢口縁部	口 径 29.4cm	頸部は丸味を帯び、口縁は直行	沈線文	雲母・石英	やや軟弱	灰褐色	
0148	25-B	深鉢口縁部	口 径 31cm	胴部は丸味、頸部はしまり、口縁は内側に口縁部に4つの腹を有す。	陵を有す、押圧文	雲母・石英	良好	褐色	
0149	25-C	深鉢口縁部	不 明	口縁部は直行し、口唇部は丸味を帯びる。	突起、キザミ目文、沈線	雲母・石英	良好	褐色	
0150	26-C	器 台	底 径 9.8cm	脚は若干外開き	突起文、キザミ目文、突起穿孔	雲母・石英	良好	赤褐色	風化が著しい
0151	25-B・C	深鉢形	口 径 41.2cm	頸部は「く」の字型、胴部は直行し、内側に「く」の字型、胴張り、上げ底	黒色研磨土器	雲母・石英	良好	黒色	復元高 36.2cm
0152	26-C	深鉢口縁部	口 径 24.2cm	頸部は「く」の字型、胴張り	黒色研磨土器	雲母・石英	良好	黒色	
0153	25-B	深鉢底	口 径 9.2cm	上げ底	精製土器	雲母・石英	良好	褐色	
0154	26-C	深鉢口縁部	頸部径 9cm	頸部は「く」の字型、胴丸	磨消縄文、沈線文、連点文	雲母・石英	良好	褐色	
0155	11-F	深鉢底	復元口径 17cm	頸部は「く」の字、胴丸を呈し丸底に近い底部		雲母・石英	良好	褐色	

第10表 12類（成川式土器）一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法 量	形 態 の 特 徴	手法・文様の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
0156		壺・完形	器高約 32cm 口径 19cm 底径 3.4cm	胴部がはり、口縁は外反する。	ヘラ描き沈線文、胴部はりつけ突起を施す	雲母・石英	良好	褐色	
0157	2E-I層	壺・完部	胴部径 20cm	球形の胴張りをし、底部は尖底に近い	※	雲母・石英	良好	褐色	
0158	表 層	壺・胴部		手づくね様	指による押圧調整	雲母・石英	良好	白みがかった褐色	
0159	25C-I層	壺・底部	底部径 7.0cm	円盤状の底部から「く」の字状に広がる。		石 英	良好	褐色	
0160	11-B-I層	壺・底部	底部径 9.2cm	円盤状の底部	ハケ調整	雲母・石英	良好	褐色	スス付着
0161	表 層	壺・底部	底部径 10.2cm	円盤状の底部		石英・角セシ石	良好	褐色	
0162	1D-I層	壺・底部	底部径 4.0cm	丸底に近い平底		雲母・石英・角セシ石	良好	褐色	
0163	1C-I層下部	壺・底部	底部径 5.8cm		ヘラなで		良好	褐色	
0164	23-E-表層	壺・底部	底部径 4.8cm				良好	褐色	
0165	0D-I層下部	壺・1. 胴部	口縁部径22.0cm	口縁部外反する。	三角形はりつけ突起ハケ横ナデ	石英・角セシ石	良好	褐色	
0166	1D-I層	壺・1. 胴部	口縁部径28.3cm	胴部がわずかに張り、口縁部は外反する。	三角形はりつけ突起ハケ調整	雲母・石英・角セシ石	良好	褐色	
0167	1D-I層	壺・胴部・底部	器高約 32.4cm 底部径 10.7cm	底部はあげ底の脚台を有す。		雲母・石英・角セシ石	良好	褐色	0168と同一体と思われる。
0168	1C-I層下部	壺・底部・胴部	底部径 10.0cm	あげ底の脚台		雲母・石英	良好	赤みをおびた褐色	
0169	表 層	壺・底部	底部径 8.4cm	あげ底の脚台	内・外面ハケなで	雲母・石英	良好	褐色	
0170	1D-I層	壺・底部	底部径 8.7cm	あげ底の脚台、脚部はりつけ	ハケの横なで		良好	褐色	
0171	23-E-I層	壺・底部	底部径 13.8cm	あげ底の脚台	内・外面ハケなで	雲母・石英・角セシ石	良好	褐色	
0172	1D-I層	卍・底部	底部径 4.0cm		外面丹塗り	雲母・石英	良好	外面……赤 内面……褐色	
0173	表 層	高杯・杯部			外面丹塗り	雲母・石英	良好	外面……丹 内面……褐色	
0174	23-E-I層	壺・胴部	突起幅 1.8cm		はりつけ突起にヘラによる山形文様を小さい管轄文を施す	雲母・石英	良好	褐色	
0175	1D-I層	壺・胴部	突起幅 1.8cm		はりつけ突起に布目の見られる櫛目状の刻目を施す	雲母・角セシ石	良好	褐色	一部スス付着
0176	2E-I層	壺・胴部	突起幅 0.8cm	球形の胴張りを有す。	はりつけ突起に布目の見られる刻目を施す	雲母・石英	良好	褐色	0158と同一

※印 胴部に一条のはりつけ突起をめぐらす。突起は布目の見られる刻目を施す。

⑫ 12類 (成川式土器) (第39図～40図)

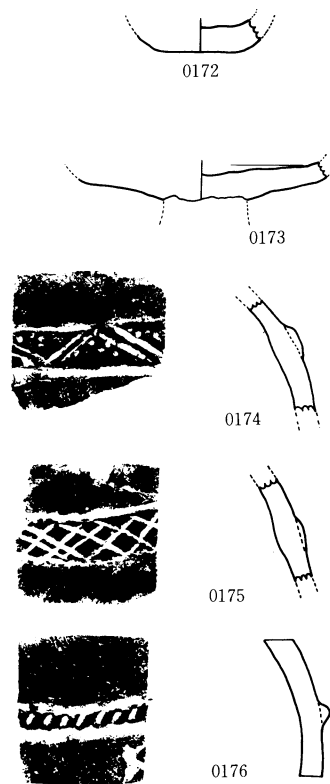
桑ノ丸遺跡の12類の土器は舌状台地の南側先端部に集中して出土しており、包含層はI層下部と思われる。しかし包含層が浅いため後世の攪乱を受けやすいせいもあったのか遺物のほとんどが小片で散在している出土状態であり、壺で完形土器が1個体、完形に近い土器片が1個体、甕で完形に近い土器が1個体出土しているぐらいである。土器の形態は壺型土器、甕形土器、丹塗り土器で高坏、埴が見られる。

壺形土器は底部の形により3つに分類される。第1は尖底に近い底部で、胴部は球形状に張り口縁部は外反するもので0156、0158の土器に見られる。0157の土器は胴部最大径の部分に一条のはりつけ突帯をめぐらす。突帯には布目圧痕の見られる刻目を施す。外面は斜位のハケによる撫で調整である。第2は平底で円盤状の底から「く」の字状に広がってゆくもの、あるいは円盤状の底からそのまま広がってゆくもので0159、0160、0161の土器に見られる。第3は丸底に近い平底で底の厚手のもので0162、0163、0164の土器に見られる。又壺型土器の類にはいると思われる土器の底部で指による押圧調整が施された手づくね様の土器(0158)も見られる。

甕型土器は底部が上げ底になっている脚台を有するものがほとんどである。0166、0167の土器は同一個体と思われるがこの土器は上げ底の脚台で胴部がわずかにはり口縁はゆるやかに外反し、頸部には三角形のはりつけ突帯を一条めぐらせる。0165の土器は胴部がわずかに張り口縁は外反する。頸部には三角形のはりつけ突帯を一条めぐらせる。0168、0170の土器はあげ底の脚台であるが中心部に突起が見られる。又0176の土器は底を尖底にした甕に円筒状の脚台をはりつけたあとが見られそのはりつけ部分には亀裂が生じている。

丹塗り土器は絶対量が少なく器形の判明するものはわずかである。0172の土器は小型の埴の底部であり外面は全面丹塗りである。0173の土器は高坏の坏部であり外面は全面丹塗りである。これら丹塗り土器は胎土が精選された粒子の細かい上質の粘土に極めて小さい雲母・石英が混入しており、他の土器とは胎土を異にしている。

12類の土器には壺形土器、甕型土器共に



第41図 第12類 (成川式土器-Ⅲ) 拓影

突帯が見られる。壺型土器にみられる突帯は幅とはりつけの方法により2種に分けられる。第1種は幅が約2cmの突帯をはりつけるものであり、突帯にはそれぞれ文様が施される。0174の土器の突帯にはへらにより二条の山形沈線と径2mmのごく小さい竹管文が施される。又0174に類似しているが竹管文が見られず二条の山形沈線だけのものもある。0175の土器においては布目の見られる細かい刻目を格子状に施す。第2種は幅が約0.8cm、厚さ0.5cmの粘土紐をはりつけるものであり、突帯には布目の見られる刻目を施す。又突帯はつながらずに上下にすれ違うようである。0157、0156等の土器に見られるものである。

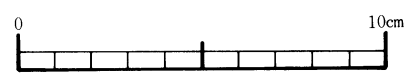
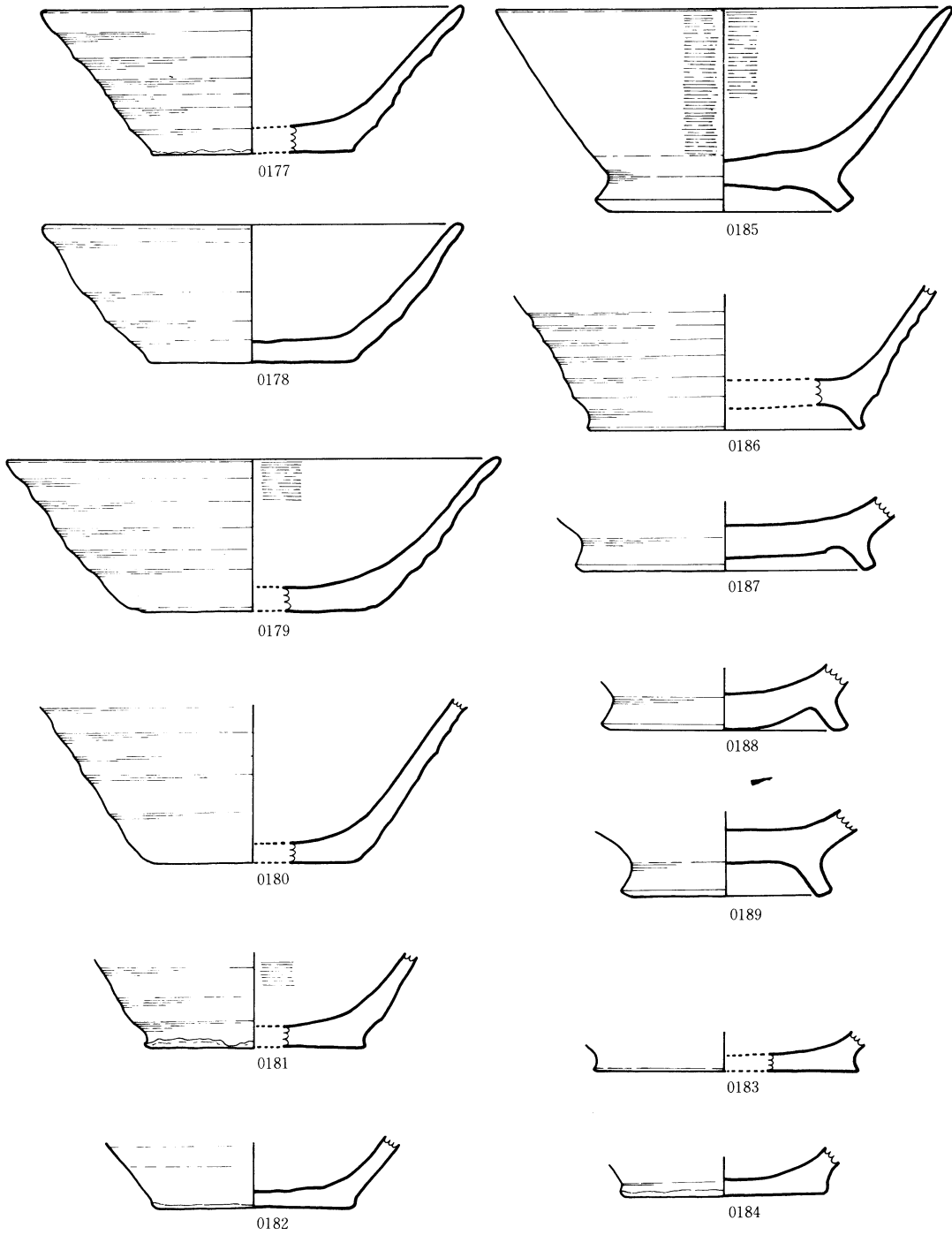
甕型土器においては幅1cm前後の断面三角形のはりつけ突帯を頸部にめぐらせるものであり0165、0166等に顕著に見られ、他の甕型土器の小破片にもよく見られるものである。

⑬ 13類土器（土師器0177～0189）（第42図）

土師器は、環形土器が出土している。坏は、2種類で平底の底部と高台の付く底部がみられる。他の器形の土師器は、出土していない。実測可能なもの13点を図示したが、他に細片が若干みられる。第1地点で3点、第2地点で3点、第4地点で7点出土している。いずれも、上層中より出土したものである。平底の底部は、糸切り底が1点（0183）あり、他はすべてへら起しである。器面は、いずれもロクロ引きによる凹凸が顕著にみられる。器内には、ハケによる刷毛目がていねいに施されている。0177には、墨書の痕跡がみられるが字体は不明である。

⑭ 14類土器（須恵器0191～0192）（第43図）

須恵器は、第2地点（13B区）と第4地点（26B区）においてそれぞれ1点ずつ出土している。いずれも胴部片であり1層から出土している。0191の器面は直であり、0192の器面は、若干胴張りを呈する。いずれも外面は、タタキの整形がみられるが0191は、タタキ整形後再度調整がおこなわれている。



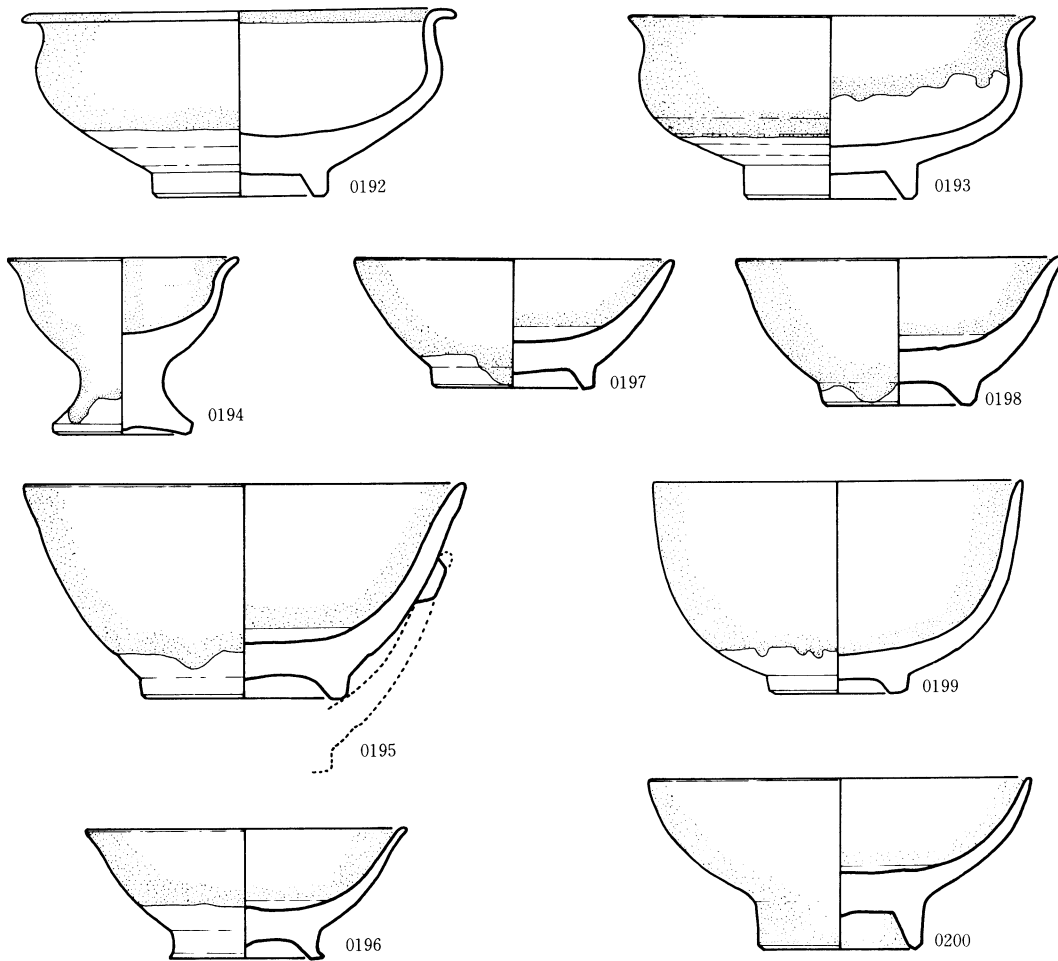
第42図 13 類 (土師器)



第43図 14類 (須恵器)

⑮ 15類 (近世陶器) 図44 0192~0200

いずれも、第1地点の墓道及び近世墓周辺で出土したものである。香炉と高坏の仏具および碗類が出土している。これらは、近隣の加治木町小山田に窯元が所在する竜門寺焼である。香炉は、2例みられる。口縁端部が水平に外へ伸びるものと、口縁端部が外反するものがある。



第44図 15類 (近世陶器)

いずれも、胴部下半部まで飴釉が施されているが、0193は、焼成不足で釉美に乏しい。高坏(0194)は、化粧土透明釉が施されたものできれいな仕上りを呈している。仏具は、以上の3点である。他に、碗類が出土している。化粧土に透明釉を施したものと飴釉を施したものがみられる。いずれも重ね焼きをおこなっていて、器内面には、蛇目がみられる。0195は、重ね焼き時に付着した陶片が残っている。0200は、黒釉を施したもので高台の高いものである。粘土は致密で焼成も良好である。他の碗とは、若干異り移入品とも考えられる。

第11表 13類(土師器) 14類(須恵器) 一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法 量	形 態 の 特 徴	手法・文様の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
0177	25C-I	坏	口 径 13cm 器 高 4.5cm 底 部 径 6.2cm	ロクロ引きの痕跡顕著	内面刷毛目	若干細砂含む	普通	黄 褐 色	墨書の痕跡がみられるが字体は不明
0178	25C-I	坏	口 径 13cm 器 高 4.3cm 底 部 径 7.0cm	底部はへう起し	不 明	若干細砂含む	普通	黄 褐 色	
0179	4B-I	坏	口 径 15.2cm 器 高 4.7cm 底 部 径 7.0cm	ロクロ引きの痕跡顕著	内外面とも刷毛目		普通	黄 褐 色	
0180	13-C-I	坏	底 部 径 6.4cm	不 明	内面刷毛目	若干細砂含む	普通	黄 褐 色	
0181	1B-I	坏	底 部 径 6.8cm	底部へう起し	内面うすい刷毛目		普通	黄 褐 色	
0182	25D-I	坏	底 部 径 6.2cm	底部あらい糸切り	内面ともうすい刷毛目		普通	黄 褐 色	
0183	4B-I	坏	底 部 径 8.0cm		外面にうすい刷毛目		普通	黄 褐 色	
0184	26B-I	坏	底 部 径 6.3cm		不 明		普通	黄 褐 色	
0185	26D-I	坏	口 径 14.0cm 器 高 6.2cm 底 部 径 7.0cm	高 台	内面刷毛目		普通	黄 褐 色	
0186	13C-I	坏	底 部 径 8.4cm	高 台	内面刷毛目		普通	黄 灰 色	
0187	25C-I	坏	底 部 径 8.7cm	高 台	不 明		不良	黄 灰 色	
0188	13C-I	坏	底 部 径 7.0cm	高台内部に糸切の痕跡	不 明		普通	黄 灰 色	
0189	25 -I	坏	底 部 径 6.7cm	高 台	不 明		普通	黄 灰 色	
0190	13B-I	胴 部	器 厚 1.0cm		外面タタキの後整形 内面斜圧痕文				
0191	26B-I	胴 部	器 厚 0.9cm	若干胴張	外面斜のタタキ文が強い 内面青釉破くずれている				

第12表 15類(近世陶器) 一覧表

遺物番号	出土区層位	器種・器部	法 量	形 態 の 特 徴	手法・文様の特徴	胎 土	焼成	色 調	備 考
0192	6D-I	香 炉	口 径 11.8cm 器 高 5.0cm 底 部 径 4.5cm	口縁端部水平に外伸びる	飴釉(胴部下半部まで)		良好	茶 褐 色	
0193	6D-I	香 炉	口 径 11.0cm 器 高 5.0cm 底 部 径 4.5cm	口縁端部外反	飴釉、焼成不足		不足	黄 灰 色	
0194	7D-I	高 坏	口 径 6.8cm 器 高 4.8cm 底 部 径 3.8cm		化粧土に透明釉	若干長石混入	良好	緑 灰 色	
0195	7D-I	碗	口 径 12.0cm 器 高 5.8cm 底 部 径 5.4cm		化粧土に透明釉		良好	緑 灰 色	重ね焼陶器破片付着
0196	2C-I	碗	口 径 8.7cm 器 高 3.5cm 底 部 径 4.3cm		飴釉、焼成不足	若干長石混入	不足	黄 褐 色	
0197	3C-I	碗	口 径 8.7cm 器 高 3.5cm 底 部 径 4.2cm		飴 釉	長石混入	良好	緑 褐 色	
0198	3B-I	碗	口 径 8.8cm 器 高 4.0cm 底 部 径 4.0cm		飴 釉	若干長石混入	良好	茶 褐 色	
0199	1B-I	碗	口 径 10.0cm 器 高 5.8cm 底 部 径 3.4cm		化粧土に透明釉	長石混入	良好	黄 灰 色	
0200	2C-I	碗	口 径 10.4cm 器 高 4.6cm 底 部 径 4.1cm	高台が高い	黒 釉		良好	黒 色	

(2) 石 器

石器には石鏃・石匙・スクレーパー・石斧・磨石・凹石・敲石などがある。

石 鏃 (第45図)

磨製石鏃 (0201・0202)

扁平無茎のもので2本とも基部にえぐりがみられる。大型の完形品で鏃が先端部付近で両方に分かれ、基部までつづく。石材はホルンフェルスと粘板岩である。共伴遺物として、成川式土器があげられる。

打製石鏃 (0203・0204・0205・0206・0207)

すべて無茎の凹基式石鏃である。0203は2層からの出土で珪岩製の片脚が欠損しているが、交互剝離のよく整ったものである。0204は黒曜石製の両面剝離の厚いものである。片脚が欠損している。0205は良質の黒曜石で作った3ヶ所に左右対象のえぐりがみられる整った形である。0206も黒曜石製である。二等辺三角形のぶ厚いものである。0204・0205・0206ともⅢa層から出土している。共伴土器は塞ノ神式土器である。0207はチャート製の鍬形の剝片鏃で前平式土器に共伴するものと思われる。

石 匙 (0208・0209・0210・0211)(第46図)

0208はチャート製で横長のよく整正されたものであるが、表面採集である。0209は黒曜石製である。形態的にみてスクレーパーの類にはいると思われるが、つまみの部分と刃部を考えた場合石匙とおもわれる。唯、一般の横長の石匙と比較すると特殊な使用目的があったものと思われる。交互剝離でよく整正されている。0210は刃部の剝離状態よりつまみの欠損した縦長の石匙であると思われる。玄武岩製で刃部の剝離は整正されている。0211も玄武岩製で横長の粗雑なつくりの石匙である。

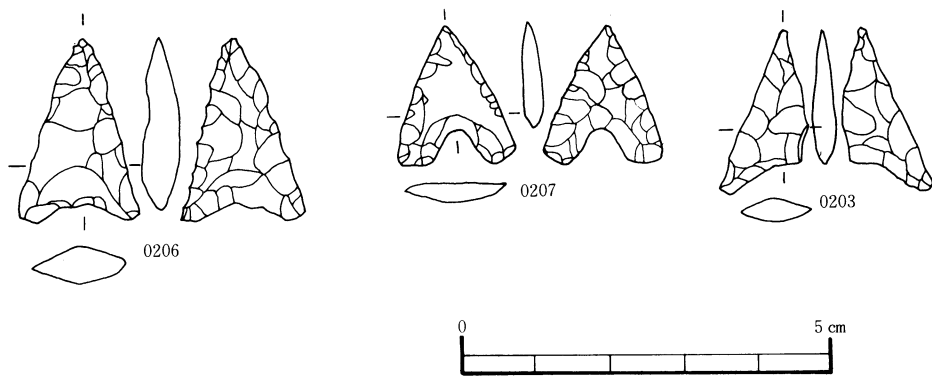
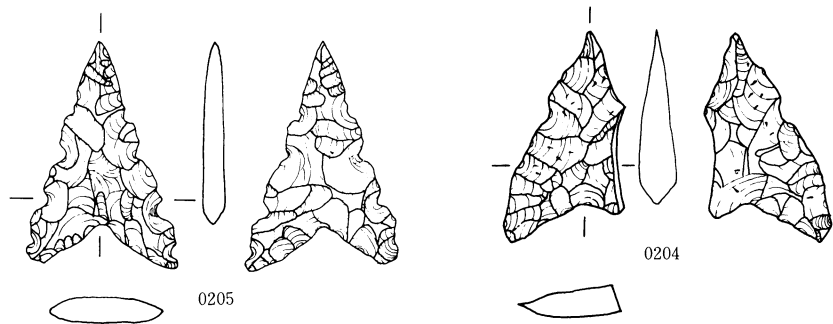
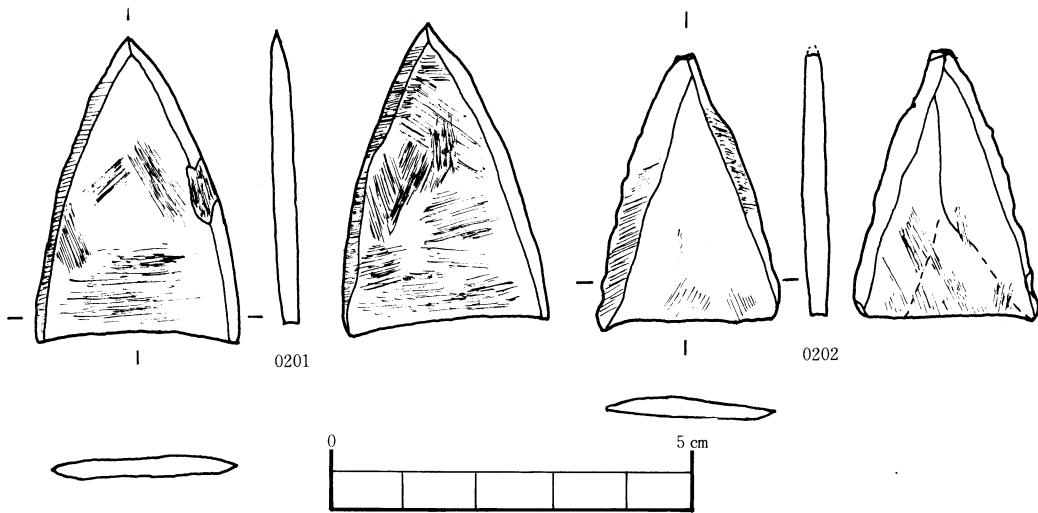
スクレーパー (0212・0213)(第46図)

0212は自然面を多く残した黒曜石の剝片を利用した鋭利な刃部をもつスクレーパーである。0213は玄武岩の縦長剝片を利用した交互剝離の刃部をもつスクレーパーである。2点とも2層から出土し石材の差はあるが同形態である。

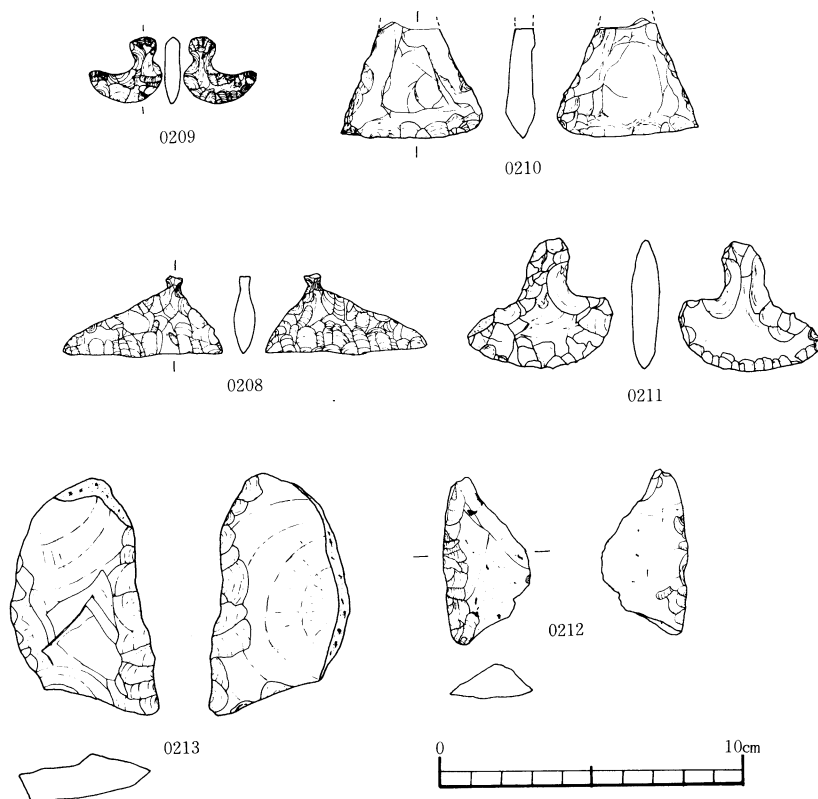
石斧 (0214・0215・0216)

石斧は磨製石斧1本と打製石斧2本が検出された。

0214は硬質砂岩とみられ全体を丁寧に研ぎ刃部は蛤刃状である。鋭利な刃物ではあるが特に激しく使用された痕跡はみうけられない。長径10.9cm・短径4.2cm・厚さ2.1cm・重さ166gである。0215は砂岩製の刃部が敲打によって鈍くなっている。長さ11.3cm・短径4.7cm・厚さ2.2cm・重さ180gである。0216は敲打によって調整された自然面をもつ打製石斧である。玄武岩製で敲打によって鋭い刃部をもつ石斧となっている。長径11.7cm・短径5.7cm・厚さ2.8cm・重さ228gである。



第45図 石 鏃 実 測 図



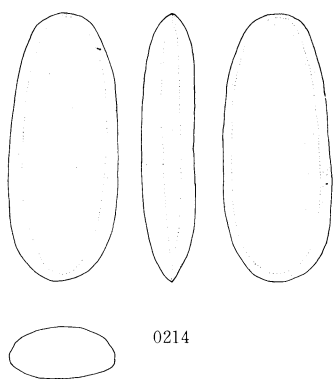
第46図 石匙・スクレーパー実測図

磨石 (0217・0218・0219・0220・0221)

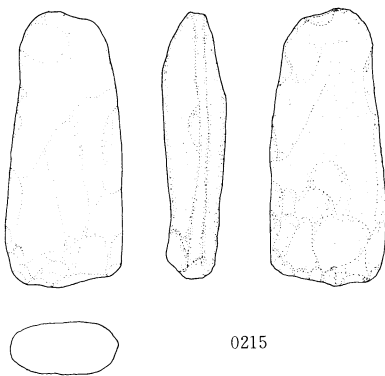
磨石は6点検出された。6面を磨ってある石ケン状磨石 (0217・0218・0219)、全体を磨ってある楕円状円礫の磨石 (0220・0221) にわけられる。石材はすべて輝石安山岩である。0217は長径・13.7cm・短径 9.3cm・厚さ 4.0cmで重さ 809 g で平面はよく使用されている。0218は長径10.9cm・短径 7.0cm・厚さ 3.5cmで重さ 355 g である。表面は風化が著るしく磨石としての形態はとどめるが使用面が不鮮明である。0219は長径 9.1cm・短径 6.3cm・厚さ 3.4cmで重さ 244 g である。やはり風化が著るしく亀裂を生じているが表面の中央部に敲打による凹みを生じ凹石としても使用したと思われる。0220は、長径11.3cm・短径 8.9cm・厚さ 5.3cm・重さ875 g の輝石安山岩製の側面部に敲痕があり敲石としても使用した磨石である。0221は長径10cm・短径 7.8cm・厚さ 5.2cm・重さ 558 g の輝石安山岩の円礫で両面に敲打によって生じた凹みを生じる。凹石としても使用したとおもわれる。

凹石 (0222)

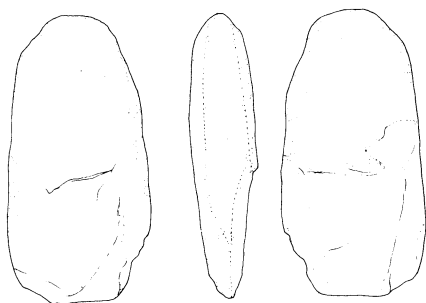
長径11.0cm・現在短径 9.2cm・厚さ4.9cm・重さ 529 g の両面に敲打によって生じる凹みを生じる。約3分の1が欠けているが凹みが中央部にあり再利用と思われる。



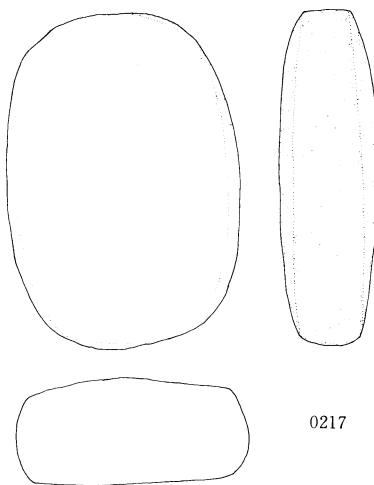
0214



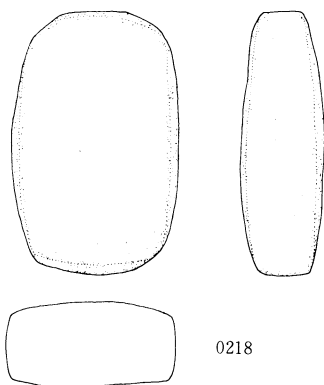
0215



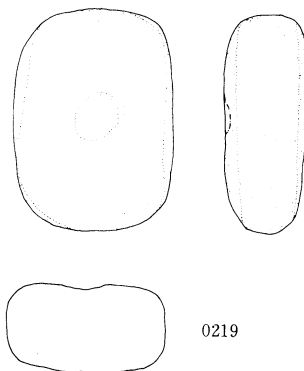
0216



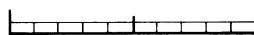
0217



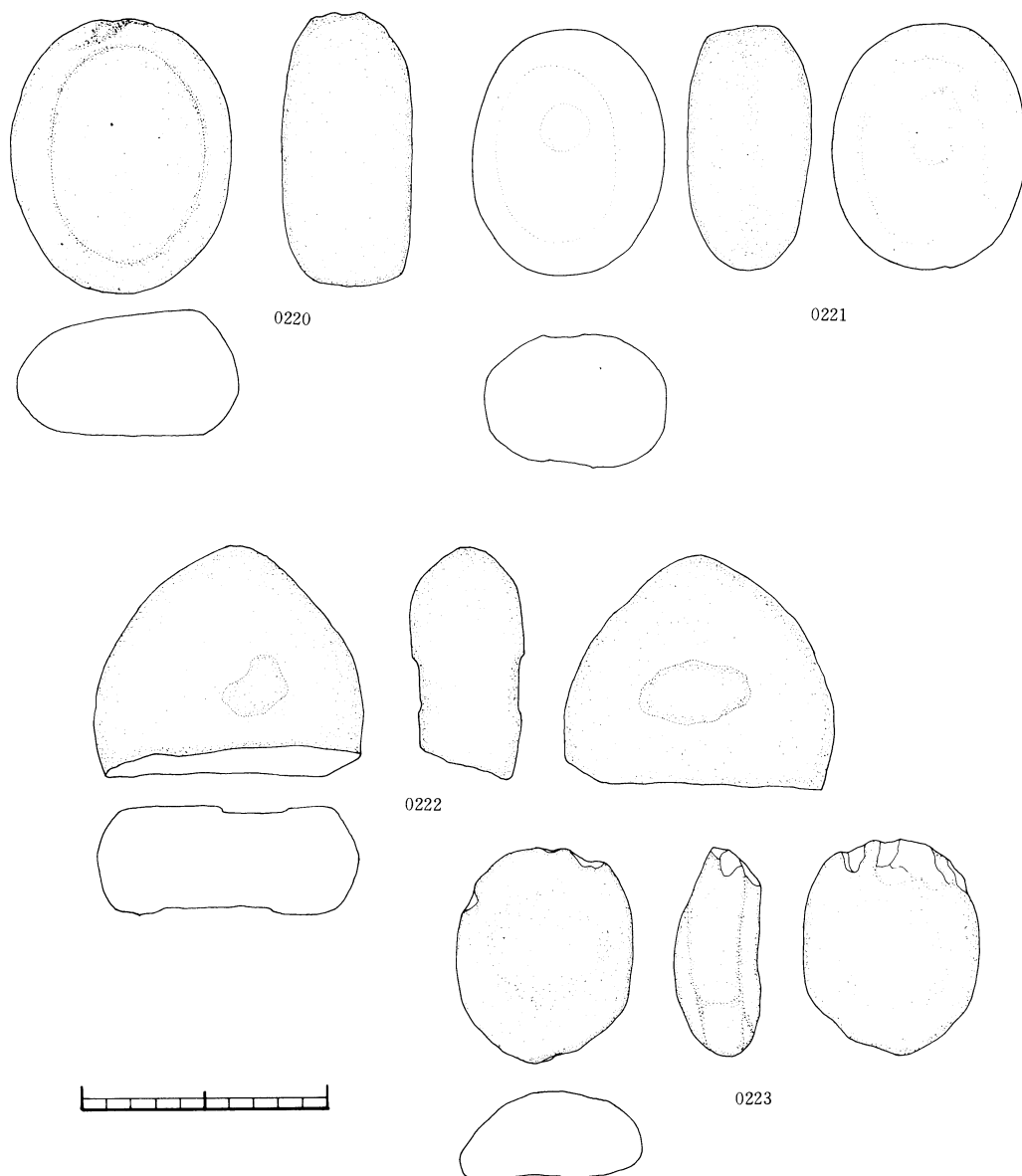
0218



0219



第47図 石 器 実 測 図



第48図 石器実測図

敲石 (0223)

長径 8.5cm・短径 7.2cm・厚さ 3.5cm・重さ 312g の輝石安山岩で風化により赤みをおびている。側面部2ヶ所に敲痕があり敲石として使用したものと思われる。

第13表 石器一覧表

遺物番号	出土区	層	石器	長径	短径	厚さ	重さ	石材	備考
0201	7-B	II上	磨製石鏃	4.2	2.8	0.25	38 g	ホルンフェイス	
0202	4-B	II	〃	3.7	2.5	0.35	3.05 g	粘板岩	
0203	25-B	II	石鏃	2.3	(1.5)	0.3	0.5 g	珪岩	
0204	25-B	IIIa	〃	2.9	(1.7)	0.45	1.55 g	黒曜石	
0205	25-B	IIIa	〃	3.2	2.0	0.3	1.2 g	〃	
0206	26-B	IIIa	〃	2.5	1.55	0.5	1.55 g	〃	
0207	25-B	IIIb	〃	1.9	1.6	0.25	0.6 g	チャート	剥片鏃
0208	表採		石匙	2.6	5.4	0.8	7.2 g	〃	横長
0209	4-B	II下	〃	2.1	2.5	0.6	2.1 g	黒曜石	
0210	25-D	IIIa	〃	(3.9)	4.7	1.0	18.5 g	玄武石	
0211	25-B	II	〃	4.2	4.8	1.0	13.7 g	〃	横長
0212	25-B	II	scraper	5.4	2.8	1.3	15.0 g	黒曜石	
0213	26-C	II	〃	8.0	4.4	1.4	52 g	玄武石	
0214	18-D	I	磨製石斧	10.9	4.2	2.1	166 g	砂石	
0215	3-E	IIIb	石斧	11.3	4.7	2.2	180 g	〃	
0216	3-D	IIIb	〃	11.7	5.7	2.8	228 g	玄武岩	
0217	1-C	IIIb	磨石	13.7	9.3	4.0	809 g	輝石安山岩	石ケン状
0218	6-C	III	〃	10.9	7.0	3.5	355 g	〃	〃
0219	4-E	IIIa	〃	9.1	6.3	3.4	244 g	〃	〃 凹石
0220	21-B	I	〃	11.3	8.9	5.3	875 g	〃	
0221	1-D	II	〃	10.0	7.8	5.2	558 g	〃	敲石
0222	26-B	II上	凹石	(9.2)	11.0	4.9	529 g	〃	
0223	1-C	IIIb	敲石	8.5	7.2	3.5	312 g	〃	

桑ノ丸遺跡出土の石器分類表

(3) ま と め

桑ノ丸遺跡の出土遺物について若干まとめてみたい。

1 類土器 (吉田式土器)

口縁部が若干外反し、端部が平縁を呈しその部分にキザミをもつもので2類土器とは明確に区別できる。桑ノ丸遺跡出土のものは、口縁部外側に貝殻腹縁による4条の刺突線が施されている。胴部は、貝殻押引文の施文である。2ヶ所から出土しているが、当遺跡においては少ない量の遺物である。当遺跡出土の1類土器は、吉田町大原遺跡で出土するような木ノ実圧痕文やクサビ形貼布文の施されたものはない。貝殻押引文も非常に⁽¹⁾あらいタッチのものである。

出土層位は、IIIb層であり2類土器(前平式土器)と同層位ではあるが、その関係については不明であった。当遺跡出土の土器の中では、2類土器及び3類土器とともに最も古いグループに属する。

2 類土器 (前平式土器)

桑ノ丸遺跡において最も多量に出土した一群の土器である。2類土器は、第1地点から出土し他の地点からはみられない。2類土器は、第1地点において3CD区、4CD区に最も集中している。また、2類土器の出土したIIIb層は1DE区、2DE区で3類土器と若干混在する以外は他の型式の土器とは混在せず、一応2類の単純層とみられる。なお、上層のIIIb層からは、4類の押型文土器が出土している。

2類土器には、円筒土器と角筒土器がみられる。まず、円筒土器についてまとめてみたい。

円筒土器は、器形のうえにおいて基本的には同形のものである。口縁端部外側にキザミなどの連続施文をおこない、胴部の器面には、貝殻条痕文が施されている。口縁部は、ほとんど直口するものである。底部は、平底であり外側に縦位の沈線を施すものが1点あり、他は、器面の条痕が下まで施されるものと、条痕のうえからヘラ削りで整形するものがある。次に、桑ノ丸遺跡における2類土器の口縁端部施文に、若干の違いが認められる。これは、基本形において形式を起えるものではないが、桑ノ丸遺跡出土の2類土器のバリエーションとして把握したい。それは、大きく3つに区別された。1は、口縁端部に凹凸をもつものであり、凹凸をもつものは、口縁内部に段をもっている。2は、口縁端部に指頭圧痕および貝殻肋背の圧痕文を連続に施すものである。3は、口縁端部に連続刺突文を施すものである。3には、ヘラ状施文具と貝殻施文具の両者がみられ、羽状に施されたものも存在する。量的には、1および2は非常に少なく、3が主体を占める。

2類土器(前平式土器)には、角筒土器が相伴している。桑ノ丸遺跡出土の角筒土器は、すべて口縁部の角部が陵をもち高くなり、一辺の中央部分が低いものである。口縁端部には、文様帯を作り、その境目には、貝殻腹縁刺突線が施されている。地文は、規則正しく水平な凹線に近い条痕文が施されるものと、規則正しい水平なクシ状施文具による条痕文が施されるものがある。以上のような類似点がみられるが、器形および文様施文のうえにおいて若干異なる部

分についてみてみよう。まず器形において、口縁部が、角形を呈し、底部が円形をなすもの(0076)がある。すでに知覧町永野遺跡⁽²⁾の調査において、河口貞徳氏が指摘されているように、円筒形と角筒形の中間的な器形であり両者の密接な関係を示している。施文上の大きな違いは器面における地文の条痕文上に施文される文様である。口縁部文様帯の下方に接して鋸歯文を描き鋸歯文の先端から縦位の施文が底部まで施文されるものと、角部から発した凹線文が中央に集まり菱形の文様を施文するものと、文様帯から直接縦位のクシ状沈線が施文される3種類の違いがみられるが、口縁文様帯直下に鋸歯文を施文するものが最も多い。鋸歯文は、縦位の施文と同じ施文具で施されたものと、貝殻腹縁刺突線で施文し文様効果を出していないものもみられる。口縁部文様帯における施文は、単独の指突文を二段に連続に施すものと、貝殻の腹縁を2肋のもの、3肋のもの、4肋のもの、5肋のものそれぞれで作った施文具で連続する刺突文を施すものとそれぞれ違いがあるが、施文手法は同一である。また、角部分には、口縁部から底部まで連続刺突文が施されている。地文施文においても、器面に水平に施文された条痕を角部において斜上させるていねいな施文がみられ、円筒土器に比較し角筒土器は、ていねいに施文されたことが推測される。以上が、第1地点における出土であり前記円筒土器と共伴して出土したものである。しかし、第2地点において、若干形態の異なる角筒土器片がみられる。第2地点においては、2類(前平式土器)の円筒土器は、出土していない。2類の角筒土器に比較すると、器面の厚みは均勢がとれて焼成が良好である。地文には、斜の条痕文が施されている。条痕文の上には、貝殻腹縁による刺突線で文様が構成されている。小片であり、全体の器形は不明であるが、2類土器の角筒土器との相違がみられるのでI類(吉田式土器)等との関係などを含めて今後検討が要求されるものであろう。

3 類土器

前記したように3類土器は、これまで形式区分されていなかった一群の土器である。当遺跡においては、第1地点と第2地点の2ヶ所で出土している。出土層位は、IIIb層であり2類前平式に近い関係にあると考える。器形は口縁部が内湾し、口縁端部が平縁で内傾するのが特徴である。施文は、貝殻状の施文具で櫛描き状に沈線文を施すものである。施文様には、6つのタイプがみられた。㉑口縁部には横位の平行櫛目文を施し、その下には縦位の波状の櫛目文を施すタイプのもの(0084)。㉒口縁部は、荒いタッチで平行斜線を櫛目施文しそれ以下は、止切れた平行櫛目文が描かれるもの(0086)。㉓短い櫛目文で力強く規則的に描くもの(0089)。㉔比較的整った櫛目文を縦横位に描くもの(0101)。㉕羽状を意図した櫛目文を施すもの(0112)。㉖器形は類似するが、荒いタッチを加え無文に近いもの(0115)。以上のように施文のうえにおいては、各種のタイプがみられ個性的な感じがみられないでもないが、これらに類する器形及び施文の土器をもつ遺跡は、県下においても若干みられる。志布志町倉野遺跡で㉑・㉓のタイプ、志布志町宮ノ後遺跡⁽³⁾で㉔のタイプ、隼人町鹿兒島神宮境内遺跡で㉕のタイプ、栗野町花ノ木遺跡⁽⁴⁾で㉖のタイプがみられる。いずれも、石坂式・吉田式・前平式・押型文・塞ノ神A式など早期・前期に比定される土器とともにみられるものである。

4 類土器（押型文土器）

第1地点においては、2類（前平式土器）の上層（Ⅲa）から、第2地点においては、3類土器の上層（Ⅲa もしくは、Ⅲb に若干入る部分）からみられ、2片が楕円押型文であり他はすべて山形押型文であった。山形押型文は、内面にも山形の施文をもち端部に原体条痕をもつものであり、楕円押型文は、内面は無文である。尚、底部は、小さな平底が1点出土している。

5類・6類・7類・8類・9類の土器

いずれも、数片の出土であってこれらの遺物から層位的に位置づけることは、困難なことである。しかしながら、今後当遺跡近隣においてこれらの土器の出土遺跡が発見される可能性は大きく、これらの土器文化の影響があったことを示唆するものとなる。

10類・11類土器

0146・0147・0150は、口縁部は直行し、山形隆起を持つ器形となす深鉢である。器面に2本の平行沈線の曲線文を基本とする文様形態を示す。この種の土器は「指宿市十二町下里の下層」の土器を標準とし、南九州を中心にその分布を知ることができる。本県においては「木ヶ暮遺跡」⁽⁵⁾、「渡瀬遺跡」⁽⁶⁾、「春日遺跡」⁽⁷⁾出土のものと同種の土器で、縄文時代後期中葉の指宿式土器⁽⁸⁾と思われる。0148は、0146、0149と共伴遺物である。器形は指宿式土器の形をとるが、文様にへう状の施文具でもって3条の刺突連続文を施文とする特徴をもっている。時期は定かでないが、器形その他により縄文時代後期の所産と思われる。今後の資料としたい。0149は器台である。この種のもは縄文時代後期になって現われる。本県においては指宿式土器に伴う器台は現在のところ、その報告例は無いが、縄文時代後期の遺跡である「市来貝塚」⁽⁹⁾・「大渡遺跡」・「草野貝塚」⁽¹⁰⁾などあげられる。これらの資料により縄文時代後期中頃に設定されよう。

0152は頸部が「く」の字を呈する器形から西平式土器系統のものを思わせるが、器面に文様がないことや、黒色研磨土器であることなどから、西平式土器よりわずかに新しい時期と思われる。三万田式土器系統の土器に設定されよう。0153の底部も、それらと同時期のものと考えられる。0154は西平式土器の特徴である頸部がしまり胴部に磨消縄文や直線文、連点文を施すもので西平式土器と思われる。西平式土器出土の遺跡には、「黒川洞穴」、「西平貝塚」が知られ三万田式土器出土の遺跡には「東原遺跡」をあげることができる。

以上のごとく桑ノ丸遺跡の縄文後期の土器は舌状台地の基本に近い、25、26-B、C区の第Ⅱ層（黄褐色火山灰土層）の中ほどに少範囲にその分布を示している。また、土器類は、極めて少ないが破片としては大きく復元可能なものもあった。なお、指宿式土器や西平、三万田系の土器は同じレベルで検出され、層位的に把握することは困難であった。

12類土器

桑ノ丸遺跡における12類の土器は指宿郡山川町にある成川遺跡の第Ⅳ類土器を標準としている成川式土器と呼称されているものに類似している。成川遺跡の第Ⅳ類土器は弥生時代終末期に置かれる。しかし第Ⅴ類土器（和泉式土師器に先行する古式土師器）が含まれるため弥生時代終末期の様相を呈しているが、中央においては古墳時代にはいつているものと考えられてい

る。指宿市の橋牟礼川遺跡、根占町の千束遺跡、鹿児島市吉野町の七社遺跡、吹上町の入来遺跡、吉松町の永山遺跡等においても、成川式土器⁰³と須恵器、古式土師器^{04 05}が共伴しているのが見られる。このように近年の調査によっても成川式土器は時間的に、古墳時代まで下降することがわかってきた。ところが同じ成川式と呼称されている土器の中に須恵器を共伴しないと思われるものがある。金峰町中津野遺跡、吹上町花熟里遺跡等がそうであり甕形土器に特徴が見られる。すなわち肩部から口縁部へかけて「く」の字状に外反し突帯を施さず底部はあげ底の脚台を有するものである。これらは須恵器を共伴するものより先行するものと思われる。桑ノ丸遺跡の12類土器^{06 07}についてみると甕形土器は頸部に断面三角形のほりつけ突帯を施し口縁部は外反する。底部はあげ底の脚台を有しているものであり、器形は中津野遺跡等の甕形土器と類似している。又、桑ノ丸遺跡においても須恵器の共伴は見られず中津野遺跡等の土器に比定できるものと考えられる。

桑ノ丸遺跡出土の0156の土器にはヘラ描きによる沈線文が施されている。このようなヘラ描きは数例知られているが絵画様のものと幾何学的な文様とが見られる。指宿市出土の土器片には舟と波を模したような沈線文が施されている。吉野町七社遺跡出土の土器片には魚を描いたものが見られる。薩摩郡下甕村の大原・宮園遺跡²¹、山川町成川遺跡、枕崎市松ノ尾遺跡²³においては絵画状のものではなく幾何学文を施している。このような沈線文は類例が乏しいため判断を下すことは出来ない。只桑ノ丸遺跡の0156の土器、松ノ尾遺跡の土器における文様には数条の沈線を曲線状に施したのが見られる所から、免田式土器における重弧文との関連性を考えても良いのではなかろうか。

13類・14類・15類

13類（土師器）・14類（須恵器）においては、後世の攪乱がみられ出土状態を明確に知るものはない。土師器の出土層は、比較的多くみられたがほとんどが細片となっている。なお墨書の痕跡の存在するものもみられるが、破損のため字体は不明であった。近世墓に關係して、竜門寺系焼の陶器の発見がみられたが、この分野における資料の整備はいまのところほとんどみられず今後要求されるところである。

石器について簡単にまとめると桑ノ丸遺跡の石器の特徴として、出土量は少ないが種類が豊富であるということであろう。磨製石鏃2本はいままで出土したものと比較して大型である。成川式土器に共伴するものと思われる。打製石鏃は剥片鏃を除いて他は塞ノ神式土器に共伴する。また吉田・前平式土器に共伴する石ケン状磨石が桑ノ丸遺跡の特徴としてあげられる。この石ケン状磨石は、鹿児島市の加栗山遺跡、指宿市の小牧遺跡からも吉田・前平式土器に共伴することが最近の調査で判明してきた。

- (1) 河口貞徳「鹿児島県鹿児島郡大原遺跡」日本考古学年報 1957年
- (2) 河口貞徳「鹿児島県における貝殻条痕文土器について」鹿児島県考古学会紀要 1955年
- (3) 瀬戸口望「採集における押型文土器並にその共伴資料」鹿児島考古8号 1973年
- (4) 鹿児島県教育委員会「花ノ木遺跡」 1975年
- (5) 浜田耕作「薩摩国指宿郡指宿村土器包含層調査報告」京大報告 大正10年11月
- (6) 河口貞徳「鹿児島県考古学会紀要」第3号 1953年
- (7) 国分直一・重久十郎「鹿児島県考古学会紀要」第4号 1955年
- (8) 河口貞徳・河野治雄「鹿児島県考古学会紀要」第4号 1955年
- (9) 河口貞徳「鹿児島県日置郡市来貝塚」日本考古学年報 昭和41年3月
- (10) 河口貞徳「南九州後期の縄文土器」考古学雑誌42-2 昭和32年3月
- (11) 文化庁「成川遺跡」埋蔵文化財調査報告 第7号 1974年
- (12) 浜田耕作「薩摩国指宿郡指宿村土器包含層調査報告」京大報告 大正10年11月
- (13) 河口貞徳「千束遺跡」根占郷土誌 昭和49年
- (14) 出口浩「吉野町七社遺跡」鹿児島考古8号 1973年
- (15) 出口浩「吉野町七社遺跡」鹿児島考古9号 1974年
- (16) 河口貞徳「入来遺跡」鹿児島考古11号 1976年
- (17) 河口・河野・池水・上村・林・出口「永山遺跡」鹿児島考古8号 1973年
- (18) 河口貞徳「鹿児島県の弥生式諸遺跡について」鹿児島県考古学会紀要 第2号 1952年
- (19) 河口貞徳・出口浩「第一次花塾里遺跡調査報告」鹿児島考古5号 1971年
- (20) 出口浩「吹上町中原発見の弥生式土器について」鹿児島考古6号 1972年
- (21) 河野治雄「鹿児島県の金石文研究抄」鹿児島考古7号 1973年
- (22) 下甕村教育委員会「大原・宮園遺跡」 1974年
- (23) 河口貞徳「鍬形石の祖型」鹿児島考古8号 1973年



図版1 桑ノ丸遺跡遠景（南から）



図版2 第1地点遠景（東から）



図版3 第1地点確認調査（東から）



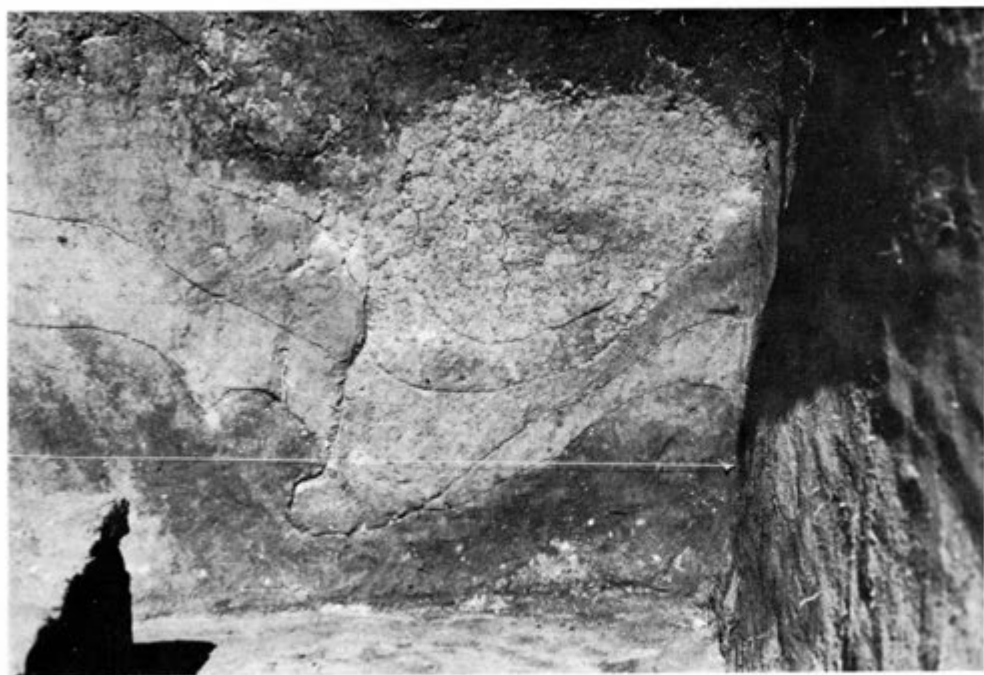
図版4 第1地点確認調査（南から）



図版5 12類（成川式土器）出土状態



図版6 12類（成川式土器）出土状態



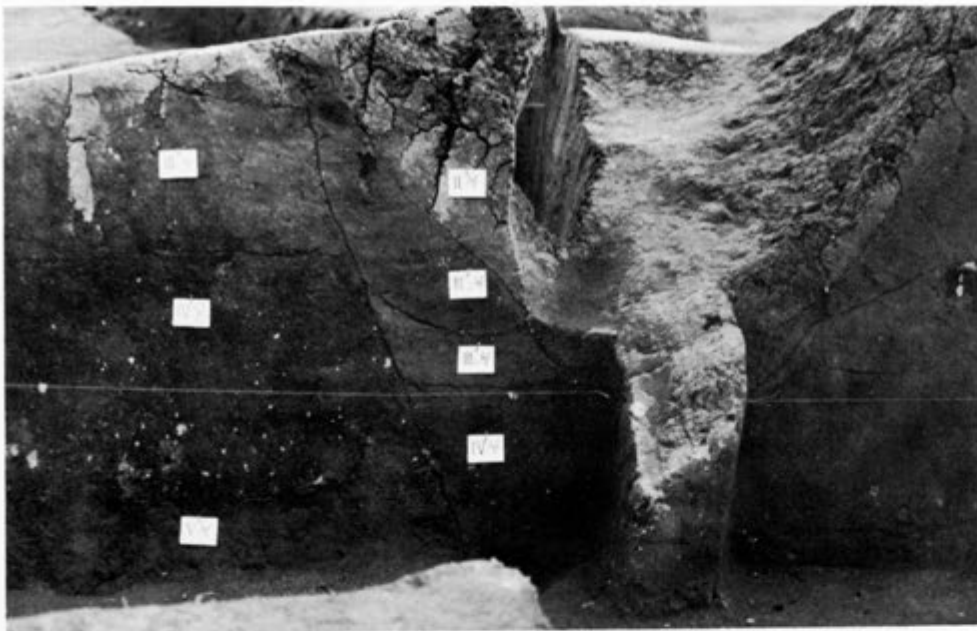
图版7 窠状遗构断面写真



图版8 窠状遗构



図版9 窠状遺構全景



図版10 窠状遺構と断層断面



図版11 円筒土器（2類）出土状態



図版12 円筒土器（2類）出土状態



图版13 第1地点遺物出土状态 (Ⅲ b層)



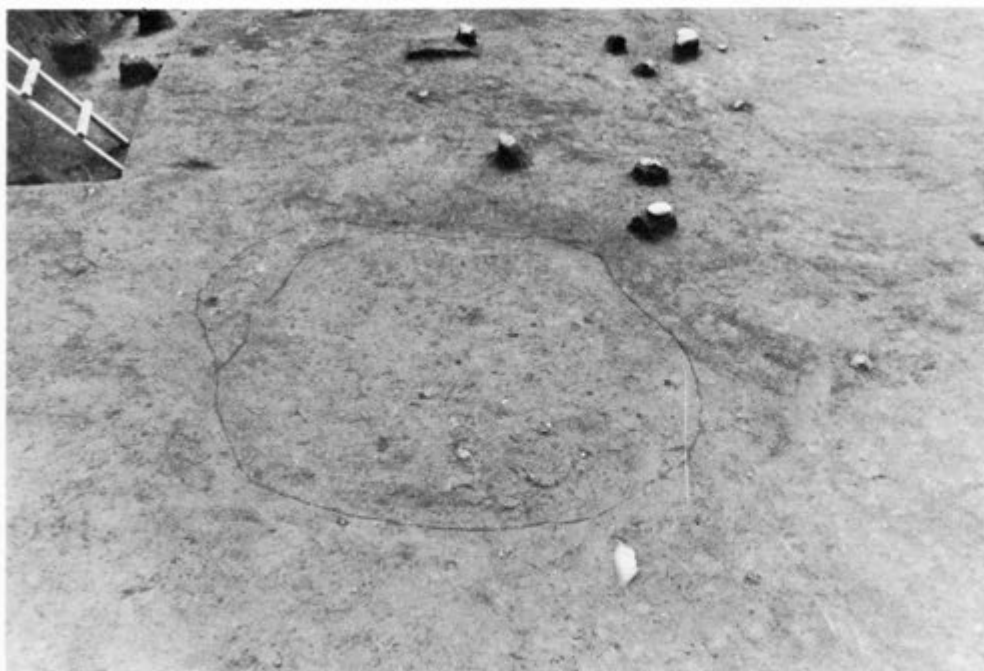
图版14 角筒土器 (2類) 出土状态



図版15 第1地点発掘風景



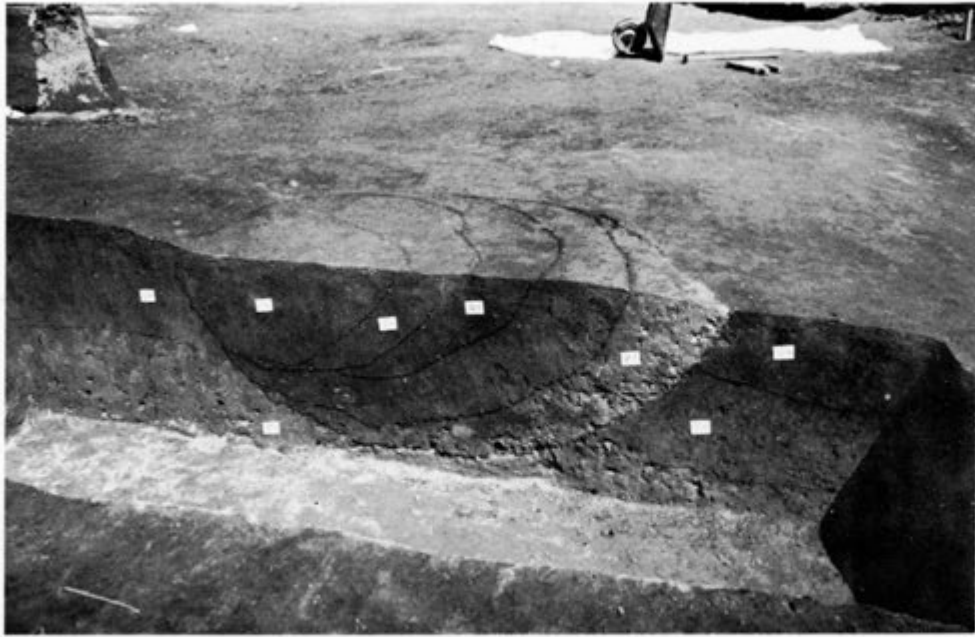
図版16 遺物出土状態(Ⅲb層)



図版17 地層横転No. 1 検出状態



図版18 地層横転No. 1 掘り上げ状態



図版19 地層横転No. 3断面



図版20 地層横転No. 3掘り上げ状態



図版21 第2地点遠景（東から）



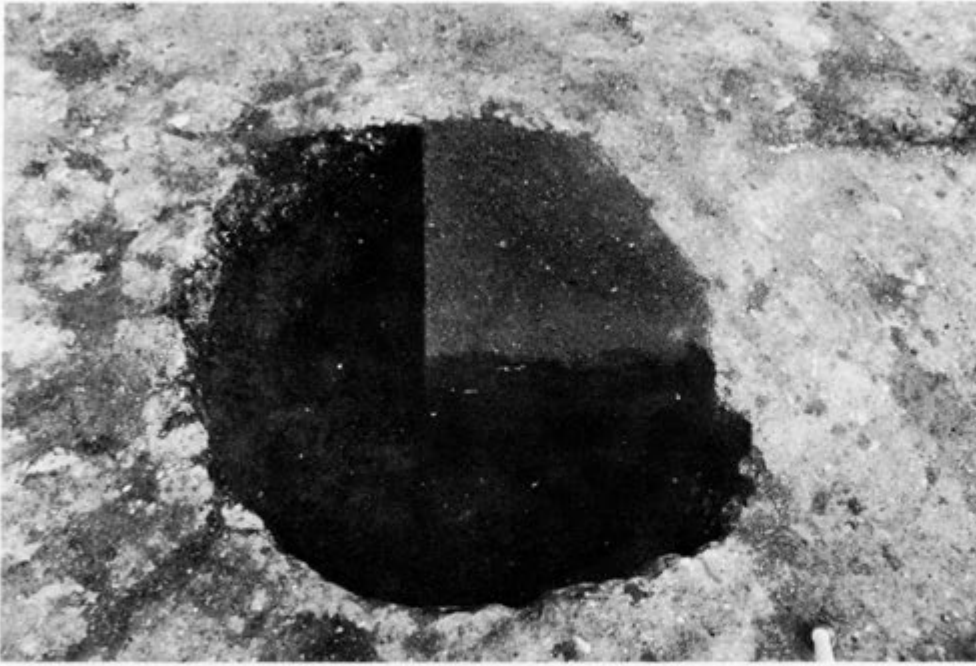
図版22 Ⅲ a 層の集石



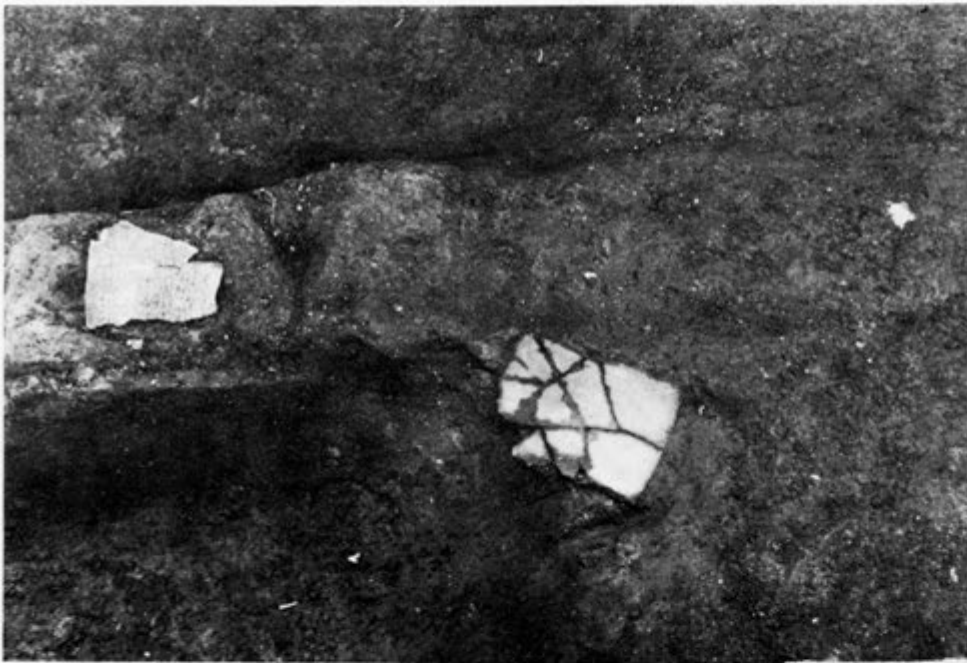
図版23 第3地点落ち込み



図版24 第3地点全景 (南から)



図版25 落ち込み



図版26 円筒土器（1類）出土状態



图版27 近世墓検出状態



图版28 近世墓群



図版29 近世墓の供養祭



図版30 近世墓出土の人骨



0001

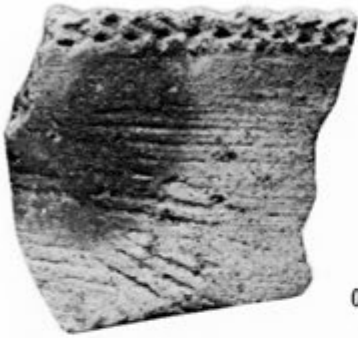


0002

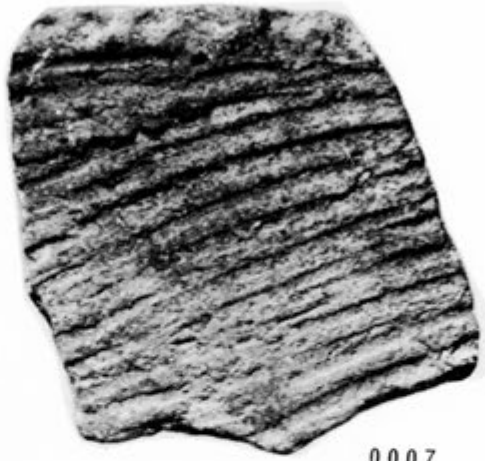


0076

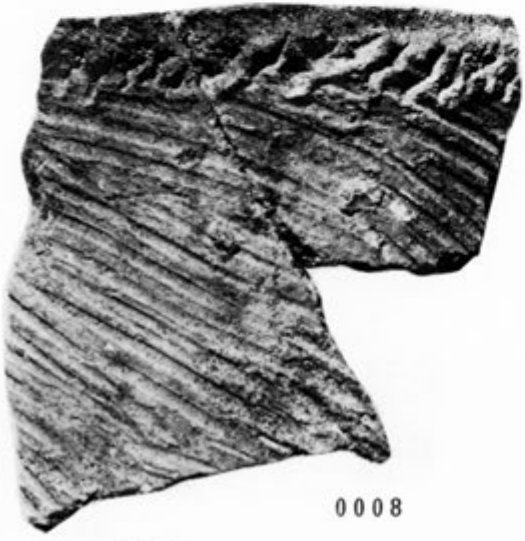
図版31 1類 (吉田式土器) ・ 2類 (前平式土器)



0005



0007



0008



0017

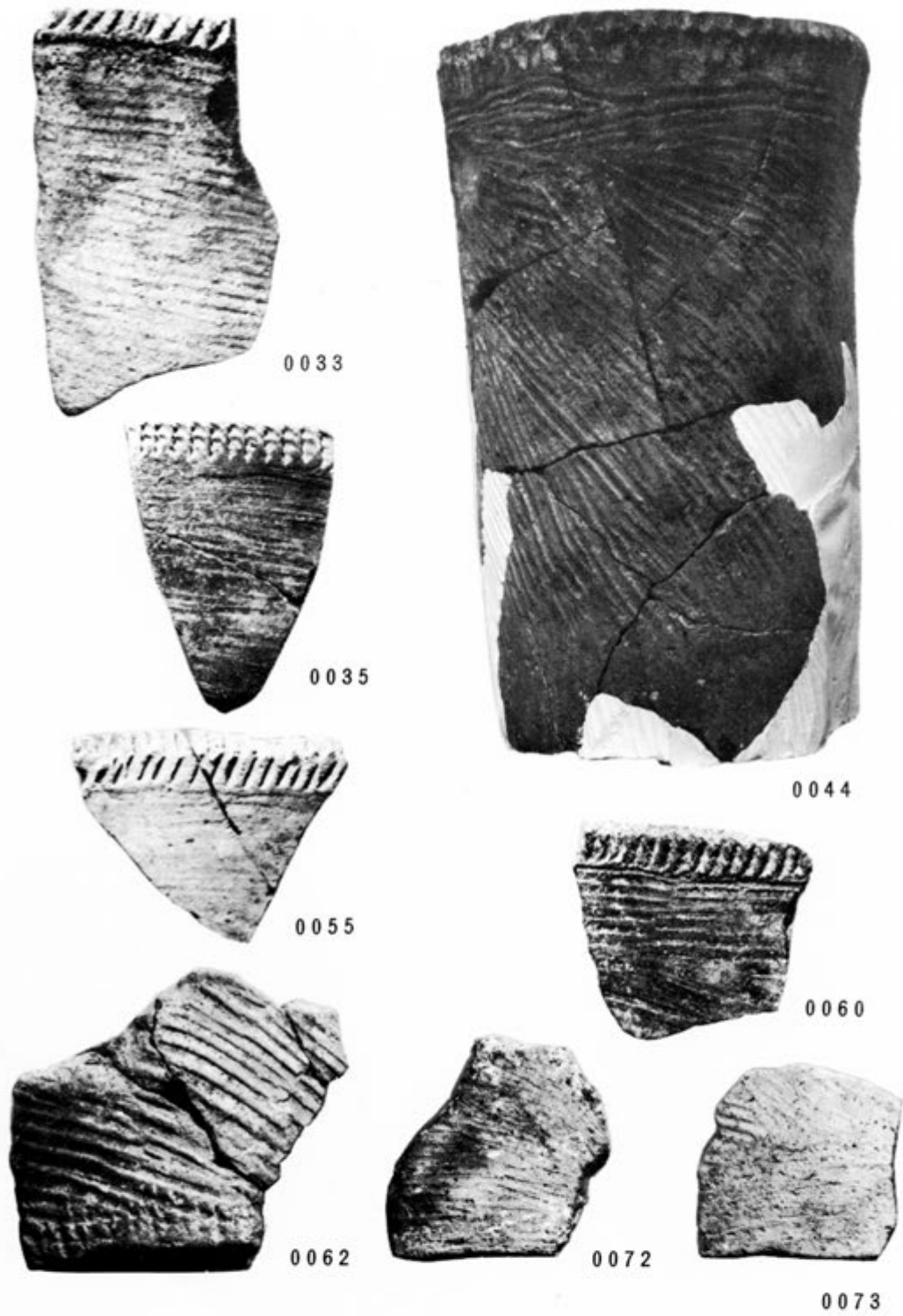


0013



0018

図版32 2類 (前平式土器)



圖版33 2類 (前平式土器)



0075



0079



(角筒土器 0076 の角部)



0077



0078



0081

0076

図版34 2類 (前平式土器)



0079



0083

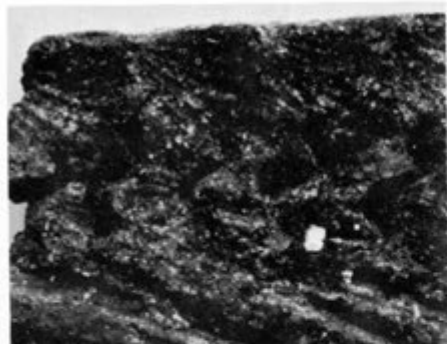


0082



0080

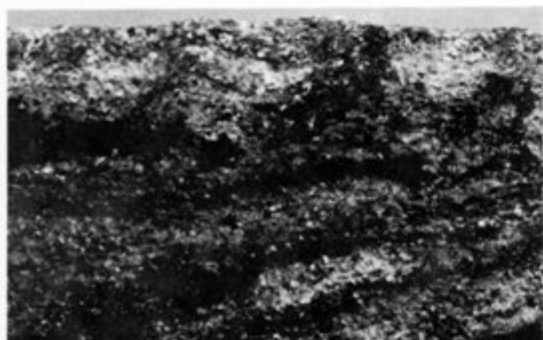
図版35 2類 (前平式土器)



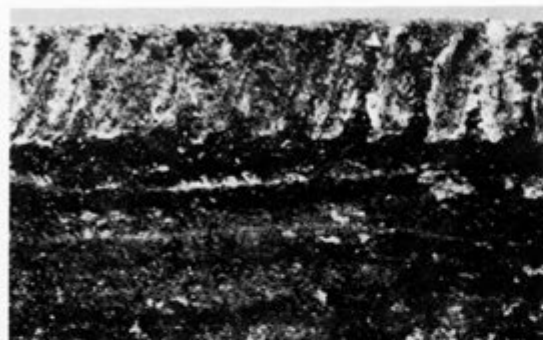
b 圧痕文を連続施文するもの
(貝殻肋背による扇状文)



a 口縁部が凹凸をなすもの

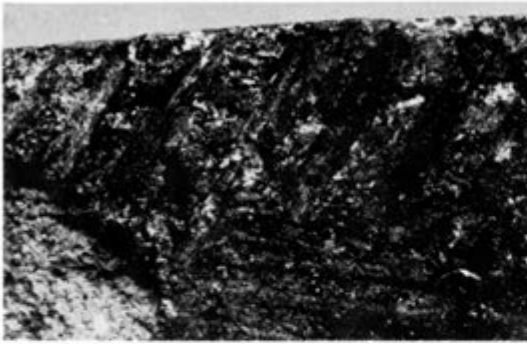


b 圧痕文を連続施文するもの



c 連続刺突文を施するもの
(へら状施文具による単斜)

図版36 2類 (前平式土器) 口縁施文



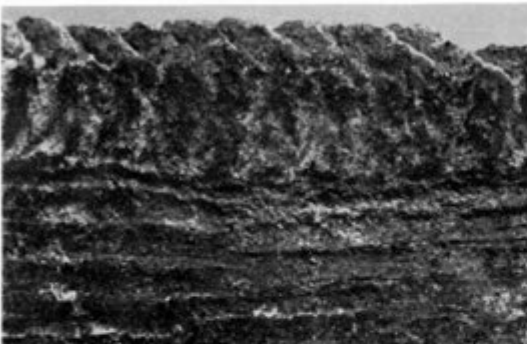
c 連続刺突文を施するもの
(ヘラ状施文具による単斜)



c 連続刺突文を施するもの
(ヘラ状施文具による羽状施文)

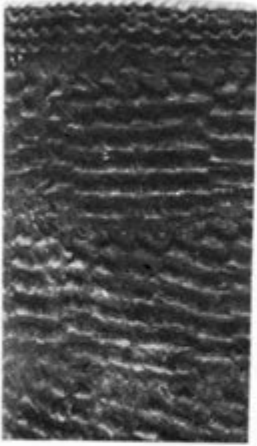


c 連続刺突文を施するもの
(貝殻施文具による単斜)



c 連続刺突文を施するもの
(貝殻施文具による羽状施文)

図版37 2類 (前平式土器) 口縁施文



1類土器口縁部



2類円筒土器の穿孔部分



2類土器口縁部



角筒土器口縁部



図版38 1類（吉田式土器）・2類（前平別土器）



0084



0086



0087



0090



0089



0091

図版39 3

類



0093



0094



0095



0097



0096

圖版40 3

類



0101



0102



0104



0103



0109



0110



0114



0112



0113

図版41 3

類



0100



0115



0116



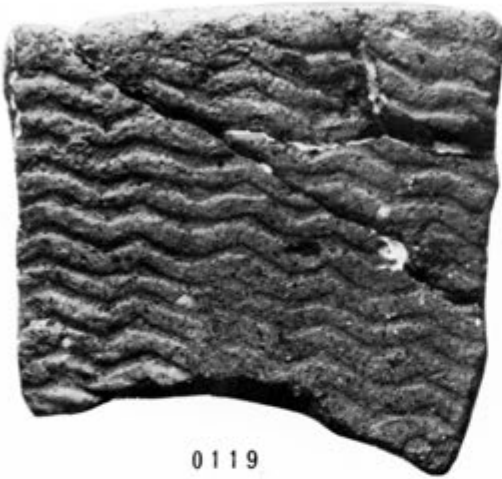
0117



0118

圖版42 3

類



0119



0119



0120



0121



図版43 4類 (押型文土器)



0128

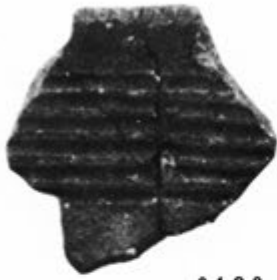


0126



0129

圖版44 4類(押型文土器)・5類(平栴Ⅱ式土器)



0130



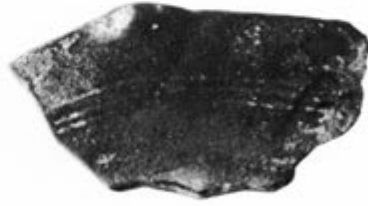
0132



0134



0138



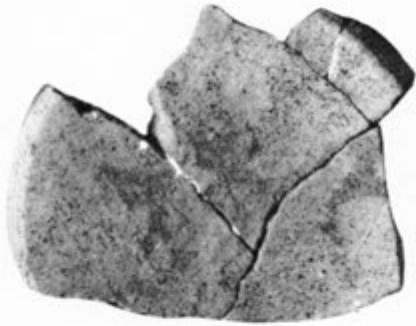
0135



0133



0139



0139



0136

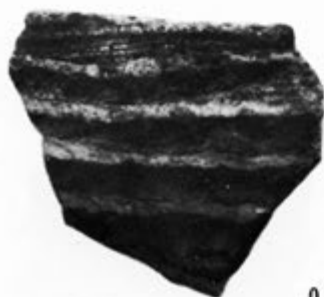
図版45 6類 (塞ノ神A式土器)



0144



0145

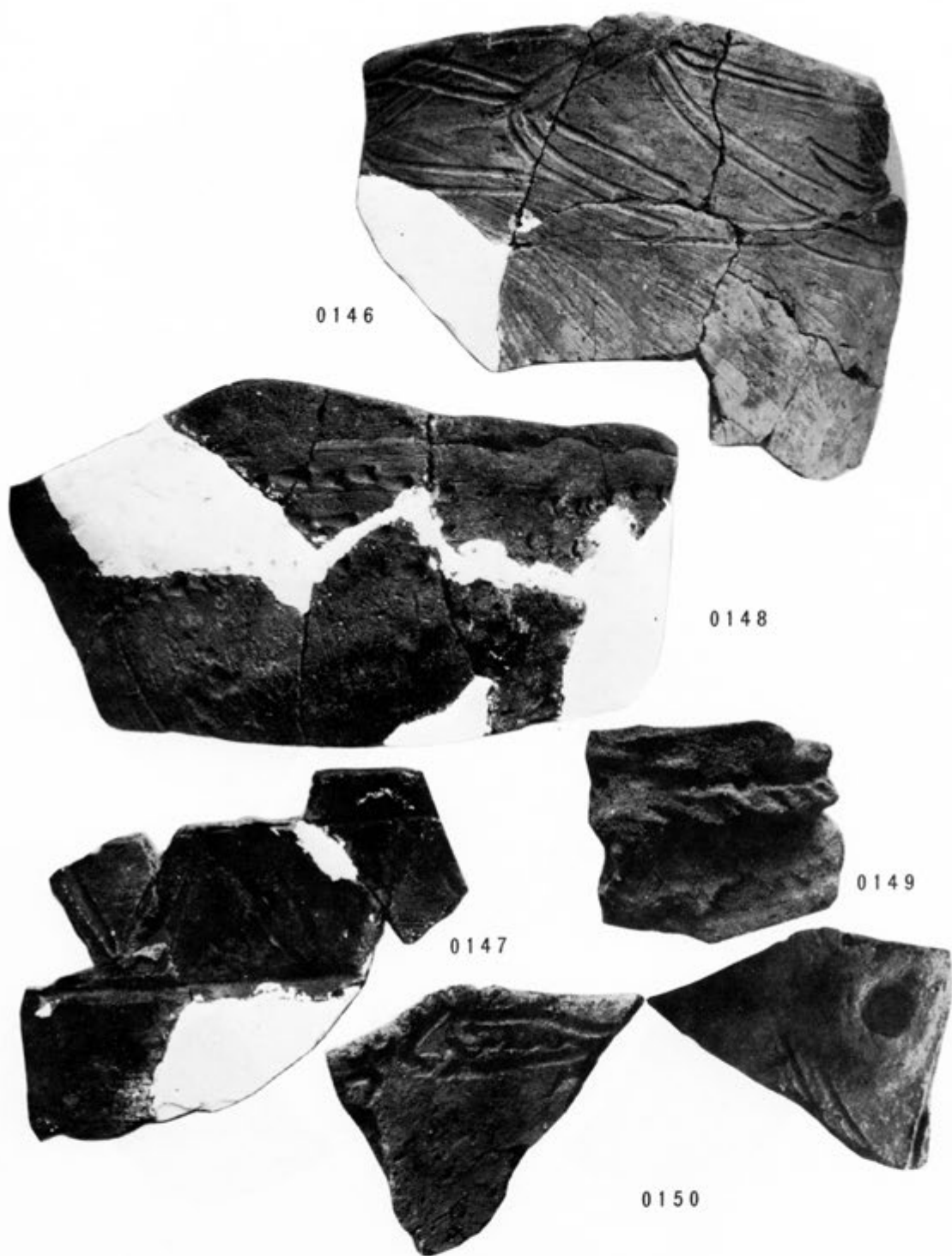


0142



0143

図版46 8類 (阿高式土器) ・ 9類 (轟式土器)



図版47 10類 (指宿式系土器)



0151



0154



(0155 胴部文様拡大)



0155

図版48 11類 (西平式・三万田式土器)



0156



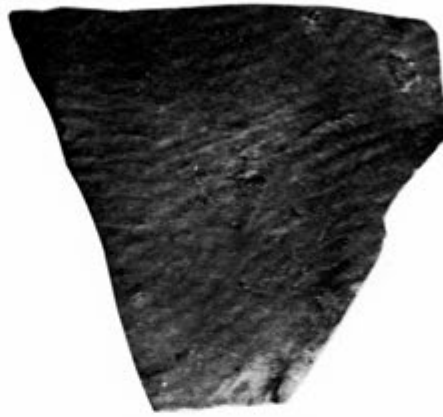
0157



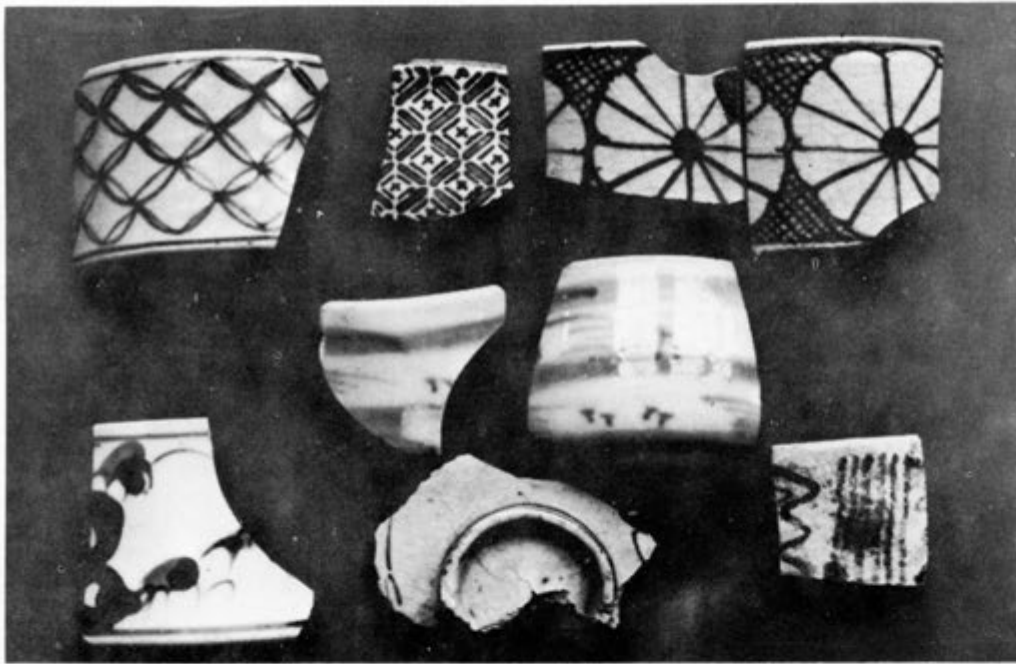
図版49 12類 (成川式土器)



0191



0190



図版50 14類(須恵器)・15類(近世磁器)



0194



0193



0195



0200



0198

圖版51 15類 (近世陶器)



0201



0202



0203



0204



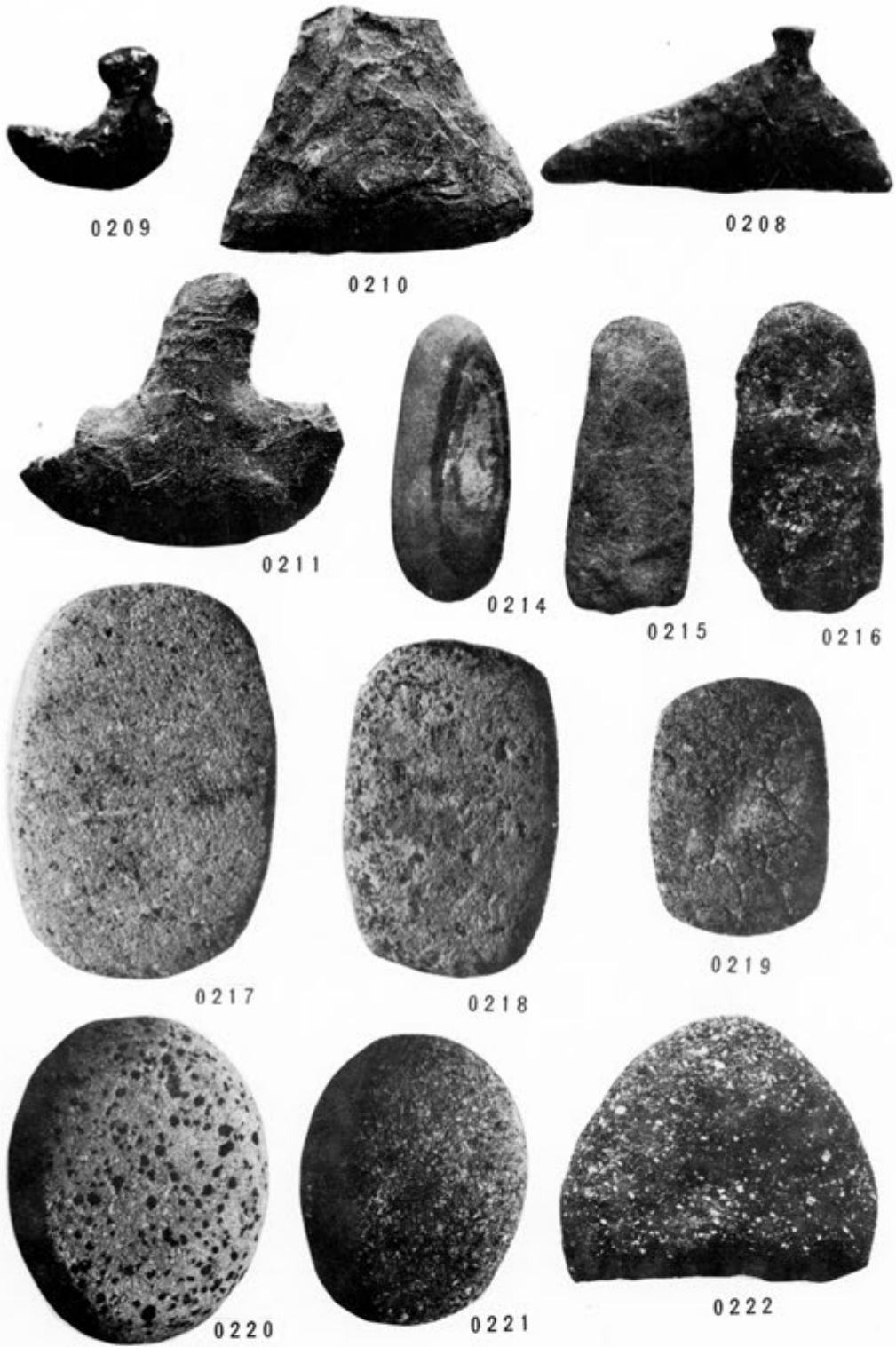
0205



0206



0207



図版53 石 器

あ と が き

九州縦貫自動車道鹿児島線関係の埋蔵文化財の調査は、昭和52年2月現在、27遺跡が終了し、目下調査中2遺跡、未調査が9遺跡となっている。

遺跡の調査は、発掘後遺物等の整理を終えて、報告書の作成までであるが、今回桑の丸等5遺跡の報告書が刊行されることになったことは、本県にとって初めてのことで、その意義は大きい。

元来、緊急調査は「記録」がその使命と考えられているだけに、調査に当たっては、つとめて詳細な記録をとることに心がけ、又報告書にそのすべを掲載するように努めたが、何しろ未経験の点が多く、さらには整理、研究に時間的制約等があり、調査結果としての報告書は必ずしも十分ではない。従って読者に満足いただけるか不安である。

最後に、発掘調査にあたりいろいろご指導助言をいただいた鹿児島県文化財専門委員河口貞徳氏・池水寛治氏・石川秀雄氏、便宜をはかり協力いただいた溝辺町教育委員会、作業員として働いてくださった論地・鍋・桑ノ丸など地元の方々、われわれの無理を聞いて奔走してくださった道路公団溝辺工区関係者の方々に心から感謝してむすびとしたい。

鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告 (7)

九州縦貫自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告 I

西免・栢場・山神・曲迫・桑ノ丸遺跡

発行日 昭和52年2月28日

発行 鹿児島県教育委員会 〒892 鹿児島市山下町14番50号

印刷 (有)昌和堂印刷 〒890 鹿児島市宇宿二丁目16-11